

宮城県文化財調査報告書第 258 集

彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡

国道 4 号大衡道路拡幅工事関連遺跡発掘調査報告書 I

令和 6 年 3 月

宮 城 県 教 育 員 会
国 土 交 通 省 東 北 地 方 整 備 局

彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付 C 窯跡

国道 4 号大衡道路拡幅工事関連遺跡発掘調査報告書 I

序 文

海・山・平野など豊かな自然環境に恵まれた宮城県には、多くの文化財が伝わっています。これらは、私たちの先祖が苦難を克服しながら築き上げ、大切に守り伝えてきたもので、これからの地域社会継承の基盤となるものです。

しかしながら、近年は過疎化や少子高齢化などを背景に、地域の文化財の滅失等が危惧されています。さらには、東日本大震災や新型コロナウイルスの感染症流行等の非常時対応を経験する中で、日常的な体制整備・理解促進・保存と活用こそが重要であることを、私たちは身をもって学びました。

なかでも土地と結びつきの強い埋蔵文化財は、各種開発行為により影響を受ける恐れが常にあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関りが生じた場合には、市町村教育委員会と協力しながら貴重な文化財を積極的に保護することに努めています。

本書は、国道4号大衡道路4車線化建設に先立って実施した彦右工門橋窯跡、吹付窯跡、吹付C窯跡の発掘調査報告書です。今回の調査により奈良・平安時代の土器づくりの様相を解明する上で貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明と社会継承の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚くお礼申し上げる次第です。

令和6年3月

宮城県教育委員会

教育長 佐藤 靖彦

例言

1. 本書は、宮城県教育委員会が令和元年～5年度に実施した彦右工門竈窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡の発掘調査報告書である。
2. 調査の主体は宮城県教育委員会で、担当は宮城県教育庁文化財課である。
3. 発掘調査および報告書作成に際して、国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、大衡村教育委員会から多大な協力をいただいた。また、以下の方々および機関からご指導・ご協力を賜った（五十音順、敬称略）なお、所属は当時のものである。
及川謙作（仙台市教育委員会）、名久井伸哉（加美町教育委員会）、早川文弥（大崎市教育委員会）、藤木海（南相馬市教育委員会）、宮城県多賀城跡調査研究所
4. 本書の遺跡位置図は国土交通省国土地理院発行の地形図を複製して使用した。
5. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標標準X系による。なお、方位Nは座標北を表している。
6. 土色の記述に当たっては「新版 標準土色帖 1996年版」（小山・竹原1996）を使用した。
7. 各年度の現場の担当者は以下の通りである。
令和元年度 佐藤 涉 村田 晃一
令和2年度 佐藤 涉 伊東博昭 風間啓太 古田和誠
令和3年度 佐藤 涉 風間啓太 古川一明
令和4年度 佐藤 涉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平
令和5年度 黒田智章 手代勝巳 村上景亮 古川一明
8. 本書の整理は、佐藤 涉、黒田智章、高橋透、熊谷亮介、伊東博昭、手代勝巳、風間啓太、村上景亮、村田晃一、佐久間光平、古川一明が行い、安齊香、遠藤友美、長田由佳、加藤紗和子、木村奈保美、小林由美、佐々木みゆき、佐藤せい子、鈴木美由紀、只木一美、永井優子、林澄江、伏見裕味子、湯元文子、吉田幸子、與名本京子が補助した。
9. 本書の執筆は、調査を担当した各職員の協議を経て、第IV章を佐久間・佐藤、第三章-3-(3)「瓦塼類についての総括」を古川が、その他の部分を廣谷和也、古川、熊谷亮介、黒田智章、佐藤が執筆し、佐藤が全体を編集した。
10. 発掘調査成果の一部は、現地説明会、宮城県教育庁文化財課ホームページ、みやぎ文化財チャンネル（YouTube）令和元・2・3・4・5年宮城県遺跡調査成果発表会、第46・47回古代城柵官衙遺跡検討会でその内容の一部を公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
11. 墨書土器は、吉野武氏（宮城県多賀城跡調査研究所）に釈読を依頼した。
12. 遺跡の航空写真は、日本特殊撮影株式会社、株式会社サングラフィックス、遺物写真の一部は、株式会社アートプロフィール、に委託した。
13. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
第Ⅱ章 遺跡の環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	5
3. 既往の調査・報告	6
4. 基本土層	7
第Ⅲ章 彦右工門橋窯跡	12
1. 調査区ごとの経過と概要	12
2. 発見した遺構と遺物	15
(1) 掘立柱建物跡・柱穴列跡	15
(2) 竪穴建物跡	22
(3) 土坑	96
(i) 土坑	96
(ii) 土師器焼成遺構	112
(iii) 焼成土坑	125
(4) 溝跡	131
(5) その他の遺構	135
3. 彦右工門橋窯跡小括	178
第Ⅳ章 吹付窯跡	269
1. 調査の経過と概要	269
2. 各区の調査	269
3. まとめ	271
第Ⅳ章 吹付C窯跡	278
1. 調査の経過と概要	278
2. 発見した遺構と遺物	281
3. 吹付C窯跡小括	294
第Ⅵ章 彦右工門橋窯・吹付窯跡・吹付C窯跡まとめ	309

目次

第1図	報告する遺跡の位置	1	第32図	SI24b 竪穴建物跡	出土遺物 (3)	47
第2図	事業範囲と遺跡	2	第33図	SI24a 竪穴建物跡	出土遺物 (4)	48
第3図	彦右工門橋梁跡・吹付窯跡・吹付C 窯跡調査 区配置図	3	第34図	SI24a 竪穴建物跡	出土遺物	49
第4図	報告対象遺跡と周辺の遺跡	4	第35図	SI25・26 竪穴建物跡		51
第5図	彦右工門橋梁跡基本層 (1)	8	第36図	SI25 竪穴建物跡	出土遺物 (1)	52
第6図	彦右工門橋梁跡基本層 (2)	9	第37図	SI25 竪穴建物跡	出土遺物 (2)	53
第7図	1～6・11区遺構分布図	13	第38図	SI25 竪穴建物跡	出土遺物 (3)	54
第8図	3区 SD1 溝跡	14	第39図	SI25 竪穴建物跡	出土遺物 (4)	55
第9図	6～9区 遺構分布図	16	第40図	SI26 竪穴建物跡	出土遺物	56
第10図	6区南～7区北 遺構配置図	17	第41図	SI27 竪穴建物跡		57
第11図	7区南～8区 遺構配置図	18	第42図	SI29 竪穴建物跡		59
第12図	SB48 掘立柱建物	19	第43図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (1)	61
第13図	SB50 掘立柱建物跡 SA49 柱列 SK28 焼成 土坑 SK47 土坑	20	第44図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (2)	62
第14図	SB79 掘立柱建物跡	21	第45図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (3)	63
第15図	SI21 竪穴建物跡	23	第46図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (4)	64
第16図	SI21 竪穴建物跡 出土遺物	24	第47図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (5)	65
第17図	SI22 竪穴建物跡	26	第48図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (6)	66
第18図	SI22 竪穴建物跡	27	第49図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (7)	67
第19図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	28	第50図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (8)	68
第20図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	29	第51図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (9)	69
第21図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (3)	30	第52図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (10)	70
第22図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (4)	31	第53図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (11)	71
第23図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (5)	32	第54図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (12)	72
第24図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (6)	34	第55図	SI29 竪穴建物跡	出土遺物 (13)	73
第25図	SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (7)	35	第56図	SI60 竪穴建物跡	SD84 溝	74
第26図	SI23 竪穴建物跡	37	第57図	SI60 カマド煙道遺物	出土状況	75
第27図	SI23 竪穴建物跡 出土遺物	39	第58図	SI60 竪穴建物跡	出土遺物 (1)	76
第28図	SI24 a 竪穴建物跡、SI24b 掘方	42	第59図	SI60 竪穴建物跡	出土遺物 (2)	77
第29図	SI24b 竪穴建物跡	43	第60図	SI60 竪穴建物跡	出土遺物 (3)	78
第30図	SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	45	第61図	SI60 竪穴建物跡	出土遺物 (4)	79
第31図	SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	46	第62図	SI62 竪穴建物跡		81
			第63図	SI62 竪穴建物跡	出土遺物	82
			第64図	SI76 竪穴建物跡	SK56 土坑	83
			第65図	SI76 竪穴建物跡	出土遺物	83
			第66図	SI78 竪穴建物跡		85

第 67 图	SI78 竖穴建物跡	出土遺物 (1)	• •	86	第 97 图	SX15 土師器焼成遺構	出土遺物 (3)	118			
第 68 图	SI78 竖穴建物跡	出土遺物 (2)	• •	87	第 98 图	SX33 土師器焼成遺構	SK32 焼成土坑	120			
第 69 图	SI78 竖穴建物跡	出土遺物 (3)	• •	88	第 99 图	SX34 土師器焼成遺構	• • • • •	120			
第 70 图	SI78 竖穴建物跡	出土遺物 (4)	• •	89	第 100 图	SX34 土師器焼成遺構	SK32 焼成土坑	出 土遺物 • • • • •	121		
第 71 图	SI78 竖穴建物跡	出土遺物 (5)	• •	90	第 101 图	SX38・39 土師器焼成遺構	• • • • •	122			
第 72 图	SI78 竖穴建物跡	出土遺物 (6)	• •	91	第 102 图	SX38 土師器焼成遺構	出土遺物	• •	123		
第 73 图	SI78 竖穴建物跡	出土遺物 (7)	• •	92	第 103 图	SX46 土師器焼成遺構	• • • • •	124			
第 74 图	SI90 竖穴建物跡	SX92 土師器焼成遺構			第 104 图	SX92 土師器焼成遺構	SK85 焼成土坑	出 土遺物 • • • • •	125		
SK93 土坑	• • • • •			93	第 105 图	SK12・16 焼成土坑	出土遺物	• • •	126		
第 75 图	SI90 竖穴建物跡	出土遺物 (1)	• •	94	第 106 图	SK16・17 焼成土坑	• • • • •	127			
第 76 图	SI90 竖穴建物跡	出土遺物 (2)	• •	95	第 107 图	SK40 焼成土坑	• • • • •	129			
第 77 图	SK9・10・13 土坑	SX3・7・8 土師器焼成 遺構 (1)	• • • • •	97	第 108 图	SK40 焼成土坑	出土遺物	• • • • •	129		
第 78 图	SK9・10・13 土坑	SX3・7・8 土師器焼成 遺構 (2)	• • • • •	98	第 109 图	SK85・86 焼成土坑	• • • • •	130			
第 79 图	SK9・13 土坑	SX3・8 土師器焼成遺構	出 土遺物 (1)	• • • • •	第 110 图	SK85 焼成土坑	出土遺物	• • • • •	130		
				99	第 111 图	SD11 溝	出土遺物	• • • • •	132		
第 80 图	SK9・13 土坑	SX3・8 土師器焼成遺構	出 土遺物 (2)	• • • • •	第 112 图	SD54 溝	出土遺物 (1)	• • • • •	133		
				100	第 113 图	SD54 溝	出土遺物 (2)	• • • • •	134		
第 81 图	SK14 土坑	SX15 土師器焼成遺構	• •	101	第 114 图	SD73 溝	出土遺物	• • • • •	134		
第 82 图	SK14 土坑	出土遺物	• • • • •	102	第 115 图	SK67・68 土坑	SD54・73 溝跡	SX71 整 地層	SX53 堆積層	• • • • •	135
第 83 图	SK18 土坑	SK12 焼成土坑	• • • • •	102	第 116 图	SX71 整地層	出土遺物 (1)	• • • • •	136		
第 84 图	SK30 土坑	SX31 土師器焼成遺構	• •	103	第 117 图	SX71 整地層	出土遺物 (2)	• • • • •	137		
第 85 图	SK36・45 土坑	SX37 土師器焼成遺構		104	第 118 图	SX71 整地層	出土遺物 (3)	• • • • •	138		
第 86 图	SK36 土坑	出土遺物	• • • • •	105	第 119 图	SX71 整地層	出土遺物 (4)	• • • • •	139		
第 87 图	SK47 土坑	出土遺物	• • • • •	105	第 120 图	SX71 整地層	出土遺物 (5)	• • • • •	140		
第 88 图	SK51・66 土坑	SK74 焼成土坑	• • •	107	第 121 图	SX53 堆積層	出土遺物	• • • • •	141		
第 89 图	SK55 土坑	SX82 土師器焼成遺構	• •	108	第 122 图	SD11 溝・SD2 河川跡	• • • • •	142			
第 90 图	SK56 土坑	出土遺物	• • • • •	109	第 123 图	SD11 溝・SD2 河川跡	断面図	• • •	143		
第 91 图	SK65 土坑	SK70 焼成土坑	• • • • •	110	第 124 图	SD2 河川跡	出土遺物 (1)	• • • • •	144		
第 92 图	SK66 土坑	出土遺物	• • • • •	111	第 125 图	SD2 河川跡	出土遺物 (2)	• • • • •	145		
第 93 图	SX4 土師器焼成遺構	• • • • •	• • • • •	113	第 126 图	SD2 河川跡	出土遺物 (3)	• • •	146		
第 94 图	SX4 土師器焼成遺構	出土遺物	• • •	113	第 127 图	SD2 河川跡	出土遺物 (4)	• • • • •	147		
第 95 图	SX15 土師器焼成遺構	出土遺物 (1)		116	第 128 图	SD2 河川跡	出土遺物 (5)	• • • • •	148		
第 96 图	SX15 土師器焼成遺構	出土遺物 (2)		117							

第129図	SD2 河川跡	出土遺物(6)	149	第164図	軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合位置のバラエ	
第130図	SD2 河川跡	出土遺物(7)	150	ティ		187
第131図	SD2 河川跡	出土遺物(8)	151	第165図	瓦当と丸瓦の接合位置の比較	188
第132図	SD2 河川跡	出土遺物(9)	152	第166図	軒平瓦製作技法模式図	189
第133図	SD2 河川跡	出土遺物(10)	153	第167図	特徴的な製作技法	190
第134図	SD2 河川跡	出土遺物(11)	154	第168図	遺構の年代・新旧関係	194
第135図	SD2 河川跡	出土遺物(12)	155	第169図	吹付窯跡調査区配置図	268
第136図	SD2 河川跡	出土遺物(13)	156	第170図	4区自然流跡断面図	269
第137図	SD2 河川跡	出土遺物(14)	157	第171図	吹付C窯跡調査区	279
第138図	SD2 河川跡	出土遺物(15)	158	第172図	吹付C窯跡遺構配置図	280
第139図	SD2 河川跡	出土遺物(16)	158	第173図	SR1 窯跡	281
第140図	SD2 河川跡	出土遺物(17)	159	第174図	SR1 窯跡 出土遺物(1)	283
第141図	SD2 河川跡	出土遺物(18)	160	第175図	SR1 窯跡 出土遺物(2)	284
第142図	SX95 堆積層断面図		161	第176図	SR1 窯跡 出土遺物(3)	285
第143図	SX95 堆積層	出土遺物(1)	162	第177図	SR2 窯跡 SK4・5 土坑	287
第144図	SX95 堆積層	出土遺物(2)	163	第178図	SR1 SR2 その他出土遺物	288
第145図	SX95 堆積層	出土遺物(3)	164	第179図	灰原 出土遺物(1)	290
第146図	SX95 堆積層	出土遺物(4)	165	第180図	灰原 出土遺物(2)	291
第147図	SX95 堆積層	出土遺物(5)	166	第181図	灰原 出土遺物(3)	292
第148図	SX95 堆積層	出土遺物(6)	167	第182図	灰原 出土遺物(4)	293
第149図	SX95 堆積層	出土遺物(7)	168	第183図	吹付C窯跡出土土器・個数と重量の比	295
第150図	SX95 堆積層	出土遺物(8)	169	第184図	彦右エ門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡遺	
第151図	SX95 堆積層	出土遺物(9)	170	構分布図	311	
第152図	SX95 堆積層	出土遺物(10)	171			
第153図	SX95 堆積層	出土遺物(11)	172			
第154図	遺構検出面	出土遺物(1)	173			
第155図	遺構検出面	出土遺物(2)	174			
第156図	その他	出土遺物	175			
第157図	SX95 堆積層	その他出土瓦	176			
第158図	表採・カクラン	出土遺物	177			
第159図	石器・縄文土器		177			
第160図	彦右エ門橋窯跡出土土器分類図		180			
第161図	年代の検討資料		183			
第162図	鬼板集成		185			
第163図	道具瓦集成		186			

表目次

表1 対象遺跡周辺の遺跡分布	5
表2 SI24 堅穴建物跡 土層表	44
表3 図示した瓦博類の出土状況	184

写真図版目次

図版 1	遺跡全景	198	図版 34	SI25 出土遺物 (1)	231
図版 2	6区 全景	199	図版 35	SI25 出土遺物 (2)	232
図版 3	7区 全景	200	図版 36	SI29 出土遺物 (1)	233
図版 4	8・9区 全景	201	図版 37	SI29 出土遺物 (2)	234
図版 5	SB48・50・79 掘立柱建物跡	202	図版 38	SI29 出土遺物 (3)	235
図版 6	SI21 竪穴建物跡	203	図版 39	SI29 出土遺物 (4)	236
図版 7	SI22 竪穴建物跡	204	図版 40	SI29 出土遺物 (5)	237
図版 8	SI22 竪穴建物跡	205	図版 41	SI29 出土遺物 (6)	238
図版 9	SI23 竪穴建物跡	206	図版 42	SI60 出土遺物 (1)	239
図版 10	SI24b 竪穴建物跡	207	図版 43	SI60 出土遺物 (2)	240
図版 11	SI24a・b 竪穴建物跡・SK36・45	208	図版 44	SI60 出土遺物 (3)	241
図版 12	SI25 竪穴建物跡	209	図版 45	SI78 出土遺物 (1)	242
図版 13	SI26・27・29 竪穴建物跡	210	図版 46	SI78 出土遺物 (2)	243
図版 14	SI29 竪穴建物跡	211	図版 47	SI78 出土遺物 (3)	244
図版 15	SI60 竪穴建物跡	212	図版 48	SI78 出土遺物 (4)	245
図版 16	SI60・62・76・90 竪穴建物跡	213	図版 49	SI62・76・90 竪穴建物跡 出土遺物	246
図版 17	SI78 竪穴建物跡	214	図版 50	SX4・8・SK9・13 出土遺物	247
図版 18	土師器焼成遺構	215	図版 51	SX4・15・34 出土遺物	248
図版 19	土師器焼成遺構・焼成土坑	216	図版 52	SK12・32・47・66・SX38・92 出土遺物	249
図版 20	土師器焼成遺構・焼成土坑・土坑	217	図版 53	SX16・SX53・SD2 大別1層 出土遺物 (1)	250
図版 21	整地層・土坑	218	図版 54	SD2 大別1層 出土遺物 (2)	251
図版 22	土坑・溝・河川	219	図版 55	SD2 大別3層 出土遺物 (1)	252
図版 23	彦右工門橋梁跡1区・3区	220	図版 56	SD2 大別3層 出土遺物 (2)	253
図版 24	彦右工門橋梁跡4区・5区	221	図版 57	SD2 大別3層 出土遺物 (3)	254
図版 25	彦右工門橋梁跡10区・11区	222	図版 58	SD2 大別4層 出土遺物 (1)	255
図版 26	SI21・22 出土遺物	223	図版 59	SD2 大別4層 出土遺物 (2)	256
図版 27	SI22 出土遺物 (1)	224	図版 60	SX95 出土遺物 (1)	257
図版 28	SI22 出土遺物 (2)	225	図版 61	SX95 出土遺物 (2)	258
図版 29	SI22 出土遺物 (3)	226	図版 62	SX95 出土遺物 (3)	259
図版 30	SI23・26 出土遺物	227	図版 63	SX95 出土遺物 (4)	260
図版 31	SI24b 出土遺物 (1)	228	図版 64	基本層 瓦1	261
図版 32	SI24b 出土遺物 (2)	229	図版 65	SD2 出土遺物	262
図版 33	SI24b 出土遺物 (3)	230	図版 66	遺構検出面 遺物	262

図版 67	SD11・54・75 出土遺物	263
図版 68	焼台 集合写真	264
図版 69	縄文土器と石器	264
図版 70	石製品 集合写真	265
図版 71	粘土 集合写真	265
図版 72	鉄滓 集合写真	265
図版 73	墨書拡大写真	266
図版 74	吹付窯跡1・2区	274
図版 75	吹付窯跡2～4区	275
図版 76	吹付窯跡5・6区	276
図版 77	吹付C窯跡 SR1	300
図版 78	吹付C窯跡 SR2	301
図版 79	吹付C窯跡 灰原	302
図版 80	吹付C窯跡 全景 トレンチ	303
図版 81	SR1 出土遺物	304
図版 82	灰原 出土遺物 (1)	305
図版 83	灰原 出土遺物 (2)	306
図版 84	灰原・SR2 出土遺物 (1)	307
図版 85	灰原・SR2 出土遺物 (2)	308

第I章 調査に至る経過

国道4号は、東京都から青森県を結ぶ総延長836.4kmの一般国道である。当県には、南部の白石市から県庁所在地の仙台市を経て、北部の栗原市に至る124.4kmが所在し、県を南北に縦貫する交通・物流の主要幹線道路となっている。このうち、交通量の多い仙台市から大崎市の間で、唯一2車線であった大衡村大衡柵木から駒場字蔵崎間の延長4.5kmを4車線に拡幅する事業が、国道4号大衡道路として計画された(第1図)。

これを受けて、平成29年11月に宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所は協議を行

い、事業範囲内に所在する周知の遺跡については確認調査を実施すること、それ以外の部分については未発見の遺跡が存在する可能性もあることから分布調査を実施することとした。

平成30年3月に実施した分布調査の結果、新たに柵木E遺跡を発見・登録し、吹付窯跡・彦右工門橋窯跡・河原遺跡で遺跡範囲を拡大した。また、平成30年10月には、遺跡範囲からは離れるものの、地形から遺跡の存在が想定された彦右工門橋窯跡南側の事業範囲内で試掘調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった(第2図)。これらに基づいて、遺跡保存と事業との調整について協議を重ねたが、計画変更等が困難であることから、やむを得ず工事前に記録保存のための発掘調査を実施する事となった。調査対象となった遺跡は、吹付窯跡・彦右工門橋窯跡・河原遺跡・大衡中学校東遺跡・柵木E遺跡と、これに令和3年に不時発見した吹付C窯跡を加えた、計6遺跡である。

発掘調査は平成31年度に着手し、用地買収の進捗や工事工程との調整を図りながら、条件の整った地点から順次実施した。本書ではこのうち、彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡の調査成果について報告する。これら3遺跡の調査は、平成31年度は彦右工門橋窯跡(8・9区本調査、1・4・10区確認調査)と吹付窯跡(1区確認調査)、令和2年度は彦右工門橋窯跡(6区本調査、3・5区確認調査)と吹付窯跡(2・3区確認調査)、令和3年度は彦右工門橋窯跡(7区本調査)と吹付窯跡(5区確認調査)および吹付C窯跡(本調査)、令和4年度は彦右工門橋窯跡(7区本調査、11区確認調査)と吹付窯跡(4・6区確認調査)および吹付C窯跡(本調査)でそれぞれ実施した。詳細な地点毎の調査経過については、各章の「調査方法と経過」の項に記載した。

第II章 遺跡の環境

1. 地理的環境

彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡の所在する大衡村は、宮城県のほぼ中央に位置し、南は大和町、東は大郷町、北東は大崎市、北西は色麻町と隣接する(第1図)。県庁所在地である仙台市



第1図 報告する遺跡の位置



第2図 事業範囲と遺跡

る。大衡村役場から北に約4kmに位置する。遺跡範囲は、東西620m、南北410mほどである。遺跡内は、東半が尾根を境に南斜面と北斜面に大別でき、西半は西から入る沢によって尾根が二分される。今回の調査では、西半を南北に縦貫するように計画された道路幅の範囲を調査した。

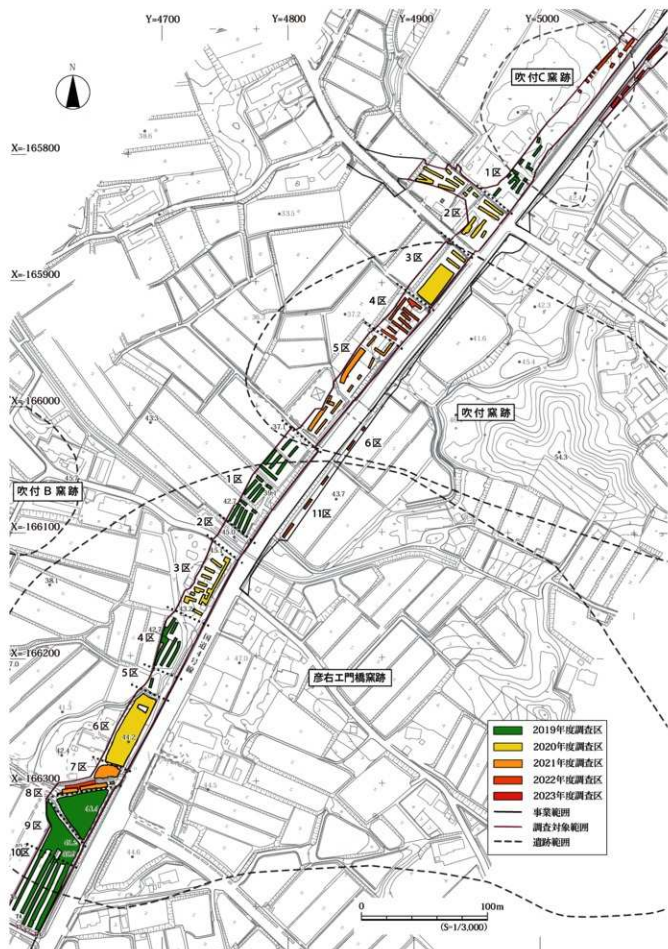
吹付窟跡は、黒川郡大衡村駒場字欠下に所在する。彦右工衙門窟跡の北に隣接する。遺跡範囲は、東西540m、南北180mほどである。遺跡内は、東西方向の尾根を境に南斜面と北斜面に大別できる。今回の調査では、西側の丘陵尾根西端と沢部分について、計画された道路幅の範囲を調査した。

吹付C窟跡は、黒川郡大衡村駒場字峯崎に所在する。吹付窟跡の北に隣接する。遺跡範囲は、東西100m、南北140mほどである。遺跡は、低地に面した丘陵斜面北端の北東緩斜面に立地する。今回の調査では、その南東部分について、計画された道路幅の範囲を調査した。

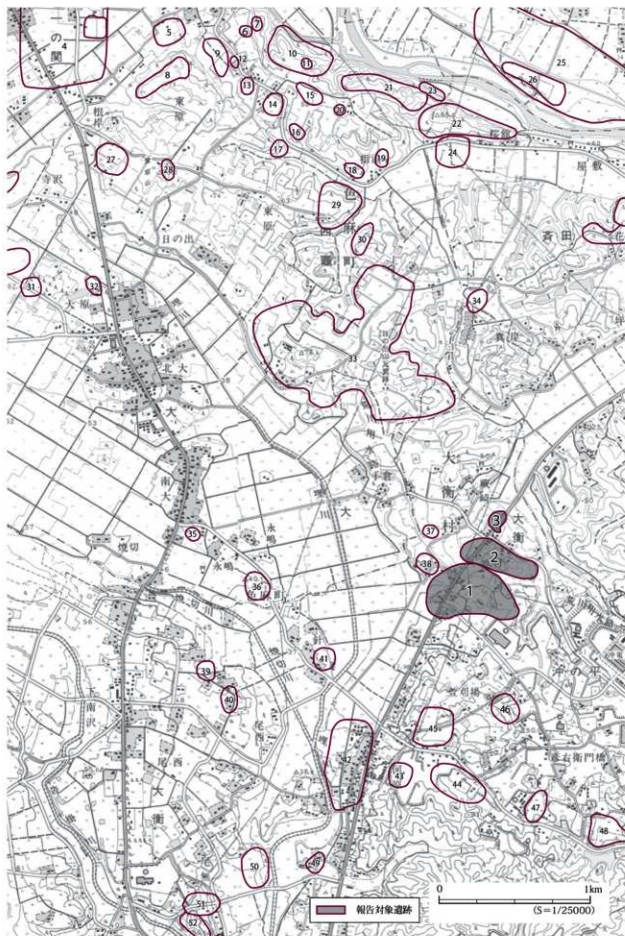
中心部から北へ約25kmに位置する。村内を国道4号、国道457号、東北自動車道が縦貫しており、交通アクセスの良さから、近年では第二仙台北部中核工業団地などの工業団地の開発が行われ、自動車や精密機械などの製造工場が多数立地している。

大衡村の所在する県中央部は、西側に奥羽山脈の山々が南北に連なり、そこから東に向かって徐々に標高を下げながら山地と丘陵が延びている。それらは吉田川によって形成された低地や沖積地をはさんで、北側の大松沢丘陵と南側の富谷丘陵に分かれている。大衡村の地形は、大松沢丘陵と、鳴瀬川や吉田川の支流が形成した低地や沖積地からなる。本書で報告する3遺跡は、大松沢丘陵の北西部に立地し、北は鳴瀬川の支流、西は吉田川支流の埋川へそれぞれそそぐ、いくつもの小河川の開析によって樹枝状に分かれた、ゆるやかな丘陵尾根やその緩斜面地に広がっている。

彦右工衙門窟跡は、黒川郡大衡村駒場字彦右工衙門橋、大衡字吹付ほかに所在す



第3図 彦右工門橋竊跡・吹付竊跡・吹付C竊跡調査区配置図



第4図 報告対象遺跡と周辺の遺跡

表1 対象遺跡周辺の遺跡分布

No.	遺跡名	類別	時代	No.	遺跡名	類別	時代
1	彦右衛門橋窯跡	窯跡	古代	27	愛宕山遺跡	散布地	縄文・古代
2	吹付窯跡	窯跡	古代	28	愛宕山窯跡	窯跡	奈良
3	吹付C窯跡	窯跡	平安	29	杉山遺跡	散布地・城跡	中世
4	一の洞遺跡(色麻糠跡)	官衙	奈良・平安	30	東原磯穴墓群	磯穴墓群	古墳後
5	真山遺跡	散布地・城跡	平安・中世	31	大原C遺跡	散布地	縄文
6	官林埴輪窯跡	窯跡	古墳	32	上新町遺跡	散布地	古代
7	熊野神社古墳群	前方後円墳・円墳	古墳	33	日の出山窯跡群	窯跡・住居跡	奈良
8	根付遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代	34	青田山遺跡	窯跡・散布地	奈良・平安
9	官林瓦窯跡	窯跡	奈良	35	前原遺跡	散布地	古代
10	酒ノ原遺跡	散布地・城跡	縄文・平安・中世	36	長島遺跡	散布地	縄文晩・古墳・古代
11	東原岡古墳	円墳	古墳	37	横前遺跡	窯跡	古代
12	東原古墳	古墳	古墳後	38	吹付B窯跡	窯跡	古代
13	東原古墳	古墳	古墳後	39	尾西A遺跡	散布地	古代
14	東原古墳	古墳	古墳後	40	尾西B遺跡	散布地	縄文・古代
15	東原古墳群	円墳	古墳後	41	新遺跡	散布地	古代
16	東原A遺跡	散布地	縄文	42	河原遺跡	散布地	縄文・古代
17	東原B遺跡	散布地	縄文	43	持付沢窯跡	窯跡・散布地	古代
18	東原C遺跡	散布地	縄文	44	持付沢B窯跡	窯跡	奈良
19	出山遺跡	散布地	縄文	45	萱刈場窯跡	窯跡	古代
20	東原北塚磯穴墓群	磯穴墓群	古墳後	46	萱刈場B窯跡	窯跡	奈良
21	歴史跡 金南寺古墳群	前方後円墳・円墳	古墳中・後	47	萱刈場C窯跡	窯跡	奈良
22	刈田遺跡	城跡	中世	48	彦右衛門橋南遺跡	散布地	古代
23	根付地磯穴墓群	磯穴墓群	古墳後	49	神宮遺跡	散布地	古代
24	松原遺跡	散布地	古代	50	東原C遺跡	散布地	前・晩・縄文
25	根付遺跡	散布地・官衙?・墓	古墳中・古代・中世・近世	51	松原聖国前遺跡	散布地	古代
26	尾西西遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	52	尾無A遺跡	散布地	縄文・古代

2. 歴史的環境

本書で報告する遺跡の周辺には、縄文時代から近世の遺跡が知られている。それらの多くは、吉田川支流の善川・埋川とそれらにそそぐ小河川が形成した、低地や沖積地に面した丘陵上またはその裾部に立地する。以下、時代別に述べる(第3図・表1)。

〔縄文時代〕

調査対象遺跡周辺で、内容の明らかな縄文時代の遺跡は知られていない。大衛村内では、奥田金沢遺跡で中期中葉の大木8b式期の竪穴建物跡(大衛村教育委員会2009)、上深沢遺跡で中期後葉の大木9式期の竪穴建物跡(宮城県教育委員会1978)、梅木遺跡では中期末葉の大木10式期の複式炬を持つ竪穴建物跡や早期後葉の土器が出土している(大衛村教育委員会1998a)。

〔古墳時代〕

遺跡の北3.5kmほどの鳴瀬川南岸の丘陵上には大形古墳が分布する。熊野神社古墳(7)は墳丘長63mの前方後円墳で、測量調査が行われている。墳丘形態、立地、埴輪をもたないことから前期と推定されている(藤原・小野寺・辻・東北学院大学1999)。念南寺古墳群(21)は、前方後円墳1基と円墳30基以上からなる古墳群である。このうち、念南寺古墳は墳丘長56mの前方後円墳で、発掘調査が行われている。調査の結果、埋葬施設に家形石棺を採用し、埴輪を持つ古墳であることが明らかになっており、中期後葉に位置付けられている(宮城県教育委員会1998)。埴輪窯は、熊野神社古墳・念南寺古墳と同一丘陵上にある官林埴輪窯跡(6)が知られている(古川市史編さん委員会2008)。

〔奈良・平安時代〕

彦右衛門橋窯跡(1)・吹付窯跡(2)・吹付C窯跡(3)も含めて、窯跡が数多く知られている。周辺には、持付沢窯跡A・B地点(43・44)、萱刈場窯跡A・B・C地点(45・46・47)、吹付B

焼成がほとんど同じであることから、同一窯の製品が廃棄されたものとみられている。年代は、長根窯跡群 B 地点 1 号窯、杉の入裏窯跡 3 号窯、安養寺下窯跡、伊治城跡 SI173 住居跡で出土した土器を類例として、8 世紀後半から 9 世紀初頭と報告されている。

平成 8 (1996) 年、前年度に引き続き道路改良工事に伴い発掘調査された(宮城県教育委員会 1997)。遺跡東半の北斜面で窯跡 1 基が調査された。調査で検出されたのは焼成部先端のみで、須恵器杯、蓋、甕が出土した。年代は、前年度調査の SK1 土坑に近いものの、甕頸部の櫛描波状文が比較的丁寧に施されており、日の出山窯跡や次橋窯跡などで出土した土器を類例として、8 世紀後半頃と報告されている。

[吹付窯跡]

畑地を中心に須恵器杯、高台杯、盤、蓋、甕、長頸壺、丸瓦、平瓦、スサ入りの窯壁片などが採集されている(村田 1988)。ヘラ切が主体で、これに再調整が施された杯や高台杯がみられる。年代は、長根窯跡群 B 地点 1 号窯や御駒堂遺跡 22 号住居跡などで出土した土器を類例として、8 世紀後半頃と報告されている。

4. 基本土層

3 遺跡の基本土層は共通することから、ここでまとめて記述する。基本土層は第 5 図のとおりである。なお、谷や沢の堆積状況は、各遺跡の報告内で述べる。

I 層：表土、耕作土、盛土などの近現代の土。

II 層：黒褐色(10YR3/1)シルト。旧表土。

III 層：暗褐色(10YR3/4)シルト。地山漸移層。古代の遺構検出面。

IV 層：黒色(10YR2/1)粘土質シルト。沢や谷で確認した自然堆積土。

V 層：明黄褐色(10YR6/6)シルト～粘土。地山。古代の遺構検出面。

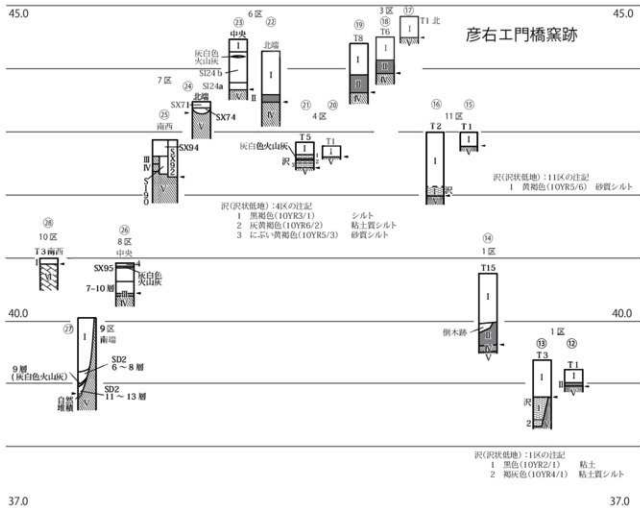
VI 層：岩盤。

I 層は調査区によって粒径・含有物や層厚が大きく異なる。II 層は元の地形が他より低くなっている沢や斜面など、主に I 層が 100cm 以上と厚く堆積する調査区で確認できる。厚さは 10～20cm 前後である。III 層は残存状況が良好な調査区で、厚さ 20～30cm 前後である。古代の遺構は、この面を掘り込んでいる。IV 層は元の地形が他より低くなっている沢や谷など、周囲より低い地点で確認できる。V 層は地山で、大部分の地点で古代の遺構検出面となっている。VI 層は岩盤で、I 層下でこの面が検出された調査区は、近現代に大きく削平を受けていると考えられる。

第 5 図に示した柱状図および地形断面図を見ると、調査対象の 3 遺跡周辺はやや起伏のある微地形を有することが分かる。

吹付 C 窯跡は北側が鳴瀬川支流の小河川による沖積地に面しており、今回の調査区は北側へ向かって標高が下がる緩斜面の手前に立地している。調査区現地表面の標高は 35 m だが、その北側の沖積地に接する丘陵裾の標高は 26 m である。

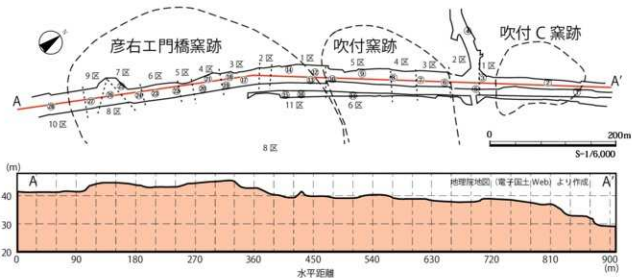
その南に広がる吹付窯跡は、現地表面がおおむね標高 40 m 弱ではあるが、調査では数箇所沢跡



沢(沢状地)：11区の注記
1 黒色(10YR2/1) 粘土
2 期灰色(10YR4/1) 粘土質シルト

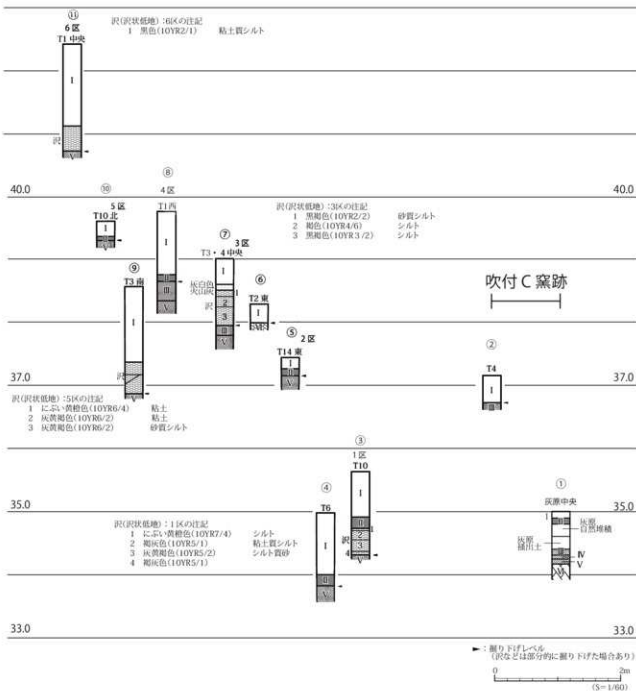
→ 掘り下しレベル
(沢などは部分的に掘り下げた場合あり)

0 2m
S-1/6.000



第5図 彦右工門橋窯跡基本層(1)

吹付窯跡



第6図 彦右工門橋窯跡基本層(2)

の堆積層が確認されている。旧地形は西流する幾筋かの沢により開析を受けた小規模な谷と尾根が広がっており、それを近現代に大規模に盛土して道路や宅地としたとみられる。

彦右工門橋窯跡は西側中央部が標高 43～44 mで最も高く、北側の現在荒川流水路となっている部分や、南側の埋川による沖積地は標高 40 m以下となっており、全体的にゆるやかな山なりの起伏を呈する。ただし、調査では数箇所沢跡による堆積層が確認されている。

地形全体を見ると、吹付窯跡で確認された沢跡は北の鳴瀬川支流へ、彦右工門橋窯跡で確認された沢跡は西の吉田川支流埋川へそそいでいたとみられる。

ひこ う え もん ぼし かま あと
彦 右 工 門 橋 窯 跡

調 査 要 項

遺 跡 名：吹付窯跡（宮城県遺跡地名表記載番号：26010）

所 在 地：宮城県黒川郡大衡村駒場字彦右工門橋、大衡字吹付

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

佐藤涉、伊東博昭、風間啓太、手代勝巳、村上景亮、佐久間光平、古川一明、
村田晃一、古田和誠

調査期間：令和元年8月3日～12月27日 佐藤涉 村田晃一

令和2年9月3日～10月2日 佐藤涉 伊東博昭 風間啓太 古田和誠

令和3年7月1日～10月31日 佐藤涉 風間啓太 古川一明

令和4年12月18日 佐藤涉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

調査対象面積：約13010㎡

調査面積：約4937㎡

第三章 彦右工門橋窯跡

1. 調査区ごとの経過と概要

調査対象地は遺跡範囲の西端付近にあたる（第2図）。現道の東西に並行する拡幅部のほかに取り付け道路や、国道と県道との合流部分を含む。調査は、事業地内における遺跡内および隣接地を対象として、幅2mの調査区において遺構・遺物の有無を確認しながら進め、遺構・遺物を発見した場合には調査区を拡張した。各調査区は、調査年度と地形をもとに、便宜的に北から南に向かって1～11区に分けた。

1区（第7図）

令和元年11月19日～11月29日に調査した。遺跡北西とその隣接地にあたり、丘陵北側の北に向かって傾斜する斜面から谷に立地する。調査前は水田である。この水田は対象地内で4段に分かれており、最上段は標高42.7m、最下段は標高37.1mである。

遺跡内と隣接地にT1～17の調査区を設定した。調査深度は40～130cmである。このうち、南側のT7～17ではI層直下が平坦な地山であったのに対して、北側のT1～4では沢跡の堆積層を確認した。

2区（第7図）

現況は農業用水路と道路で、範囲が狭小であり、1区・3区の隣接部分で遺構・遺物の発見がなかったことから、調査対象から除外した。

3区（第7図）

令和2年9月3日～10月2日に調査した。遺跡の西側で2つに分かれる尾根のうち北側の尾根にあたり、西に舌状に張り出す丘陵尾根に立地する。調査前は宅地である。

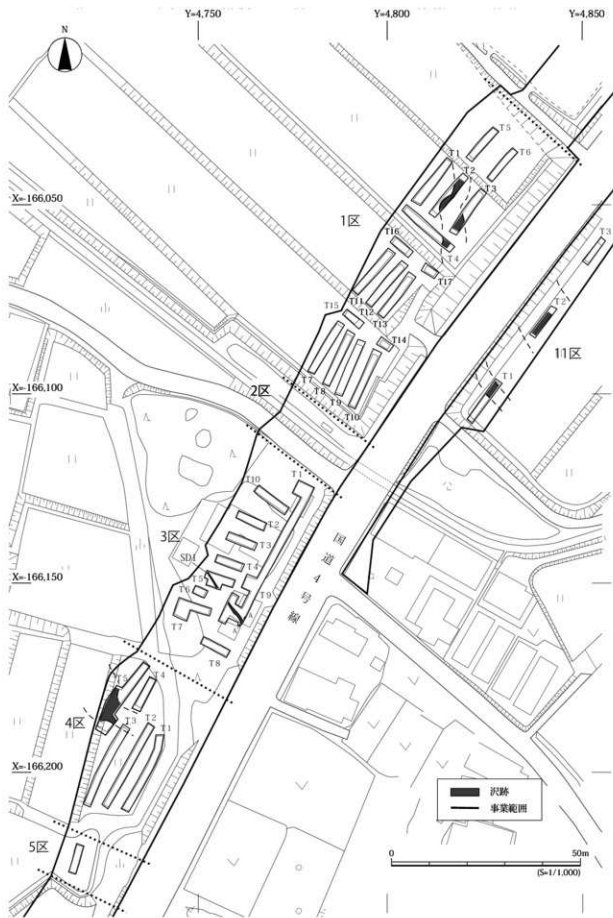
3区ではT1～10の調査区を設定した。調査深度は50～120cmである。T1～5・10ではI層直下でV層を確認しており、II～III層は削平されたと考えられる。南側のT6～9では地形が南に向かって低く傾斜しており、II～III層の堆積を確認した。

遺構は、T5～9でSD1溝跡を検出した（第8図）。北西-南東方向に延びる溝跡で、規模は検出長9.8m、T9の調査区東壁で上幅156cm、深さ40cmである。断面は逆台形である。堆積層は2層に細分されるが、すべて自然堆積層である。遺物は出土していない。他の調査区でも遺物の出土は無かった。

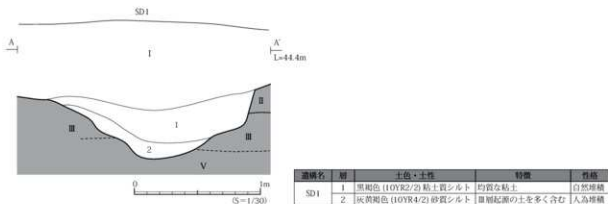
4・5区（第7図）

4区は令和元年11月12日～11月15日、5区は令和2年9月29日・30日に調査した。調査年度の都合で分けたものであるため、以下ではまとめて記述する。

4・5区は、丘陵尾根にあたる3区と6区に挟まれた低地部である。調査前は水田である。4区はT1～T5の調査区を設定し、5区は1か所だけの調査区である。調査深度は20～40cmである。4区のT3北端からT5南半部にかけて、灰白色火山灰が堆積する沢およびII～III層を確認したが、それ以外の場所ではI層直下でV・VI層を確認した。沢跡を確認した調査区以外ではII～III層は削平



第7図 1～6・11区遺構分布図



第8図 3区 SD1 溝跡

されていると考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。

6区 (第9図)

令和2年9月3日～12月25日に調査した。調査区は遺跡範囲西の中央、2つに分かれる尾根のうち南の尾根にあたり、東から西に向かって延びる丘陵尾根平坦面に立地する。調査前は、北半が畑地、南半が宅地である。調査区中央付近が最も標高が高く、北と南に向かってそれぞれ緩やかに傾斜する。南側の斜面は7区に続き、8区で埋川の沖積低地に接している。

前年度の8・9区の調査成果から、事前に遺構・遺物が密であることを想定し、路線範囲全体に調査区を設定した。調査深度は20～50cmである。調査区中央ではI層直下でV層を確認しており、III層は削平を受けているとみられる。調査区の南と北ではそれぞれ標高が低くなっていくが、それに伴ってIII層が徐々に厚く残っており、II層は調査区北側でのみ確認している。

遺構は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土器焼成遺構、焼成土坑、土坑、柱穴・ピットを検出した。遺物は主に土器・須恵器で、他に瓦や陶製の紡錘車、錘などと合わせ、整理用コンテナ100箱分が出土した。

7区 (第9図)

令和3年7月1日から10月31日に調査した。調査区は、東から西に向かって延びる丘陵尾根上の平坦面とその南側の緩斜面に立地する。調査前は宅地、農道、基幹水路用地である。元の地形が南緩斜面で低かったのに対して、現地表面が6区中央と同程度の標高になるよう盛土されていたため、I層が厚く、その下には竪穴建物跡の窪みに由来する堆積層や古代以降の整地層が残っていた。遺構は、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、焼成土坑、土坑、整地層、溝、柱穴・ピットを検出した。遺物は土器・須恵器のほか、瓦が少量あり、整理用コンテナ14箱分が出土した。

8・9区 (第8図)

令和元年8月3日～12月27日に調査した。調査区は遺跡南西側にあたり、丘陵南緩斜面から低地部に立地する。調査前は水田である。

調査深度は10～120cmである。8区の現地表面は平坦であったが、北側ではI層直下でV層を確認したのに対し、南側ではII～III層が残っていた。旧地形は北が高く南が低かったとみられる。9

区はその緩斜面下の低地部にあたる。

遺構は、土師器焼成遺構、焼成土坑、土坑1基のほか、堆積層や河川跡を検出した。遺物は主に土師器・須恵器・瓦、ほかに陶製の鎌、縄文時代の石器など、整理用コンテナ100箱分が出土した。なお、調査当初は8区を北区、9区を中区と呼称していたため、遺物の注記がそれぞれ北区・中区となっている。

10区（第9図）

令和元年8月3日～8月14日に調査した。調査区は遺跡南西端および遺跡隣接地にあたり、低地部に立地する。調査前は水田である。

10区ではT1～5の調査区を設定した。掘削深度は10～30cmである。すべての調査区で、I層直下でV層を確認した。V層にはバックホーのバケットの爪痕やキャタピラの痕が残っており、現代に地形が大きく削平されたとみられる。遺構・遺物は発見されなかった。

11区（第7図）

令和4年12月18日に調査した。遺跡北端部にあたり、調査前は荒蕪地（旧水田）である。

11区ではT1～3の調査区を設定した。調査深度は30～120cmである。I層直下でV層を確認したが、II～III層はほとんど残存していない。開田時の切土で削平を受けているとみられる。T1・T2では、厚いI層の下で黒色砂質シルト層を確認した。また、T1では一部に灰白色火山灰を検出した。これらは、西側の1区で確認された沢跡の堆積土と類似しており、沢跡の堆積土の一部と考えられる。遺構・遺物は発見されなかった。

2. 発見した遺構と遺物

丘陵尾根平坦面から低地部分にあたる6区～9区で、掘立柱建物跡3棟、竪穴建物跡14棟、土師器焼成遺構14基、焼成土坑10基、土坑22基、溝5条、多数の柱穴・ピットを検出した。

（1）掘立柱建物跡・柱穴列跡

丘陵南緩斜面にあたる6区南と7区で計3棟検出した。

【SB48 掘立柱建物跡】（第12図・図版5）

〔位置・検出面〕6区・7区の南緩斜面に位置し、III層で検出した。

〔重複〕SI22、SX39、SK66、SX71、SK74と重複し、これより古い。

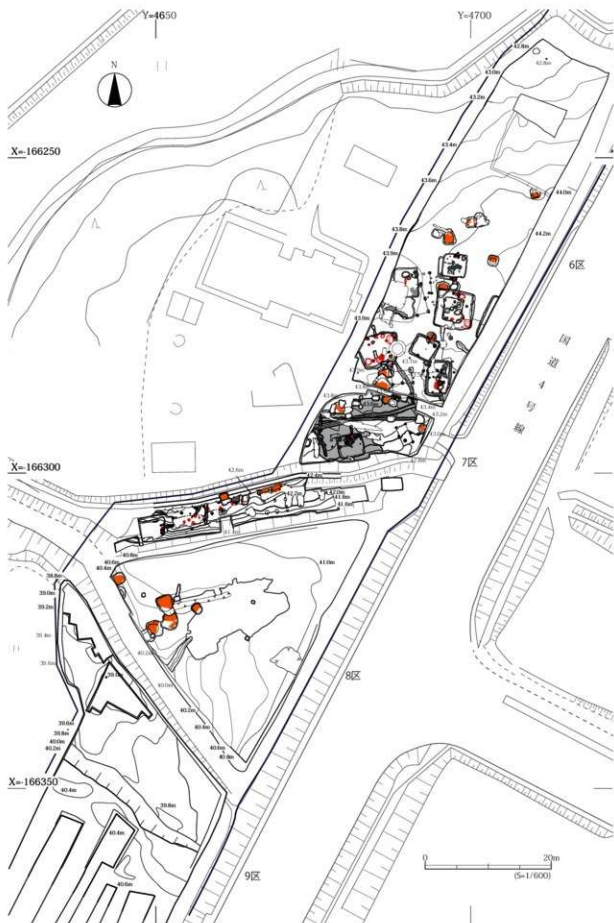
〔柱間数・棟方向〕南北2間、東西1間の南北棟建物である。

〔検出状況〕柱穴を7箇所検出し、このうち5箇所で柱痕跡、1箇所で抜き取り穴を検出した。調査区の制約によりP4の一部が未調査である。

〔平面規模〕桁行は、西側柱列で柱間寸法が北から2.0m、2.3mで総長4.3m、梁行は北側柱列で総長3.1mである。

〔方向〕西側柱列で測るとN・5°・Wである。

〔柱穴〕四隅の柱穴（P1～4）は長軸0.8～1.0m、短軸0.7～0.8mの隅丸長方形で、深さは0.8



第9図 6~9区 遺構分布図

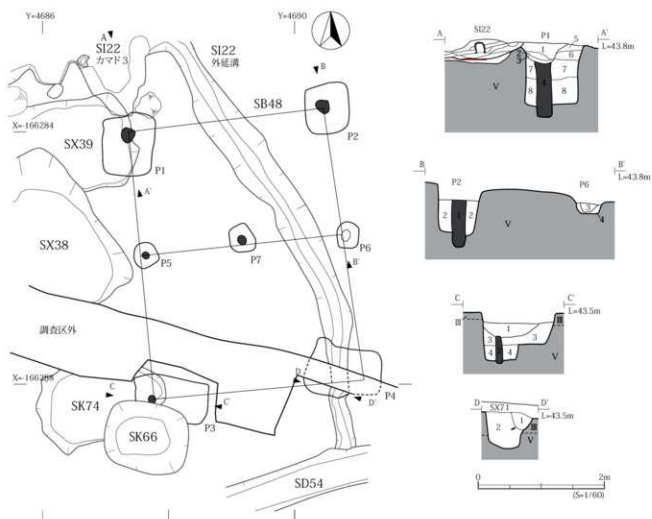


第10图 6区南~7区北 遺構配置図



第11図 7区南～8区 遺構配置図

m～1mである。掘方埋土はV層を主としてⅢ層ブロックを含む土を主体とする。柱痕跡は直径0.15～0.2mの円形である。北から2列目の柱列は、長軸0.4～0.5m、短軸0.4mの隅丸方形あるいは円形で、深さは0.1mから0.2mである。掘方埋土はⅢ層を主体として地山（V層）ブロック小を少

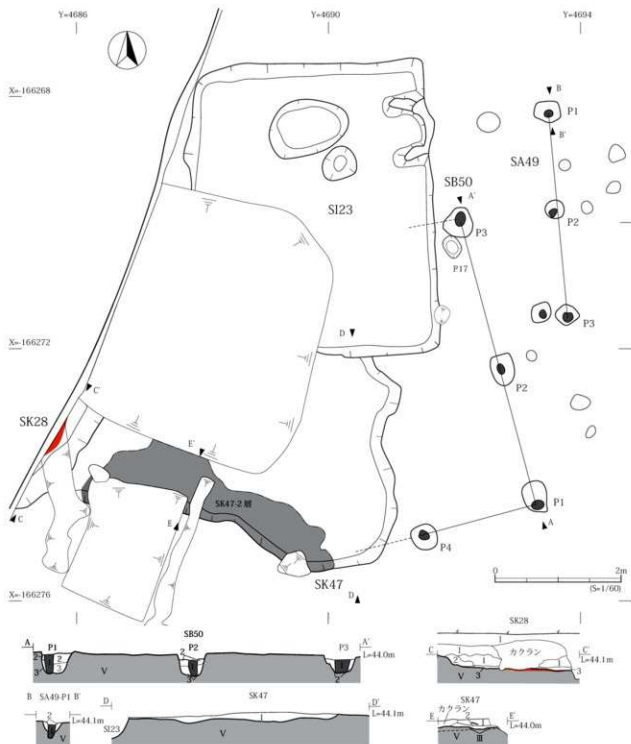


遺構名	層	土色・土性	特徴	性状
P1	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	炭化物小、地山 (V層) 粘を少し含む	掘削穴
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	土とほぼ同様、粘土粒を多く含む	掘削穴
	3	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	土1とほぼ同様、粘土塊、地山 (V層) ブロック小を多く含む	掘削穴
	4	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) 粘を少し含む	柱礎跡
	5	暗褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	掘方埋土
	6	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	掘方埋土
	7	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小～大を多く含む	掘方埋土
	8	明褐色 (10YR3/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック中を少し含む	掘方埋土
P2	1	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粘を少し含む	柱礎跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック大を大量に含む	掘方埋土
P3	1	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト	黄褐色 (10YR5/6) 地山 (V層) ブロック中を多く含む 炭化物粒、粘土粒を少し含む	掘削穴
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト		柱礎跡
	3	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	黄褐色 (10YR7/8) 地山 (V層) ブロック中を多く含む	掘方埋土
	4	浅黄褐色 (10YR8/4) 粘土	褐色 (10YR4/4) 粘土ブロック大を多く含む	掘方埋土
P4	1	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	炭化物粒を多く含む	掘方埋土
	2	にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト	地山 (V層) ブロック大～小を多く含む	掘方埋土
P6	3	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック中を大量に含む	掘削穴
	4	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) 粘を少し含む	掘方埋土

第12図 SB48掘立柱建物

し含む土を主体とする。柱痕跡は直径0.1mの円形である。四隅の柱穴に対し、それ以外の柱穴が小規模である特徴があり、P7は間仕切りを作るための柱穴である可能性がある。

〔出土遺物〕 採取穴、掘方から須恵器・土師器片が少量出土した。



遺構名	層	土色・土性	特徴	層構成
SB50	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を微量含む	柱石礎
	2	にじみ・黄褐色 (10YR5/3) シルト	黒層とV層からなる	側方埋土
	3	にじみ・黄褐色 (10YR5/2) シルト	黒層とV層からなる	側方埋土
SA49	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	柱石礎
	2	にじみ・黄褐色 (10YR5/3) シルト	黒層とV層からなる	側方埋土
SK28	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、地山 (V層) ブロック小を微量含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒を多く含む	炭層
SK47	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	明黄褐色 (2.5Y6/0) 粘土質シルト	粘土ブロックからなり、炭化物粒、白色粒子を少し含む	人為堆積

第13図 SB50掘立柱建物跡 SA49柱列 SK28焼成土坑 SK47土坑

【SB50 掘立柱建物跡】(第13図・図版5・9)

〔位置・検出面〕6区中央西寄りの丘陵平坦面に位置し、V層で検出した。

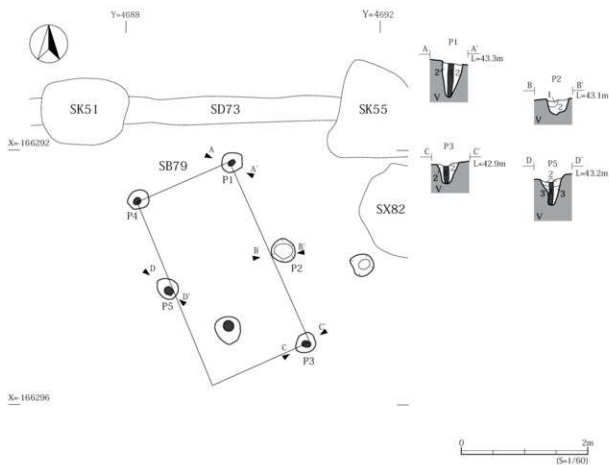
〔重複〕SI23、SK47と位置が重複する。遺構同士の重複は無いため前後関係は不明であるが、P3の西側はSI23 竪穴建物跡造成時に削平された可能性がある。

〔柱間数・棟方向〕南北2間、東西1間以上の南北棟建物である。

〔検出状況〕柱穴を4個検出し、このうち4箇所て柱痕跡を検出した。

〔平面規模〕桁行は、東側柱列で柱間寸法が北から2.4m、2.3mで総長4.7m、梁行は南側柱列で総長1.8m以上である。

〔方向〕西側柱列で測るとN-4°-Wである。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
P1	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト	炭層を多く、地山(V層)を少し含む	掘方埋土
P2	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	炭化物粒を多く含む	白灰堆積
	2	明黄褐色(10YR7/6)シルト	炭層を少し、地山(V層)を多く含む	掘方埋土
P3	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	明黄褐色(10YR7/6)シルト	炭層を少し、地山(V層)を多く含む	掘方埋土
P5	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト	炭層を多く、地山(V層)を少し含む	掘方埋土
	3	明黄褐色(10YR7/6)シルト	炭層を少し、地山(V層)を多く含む	掘方埋土
P	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	炭化物粒を多く含む	柱痕跡
	2	明黄褐色(10YR7/6)シルト	地山(V層)を少し、V層を多く含む	掘方埋土

第14図 SB79掘立柱建物跡

〔柱穴〕掘方は直径0.3～0.5mの不整円形で、深さは0.2～0.3mである。掘方埋土はⅢ層とⅤ層ブロックからなる土を主体とする。柱痕跡は直径0.1～0.15mの円形である。

〔出土遺物〕掘方から須恵器・土師器片が少量出土した。

〔SB79 掘立柱建物跡〕(第14図・図版9)

〔位置・検出面〕7区南緩斜面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔柱間数・棟方向〕南北2間、東西1間の南北棟建物である。

〔検出状況〕柱穴を5個検出し、このうち4箇所て柱痕跡を確認した。南西隅の柱穴は、南西に向かって緩やかに傾斜する斜面にあり、ほかの柱穴の底面標高からみて削平された可能性が高い。

〔平面規模〕桁行は、東側柱列で柱間寸法が北から1.6m、1.5mで総長3.1m、梁行は北側柱列で総長1.6mである。

〔方向〕西側柱列で測るとN-22°-Wである

〔柱穴〕掘方は直径0.3～0.4mの不整円形で、深さは0.2～0.6mである。掘方埋土はⅢ層とⅤ層ブロックからなる土を主体とする。柱痕跡は直径0.1mの円形である。

〔出土遺物〕掘方から須恵器・土師器片が少量出土した。

〔SA49 柱穴列跡〕(第13図)

〔位置・検出面〕7区南緩斜面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔柱間数・棟方向〕南北2間である。

〔検出状況〕柱穴3個を検出し、いずれも柱痕跡を確認した。柱間隔は北から1.6m、1.7mで、総長3.3mである。

〔方向〕N-6°-Wである。

〔柱穴〕掘方は直径0.3～0.4mの円形もしくは楕円形で深さは0.1～0.2cmである。掘方埋土はⅢ・Ⅴ層由来のにぶい黄褐色粘土質シルトを主体とする。柱痕跡は直径0.1mの円形である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

(2) 竪穴建物跡

丘陵尾根平坦面にあたる6区南で8棟、丘陵南緩斜面にあたる7区で5棟検出した。

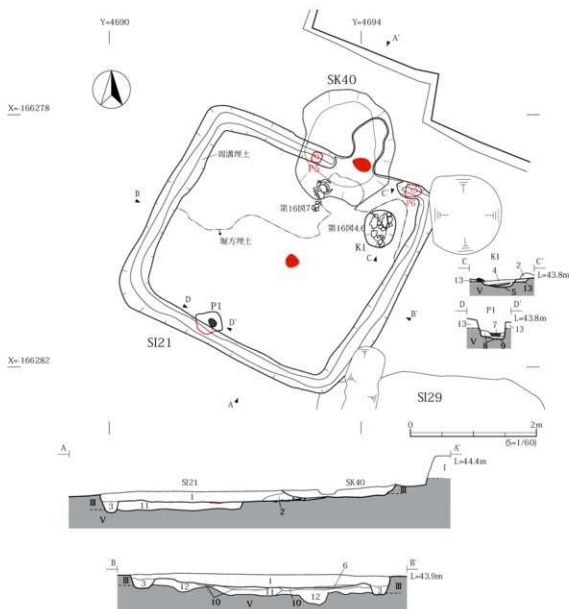
〔SI21 竪穴建物跡〕(第15・16図・図版6)

〔位置・検出面〕6区南の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK40・SI29と重複し、前者より古く、後者より新しい。

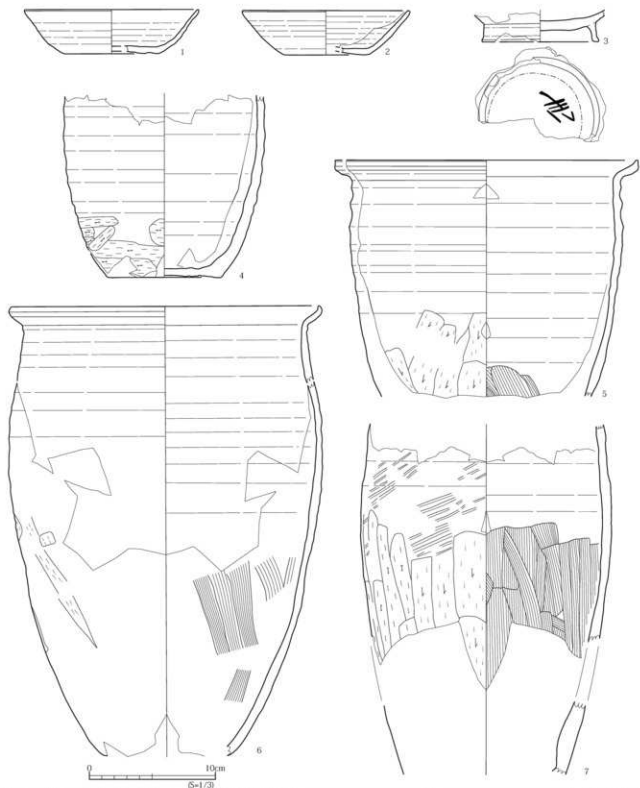
〔規模・平面形〕東西4.1m、南北3.6mの隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-30°-Eである。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SI21	1	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	炭化物粒を微量。地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック大を大量に含む	自然堆積 カマド跡瓦土由来か?
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	埋溝埋土 人為堆積
	4	黒褐色 (10YR2/3) 粘土質シルト	炭化物粒を少し。植土ブロック中を多く含む	K1 人為堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる 暗褐色土ブロック小を少し含む	K1 人為堆積カマド跡瓦土由来か?
	6	黒褐色 (10YR2/2) 粘土質シルト	炭化物が主体となる層	人為堆積
	7	暗褐色 (10YR3/3) シルト		P1 柱礎跡
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	P1 堀方埋土
	9	黄褐色 (10YR5/6) 粘土	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘を少し含む	P1 堀方埋土
	10	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	堀方埋土
	11	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) ブロック小、灰黄褐色 (10YR4/2) ブロック小を少し含む	堀方埋土
	12	黄褐色 (10YR5/6) シルト	灰黄褐色 (10YR4/2) ブロック小を多く含む	堀方埋土

第 15 図 SI21 竪穴建物跡



No.	器種	遺構・期	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	埴原溝	1/4	(13.7)	(7.5)	3.5		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		636
2	須恵器 坏	1層	1/2	(13.1)	(6.8)	3.5		外内：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ 火ダスキト字	26-1.73-3	641
3	須恵器 高台鉢	1層	底 1/2		(9.1)	2.5-		須恵か?		632
4	土師器 甕	K1	1/2 下半		(9.0)	14.4-		内：ロクロナデ→回転ケズリ→ケズリ 内：ロクロナデ 底部：静止糸切り		633
5	土師器 甕	埴原溝	1/5	(24.0)			18.7-	内：ロクロナデ→ケズリ スズ 内：ロクロナデ→ナデ		638
6	土師器 甕	K1	1/2	(24.4)			35.7-	内：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		634
7	土師器 甕	2層	1/4					内：平行タタキ→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		635

第 16 図 SI21 竪穴建物跡 出土遺物

〔堆積土〕2層認められ、1層は灰黄褐色粘土質シルトの自然堆積土、2層はカマド崩落土由来とみられる灰黄褐色粘土質シルトの自然堆積土である。

〔壁〕垂直気味に立ち上がる。高さは最も残りの良い東辺中央付近で18cmある。

〔床〕北半は地山、南半は掘方埋土を床としている。

〔柱穴〕主柱穴は確認していない。

〔カマド〕北壁の中央やや東寄りに付設される。SK40によって大部分が壊されており、燃焼部焼け面付近と煙道の最下部のみが残存する。煙道は長さ0.8mである。本体の規模や構造は不明瞭であるが、カマド崩落土由来とみられる層（2層）が燃焼部焼け面の南側にのみ広がることから本体部分は建物内にあつたとみられる。2層が広がる範囲の床面および2層から出土した土師器甕（第16図-7）はカマドの構築に使用された可能性がある。

〔周溝〕カマド部分を除くほぼ全体で検出した。建物の掘方埋土およびP1の構築後に掘り込まれており、内部にはぶい黄褐色粘土質シルトで人為的に埋め戻されている。幅は20～40cm、深さは15cm前後である。

〔土坑〕床面で1基確認した。K1は北東隅に位置し、平面形が長軸59cm、短軸48cmの楕円形で、深さは12cmある。断面形は不整な逆台形である。堆積土は2層認められる。いずれも人為的に埋め戻されており、下層からは土師器甕（図14-4・6）が横位で出土した。

〔そのほかの施設〕建物中央付近の床面で焼け面、南辺中央でP1、北辺中央でP5、北東隅でP6を確認した。焼け面は径20cmの円形である。P1は床面で検出しており、掘方の一部が周溝埋土に覆われる。掘方が径45cmの楕円形で深さ27cmである。柱痕跡は径10cmの円形である。壁際でカマドと相対する位置にあること、主柱穴にはならないとみられることから、出入口に関連する施設である可能性がある。

P5・P6は周溝底面で検出した。P5は深さ10cmで一辺15cmの正方形を呈し、褐色シルトで人為的に埋め戻されている。P6は長軸25cmの楕円形で深さ10cmで、褐色シルトで人為的に埋め戻されている。カマド燃焼部に対して左右対称の位置にあることから、カマドに関わる施設である可能性がある。

〔出土遺物〕堆積土、床、周溝から須恵器環、高台環、土師器甕などが出土した。量が少なく全容の分かるものが限られる。

【SI22 竪穴建物跡】（第17～25図・図版7・8）

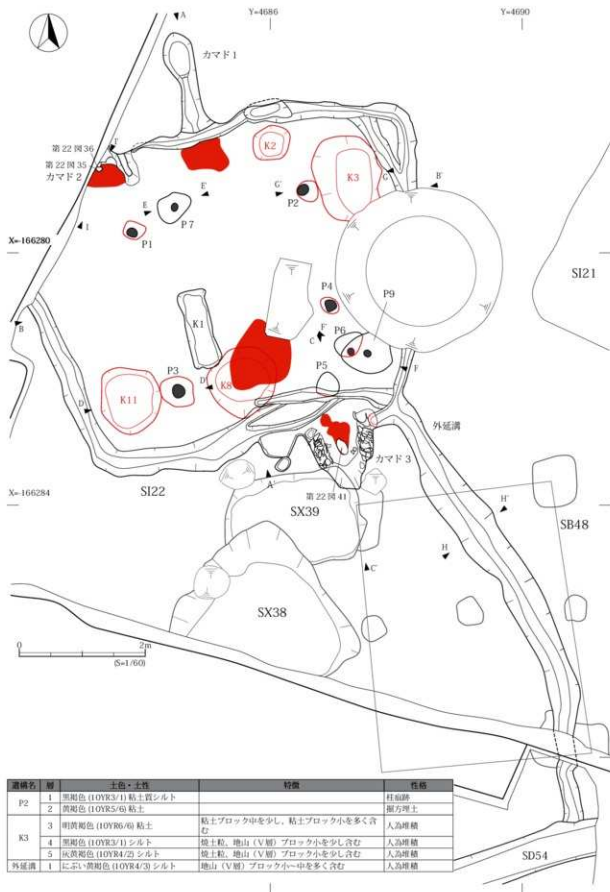
〔位置・検出面〕6区南西の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。建物北西隅は調査区外にある。

〔重複〕SX39、SB48、SD54、SX71と重複し、SX39、SX71より古く、SB48より新しい。SD54との新旧関係は不明である。

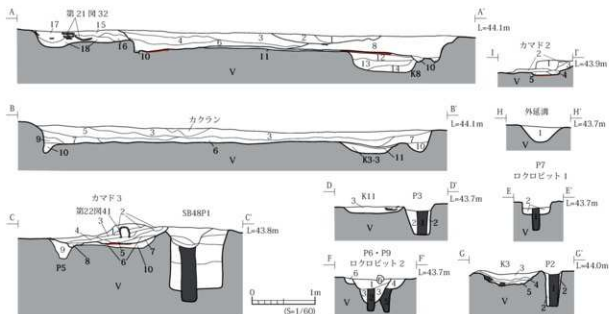
〔規模・平面形〕東西6.4m、南北5.2mの隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-22°-Wである。

〔堆積土〕カマド部分を除いて9層に分けられた。1・2層は土器片を多く含む人為的埋戻し土、3

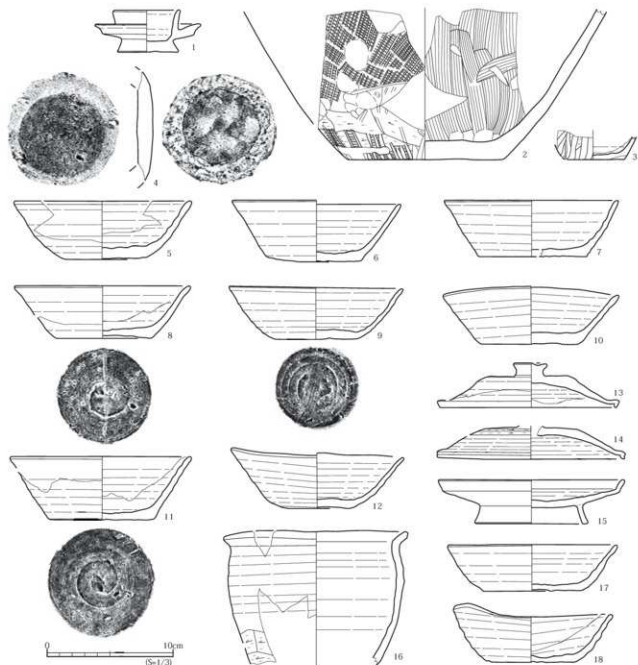


第 17 図 SI22 竪穴建物跡



遺構名	層	土色・土性	特徴	取巻
SI22	1	黒褐色 (10YR6/1) シルト	炭化物小、粘土小を多く含む	炭成遺構由来か? 人為堆積
	2	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物粒を少し、粘土粒を微量含む	炭成遺構由来か? 人為堆積
	3	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト		自然堆積
	4	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土ブロック中を多く含む	人為堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒を少し含む	自然堆積
	6	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒を少し含む	自然堆積
	7	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト粒を少し含む	自然堆積
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	黒層と地山 (V層) ブロック、粘土ブロックからなり、炭化物粒を少し含む。	建物跡面 1/3 を埋め戻す 土処理層か? 人為堆積
	9	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土	地山 (V層) ブロック大からなる	早期落土
	10	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	11	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		灰床
	12	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土ブロック小を多く含む	K8 人為堆積
	13	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	粘土粒を多く、にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土粒を少し含む	K8 人為堆積
	14	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土ブロック中を多く含む	K8 人為堆積
	15	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック中を多く含む	煙道埋戻し土 人為堆積
	16	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	粘土ブロック小を少し含む	煙道埋戻し土 人為堆積
	17	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積
18	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	炭化物粒を微量含む	機能貯堆積土 自然堆積	
SI22 カマド2	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	自然堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土		人為堆積
	3	明赤褐色 (5YR5/6) 粘土	被熱土体の層。褐色 (10YR4/4) シルト粒を少し含む	煙道落土?
	4	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	粘土粒を少し含む	カマド機能時の埋積土
	5	明赤褐色 (5YR5/6) シルト		カマド機能時の埋積土
SI22 カマド3	1	SI22-8層と同じ		人為堆積
	2	明赤褐色 (5YR5/6) 粘土	強い焼失を受ける	カマド天板崩落土
	3	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト	粘土粒を微量含む	カマド構築時の埋積土
	4	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト	炭化物粒、粘土粒を多く含む	カマド機能時の埋積土
	5	暗褐色 (10YR3/3) シルト	粘土粒を少し含む	カマド機能時の埋積土
	6	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	粘土粒を少し含む	カマド機能時の埋積土
	7	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	粘土粒を少し含む	カマド機能時の埋積土
	8	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	炭化物粒、粘土粒を少し、地山 (V層) ブロック小を多く含む	カマド抜き出し土 人為堆積
	9	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	P5 人為堆積
	10	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	黒層ブロックと地山 (V層) ブロックからなる。	灰方埋土
P3	1	黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト	白色粘土ブロック小をまだらに少し含む	柱基礎
	2	黄褐色 (10YR5/6) 粘土	白色粘土ブロック小を多く含む	灰方埋土
K11	3	黄褐色 (10YR5/6) 粘土	灰黄褐色土粒を多く含む	人為堆積
	3	灰黄褐色 (10YR4/1) 粘土質シルト		輪木跡
P7 (ロクロ ビット1)	2	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	炭化物粒、地山 (V層) 粒を微量含む	灰方埋土
	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	切取穴 人為堆積
P9 (ロクロ ビット2)	1	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	輪木跡
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	灰方埋土
	3	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	炭化物粒を微量、地山 (V層) ブロック小を多く含む	切取穴 人為堆積
P6	4	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を多く含む	輪木跡
	6	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	SI22-11層と同じ	灰床

第 18 図 SI22 竪穴建物跡



品	名称	遺構・層	発行	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録	
1	須恵器 托	1層	ほぼ完形	5.0	8.4	4.7	3.3	外内：ロクロナデ 受け下部：ケズリ→ナデ 底部：ケズリ		26-2	362
2	須恵器 甕	1層	底部完存			12.2	11.9	外：平行（扇格子） タタキ→ケズリ 内：ナデ			363
3	土師器 壺	1層	底部片			4.9		外：ケズリ→ナデ（ミガキ半に高い） 内：ロクロナデ 底部：ナデ			463
4	須恵器 横瓶?	3層						閉塞付型		29-1	386
5	須恵器 坏	Ⅱ	底部完存	(13.0)		6.5	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ			462
6	須恵器 坏	Ⅱ	完形	13.2		7.6	4.9	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ			464
7	須恵器 坏	埴輪上	3/4	(13.7)		(8.5)	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り			423
8	須恵器 坏	埴輪上	1/3	(13.6)		(7.5)	4.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 「一」字ヘラ曲ぎ			415
9	須恵器 坏	埴輪上	完形	13.5		6.6	4.2	外内：ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→ナデ			421
10	須恵器 坏	埴輪上	ほぼ完形	13.7		7.6	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ			413
11	須恵器 坏	Ⅱ	埴輪上	1/2	(14.0)	8.3	5.0	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ			416
12	須恵器 坏	Ⅱ	完形	13.5		4.8	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右 底切れ		26-3	1148
13	須恵器 蓋	埴輪上	3/4	(13.8)			3.6	匳宝風 外内：ロクロナデ 内面にヒビ			424
14	須恵器 蓋	8層	1/3	(15.0)				外：ロクロナデ→天井ケズリ 内：ロクロナデ 火ダスキ S22・1層出土片と接合			477
15	須恵器 甕	Ⅱ	埴輪上	1/3	(14.5)	(8.8)	3.5	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ			417
16	土師器 甕	Ⅱ	埴輪上	2/3	(14.4)		10.7	外：ロクロナデ 下部ナデ 焼熱 スス 内：ロクロナデ			418
17	須恵器 坏	6層	3/4	(13.2)		7.8	3.7	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ十字		26-4	389
18	須恵器 坏	6層	2/3	(12.2)		7.0	4.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		26-5	422

第19図 SI22 竪穴建物跡 出土遺物(1)

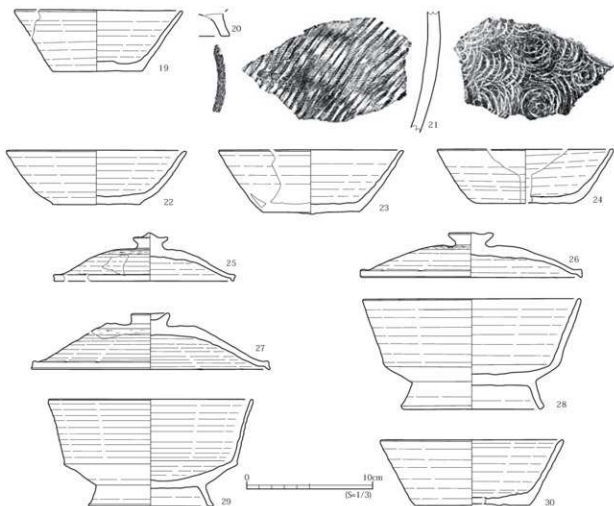


図	品名	遺跡・層	形状	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	頁数
19	須恵器 坏	6層	3/4	(13.1)		7.0	4.8	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ		390
20	須恵器 高台杯	6層	高台破片					高台底面に布目	20-2	391
21	須恵器 蓋	6層	胴部破片					外：平行（縦格子）タタキ 内：同心門文当て具編	29-3	392
22	須恵器 坏	8層	1/2	(14.0)	10.9	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り			410
23	須恵器 坏	8層	2/3	(14.4)	7.7	5.1	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り			403
24	須恵器 坏	8層	1/2	(13.7)	(7.5)	4.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り			396
25	須恵器 蓋	8層	2/3	(14.2)		3.8	窯室床拵ツマミ 外：ロクロナデ→天井網ケズリ 内：ロクロナデ			408
26	須恵器 蓋	5・8層	1/4	17.4		3.5	ボタン拵ツマミ 外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 天井ナデ			393
27	須恵器 蓋	8層	1/3	(18.7)		4.4	縦横拵ツマミ 外：ロクロナデ→網ケズリ 内：ロクロナデ			407
28	須恵器 高台杯	8層	2/3	(17.0)	(10.8)	8.8	外内：ロクロナデ 底部：網ヘラ切り 赤褐色		26-6	395
29	須恵器 高台杯	8層	1/2	(16.0)	10.7	8.5	外内：ロクロナデ		26-7	409
30	須恵器 坏	10層	1/2	(14.3)	10.0	5.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り			411

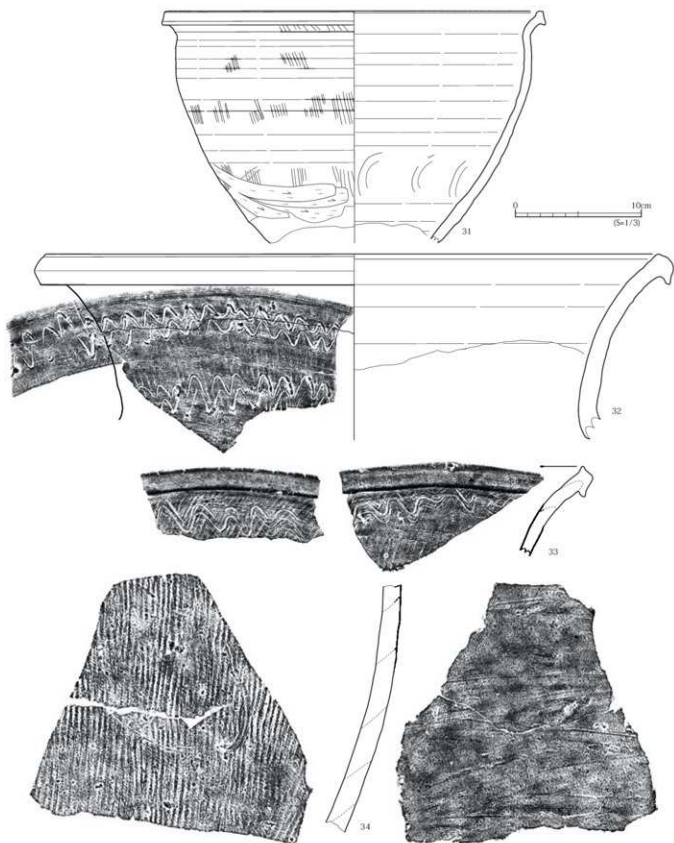
第20図 S122 竪穴建物跡 出土遺物（2）

層は自然堆積土、4層は人為的埋め戻し土、5～7層は自然堆積土、8層は地山ブロックや粘土ブロックからなる人為的埋め戻し土である。4層は建物跡北側に堆積する。8層は建物跡南半に厚く堆積し、北側ほど厚さを減ずる。

〔壁〕垂直気味に立ち上がる。北壁や西壁の一部は壁周溝がオーバーハングする。高さは、最も残りの良い西辺で36cmある。

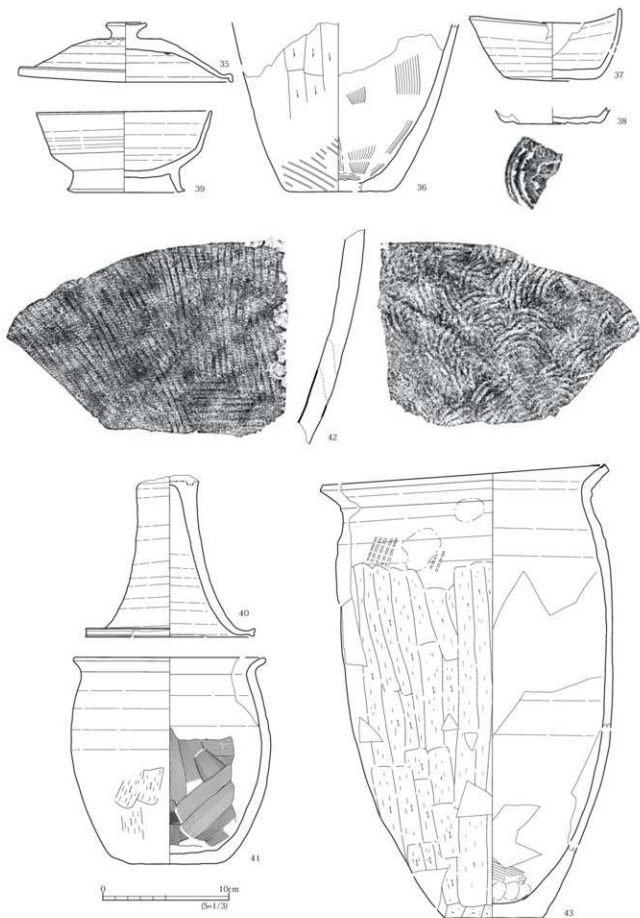
〔床〕カマド1の周辺を除いて、ほぼ全面が明黄褐色粘土主体の貼床である。貼床の厚さは1～3cmほどで南ほど厚い傾向にある。

〔柱穴〕P1・2・3・4の4個を確認した。建物平面形の対角線上に位置しており主柱穴と考えられ

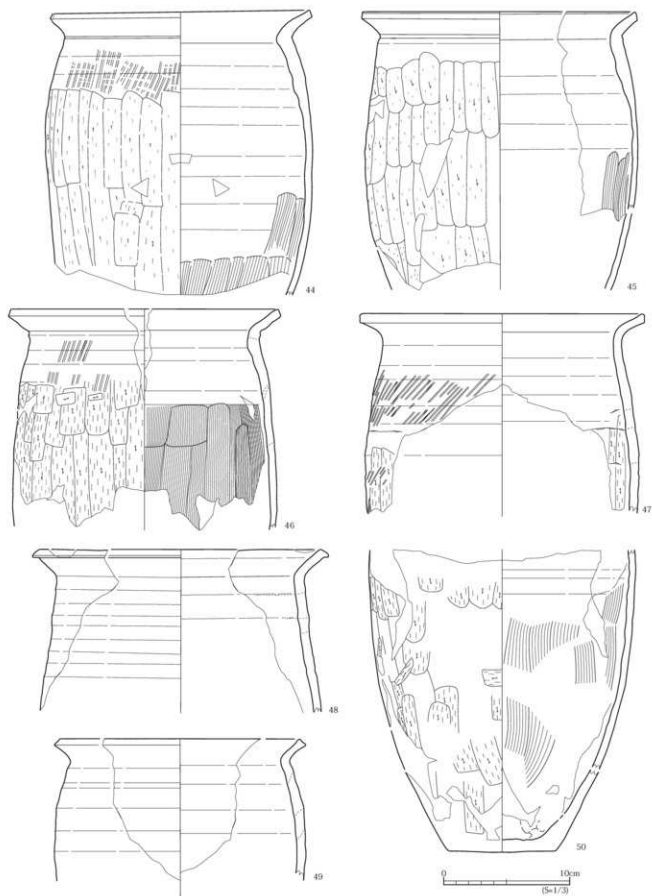


品	品種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	巻録
31	須恵器 鉢	埴道	1/3	(29.5)			18.3	外：平行タタキ→ロケロナデ 下部ケズリ 内：ロケロナデ 下部当て具痕		441
32	須恵器 甕	埴道18層	口縁部片	48.6			14.7	外：波状文2線×2段 平行タタキ→ロケロナデ 内：ロケロナデ	27.1	442
33	須恵器 甕	埴道18層	口縁部					外：巻渦波状文(巻渦数2) 平行タタキ→ロケロナデ 内：ロケロナデ	29.4	444
34	須恵器 甕	埴道18層	側面破片					外：平行(縦格子) タタキ 縦筋 内：ナデ		443

第21図 S122 竪穴建物跡 出土遺物(3)



第 22 図 SI22 竖穴建物跡 出土遺物 (4)



第 23 図 S122 竪穴建物跡 出土遺物 (5)

No	階層	遺構・層	形状	口径	最大径	底径	深高	特徴	写真画像	図録
35	築造部	カマド2床	ほぼ円形	16.7		4.8		ボタン状アタミ 外:ロクロナデ→人目同焼ケズリ 内:ロクロナデ 底:白の灰跡 赤褐色(はなれ焼か?)	27.2	431
36	土師器	カマド2 2層	胴部中～底部		8.4	13.4		外:平行四角ナデ 内:ナデ 厚減 外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→部手持ちケズリ 外内に自然釉	27.5	433
37	築造部	カマド3付近 8層	3/4	(11.8)	6.7	5.8		外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り「十」字へラ掻き		438
38	築造部	カマド3付近動床内	底部1/4		7.6	1.1		外内:ロクロナデ 内:ロクロナデ 外内:自然釉		437
39	築造部	高坪外	カマド3付近床	3/4	(13.8)	8.2	6.5	外内:ロクロナデ 底:回転ケズリ 赤褐色	27.3	435
40	築造部	高坪	カマド3支脚	脚		13.2	12.3	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ 外内:自然釉	27.4	439
41	土師器	カマド3 3層	3/4	(15.0)	6.9	16.4		外:ロクロナデ→ドクズリ 内:ロクロナデ→ドクズリ	27.6	440
42	築造部	カマド3付近埋積土	胴部破片					外:平行(規格?) タタキ 内:同心円文当て具跡 外内:釉	29.5	434
43	土師器	カマド右袖横位	ほぼ円形	(22.5)	7.7	36.0		外:上平タタキ→ロクロナデ ドクズリ 内:上ロクロナデ 下ロクロナデ→部ナデ	28.1	471
44	土師器	カマド3	1/3	20.2		22.6		外:上平タタキ→ロクロナデ 下:ケズリ 内:上ロクロナデ ナデ	28.2	465
45	土師器	カマド左袖横位	1/2	21.6		21.8		外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ	46.7.1	
46	土師器	カマド3右袖横位	1/4(口縁部片)	(21.1)		17.5		外:即基→ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ	47.0	
47	土師器	カマド3右袖	口縁部片	(22.2)		15.9		外:即基→ロクロナデ 内:ロクロナデ	46.6	
48	土師器	カマド3 3層上面	口縁部片	(22.3)		12.9		外内:ロクロナデ	46.8	
49	土師器	カマド3 3層	口縁部片	(19.0)		11.2		内外:ロクロナデ	46.9	
50	土師器	カマド右袖横位	1/2(胴部中～底部)		8.5	24.0		外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ	46.7.2	

る。発掘調査時の断面図作成上の不備により貼床との重複を明示できないが、いずれも柱痕跡は貼床上、掘方は貼床下で確認した。掘方は径30～50cmの楕円形あるいは不整形形で、深さは46cmである。柱痕跡は径15～20cmの円形である。

[カマド] 北壁中央のカマド1、北壁西寄りのカマド2、南壁南東隅付近のカマド3の計3基を検出した。カマド1が最も古く、カマド2・3が新しい。

カマド1は煙道と燃焼部底面のみを残して本体が除去されている。煙道は長さ1.5mで、上層は人為的に埋め戻されている。

カマド2は燃焼部・本体右側壁・煙道の一部を確認した。左側壁と煙道の大部分が調査区外にある。右側壁は明黄褐色粘土を主体として構築されている。高さ10～15cm、基部の幅15～20cmが残っていた。燃焼部は周囲より5cm程低く窪んでおり、その上面はほぼ平坦である。燃焼部内の堆積土は5層認められる。1層は自然堆積土、4・5層は機能時の堆積土である。2層は、調査区外の状況次第では天井崩落土の可能性が残るものの、被熱痕跡が無いこと、層の厚さが1～3cm程で厚くないことから、カマド2廃絶後人為的にぶい黄褐色粘土を用いて埋め戻したものとみておきたい。

カマド3は建物南壁の外側に突出して構築されており、本体部分と煙道部を確認した。南壁から煙道先端までの長さは、約1.1mである。左右の側壁は黄褐色粘土を主体として構築されている。にぶい黄褐色シルトの掘方埋土を燃焼部としており、上面はほぼ平坦である。残存する煙道は奥壁側に向かって緩やかに立ち上がる。右側壁では、土師器長胴甕(第23図-43・46・47・50)が横位で出土した。側壁先端側に口縁部を向けた状態で連結されていた可能性がある。左側壁前端では、土師器甕口縁部片(第23図-45)が逆位で出土している。いずれも構築材の一部として使用されたとみられる。燃焼部中央奥壁寄りの位置では、坏部を欠いた高坏脚部(第22図40)が正位で出土した。被熱痕跡などはみられず、器面は良好な状態を保っている。

カマド2・3の前後関係は不明確だが、カマド2燃焼部が粘土で埋め戻されていると考えられることから、この上面を建物の床とした段階に、カマド3を使用していたものとみておきたい。

[周溝] 検出した壁の直下ではカマド2部分を除いて全周する。北東壁付近と南壁東側では部分的に

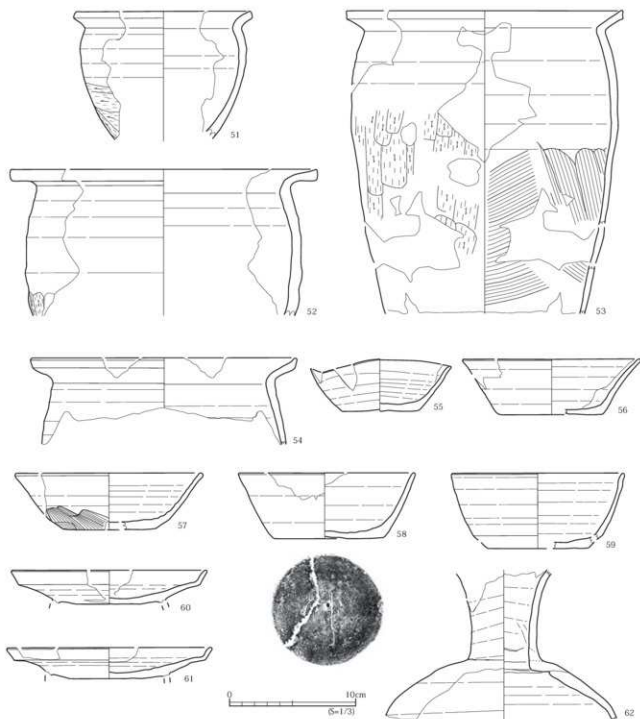
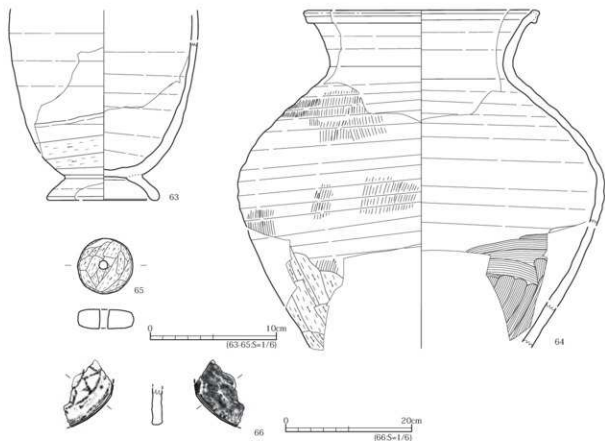


図	名称	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	登録
51	土師器 甕	K11 1層	1/5 側面	(13.8)			10.1	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ		455
52	土師器 甕	K11 1層	口縁部片	(24.3)			11.6	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ		453
53	土師器 甕	K11 1層	1/5 口縁部～ 胴部	(21.8)			24.0	外:ロクロナデ→胴部中～下部ケズリ 内:ロクロナデ→胴部中～下部ナデ		472
54	土師器 甕	K3	口縁部片	20.9				外内:ロクロナデ		473
55	須恵器 坏	K11	1/2	(10.5)	6.0	4.2	6.0	外内:ロクロナデ 底:底:手持ちケズリ?	28.3	450
56	須恵器 坏	K11 1層	1/2	(13.9)	8.0	4.4	8.0	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り		457
57	須恵器 坏	貼床	1/3	(14.6)	7.4	4.5	7.4	外内:ロクロナデ 外面下部不整方向ナデ 底:ヘラ切り→ナデ		449
58	須恵器 坏	K11 1層	3/4	13.8		8.6	5.2	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ 「一」字ヘラ掘き 酸化 黄褐色	28.5	458
59	須恵器 坏	K3	1/3	(13.4)	7.8	6.0	6.0	外内:ロクロナデ 底部:手持ちケズリ		447
60	須恵器 甕	K3	1/4	(15.3)			2.7	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ		446
61	須恵器 甕	K11 1層	3/4	16.0			2.5	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ	28.4	456
62	須恵器 長頸瓶	K11 1層	胴部～首部					外内:ロクロナデ 接合部3段		451

第24図 S122 竪穴建物跡 出土遺物(6)



No.	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	図録
63	泉流器 瓶?	K3	側部下平~底部				8.5	外：ロクロナデ→下部回転ケズリ 内：ロクロナデ 底部：ロクロナデ ； 総高~黄褐色	28-6	448
64	泉流器 甕	K11 1層	1/4	(18.0)				口縁：ロクロナデ 胴：平行タタキ→ロクロナデ 下部：平行タタキ→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		459
65	土製紡錘車	K11 1層	完形					ケズリ 長径 4.4 短径 4.3 厚さ 1.4 孔径 0.7 重量 36.7 g ； 灰色		452
No.	品名	分類	遺構・層	残存	特徴			色調	写真掲載	図録
66	軒瓦瓦	II	1・2層	瓦当破片 右下部?	筒縁：ケズリ	瓦当裏：ナデ				K13

第 25 図 SI22 竪穴建物跡 出土遺物 (7)

建物内側方向に二股に分かれ、南東隅では外延溝と接続する。幅は、15cm～50cm、深さは16cmで、断面形U字形である。北から南の外延溝に向かって緩やかに低く傾斜しており、標高はカマド1付近で43.5m、南東隅の外延溝との接続部で43.3mである。堆積土は自然堆積土である。

〔外延溝〕建物南東隅から南東方向に向かって延びる。長さは約5.7m分確認した。幅は30～70cmほどで断面形は逆台形である。南端の底面標高は43.1mで、建物北辺周溝底面との比高は約40cmである。建物内8層と同様の土で人為的に埋め戻されている。

〔土坑〕5基確認した。このうち1基は床面上(K1)、4基は貼床下で(K2・3・8・11)確認した。K1は中央南西よりに位置し、平面形が長辺128cm、短辺28cmの長方形で、深さは10cmある。断面形は箱形である。堆積土は建物跡の8層で人為堆積層である。

K2は建物北東よりに位置し、平面形が長軸55cm、短軸52cmの楕円形で、深さは10cmある。断面形は皿状である。堆積土は人為堆積層である。K3は建物北東隅に位置し、平面形が長軸132cm、短軸100cmの楕円形で、深さは18cmある。断面形は皿状である。堆積土は3層認められ、いずれも人為堆積層である。K8は建物中央南よりに位置し、平面形が長軸108cmの円形で、深さは28cm

ある。断面形は長方形である。堆積土は3層認められ、いずれも人為堆積層である。K11は建物南西隅に位置し、平面形が長軸96cmの円形で、深さは9cmある。断面形は浅い皿状である。堆積土は1層のみ認められ、人為的に埋め戻されている。

〔そのほかの施設〕ロクロピットの可能性があるピット2基、焼け面1カ所を検出した。

P7（ロクロピット1）は主柱穴P1の東側に位置する。平面形は長軸55cm、短軸40cmの楕円形で、断面形は箱形である。中央に径10cm、長さ34cmの棒状の痕跡があり、掘方内は灰黄褐色粘土質シルトで埋め戻されている。

P9（ロクロピット2）は建物南東に位置する。平面形は直径60cmほどの楕円形で、断面形は漏斗状である。中央に径10cm、長さ36cmの棒状の痕跡があり、掘方内は暗褐色粘土質シルトで埋め戻されている。

主柱穴とは配置や規模が異なり、棒状の痕跡があることから、P7とP9はロクロピットとみられる。建物中央南寄りの位置で長軸1.1m、短軸0.9mほどの焼け面を検出した。

〔出土遺物〕堆積層、埋戻土、カマド、土坑から土師器環、甕、須恵器環、蓋、高台環、盤、高環、鉢、長頸瓶、横瓶、甕、托など多量の土器のほか、土製紡錘車、瓦が出土した。大部分は堆積土や掘方、土坑、カマドから出土している。床からの出土は少ない。

1は仏器の托を模倣した須恵器である。3～7層から出土した遺物は多くない。4は横瓶側面の閉塞盤とみられる。埋戻土である8層では須恵器環、蓋、高台環（7～11）のほか須恵器・土師器片が多く出土した。32の甕口縁は、カマド1の煙出しピットとその周囲から落ち込んだ状態で出土した。後述するSI24やSI60の例を踏まえると、煙出しピットの構築材として用いられたものとみられる。同位置で出土した須恵器鉢と甕片も同様に構築材として用いられたとみられる。35はカマド2の燃焼部に正位で置かれていた。一部赤化しており、熱を受けている。43～50はカマド3の構築材として転用された甕である。40は坏部を欠く高環脚部でカマド3の燃焼部に正位で置かれていた。41は逆位で、40の真上からややずれた位置で内面が土で満たされた状態で出土している。K3、K11から土師器甕、須恵器がまともって出土している。

【SI23 竪穴建物跡】（第26～27図・図版9）

〔位置・検出面〕6区中央西辺の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。建物南西は攪乱で大きく壊されている。

〔重複〕SK47・SB50と重複し、これらより新しい。

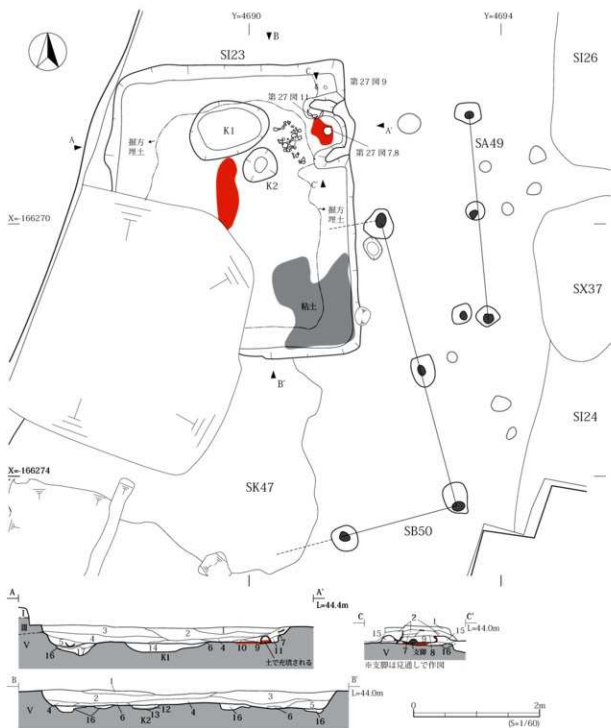
〔規模・平面形〕東西3.8m、南北4.7mの方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-4°-Wである。

〔堆積土〕カマド部分を除いて6層に分けられた。1～4層は地山ブロックや炭化物を含む自然堆積層、5層は壁が崩落した自然堆積層、6層は機能時に堆積した炭化物層である。

〔壁〕垂直気味に立ち上がる。最も残りの良い西辺で高さ28cmである。

〔床〕中央は地山、周辺は掘方埋土を床とする。掘方埋土は黄褐色シルトを主体とし、各辺に沿って



第26図 SI23 竪穴建物跡

30～70cmの幅で廻る。

〔柱穴〕 確認していない。

〔カマド〕 東壁の北東隅寄りに付設される。本体と燃焼部を確認した。本体は建物内にあり、黄褐色粘土で構築されている。左側壁先端で土師器甕胴部片（第27図-11）が出土しており、側壁の構築材として使われていた可能性がある。燃焼部内部はカマド崩落土（7～10層）で覆われており、掘方埋土の上面を焼け面としている。焼け面中央では土師器甕底部2個体（第27図-7・8）が逆位で重ねられた状態で出土した。これらは支脚として転用されたものである。

〔土坑〕 床面で2基確認した（K1・K2）。K1は中央やや北辺よりに位置し、長軸129cm、短軸90cm

遺構名	層	土色・土性	特徴	資格
SI23	1	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	焼土粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、地山(V層)ブロックを少し含む	自然堆積
	3	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山(V層)ブロックを少し含む	自然堆積
	4	暗褐色(10YR3/3)シルト	部分的に炭化物粒を少し含む、地山(V層)粒を微量含む	自然堆積
	5	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山(V層)粒を少し含む	自然堆積
	6	暗褐色(10YR3/3)シルト	炭化物が広がる層、暗褐色シルト、地山(V層)ブロックを少し含む	人為堆積
	7	褐色(7.5YR4/4)粘土	焼熱、にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土ブロックを少し含む	カマド崩落土
	8	黄褐色(10YR8/6)粘土	焼熱、にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土ブロックを少し含む	カマド崩落土
	9	明赤褐色(5YR5/4)粘土	焼土粒ブロック小・粒を多く含む	カマド崩落土
	10	褐色(7.5YR4/4)粘土	焼土粒を多く含む	カマド崩落土
	11	褐色(10YR4/4)砂質シルト	焼土粒を微量含む	自然堆積
	12	黄褐色(10YR5/6)シルト	焼土粒を少し、褐色ブロック小、黄褐色ブロック小を多く含む	K2人為堆積
	13	暗褐色(10YR3/3)シルト	焼土粒を多く、黄褐色(10YR5/6)ブロック小を少し含む	K2自然堆積
	14	暗褐色(10YR3/4)シルト	黄褐色ブロック小を多く、炭化物粒、焼土粒を少し含む	K1人為堆積
	15	黄褐色(10YR8/6)粘土	地山(V層)黄褐色土ブロックからなる	カマド構築土
	16	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト	灰黄褐色、黄褐色ブロックを少し含む	掘方埋土
	17	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト	明黄褐色ブロックを少し含む	掘方埋土
SA40	1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山(V層)粒を微量含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト	黄層と地山(V層)からなる	掘方埋土
SB50	1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	地山(V層)ブロックを微量含む	柱痕跡
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)シルト	黄層と地山(V層)からなる	掘方埋土
	3	にぶい黄褐色(10YR5/2)シルト	黄層と地山(V層)からなる	掘方埋土

の楕円形で、深さは13cmある。断面形は浅い皿状である。堆積土は1層のみで、地山ブロックを含む土で埋め戻されている。K2はK1のすぐ南に隣接し、径52cmの円形で、深さは6cmある。断面形は逆台形である。堆積土は2層認められ、底に薄く焼土粒を含む暗褐色土が自然堆積した後、地山ブロックを含む土で埋め戻されている。

〔そのほかの施設〕床面上で焼け面と粘土を検出した。焼け面は建物中央の床面で検出され、長軸1.2m、短軸0.4mの長楕円形である。粘土は南東隅の床面で検出され、東西1.2m、南北1.5mの範囲に広がっている。厚さは1～5cmである。

〔出土遺物〕カマドとその周辺の床から須恵器環・土師器篋、砥石が出土した。全体の出土量は多くない。環の底部は1～3が回転糸切り、4がヘラ切りである。6の甕は被熱による明確な使用痕がある。9～11はカマド堆積土、崩落土その周囲の床から出土した甕で、残存率が低く、器面も摩滅・風化が進んでいるため、使用、あるいは構築にかかわるかの判断がつかない。7と8はカマド燃焼部からそれぞれ逆位で8に7が重なった状態で出土した支脚転用品である。

【SI24 竪穴建物跡 a・b】(第28～34図・図版10・11)

〔位置・検出面〕6区中央やや南寄りの丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。新旧2時期あり、SI24aを埋め戻してSI24bに拡張している。SX37、SK36、SK45と重複しいずれよりも古い。方向は、西辺で測るとN-10°-Eである。

≪SI24a 竪穴建物跡≫(第28・34図)

〔規模・平面形〕東西3m、南北3.6mの長方形である。

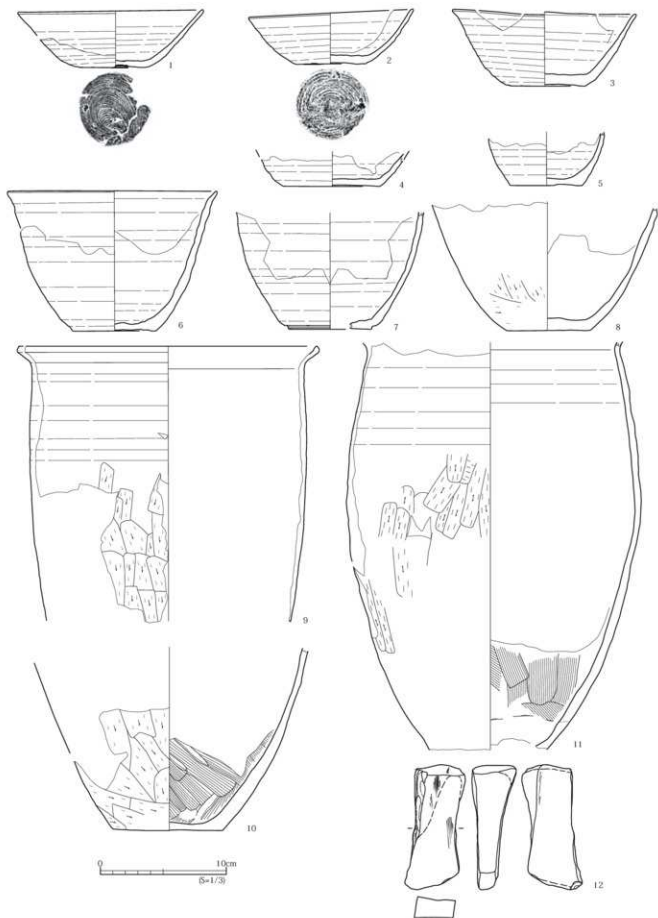
〔堆積土〕SI24bの掘方埋土で埋め戻される。

〔壁〕垂直気味に立ち上がる。深さは最も残りの良い北辺で10cmある。

〔床〕地山を床とする。

〔柱穴〕主柱穴は確認していない。

〔カマド〕東壁南東隅寄りに付設される。SI24b構築時に大部分が壊されたとみられ、燃焼部、側壁



第27圖 SI23 豎穴建物跡 出土遺物

No.	部材	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	巻数
1	瓦	カマド付瓦床	2/3	(14.5)	(5.1)	4.6	4.6	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右	30-2	614
2	瓦	カマド付瓦床	3/4	12.9		5.5	4.4	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右→ナデ	30-1	616
3	瓦	カマド付瓦床	3/4	(14.4)		5.9	6.1	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右	30-3	618
4	瓦	カマド付瓦床	瓦			7.7		外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り		615
5	土師器	カマド前床	底部			5.7	4.3-	外内:ロクロナデ 内:コゲ 外:スス		610
6	土師器	5層	3/4	(16.5)		6.5	11.4	外:ロクロナデ スス 裾脚内 内:ロクロナデ 嚙水線コゲ 底部:回転糸切り右	30-4	611
7	土師器	カマド支脚	底部		(6.5)	(10.3)		外内:ロクロナデ 底部:糸切り		624
8	土師器	カマド支脚			6.4			外:ケズリ 内:著しく風化		625
9	土師器	カマド左袖付瓦床	1/4	(23.6)				外:ロクロナデ→ケズリ 内:著しく風化		620
10	土師器	カマド床	底面存			8.7		外:ケズリ 内:ナデ		617
11	土師器	カマド前床	2/3			32.3-		外:ロクロナデ→ケズリ(ナデに近いケズリ) 内:ロクロナデ→ナデ		621
12	瓦石	2層						砂岩 長:89mm 幅:43mm 高さ:13.44cm	70-2	627

の構築に使用されたとみられる瓦が残存する。本体の規模や構造は不明瞭であるが、側壁は明黄褐色粘土で構築されており、両壁前端には芯材として使われた丸瓦（第34図-2）が玉縁を下にして据えられていた。煙道は奥壁側に向かって緩やかに立ち上がる。瓦の欠損部はSI24bの床面やや下で、長さ17cmが残存する。

〔周溝〕北辺と西辺の一部で検出した。

〔建物内土坑〕3基確認した（K1～K3）。K1は建物中央に位置し、平面形が60cmほどの円形で、深さは10cmある。断面形は浅い皿状である。堆積土は人為堆積層である。K2は建物西辺よりに位置し、平面形が長軸81cmの円形で、深さは17cmある。断面形は逆台形である。堆積土は人為堆積層である。K3は建物北よりに位置し、平面形が長軸36cm、短軸30cmの楕円形で、深さは5cmある。断面形は浅い皿状である。

〔その他の施設〕建物中央やや北東よりの位置で、P1を確認した。掘方は径45cmほどの円形で、深さは33cmである。柱痕跡は径10cmの円形である。

〔出土遺物〕土師器、須臾器、瓦が出土している。この建物跡に明確に伴うといえる遺物は、カマド焚口補強材に転用された丸瓦2点36・37のみである。建物の大部分がSI24b掘方によって床面が壊され、掘方埋土で埋め戻されているため、SI24aに伴うといえる土師器・須臾器はない。

【SI24b 竪穴建物跡】（第29～33図・図版10・11）

〔規模・平面形〕東西6.1m、南北6.1mの方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-10°・Eである。

〔堆積土〕10層に分けられた。1から7層はいずれも自然堆積層で、2層は灰白色火山灰である。8・9層がカマド部分の堆積である。10層は建物北辺を除く範囲の床面上に分布する黄褐色粘土である。厚さは1cmから10cmで上面は凹凸があり、一部10cm以上のまとまりとして残る箇所がある（平面図「粘土塊」部分）。これらは土器制作の素地として使用された粘土の残滓である可能性がある。

〔壁〕西壁は垂直気味に立ち上がり、東壁は緩やかに立ち上がる。北壁は東側ほど緩やかに立ち上がる。南壁の立ち上がり角度は不明である。高さは最も残りの良い南東壁で24cmである。

〔床〕地山（V層）ブロックを主体とする掘方埋土である。SI24bとして新たに拡張された部分では掘方埋土が厚さ1～3cmで貼床になっている。

〔柱穴〕竪穴平面形の対角線上でP2、P3、P4、P5の4基を確認した。掘方は貼床下で、柱痕跡は床

上で確認した。掘方は長軸が24cm～36cmの楕円形で、深さ35～48cmである。柱痕跡は径15～20cmほどの円形である。掘方埋土はⅢ・Ⅴ層ブロックを多く含む明黄褐色粘土で埋め戻されている。〔カマド〕北壁中央に付設される。煙道の西側は、SK36・SK45によって壊されている。本体は建物内にあり、側壁は明黄褐色粘土で構築される。右壁前端で土師器甕胴底部が出土しており、側壁構築材の一部として使われていた可能性がある。掘方は確認していない。煙道は長さ1.3mの長煙道で、掘方内に粘土と土器で構築されている。掘方は、長さ1.2m、残存幅0.4m、深さ0.4mでⅢ・Ⅴ層からなる土で埋め戻されている。燃焼部側先端で土師器甕口縁部(9)を芯材としていた状況を確認した。また、煙道堆積土やSK36から土師器甕片が出土していることから、掘方に甕を連結して据えて煙道を構築していたとみられる。煙道先端の煙出しピットから28、30の須恵器甕が出土した。それぞれ潰れた状態で出土しているが、30は底部を建物側に向けて原則、28より下から出土している。SK45の掘削によって元の位置は失われているものの、出土状況と土器の状態からみて、30の上に底部を打ち欠いた28を乗せて煙突を構築したとみられる。

なお、燃焼部中央では燃焼部床からわずかに浮いた状態で、円筒状の土製専用支脚(35)が出土している。

〔周溝〕カマド下部を含めて壁面下の全周で検出した。幅20～50cm、深さは15cm前後である。東辺・西辺を中心に幅約10cm、深さ12cmの壁痕跡を検出しており、掘方にはにぶい黄褐色土で埋め戻されている。カマド下部の溝内埋め戻し土中からは、須恵器甕の破片(32・33・34)が、体部上面を上にして並んだ状態で出土した。カマド下の暗黒蓋として転用されたものとみられる。

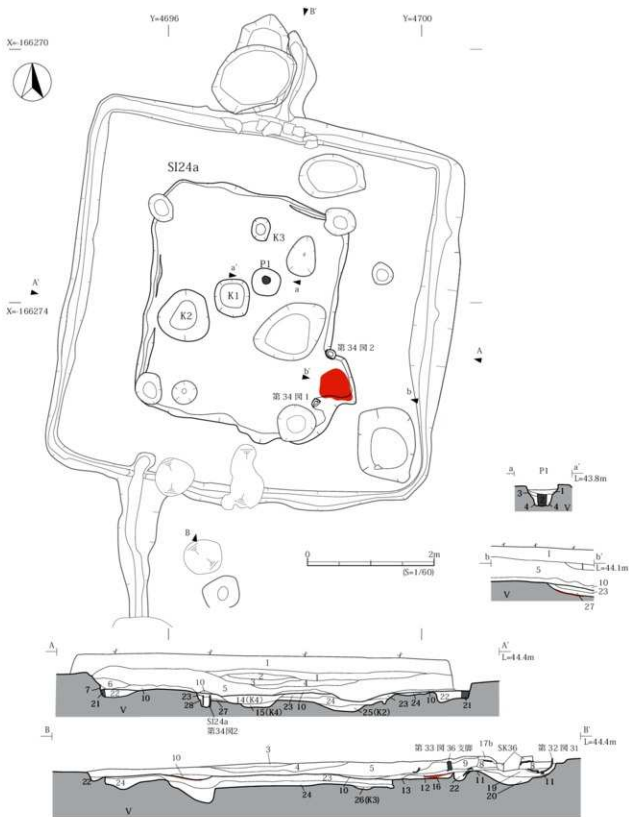
〔外延溝〕建物南辺西寄りから南に向かって延びる。長さは約2.2m分確認した。幅は30～90cmほどで断面形は緩やかなU字状で深さは20cmある。堆積土は2層に分けられた。2層(外延溝2層)は自然堆積層である。建物と接続する付近に2層上部には明黄褐色粘土(外延溝1層)が分布する。建物に近接した位置の天井構築などにかかわる可能性がある。

〔建物内土坑〕床面で1基(K4)、貼床・掘方埋土下で2基(K5・K6)を確認した。K4は、長軸108cm、短軸94cmの不整形の土坑で、断面形は皿形、深さ18cmである。人為的に埋め戻されている。K5は長軸116cm、短軸92cmの楕円形の土坑で、断面形は箱形で深さは45cmである。人為的に埋め戻されており上面が貼床で覆われている。K6は長軸102cm、短軸72cmの楕円形の土坑で、断面形は箱形で深さは50cmである。人為的に埋め戻されており上面が貼床で覆われている。

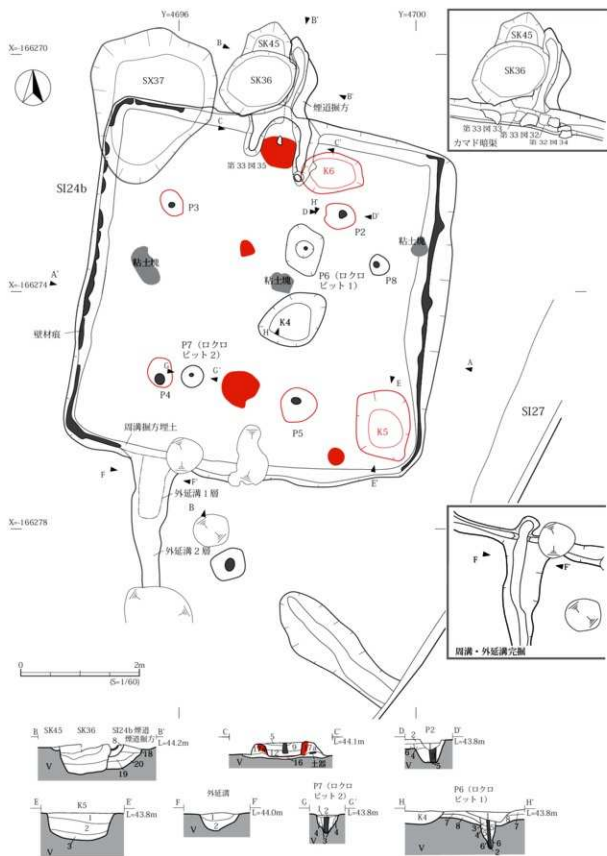
〔その他かの施設〕ロクロピットの可能性のあるピット2基、焼け面3カ所を検出した。

P6は主柱穴P2の南西側に近接し、平面形は長軸66cm、短軸45cmの楕円形で、断面は漏斗状を呈する。中央に径6cm、長さ49cmの棒状の痕跡があり、主ににぶい黄褐色粘土を用いて埋め戻されている。

P7は主柱穴P4の東側に近接し、平面形は直径40cmの円形で、断面は漏斗状を呈する。中央に径9cm、長さ28cmの棒状の痕跡があり、主ににぶい黄褐色粘土質シルトを用いて埋め戻されている。主柱穴とは配置や規模が異なり、棒状の痕跡があることからP6とP7はロクロピットとみられる。建物中央北よりの位置で、直径25cm、建物中央南よりの位置で直径60cm、建物南東隅の位置で直



第28回 SI24a 竖穴建物跡、SI24b 掘方



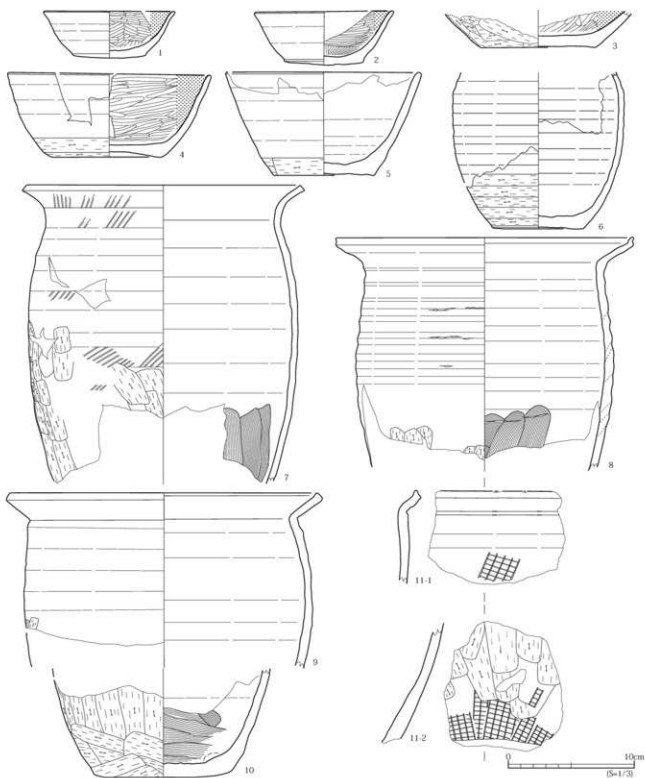
第 29 図 SI24b 竪穴建物跡

表 2 SI24 竪穴建物跡 土層表

遺構名	層	土色・土質	特徴	色略
SI24b	1	黒色 (10YR1.7/1) シルト		自然堆積
	2	灰白色 (10YR8/1)	灰白色火山灰	一次堆積
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト		自然堆積
	4	褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	自然堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒を微量、にぶい黄褐色ブロック小を少し含む	自然堆積
	6	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	7	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		壁面塗土
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	焼土粒を少し含む	自然堆積
	9	にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘土		カマド天井崩壊土
	10	黄褐色 (10YR8/6) 粘土	粘土	人為堆積 粘土残滓 焼土塊
	11	黒褐色 (10YR3/1) シルト		壁面塗土
	12	黒褐色 (7.5YR3/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	カマド機能時堆積土
	13	褐色 (10YR3/1)	炭屑	人為堆積
	14	にぶい黄褐色 (10YR7/3) 粘土	炭化物粒、地山 (V層) 粒を多く含む	R4 人為堆積
	15	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	炭化物粒、地山 (V層) 粒を多く含む	R4 人為堆積
	16	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	焼熱	カマド壁方理土
	17a	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	焼熱	カマド構築土
	17b	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	焼熱	壁面塗染土
	18	褐色 (10YR4/4) シルト		壁面面方
	19	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	地山 (V層) 由来のブロックからなる 壁層ブロック小を微量含む	壁面面方
	20	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	壁層由来のブロックからなる 地山 (V層) 粒を微量含む	壁面面方
	21	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		壁材面
	22	にぶい黄褐色 (10YR5/5) シルト	地山 (V層) 由来のブロックからなる 暗褐色土ブロック小を少し含む	両面塗土
23	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト		筋灰・壁方理土	
24	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小、地山 (V層) 粒を少し含む	壁方理土	
SI24a	25	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小へ大、暗褐色ブロック大を多く含む	K2 人為堆積
	26	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	K3 人為堆積
	27	暗褐色 (10YR2/3) シルト	炭化物粒、焼土粒からなる層	SI24a カマド機能時堆積土
	28	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックからなる	カマド構築土
SI24a P1	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質シルト	暗褐色 (10YR3/3) ブロック小を含む	炭灰穴
	2	黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	柱基礎
	3	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	壁方理土
K5	4	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	壁方理土
	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	炭化物粒を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト	炭化物粒を少し、焼土粒を多く含む	人為堆積
	3	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小へ中を多く含む	自然堆積
	1	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック大を少し含む	切取穴? 自然堆積?
P6 (ロケロ ビット1)	2	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト	層の下部に炭化物が残存	軸木基礎
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土	炭化物小、地山 (V層) 粒を少し含む	軸木面方理土
	4	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土	白色粘土をまじりに少し含む	軸木面方理土
	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	軸木面方理土
	6	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト	地山 (V層) 粒を多く含む	軸木面方理土
	7	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	22 層対応	軸木面方理土
	8	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	23 層対応	筋灰
P7 (ロケロ ビット2)	1	褐色 (10YR4/4) シルト		壁方理土
	2	黒褐色 (10YR3/2) シルト		切取穴? 自然堆積?
	3	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	軸木基礎
SI24 P2	4	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト	壁層と地山 (V層) ブロックからなる	壁方理土
	1	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	地山 (V層) 粒を微量含む	壁方理土
	2	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト	22 層対応	筋灰
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト		柱基礎
外延溝	4	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	壁層ブロック小へ中を多く含む	柱穴面方理土
	5	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土	壁層ブロック小へ中を多く含む	柱穴面方理土
	6	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	23 層対応	建物面方理土
	1	明黄褐色 (10YR6/8) 粘土	地山 (V層) ブロックからなり、灰褐色ブロック小を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積

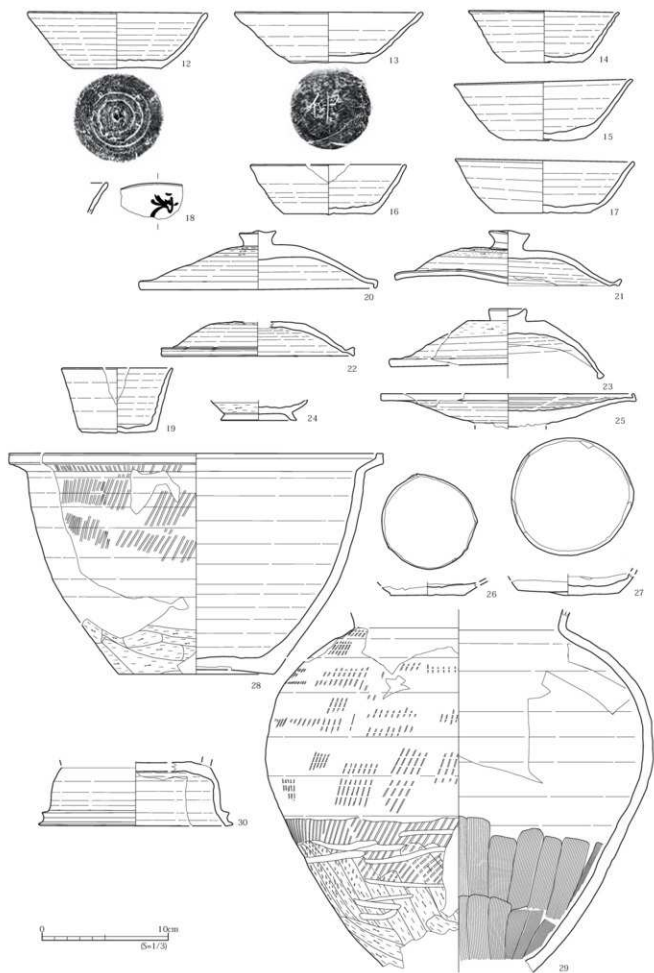
径 30cm の焼け面を検出した。

〔出土遺物〕 堆積土、床、カマド、掘方から土師器環、鉢、甕、須恵器環、蓋、高台環、高環、鉢、片面硯、甕のほか土錘、土製支脚が出土した。土師器環は 4 のほか 1、2 のような小形の環がある。須恵器環の底部はヘラ切り、あるいはヘラ切り→ナデ調整である。26 と 27 は体部を打ち欠いて円形に整えられている。なお、堆積土中から出土した須恵器環口縁部片 18 は「家」の墨書がある。31 の須恵器甕は、カマド下の周溝で蓋として用いられていた複数の破片が接合したほか、SI29 堆積土層から出土した破片も接合した。

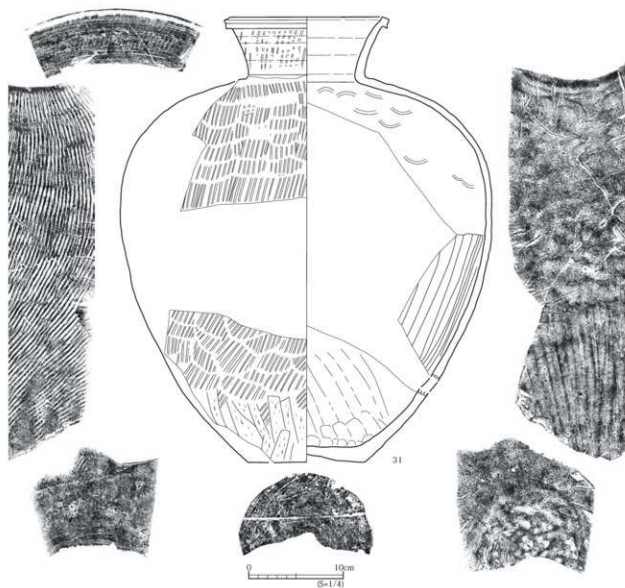


編	器種	遺物・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真番号	登録
1	土師器 杯	5層	1/3	[10.2]	5.7	3.8	8.8	外：ロクロナデ 内：黒色胎理 底部：ナデ	31-1	521
2	土師器 杯	検出面	3/4	10.9	6.3	4.3	8.8	外：ロクロナデ 内：黒色胎理 底部：ヘラ切り→ナデ	31-2	930
3	土師器 鉢	5層	1/3 底部片		9.0	2.9-		外：ケズリ 内：黒色胎理		511
4	土師器 杯	床	1/2	15.9	8.7	6.7	8.8	外：ロクロナデ 下端)回転ケズリ 内：黒色胎理 底部：回転糸切り右→回転ケズリ	31-3	528
5	土師器 甕	カマド前床	胴部中～底部	[15.2]	7.9	8.2	8.8	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 底部：ナデ		519
6	土師器 甕	5層	胴部～底部		7.2	12.4-		外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		504
7	土師器 甕	カマド煙道	1/2 上半	[21.7]		23.6-		外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		539
8	土師器 甕	樽山塔積土	上半部	[23.4]		18.5-		外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		544
9	土師器 甕	樽道	口縁部付近	[24.3]				外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		543
10	土師器 甕	カマド側壁	胴部下端～底部		10.8	8.6-		外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		537
11	土師器 甕	床	部分破片				残存高 7.4 9.4	外：ロクロナデ 下部)格子叩き→ケズリ 内：上部ロクロナデ 下部ナデ		529

第30図 S124b 竪穴建物跡 出土遺物(1)



第 31 図 SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (2)



No.	器種	遺構・層	形状	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
12	須恵器 坏	床	ほぼ完形	14.1	7.0	4.5	7.0	外内：ロクロナデ 底部：へう切り		923
13	須恵器 坏	増築土	1/3	(14.8)	6.0	4.0	6.0	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ→ナデ 「特」へう掻き		931
14	須恵器 坏	カマ下崩落土	完形	11.9	6.0	4.1	6.0	外内：ロクロナデ 底部：へう切り→ナデ		31-4 536
15	須恵器 坏	土坑 1 1層	ほぼ完形	13.9	6.7	4.9	6.7	外内：ロクロナデ 底部：へう切り→ナデ		31-5 548
16	須恵器 坏	3層	1/2	(12.1)	7.1	4.0	7.1	外内：ロクロナデ 底部：へう切り→ナデ		500
17	須恵器 坏	4層	3/4	(14.1)	7.6	4.3	7.6	外内：ロクロナデ 底部：へう切り→ナデ 赤褐色		530
18	須恵器 坏	4層	破片					平造「家」		73-1 502
19	須恵器 坏	床	1/3	(8.8)	5.8	5.2	5.8	外内：ロクロナデ 底：へう切り→ナデ 胎土：密 焼成：良好		1451
20	須恵器 蓋	カマ下左崩落土	完形	18.5		4.7	4.7	靱宝珠状ツマミ 外内：ロクロナデ→天付付近回転ケズリ→ナデ		31-6 542
21	須恵器 蓋	外延溝	2/3・ツマミ半分	17.6		4.4	4.4	靱宝珠状ツマミ 外：ロクロナデ→天付ケズリ 内：ロクロナデ 外内軸がかる 旋回転削の可能性		920
22	須恵器 蓋	床	1/3	(15.1)		2.7-	2.7-	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		532
23	須恵器 蓋	2層	3/4			(5.5)	(5.5)	瘤状ツマミ 外：ロクロナデ→体部上ケズリ 体部中～下部ロクロナデ 編み外軸回転削り 内：ロクロナデ 編み部位置ずれ 歪んで著しい		31-7 927
24	須恵器 高付坏	床	底部		5.9	1.6-	1.6-	外：回転ケズリ 外内：回転ケズリ→高付削り付ナデ		526
25	須恵器 高坏	23層	1/2	20.0		2.8-	2.8-	外：ロクロナデ 回転ケズリ→ロクロナデ		932
26	須恵器 坏	床	底部		5.9		5.9	底部：へう切り		533
27	須恵器 坏	24層	底部		7.9		7.9	底部：へう切り		950
28	須恵器 鉢	横出面	1/4	(29.6)	12.3	17.5	17.5	外：タタキ→ロクロナデ 下部ケズリ 内：ロクロナデ		32-1 925
29	須恵器 甕	横道	胴部			28.9-	28.9-	外：平行タタキ→上平ロクロナデ 下平ケズリ→ナデ 内：無文当て貝組→上平ロクロナデ 下平ナデ 平底		32-2 547
30	須恵器 円面碗	縦方埋土	1/5	(14.6)				外内：ロクロナデ		32-5 928
31	須恵器 甕	横道	1/2	(16.0)	(12.5)	(39.2)	47.0	外：口：タタキ→ロクロナデ 胴：平行タタキ→ケズリ 内：口：ロクロナデ 胴：無文当て貝組→ナデ 平底		540 541

第 32 図 SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (3)

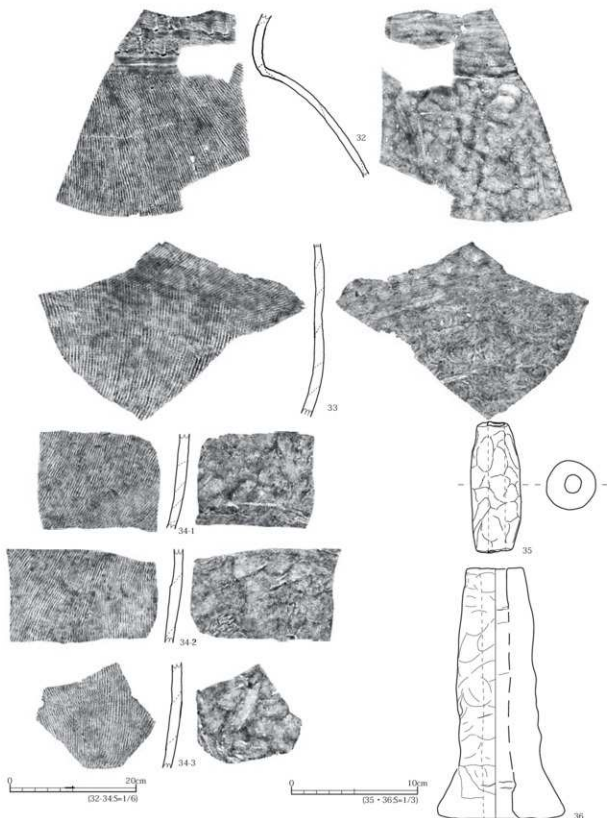
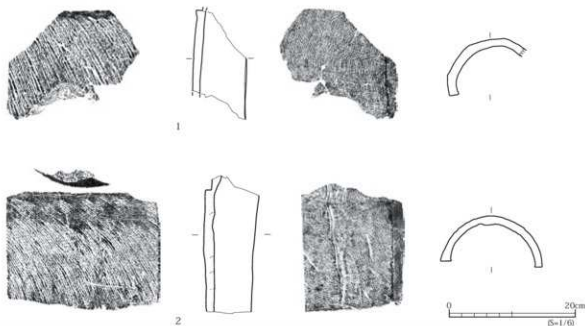


図	品名	遺構・層	残存	口徑	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
32	黒点器 甕	カマド下 22 期・カマド 下土11層・5層・土土・ 焼出面・S29 上層	胴部～胴上部				残存高 25.9	胴部径(推定) 41.0 外：柳掻波状文(柳掻数7) 2段→ロケロナ子 胴部縦格子タタキ 内：無文当て具組 ※ No.177(S29)と組合	32-4	546
33	黒点器 甕	カマド下 22 期	胴部破片					外：縦格子タタキ 内：同心円文当て具組→カキメ	33-2	552
34	黒点器 甕	カマド下 22 期	胴部破片				残存高 15.3	外：縦格子タタキ 内：無文当て具組→ナデ	33-1	545
35	土罐	床	完形					長さ：10.5 最大幅：3.9 孔径：1.3 重量 153.6 g 指環口施	32-6	525
36	土製品 支脚	カマド	一部欠損					高：19.8 径(幅)先端：4.5 下部最大：10.0	32-7	538

第 33 図 SI24b 竪穴建物跡 出土遺物 (4)



NO	品名	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	五番目
1	丸瓦	I	SI24a カマド 右軸	1/4	残長：13.5cm 残幅：13.0cm 重量：0.5kg 凸面：隅平目→口クロナデ 凹面：包目 側面：小口ノケズリ	DY7/1 灰白		K17
2	丸瓦	I	SI24a カマド 左軸	3/4	残長：20.2cm 残幅：15.9cm 凸面：隅平目→一部ナデ 凹面：粘土組織 側面：小口ノケズリ 色調：灰白色 (10YR8/1)	2.5Y8/2 灰白		K18

第 34 図 SI24a 竪穴建物跡 出土遺物

【SI25 竪穴建物跡】(第 35～39 図・図版 12)

〔位置・検出面〕6 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。床面上に炭化物、炭化材、焼土の広がりを確認したことから焼失建物と考えられる。

〔重複〕SI26 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形〕東西 3.6 m、南北 3.6 m の隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測ると N-4°-E である。

〔堆積土〕カマド部分を除いて 7 層に分けられた。1～4 層は自然堆積土である。このうち 2 層は灰白色火山灰 (To-a) からなる層で、床から 15cm ほど上に堆積している。7 層は炭化物・焼土層で、火災時の堆積とみられる。火災後、南辺から中央にかけては 5 層で埋め戻され、残りの窪みに火山灰や流入土が堆積したとみられる。

〔壁〕やや外傾して立ち上がる。高さは、最も残りの良い北壁で 36cm ある。

〔床〕中央から南西隅にかけては掘方埋土、そのほかの部分は地山を床とする箇所が不規則に混在する。北東隅に近づくほど地山床の占める割合が大きくなる傾向にある。

〔柱穴〕確認していない。

〔カマド〕北壁中央に付設される。本体部分と煙道を確認した。本体部分は建物内にあり、明黄褐色粘土で構築される。両側壁の先端に土師器甕 (20・21) が逆位で埋設されていた。これらの間にあたる位置のカマド焚口崩落土の中からも土師器甕 (16・19) が出土しており、これらはカマド側壁・天井の構築材として使われていたものが崩落したものとみられる。カマドの中央では完形に近い土師器甕 2 個体 (17・18) が出土しており、左側の甕 (17) は支脚に転用された土師器甕 (7) の上に乗っ

た状態であった。これらは、並べて横掛けにされた状態を一定程度保っているものとみられる。燃焼部内部の堆積は3層に分けられた。8層は焼土塊を多く含むカマド焚口の崩落土、9層は自然堆積土、10層は炭化物粒・焼土粒を含むカマド機能時の堆積土である。煙道からは、底部がない土師器甕(22)が底部側を建物に向け、潰れた状態で出土している。その上では煙道を構築していた明黄褐色粘土の崩落土(11層)を確認した。底部を打ち欠いた甕の外側を粘土で覆って煙道を構築していたとみられる。

〔土坑〕床面で1基確認した。K1は建物北東隅に位置し、長軸75cm、短軸57cmの楕円形で、断面は楕鉢状で深さは20cmある。埋土は自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面から土師器環、甕、須恵器甕胴部片、砥石、カマドから土師器甕が出土した。須恵器は堆積土を含めて少ない。床面から出土した1～3はいずれもロクロ土師器で平底、内黒で1の底部が回転系切り、2、3は底部から体下部が回転ケズリである。甕は2点出土しているが、5に被熱による明確な使用痕がみられるのに対して、6は使用痕がなく、器面の状態がよく変色もみられない。7はカマド支脚への転用品である。17と18はカマドに掛けられていた甕で、16、19～22はカマドの芯材として転用された甕である。ほかに床から人頭大の河原石が出土している。

【SI26 竪穴建物跡】(第35・40図・図版13)

〔位置・検出面〕6区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕SI25・SK45と重複し、これより古い。

〔規模・平面形〕東西3.2m以上、南北3.4mの隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-4°-Eである。

〔堆積土〕カマド部分を除いて1層のみ認められる。16層はにぶい黄褐色シルトの自然堆積土である。

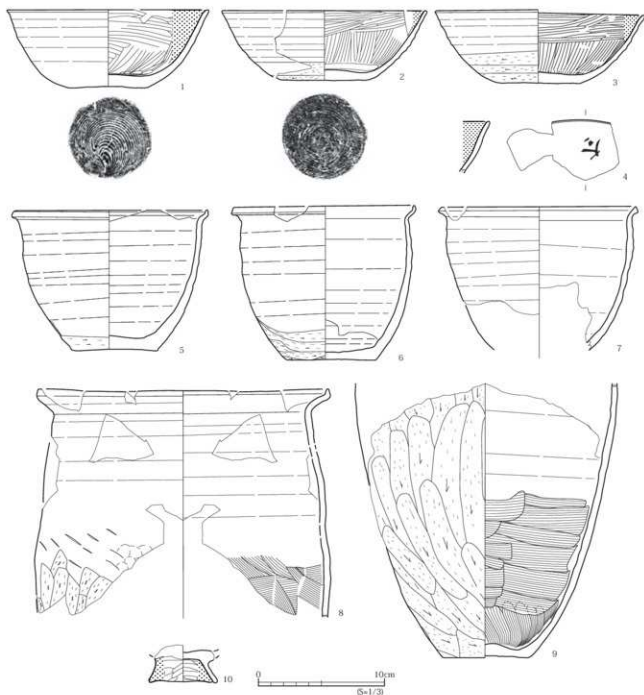
〔壁〕やや外傾して、緩やかに立ち上がる。高さは最も残りの良い西辺で18cmである。

〔床〕地山(V層)ブロックを主体とする掘方埋土を床とする。

〔カマド〕南壁南東隅に付設される。本体と燃焼部焼け面の一部を確認した。本体の先端はSI25によって壊されている。本体は南壁を掘り込んで外側にやや突出し、明黄褐色粘土で構築されている。左側壁の焚口側で逆位の土師器甕片(9)が出土しており、構築材として使用されたとみられる。燃焼部焼け面の中央には、土師器甕底部(7)が逆位で据えられており、支脚に転用されたものとみられる。燃焼部内部の堆積土は3層認められる。17層はカマド崩落土、18層は炭化物粒・焼土粒を含む機能時の堆積土、19層は支脚内に充填されていた粘土質シルト土である。

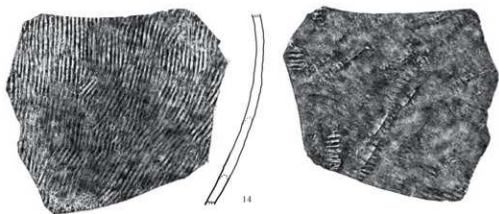
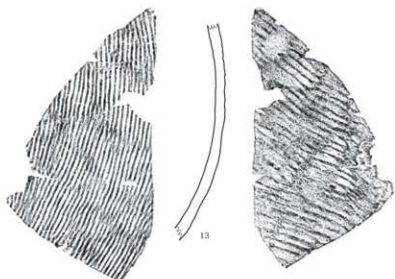
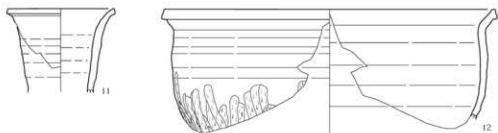
〔そのほかの施設〕南西隅で粘土のまばらな広がりとその中で一部粘土塊を確認した。粘土の範囲は長軸72cm、短軸45cm以上で、北東側はSI25に壊されている。その中央に粘土塊があり、径40cmの円形で、厚さは約10cmである。

〔出土遺物〕カマド周辺の床面から須恵器環、カマドから土師器甕が出土した。須恵器環は全容のわかるものが6個体出土している。底部は3と6がへら切り、ほかは系切りである。環はカマド左壁寄りの床に上から1、3、5の順で逆位、建物壁際の床に上から2、6の順で正位で置かれていた。4



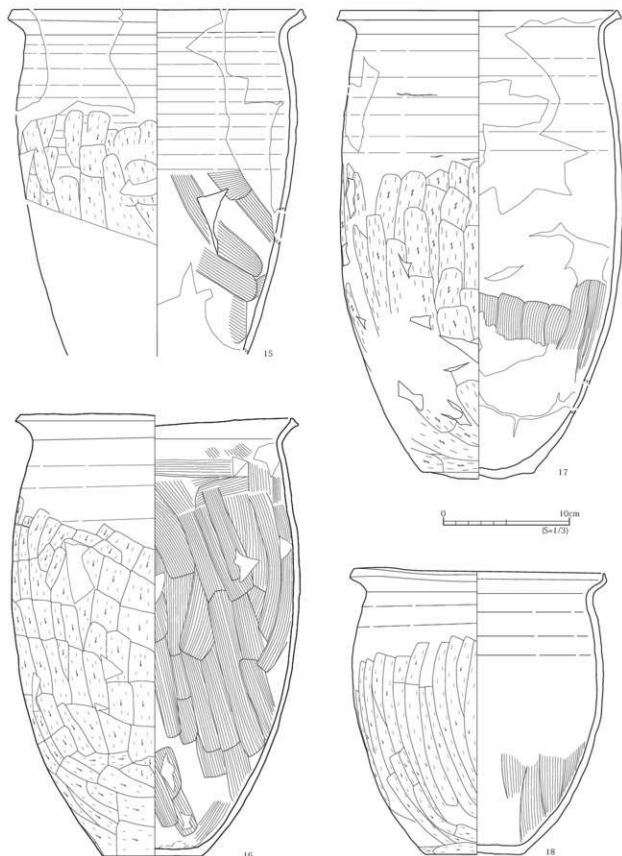
No.	器種	器種・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図数	登録
1	土師器 坏	床	ほぼ円形	15.0	6.2	6.2		外: ロクロナデ 内: 黒色巻理 底部: 回転糸切り	34-1	569
2	土師器 坏	床・堆積土下層	2/3	15.9	6.7	5.5		外: ロクロナデ→体下部回転ケズリ 内: 黒色巻理 底部: 回転ケズリ		577
3	土師器 坏	床・6層	ほぼ円形	16.3	6.2	5.8		内: ロクロナデ→体下部回転ケズリ 内: 黒色巻理 底部: 回転ケズリ	34.2	562
4	土師器 坏	4層	破片					内: 黒色巻理 断面か	34.6,7,3-6	586
5	土師器 甕	床	ほぼ円形	15.2	6.8	11.2		外: ロクロナデ→体下部ケズリ 赤きこぼれ編 内: ロクロナデ 上半スス付着 底部: 回転糸切り右	34-3	566
6	土師器 甕	床	3/4	14.2	7.0	12.3		外: ロクロナデ→ケズリ 内: ロクロナデ 底部: 回転糸切り右 スス・コケなし	34-4	568
7	土師器 甕	カマド	3/4	15.4		11.3		外内: ロクロナデ		580
8	土師器 甕	カマド 4層	1/3脚-胴部	(22.0)		17.9		外: ロクロナデ 下ケズリ・胎頭1面 内: ロクロナデ トナデ		570
9	土師器 甕	北側 5層	1/4	(20.4)		6.8	21.9	外: ケズリ 内: ロクロナデ→下部ナデ		564
10	土師器 耳皿	6層	底部付近			5.3	3.0	外内: 黒色巻理	34-5	563

第36図 SI25 竪穴建物跡 出土遺物(1)



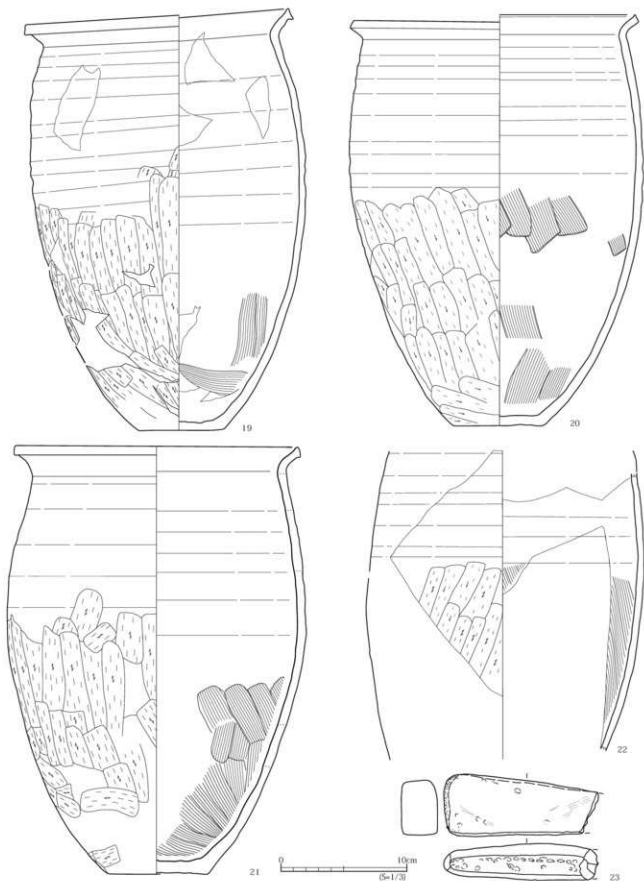
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	付録
11	須恵器 長頸瓶	1層	口縁部-頸部	8.4			6.6-	内内：ロクロナデ（全体に自然釉）		584
12	須恵器 鉢	カマド4層	口縁部	(26.0)			9.8-	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ		571
13	須恵器 甕	1層	胴-胴上					外：平行タタキ 内：平行当て具痕		560
14	須恵器 甕	床	胴部破片					外：平行タタキ 内：無文当て具痕		567

第 37 図 SI25 竪穴建物跡 出土遺物（2）



№	器種	遺構・層	高さ	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	図録
15	土師器 甕	カマド	1/2	23.0		27.3		外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ（ススあり）		574
16	土師器 甕	カマド	3/4	21.4	7.3	35.2		外：ロクロナデ 下ケズリ 内：ロクロナデ 下ナデ		572
17	土師器 甕	カマド	3/4	21.9	8.7	37.1		外：ロクロナデ→3/4ヘラケズリ 全体的にスス付着 内：ロクロナデ→ナデ 底部：ヘラで形成してる	35-1	575
18	土師器 甕	カマド	ほぼ完形	19.8	7.6	22.5		外：ロクロナデ→ケズリ（体部～底部にスス付着） 内：ロクロナデ→ナデ（体部～底部に黒色に電色）	35-2	579

第38図 S125 竪穴建物跡 出土遺物（3）



№	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
19	土師器 甕	カマド4期	ほぼ完形	20.9	6.7	33.4		外：ロクロナデード平ケズリ 内：ロクロナデード部ナデ	35-3	581
20	土師器 甕	カマド右袖	ほぼ完形	22.3	7.1	32.6		外：ロクロナデードケズリ 内：ロクロナデードナデ		582
21	土師器 甕	カマド左袖	ほぼ完形	22.4	7.8	33.8		外：ロクロナデード平ケズリ 内：ロクロナデードナデ	35-4	583
22	土師器 甕	煙道	破片					外：ロクロナデードケズリ 内：ロクロナデードナデ		578
23	礎石	床	一部欠					礎石未成品? 前面縦打。一部研磨 砂岩 長：121 幅：49 重さ：283.0g	70-3	587

第39図 SI25 竪穴建物跡 出土遺物(4)

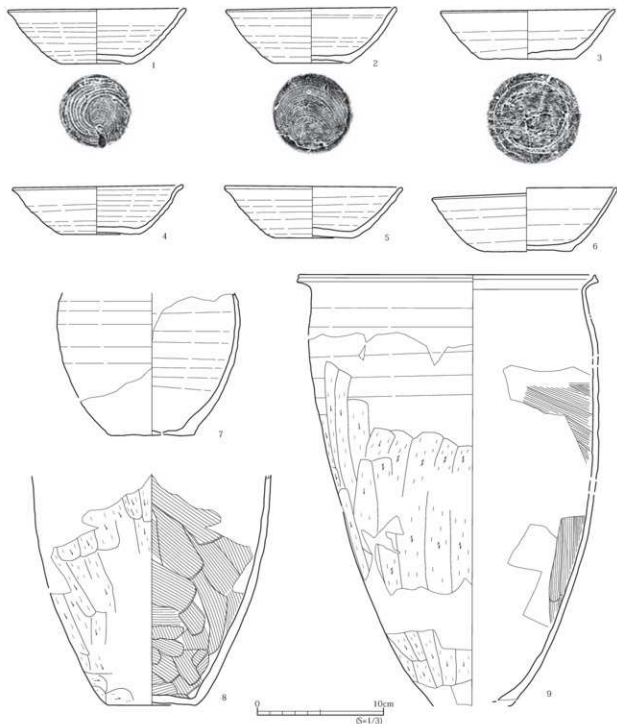


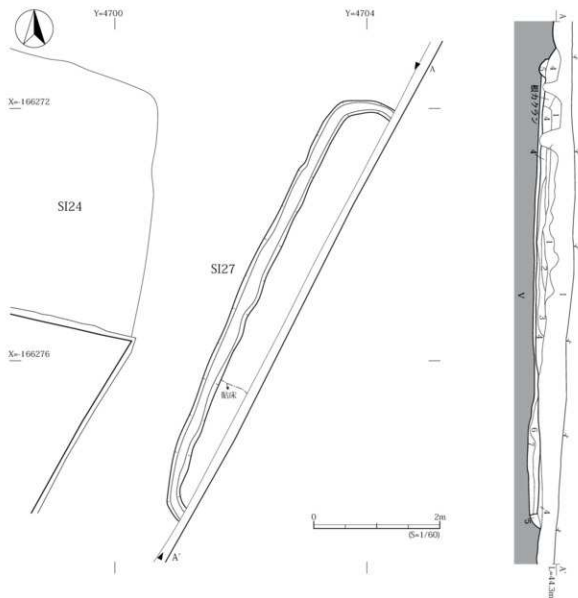
図	形種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	登録
1	須恵器 坏	床	完形	13.9	5.6	4.4	5.1	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		591
2	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.5	6.1	4.5	5.1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り		594
3	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.8	7.3	4.0	4.0	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		592
4	須恵器 坏	カマド之朝顔上	3/4	13.4	6.1	4.0	4.0	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右 底切れ・灯明皿		597
5	須恵器 坏	床	ほぼ完形	14.0	6.2	4.1	4.1	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		593
6	須恵器 坏	床	ほぼ完形	14.5	6.8	5.1	5.1	外：ロクロナデ 底部：へら切り		595
7	土師器 甕	カマド支脚	底部		6.6	11.3	7.0	外：ロクロナデ 体部ケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転糸切り		599
8	土師器 甕	カマド副流土	底部付込		7.0	18.2	7.0	外：ケズリ 内：ナデ		600
9	土師器 甕	カマド左箱	2/3	(23.4)				外：ロクロナデ→ケズリ 内：ナデ 摩滅しているところあり		598

第 40 図 SI26 竪穴建物跡 出土遺物

はカマド機能時堆積土の18層直上から出土している。底部が裂けているが、内面上部に燈明として用いた際に付いたとみられる痕跡がある。7は燃焼部から逆位で出土した甕で支脚転用品である。9はカマド本体の芯材に用いられた甕で左前壁から逆位でSI25側の胴部を欠損した状態で出土した。

【SI27 竪穴建物跡】(第41図・図版13)

〔位置・検出面〕6区中央東辺の丘陵平坦面に位置し、V層で検出した。建物西辺が調査区内にかかり、他の大部分は調査区外にある。



層	土色・土質	特徴	性格
1	黒色(10YR2/1)シルト		自然堆積
2	にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト	灰白色火山灰	二次堆積
3	黒褐色(10YR3/1)シルト	暗灰色(10YR4/1)土を多く、褐色(10YR4/6)土を少し含む	自然堆積
4	褐色(10YR4/4)シルト	暗褐色(10YR3/3)土、にぶい黄褐色(10YR4/3)土を少し含む	自然堆積
5	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	黄土粒を少し、にぶい黄褐色(10YR6/4)ブロック中を少し含む	埋埋溝自然堆積
6	明黄褐色(10YR7/8)粘土質シルト		粘土
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト	黒層・V層ブロックからなる	埋方土

第41図 SI27 竪穴建物跡

[重複] なし。

[規模・平面形] 東西 0.8 m 以上、南北 7.2 m の隅丸方形とみられる。

[方向] 西辺で測ると N-25° -E である。

[堆積土] 5 層に分けられた。1～5 層は自然堆積層である。そのうち 2 層は灰白色火山灰 (To-a) の二次堆積層である。2 層は床から 10cm ほど上にレンズ状に堆積しており、灰白色火山灰の降下時には建物跡が窪んだ状態であった可能性がある。

[壁] 高さは、最も残りの良い南辺の調査区壁付近で 12cm ある。

[床] 北側 3 分の 2 が掘方埋土を床とし、南側 3 分の 1 が掘方埋土の上に粘土で貼床としている。

[周溝] 幅は 15～20cm、深さは 15cm 前後で、断面 U 字形である。堆積土は明黄褐色粘土質シルトの自然堆積層である。

[出土遺物] 堆積土、掘方埋土から土師器・須恵器が出土したが、図化できる遺物はなかった。

【SI29 竪穴建物跡】(第 42～55 図・図版 13・14)

[位置・検出面] 6 区南東隅付近の丘陵頂部～南東緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。南東隅に付設されるカマドの大部分は調査区外にある。

[重複] SI21、SD54 と重複し、SI21 よりも古い。SD54 との新旧関係は不明である。

[規模・平面形] 東西 3.9 m、南北 5.7 m の隅丸長方形である。

[方向] 西辺で測ると N-7° -E である。

[堆積土] 9 層に分けられた。いずれも自然堆積層で、このうち 1・2 層は、建物が廃絶した後の窪地に堆積した暗褐色シルトで、その範囲は建物輪郭外側の東西 5 m 以上、南北 7 m 以上の楕円形の範囲に広がる。8・9 層は建物の壁およびカマド本体部分の崩落土である。

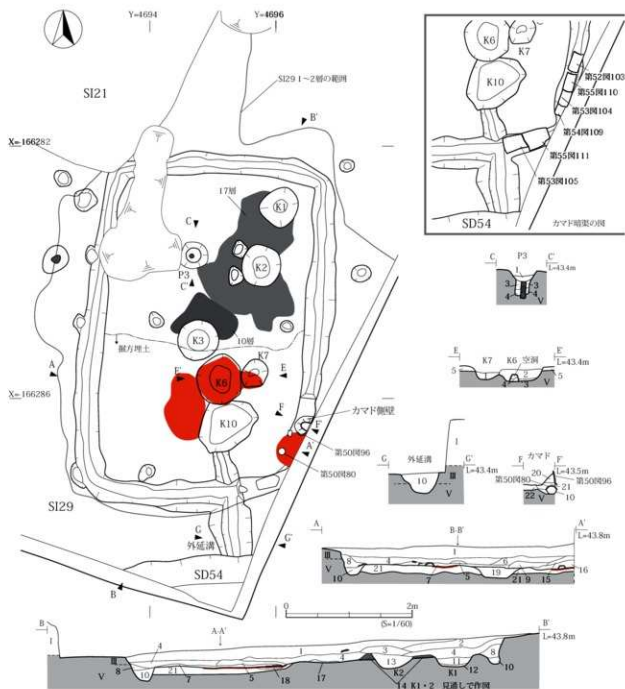
[壁] 垂直気味に立ち上がる。高さは最も残りの良い北辺で 26cm である。

[床] 北半が地山、南半がⅢ・V層からなる土を主体とする掘方埋土を床とする。建物中央付近には、床機能時の堆積とみられる炭化物・焼土粒を含む暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土質シルト (17 層) が広がる。

[柱穴] 主柱穴は確認していない。

[カマド] 南東隅付近に付設される。本体の大部分と煙道は調査区外にあり、本体左側壁の一部と燃焼部焼け面のみを検出した。側壁は、にぶい黄褐色粘土を主体として構築されている。左壁先端にあたる位置からは須恵器鉢口縁部破片 (第 50 図-96) が逆位で出土しており、カマド構築に使われた可能性がある。燃焼部上で、カマド機能時の堆積とみられる黒褐色シルト (16 層) とその上部の炭化物層 (15 層) を確認している。

[周溝] 検出した壁の直下を全周する。南辺中央東寄り以南に延びる外延溝と接続する。幅は 30～40cm で、断面は逆台形である。溝底面は、北から南の外延溝に向かって緩やかに低く傾斜しており、その標高は北辺で 43.23 m、西辺中央で 43.05 m、周溝と外延溝の接続部 42.95 m、南北の比高は約 30cm ある。カマド下とその周辺では瓦と土器を用いた暗渠を確認した。凸面を上にした丸瓦・平瓦 (第 52～55 図-101～111) を連結して設置し、瓦同士をつなぎ上部を土師器甕片により覆っ



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
S129	1	暗褐色(10YR3/3)シルト	炭化物小、焼土粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色(10YR3/3)シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、にぶい黄褐色粘土ブロック小へ火を多く含む	自然堆積
	3	暗褐色(10YR3/3)シルト	炭化物小を少し、焼土粒を微量含む	自然堆積
	4	暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト	炭化物小を微量、にぶい黄褐色粘土ブロック小を少し含む	自然堆積
	5	黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト	黒色土を多く含む粘土塊	自然堆積
	6	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、明黄褐色ブロック小を多く含む	自然堆積 カマド崩落土由来
	7	黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト		自然堆積
	8	灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト	地山(V層)ブロック中を少し含む	明梁落土を含む
	9	暗褐色(10YR3/2)粘土質シルト	地山(V層)ブロック小を少し含む	カマド崩落土を含む
	10	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト	地山(V層)粒を多く含む	自然堆積 明梁溝・外延溝埋積土
	11	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト	地山(V層)ブロック小を少し含む	K1自然堆積
	12	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土	地山(V層)粒を少し含む	K1自然堆積
	13	褐色(10YR4/4)シルト	炭化物粒を少し含む	K2自然堆積
	14	黄褐色(10YR7/6)粘土質シルト	地山(V層)ブロックからなる、固く締まる	人為堆積
	15	黒色(10YR2/1)	炭化物層	自然堆積
	16	黒褐色(10YR2/3)粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	カマド側壁埋積
	17	暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト	炭化物小を少し、焼土粒を微量含む	床埋積時の埋積
	18	K6-2層と同じ		K6
	19	暗褐色(10YR3/4)シルト	黄褐色ブロック主体で地山(V層)ブロック小へ火を少し含む	K10人為堆積
	20	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土	焼土	カマド構造材
	21	暗褐色(10YR4/4)粘土質シルト		カマド構造材
	22	にぶい黄褐色(10YR6/4)粘土質シルト	黄褐色と地山(V層)ブロックからなる	東方理土

第42図 S129 竪穴建物跡

遺構名	層	土色・土質	特徴	性格
K6	1	暗褐色(7.5YR3/3)シルト	炭化物粒を少し、焼土粒を多く、にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト粒を少し含む	人為堆積
	2	暗褐色(7.5YR3/3)シルト	焼土ブロック中を多く、地山(V層)ブロック大、にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルトブロック小を少し含む	人為堆積
	3	にぶい黄褐色(10YR5/4)粘土	地山(V層)ブロック小を多く含む	人為堆積
	4	にぶい黄褐色(10YR6/4)粘土		人為堆積 土師器遺内土
	5	笠29.22層と同じ		掘方埋土
P3 (ロクロピットか)	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト	炭化物粒、焼土粒を少し、地山(V層)粒を微量含む	自然堆積
	2	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト		軸木腐跡か
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト	炭化物粒を微量、地山(V層)粒を少し含む	掘方埋土
	4	明黄褐色(10YR6/6)粘土	地山(V層)ブロック小を少し含む	掘方埋土

て暗渠の天井部としている。その上部を建物床面の高さまで暗褐色粘土質シルトで埋め戻している。堆積土は、暗渠内も含めて自然堆積土である。

〔外延溝〕長さ0.9m、幅50～70cmである。深さは0.3mで、断面は底面に丸みのある逆台形である。底面標高は42.92mである。堆積土は自然堆積層である。

〔建物内土坑〕6基確認した。このうち4基(K3、K6、K7、K10)は床面上で、2基(K1、K2)は黄褐色粘土質シルト(14層)上で確認した。K6とK10は重複し、K6が新しい。

K3は建物中央に位置し、平面形が直径60cmの円形で、深さは10cm以下である。断面は浅いレンズ状である。堆積土はⅢ層とⅤ層からなるにぶい黄褐色シルトの人為堆積層である。土坑北側では輪郭の外側に沿うように10層が広がる。K6は建物中央南寄りに位置し、平面形は直径80cmの円形で、深さは25cmである。断面は箱形である。堆積土は2層認められ、焼土ブロック、地山ブロックを含む土の人為堆積層である。K7はK6の東隣に位置し、平面形は直径40cmの円形で、深さは20cmである。断面形は逆台形である。堆積土は炭化物粒や焼土粒などを含む暗褐色シルトである。

K10は建物南側に位置し、平面形が直径80cmの円形で、深さは20cmである。断面は逆台形である。堆積土はⅢ層とⅤ層からなるにぶい黄褐色シルトの人為堆積層である。

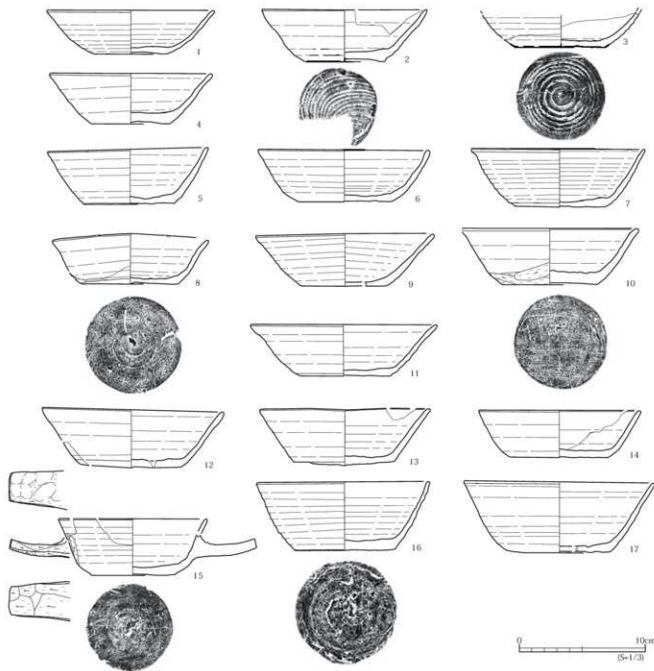
K1は北東隅、K2中央北東よりに位置し、いずれも建物北東部に分布する人為堆積土(地山ブロック(V層)からなり、固く締まる黄褐色(10YR7/8)粘土質シルト)上から掘り込まれている。いずれも平面形は直径60～70cmほどの円形で、深さは20cmである。断面は錐錐状である。堆積土は自然堆積層である。

〔そのほかの施設〕ロクロピットの可能性があるピット1基、焼け面2カ所を検出した。

P3は建物中央北よりに位置する。平面形は、長軸45cmの楕円形で、断面形は箱型を呈する。中央に径10cm長さ30cmの棒状の痕跡があり、掘方内は黄褐色シルトで埋め戻されている。建物内にほかに組み合う柱穴がなく、棒状の痕跡があることからロクロピットと判断した。

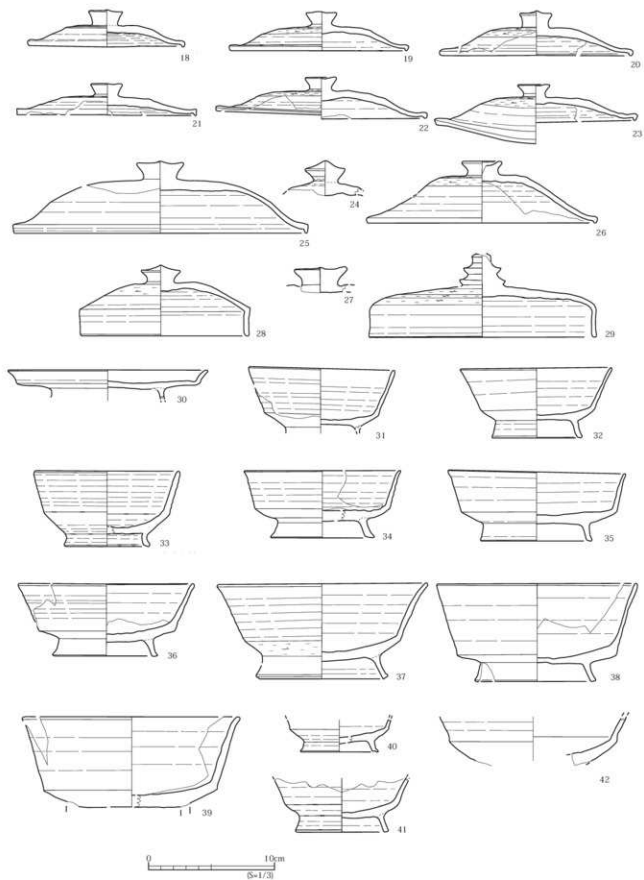
K6・7・10上の東西150cm、南北70cmの範囲で焼け面を確認した。

〔出土遺物〕1～7層から須恵器は坏、蓋、高台环、盤、高环、鉢、壺、長頸瓶、甕、土師器は坏、甕など大量の土器が出土した。また、おもにカマド周りの壁周溝から周溝蓋に転用された丸瓦と平瓦が出土した。須恵器坏は底部切離し・調整が糸切りのものが2点出土したほかは、ヘラ切りか再調整である。80はカマド燃焼部から倒れて出土した須恵器坏である。この坏は小形、厚底底部で一般的な器形ではない。1～7層から出土した土器は接合関係をもつものが多く、完形に近くなるものが多い。

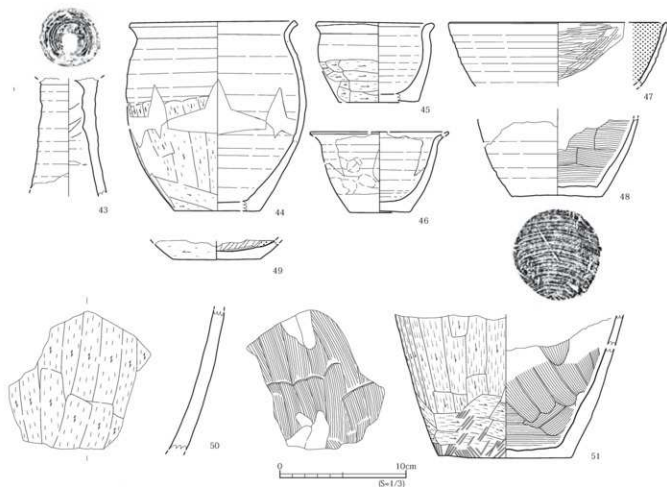


品	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	横出函 1/2		(13.2)	(5.9)	3.5		外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右	36-1	204
2	須恵器 坏	上層(1-2層) 1/3		(13.0)	(6.4)	4.1		外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		221
3	須恵器 坏	4層 底完存			7.0	2.7		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り		316
4	須恵器 坏	下層(3-4・7層) 完形	12.7		6.2	4.0		外内：ロクロナデ 火ダスキ 底部：ヘラ切り→ナデ	36-2	216
5	須恵器 坏	上層(1-2層) 2/3	(12.6)		7.3	4.5		外：ロクロナデ 火ダスキ 内：ロクロナデ 軸あり 底部：ヘラ切り	36-3	117
6	須恵器 坏	上層(1-2層) 3/4	(13.5)		7.2	4.2		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ	36-4	116
7	須恵器 坏	上層(1-2層) 2/3	(13.6)		7.0	4.6		外内：ロクロナデ 火ダスキ十字 底部：ヘラ切り 胎土：やや粗	36-5	119
8	須恵器 坏	1層 2/3	(12.3)		7.6	4.0		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 「十」ヘラ置き		89
9	須恵器 坏	6層 2/3	14.1		6.7	4.3		外内：ロクロナデ 火ダスキ十字 底部：ナデ 胎土：海綿質骨針かきかき	36-6	296
10	須恵器 坏	7層 2/3	(13.8)		7.4	4.5		外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ	36-7	22
11	須恵器 坏	1・2・7層 2/3	14.6		7.2	4.1		外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ 胎土：やや粗		43
12	須恵器 坏	7層 2/3	(14.3)		8.1	4.8		外内：ロクロナデ 火ダスキ十字 底部：ヘラ切り		31
13	須恵器 坏	1・2層 完形	(13.4)		8.0	4.6		外内：ロクロナデ 火ダスキ 底部：ヘラ切り 底切れ ヒビ	36-9	341
14	須恵器 坏	10層 3/4	(12.7)		7.7	3.7		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→一部ナデ	36-8	212
15	須恵器 坏	下層(3-4・7層) 2/3	(11.7)		6.6	4.5		外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 胎土：ケズリ 指ねさえ 底部：手持ちケズリ 外内：自然釉 双耳杯	36-10	215
16	須恵器 坏	7層	口一部欠	(13.5)	7.9	5.4		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 「十」ヘラ置き 外：自然釉		4
17	須恵器 坏	7層	口一部欠	(15.0)	8.2	5.7		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 赤褐色	36-11	21

第43図 S129 竪穴建物跡 出土遺物(1)

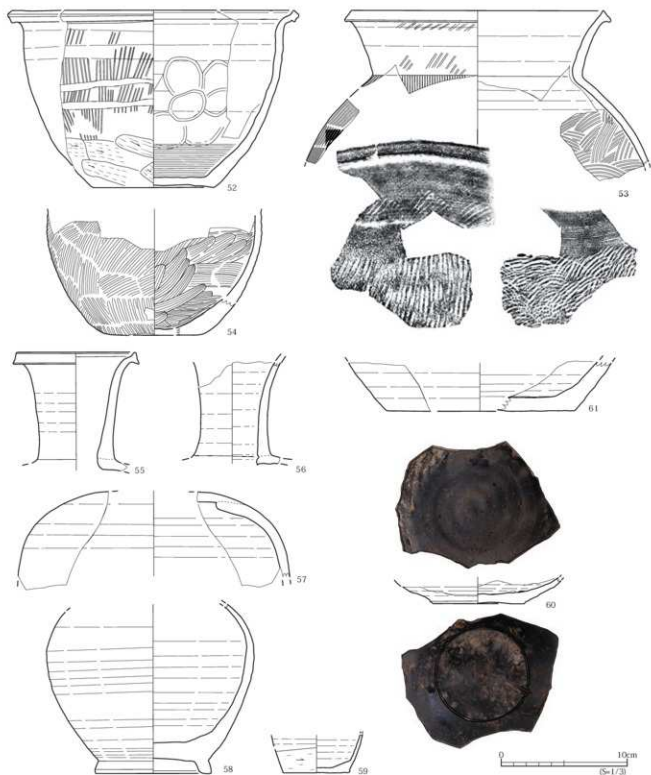


第44圖 S129 竪穴建物跡 出土遺物(2)



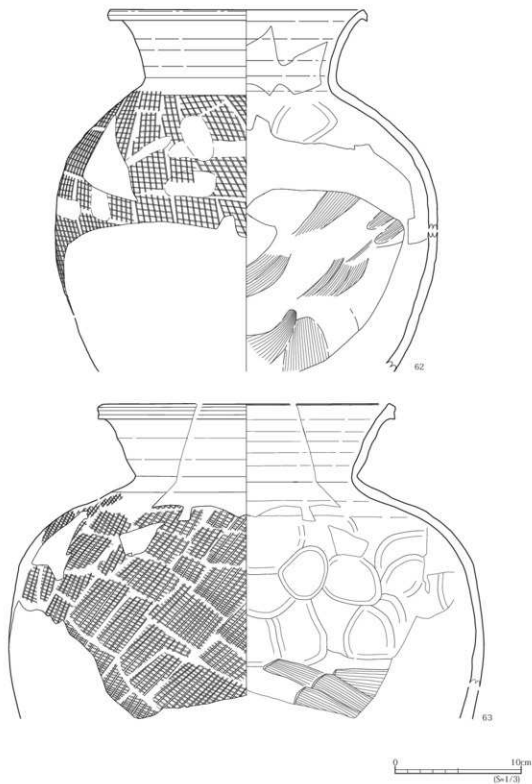
№	図柄	遺構・層	残存	口径	胴径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
18	須恵器 蓋	7層	ほぼ完形	12.2	12.2	2.9	2.9	靑瓦珠 外:ロクロナデー大井筒回転ケズリ 内:ロクロナデ	37.1	295
19	須恵器 蓋	4層	3/4	(13.9)		3.1	ボタン	外:ロクロナデー大井筒回転ケズリ 内:ロクロナデ	37.2	303
20	須恵器 蓋	4層	2/3	(15.1)		3.6	靑瓦珠	外:ロクロナデー大井筒回転ケズリ 内:ロクロナデ	37.3	302
21	須恵器 蓋	4層	2/3	14.1		2.5	ボタン	外:ロクロナデー大井筒回転ケズリ 内:ロクロナデ	37.3	304
22	須恵器 蓋	10層	3/4	16.5		3.3	ボタン	外:ロクロナデー大井筒回転ケズリ 内:ロクロナデ	37.4	209
23	須恵器 蓋	7層	3/4	15.7		4.6	ボタン	外内:ロクロナデー大井筒回転ケズリ	37.5	294
24	須恵器 蓋	5層	つまみ				2.8- 宝珠			301
25	須恵器 蓋	1層 (1・2層)	1/2	(23.1)		5.7	靑瓦珠	外:ロクロナデー回転ケズリナデ 内:ロクロナデ	37.6	125
26	須恵器 蓋	7層	3/4	18.0		4.9	ボタン	外:ロクロナデー大井筒回転ケズリ 内:ロクロナデ	37.7	18
27	須恵器 蓋	7層	つまみ				靑瓦珠			213
28	須恵器 蓋	2層	2/3	(13.2)		5.6	靑瓦珠	外:ロクロナデー回転ケズリナデ 内:ロクロナデ	37.9	69
29	須恵器 蓋	1・2層	1/4	(17.8)		6.7-	クマゴ三蓋 外:ロクロナデーケズリ 上面に自然輪 内:ロクロナデ	37.8	274	
30	須恵器 壺	1層・4層・上層	1/2	(15.6)		2.3-	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ	37.10	42	
31	須恵器 高台付	7層	1/2	(11.5)	(6.2)	5.8-	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ 外内全面に自然輪かかると	37.12	44	
32	須恵器 高台付	7層	口一部欠	(11.5)	7.0	5.6	外内:ロクロナデ 底部:ナデ 内面-口縁外面に自然輪かかると	37.11	11	
33	須恵器 高台付	1層	2/3	11.3	(6.6)	6.0	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ	37.14	88	
34	須恵器 高台付	4層	1/3	(12.2)	8.2	5.3	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ	37.15	308	
35	須恵器 高台付	7層	2/3	(13.9)	(6.7)	5.6	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ 赤褐色	37.13	211	
36	須恵器 高台付	1層	1/2	(13.2)	8.2	5.8	外内:ロクロナデ 底部:高台取り付→ロクロナデ	37.15	291	
37	須恵器 高台付	7層	2/3	16.5	9.8	7.6	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ	38.1	293	
38	須恵器 高台付	上層 (1・2層)	2/3	15.6	9.5	7.8	外内:ロクロナデ 底部:ヘタ切り→ロクロナデ	38.2	112	
39	須恵器 高台付	1層	2/3	高台欠	17.0		7.2-	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ	38.3	87
40	須恵器 高台付	1層	底部1/2		(6.1)		外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ	38.4	94	
41	須恵器 高台付	横出面	底1/2		(7.0)	4.3-	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリナデ	241		
42	須恵器 高台付	1層	破片				外内:ロクロナデ	86		
43	須恵器 高台付	1・2層	脚部片			9.4-	外内:ロクロナデ 破り	258		
44	土師器 甕	1層・下層	2/3	12.9		6.8	15.1	外:ロクロナデ →ト部ケズリ 被熱面 内:ロクロナデ 裏水溜スス	38.5	300
45	土師器 甕	7層	1/2	(9.1)	(6.3)	6.5	外:ロクロナデト部ケズリ 内:ロクロナデ 底部:ケズリ	38.4	292	
46	土師器 甕	1層 (3・4・7層)	1/3	(10.9)		4.7	6.4	外:ロクロナデ→指おさ丸瓶 内:ロクロナデ 裏水溜スス 底部:ヘタ切り	234	
47	土師器 杯	上層 (1・2層)	口縁部一部	(17.4)		5.0-	外:ロクロナデ 内:黒色陶理	171		
48	土師器 杯	横出面	底1/2		7.0	1.6-	外:ケズリ 内:黒色陶理 底部:回転ケズリ	277		
49	土師器 甕	7層	底部		7.1	6.2-	外:ロクロナデ→下部回転ケズリ 内:ナデ スス 底部:静止糸切り?	39		
50	土師器 甕	4層	破片付瓦破片				外:ケズリ 内:ナデ (ハケス) →一部ナデ 色調:灰黄褐色	329		
51	土師器 甕	7層	底部片		10.5	11.3-	外:平行タタキ→ケズリ 内:ナデ→ト部回転ケズリ	337		

第45図 S129 竪穴建物跡 出土遺物 (3)



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
52	須恵器 鉢	7層	3/4	(22.4)		9.5	14.0	外：平行タタキ→部分的にナデ→ト部ケズリ 内：無文当て具→ナデ	38-6	9
53	須恵器 甕	1層	口・肩	(20.0)			13.4	外：ロクロナデ→平行タタキ→口縁ロクロナデ 内：口縁部ロクロナデ 胴部：同心四文当て具組	39-1	93
54	須恵器 甕	1層(1・2層)	底部片					外：平行タタキ 内：無文当て具組→ナデ		179
55	須恵器 長頸瓶	1層(1・2層)	口縁部片	(伊3)			9.4	外内：ロクロナデ 軸かかる		173
56	須恵器 長頸瓶	1・2層	一部				8.0	胴部径：6.0 外内：ロクロナデ 3段 円盤 自然軸		251
57	須恵器 長頸瓶	軸付面	胴部口					胴部径 (21.6) 外内：ロクロナデ 3段 円盤 自然軸		205
58	須恵器 長頸瓶	7層	胴・底部		16.5	9.1	13.4	外内：ロクロナデ 底部：回転系切り右	38-7	2
59	須恵器 壺	1層	底部付近		5.1	3.1		外：ロクロナデ→下部回転ケズリ 内：ロクロナデ 底部：へう切り→ナデ		92
60	須恵器 坏	2層	底部		7.3	2.1		外内：ロクロナデ 底部：へう切り→ナデ 外内自然軸かかる 幾何に転用	38-8	75
61	須恵器 甕	4層	底部付近		(14.0)	3.9		外内：ロクロナデ		321

第46図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(4)



No.	名称	遺跡・期	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	巻数
62	須恵器 甕	7期	口縁部~胴部中	20.2			28.9	口：ロクロナデ 外：縦格子タタキ 内：無文当て貝面→ナデ	30-2	5
63	須恵器 甕	1層①・2期・1層③・4期・7期	口~胴中	22.6	(37.3)		25.0	口縁（外内：ロクロナデ） 胴部（外：縦格子タタキ 内：無文当て貝面→下部のみナデ）	30-3	7

第 47 図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (5)

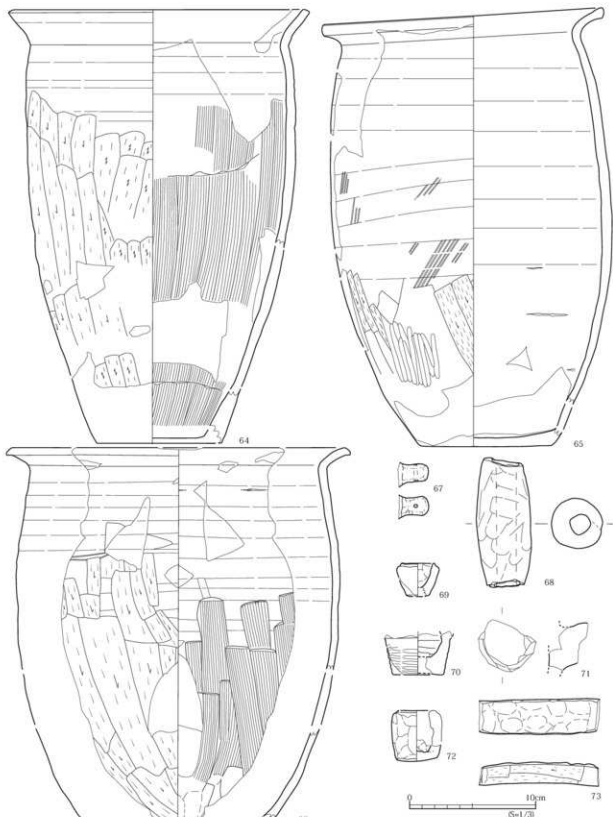
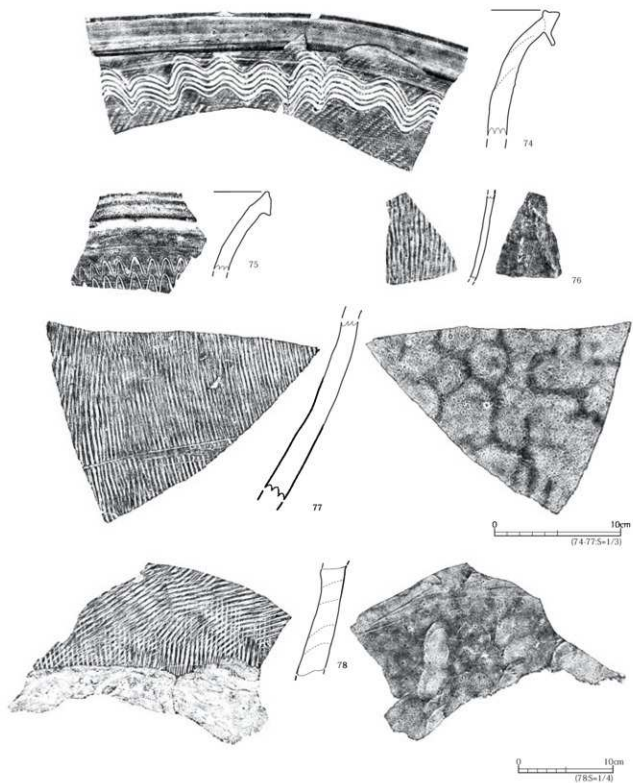


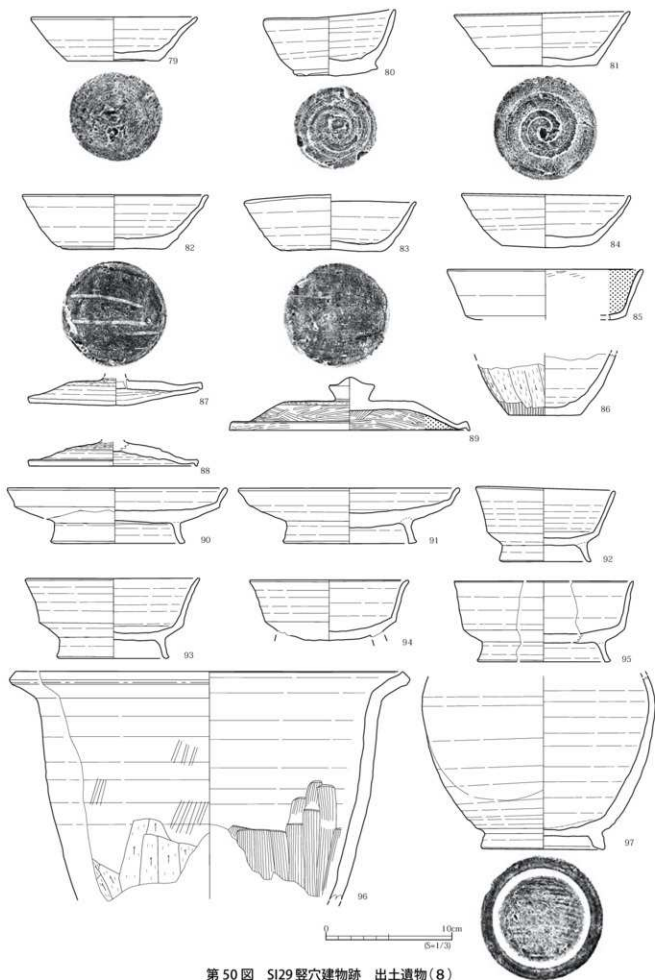
図	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	頁数
64	土師器 甕	前面	3/4	(22.9)			(34.6)	外：ロクロナデ ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 未使用か？		27
65	土師器 甕	床	3/4	22.2	10.4	34.5		外：平行タタキ ロクロナデ→ケズリ→ミゴキ 内：ロクロナデ→ナデ	40-1	13
66	土師器 甕	上層(1・2層)・下層(3・4・7層)	1/4	(26.4)			29.7	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 薄いコゲ		25
67	土製品 把手	1層	破片					残長：2.2 高：1.4		107
68	土罐	上層(1・2層)	成形		4.2			径：10.2 内径：1.6 外内：ナデ 指痕に痕残り 重さ：167.8g	41-5	123
69	土製品 ミニチュア土器	上層(1・2層)	破片	2.6	0.8	2.6		風化により調整不明		122
70	土製品 ミニチュア土器	2層				(3.9)		外：平行タタキ一部ナデ 内：ナデ		74
71	土師器 壺把手？	上層(1・2層)	把手のみ							194
72	土製品 ミニチュア土器	2層			3.0	4.0		外：ナデ オサエ		73
73	甕底部分か？	5層						長さ：9.5 厚さ：1.6 ケズリ 指痕に痕		298

第48図 S129 竪穴建物跡 出土遺物(6)

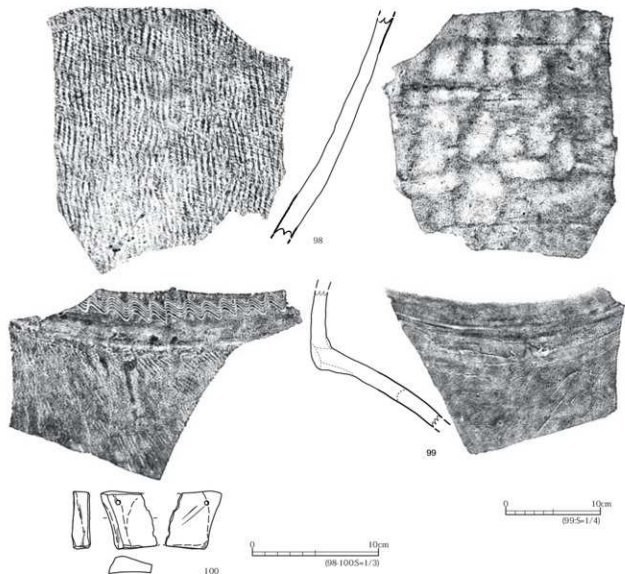


番号	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	頁数
74	須恵器 甕	1層(1・2層)	口縁破片					帯線成状文(帯曲数5) / 平行タタキ→ロクロナデ	41-3	175
75	須恵器 甕	1層	口縁破片					外:一本線成状文2段 / ロクロナデ	41-4	84
76	須恵器 甕	1層(1・2層)	胴部破片					外:縦格子タタキ 内:無文当て具施	180	
77	須恵器 甕	4層	胴部破片					外:平行タタキ 内:無文当て具施	41-1	318
78	須恵器 甕	1層(1・2層)	胴下部破片					外:平行タタキ 内:無文当て具施→ナデ		175

第49図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(7)

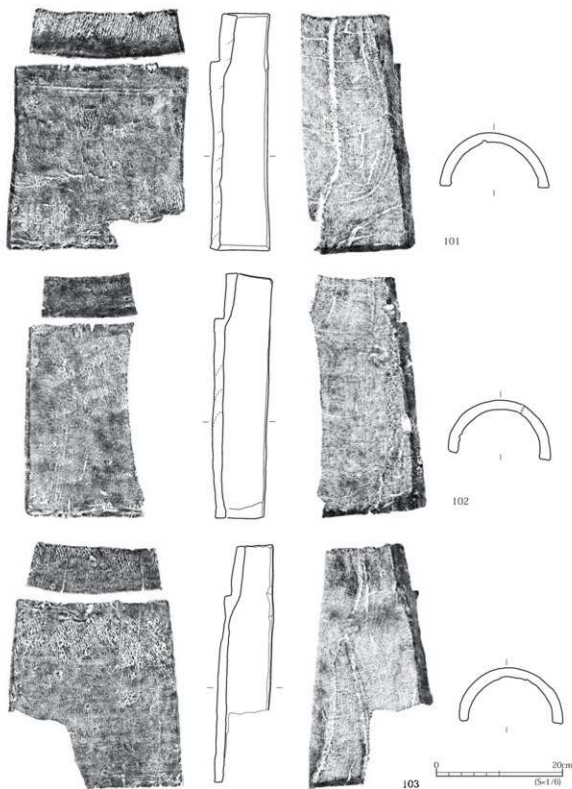


第50图 SI29 豎穴建物跡 出土遺物(8)



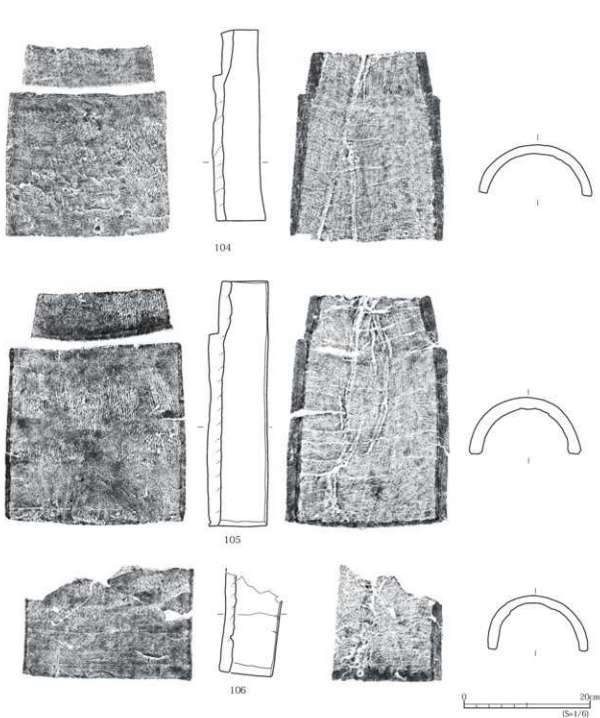
№	層種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
79	黄砂層	7層	ほぼ完形	12.9	7.2	3.5		外内：ロクロナデ 底部：ヘウ切り→ナデ	40-2	8
80	黄砂層	環	カマド惣焼部	完形	10.4	6.4	5.3	外内：ロクロナデ 底部：ヘウ切り	40-3	34
81	黄砂層	環	7層	完形	13.8	8.3	4.3	内内：ロクロナデ 底部：ヘウ切り 火ダスキ	40-4	16
82	黄砂層	環	7層	ほぼ完形	14.6	7.7	4.4	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ 火ダスキ ヒビ	40-5	19
83	黄砂層	環	外延溝	完形	13.5	8.1	4.5	外内：ロクロナデ 内面全面自然釉(陶灰) 外面火ダスキ 底部：手持ちケズリ	40-6	38
84	黄砂層	環	7層	ほぼ完形	(13.3)	7.1	4.2	外内：ロクロナデ 底部：ヘウ切り→ナデ 火ダスキ	40-7	14
85	土師窯	高台環	外延溝	1/4	(15.4)		4.0-	外：ロクロナデ 内：黒色処理		36
86	土師窯	鉢	底部片			5.7	4.9-	外：叩き→ケズリ 内：ロクロナデ		37
87	黄砂層	蓋	K2 1層	ツマミ以外完存	13.6	2.2-		外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ ヒビ・ユガミ	39	
88	黄砂層	蓋	K2 1層	1/3	13.3	1.9-		外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ	40	
89	土師窯	蓋	10層		(19.0)	4.2		宝珠ツマミ 外：天目回転ケズリ→ミガキ 下ミガキ 内：黒色処理	40-10	208
90	黄砂層	壺	7層	2/3	17.1	10.0	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 高台内側はがれる	40-9	10
91	黄砂層	壺	7層	1/2	(17.3)	10.5	4.4	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ	40-8	12
92	黄砂層	高台環	7層	完形	10.9	7.1	6.0	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 内面重ねヒビ	40-11	24
93	黄砂層	高台環	7層	ほぼ完形	13.5	8.5	6.5	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ ヒビ	17	
94	黄砂層	高台環	7層	高台欠	12.4		4.8-	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ	6	
95	黄砂層	高台環	カマド前床	1/3	(14.0)	(10.5)	6.4	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 赤褐色	33	
96	黄砂層	鉢	カマド袖	口一底部	(30.7)			外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 赤褐色	35	
97	黄砂層	長頸瓶	7層		18.4	9.5		外内：ロクロナデ 底部：静止系切り?	3	
98	黄砂層	甕	7層	胴部破片				外：縦格子タタキ 内：無文当て貝殻 外内軸かか	41-2	1
99	黄砂層	甕	7層	胴→肩の一部				胴部径：(57.0) 残高：14.3 口：縹褐色状文(縹黒数6) ナデツケ 胴部片：平打ちタタキ 内：当て貝殻 自然釉 縹灰河 黄面に片物の縹 左肩部に穿孔、金属の溝か 幅：40mm 重さ：29.6g	15	
100	砥石	5層							70-4	343

第51図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(9)



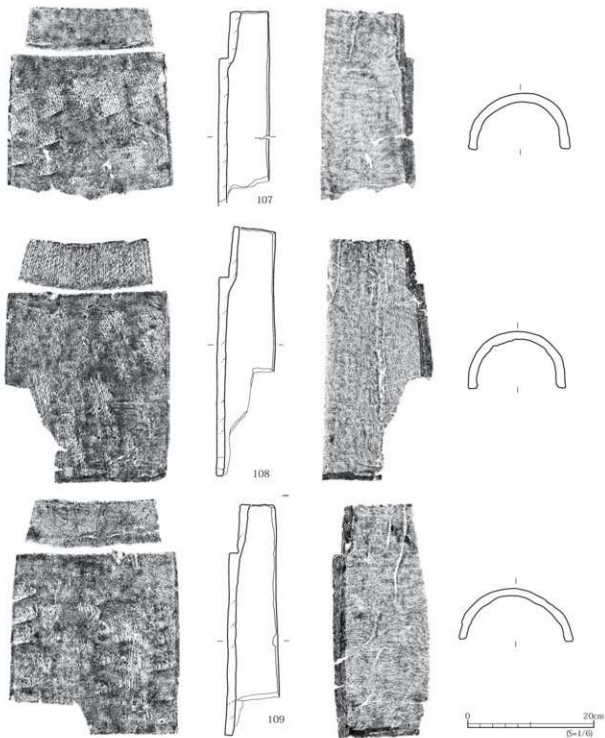
品	器種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	頁番号
101	丸瓦	I	10層	完形	全長:37.5cm 丸瓦部長さ:30.0cm 丸瓦部広端幅:(17.0)cm 狭端幅:12.5cm 玉縁部広端幅:15.0cm 狭端幅:14.0cm 重量:2.7kg 凸面:脚甲目→口クロナデ 凹面:布目(布のどじ紐部有り) 側端・小口:ケズリ	5YR5/2 灰褐		K11
102	丸瓦	I	10層	完形	全長:38.0cm 丸瓦部長さ:31.0cm 丸瓦部広端幅:17.0cm 狭端幅:14.5cm 玉縁部広端幅:13.8cm 狭端幅:8.5cm 重量:2.3kg 凸面:脚甲目→口クロナデ 凹面:布目(布のどじ紐部の面有り) 側端・小口:ケズリ 凹みにより接合できます	2.5Y7/2 灰黄		K9
103	丸瓦	II	10層	ほぼ完形 狭端一部分欠	全長:37.5cm 丸瓦部長:29.5cm 丸瓦部狭端幅:15.5cm 玉縁部広端幅:14.5cm 狭端幅:12.4cm 重量:2.0kg 凸面:脚甲目→口クロナデ 凹面:布目(布の合わせ目面有り) 側端・小口:ケズリ	7.5Y5/3 に近い		K4

第52図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(10)



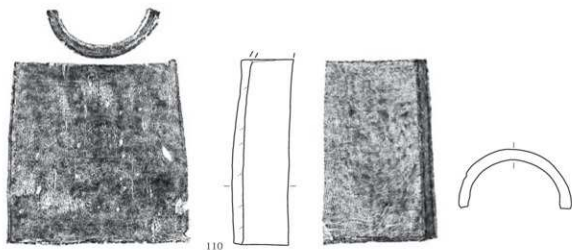
№	陶種	分類	遺構・層	現存	特徴	色調	写真図版	瓦番号
104	丸瓦	Ⅱ	10層	完形	全長：30.0cm 丸瓦部長さ：23.2cm 広端幅：48.1cm 狭端幅：13.3cm 凸面：襷甲目→口クロナ子 凹面：粘土粘結痕（明配）・布目 側端・小口：クズリ 色調：暗灰色（10YR4/1）	7.5Y6/1 灰	41-7	K6
105	丸瓦	Ⅱ	10層	完形	全長：36.0cm 丸瓦部広端幅：19.0cm 狭端幅：47.5cm 玉縁部広端幅：15.0cm 狭端幅：13.2cm 重量：2.7kg 凸面：襷甲目→口クロナ子 凹面：布目（布の含む程度目縁有り） 側端・小口：クズリ	7.5Y7/1 灰白	41-6	K5
106	丸瓦	Ⅱ	10層	1/3 玉縁欠	丸瓦部長：(16.5) cm 丸瓦部広端幅：16.5cm 重量：1.1kg 凸面：襷甲目→口クロナ子 凹面：布目（布のとじ縫部の端有り） 側端・小口：クズリ	2.5YR5/1 赤灰		K2

第53図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物 (11)

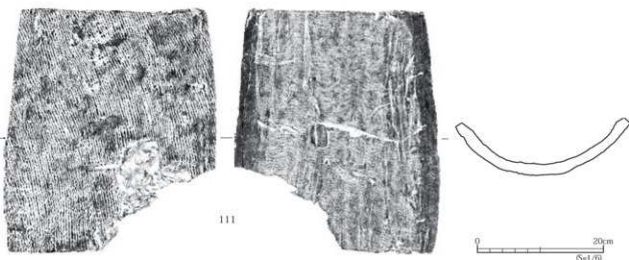


No.	図種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真関係	瓦番号
107	丸瓦	Ⅱ	10層	ほぼ完形 広端欠	全長：30.1cm 丸瓦部長：(22.5)cm 丸瓦部狭端幅：15.5cm 玉縁広端幅： 13.0cm 狭端幅：12.6cm 重さ：1.7kg 凸面：脚甲白→口クロナ子 凹面： 布目 側端・小口：ケズリ	10Y6/1	概図	K1
108	丸瓦	I	10層	ほぼ完形 広端一部欠	全長：38.0cm 丸瓦部長：30.0cm 丸瓦部狭端幅：15.0cm 玉縁部広端幅： 12.0cm 狭端幅：10.1cm 重さ：18.5kg 凸面：脚甲き→口クロナ子 凹面： 布目（含むむ目縁目り） 脚端・小口：ケズリ	2.5Y8/2	灰白	K10
109	丸瓦	Ⅱ	10層	ほぼ完形 広端一部欠	全長：36.5cm 丸瓦部長：29.0cm 丸瓦部狭端幅：18.0cm 玉縁部広端幅： 15.0cm 狭端幅：13.5cm 重さ：2.3kg 凸面：脚甲白→口クロナ子 凹面： 布目 側端・小口：ケズリ	7.5Y6/2	灰陶	K7

第54図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物(12)



110



111

0 20cm
S=1/50

品	図解	分類	遺構・層	保存	特徴	色調	写真掲載	頁番号
110	丸瓦	I	10層	3/4 玉縁 欠	全長：29.4cm 広端幅：18.3cm 狭端幅：15.9cm 凸面：刷印き→口クロ ナデ 凹面：粘土層積層（あまり見えない）・布目 側端・小口：ケズリ 色調：比色・黄褐色（10YR7/3）	2.5Y8/2 灰白		K8
111	平瓦	II	10層	ほぼ定形 広端側欠	長さ：38.5cm 狭端幅：23.8cm 重量：3.89g 凸面：刷印目・凹型台端 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	10Y6/1 褐色		K3

第55図 SI29 竪穴建物跡 出土遺物（13）

【SI60 竪穴建物跡】（第56～61図・図版15）

〔位置・検出面〕7区南西の丘陵南緩斜面に位置し、V層で検出した。西辺は調査区外、南辺は削平により失われている。

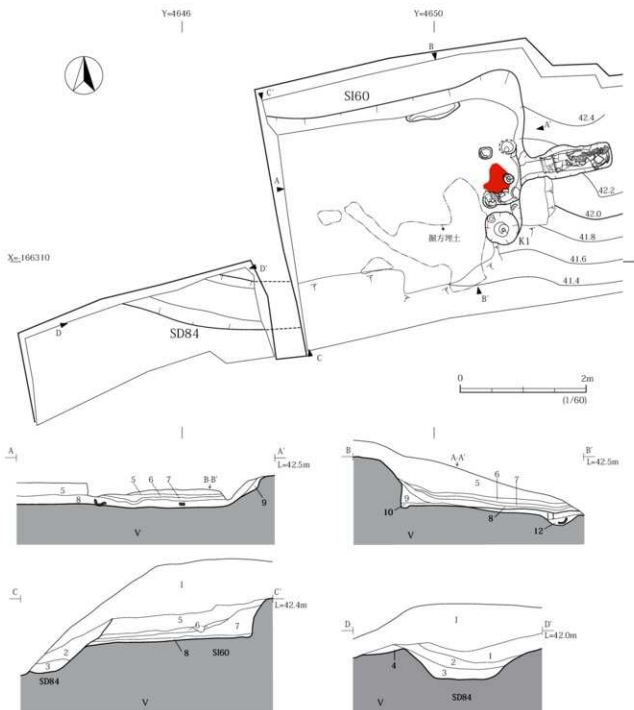
〔重複〕SD84と重複し、これより古い。

〔規模・平面形〕東西3.9m以上、南北3.0m以上である。

〔方向〕北辺で測るとN-83°-Eである。

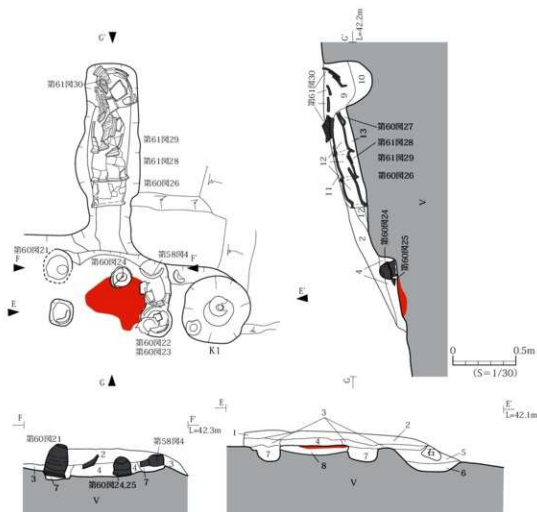
〔堆積土〕カマド・煙道を除いて6層に分けられた。5～10層は自然堆積層である。6層は黒色土と灰白色火山灰（To-a）ブロックからなる層で床から10cmほどの高さで北から南に向かって傾斜する。

〔壁〕北壁はほぼ垂直に立ち上がり、途中から大きく外傾する。東壁は緩やかに立ち上がる。北東隅付近ではややオーバーハング気味になる。高さは、最も残りの良い北壁中央付近で46cmある。



遺構名	層	土色・土質	特徴	性格
SD84	1	黒色 (1OYR1.7/1) シルト	炭粒・焼土粒を少し含む 土器片を含む	自然堆積
	2	黒褐色 (1OYR2/3) シルト	炭粒・焼土粒を多く含む 土器片を含む	自然堆積
	3	暗褐色 (1OYR3/4) 砂質シルト	木炭片・焼土粒を多く含む 水成堆積	自然堆積
	4	褐色 (1OYR4/4) シルト	木炭片・焼土粒を多く含む	自然堆積
SI60	5	黒色 (1OYR1.7/1) シルト		自然堆積
	6	にぶい黄褐色 (1OYR5/4) シルト	灰白色kaolinitがブロック状に散じる	自然堆積
	7	黒褐色 (1OYR2/3) シルト	木炭粒を少し含む	自然堆積
	8	褐色 (1OYR4/4) シルト	木炭片・焼土粒を少し含む	自然堆積
	9	にぶい黄褐色 (1OYR5/4) シルト	地山 (V層) ブロックを多く含む	自然堆積
	10	にぶい黄褐色 (1OYR5/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック・焼土塊を多く含む	自然堆積
	11	にぶい黄褐色 (1OYR5/3) 粘土質シルト	層層ブロック、地山ブロックからなる	床 厩方埋土
	12	にぶい黄褐色 (1OYR4/3) シルト	層層ブロック、地山ブロックからなる	厩方埋土

第56図 SI60 竪穴建物跡 SD84 溝



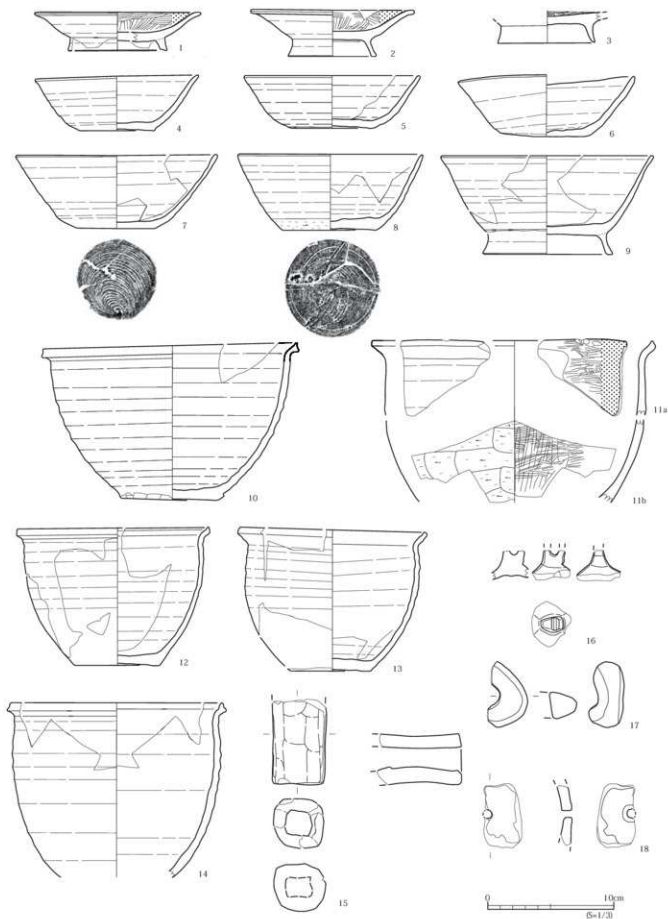
遺構名	層	土色・土性	特徴	植物
S60 カマド	1	黒褐色(10YR3/1)シルト		自然堆積
	2	褐色(10YR4/5)シルト		自然堆積
	3	黒褐色(10YR2/3)シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	自然堆積
	4	黒褐色(7.5YR3/2)シルト	木炭粒・焼土粒を多く含む	焼成時堆積土 自然堆積
	5	暗褐色(7.5YR3/4)シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	K1 自然堆積
	6	褐色(10YR4/4)シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	K1 自然堆積
	7	暗褐色(10YR3/3)シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	カマド地心対策方理土
	8	にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト		方理土。S60-12層と同質
S60 カマド 煙道ピット	9	黒褐色(10YR2/3)シルト	木炭粒を多く含む	煙道ピット 自然堆積
	10	暗褐色(7.5YR2/3)シルト	木炭粒・焼土粒を少し含む	煙道ピット 自然堆積
	11	にぶい褐色(7.5YR5/3)シルト	硬質片を少し含む	煙道(土層内) 自然堆積
	12	暗褐色(10YR3/4)シルト		煙道(土層内) 自然堆積
	13	暗褐色(10YR3/3)シルト	硬質片を少し含む	煙道側方理土

第57図 S160カマド煙道遺物出土状況

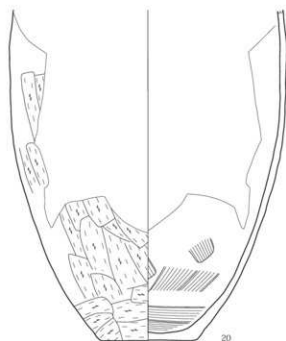
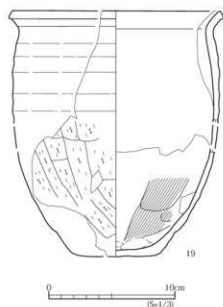
〔床〕北半は地山、南半は掘方埋土を床としている。

〔柱穴〕確認していない。

〔カマド〕東壁の北東隅寄りに付設される。本体部分と煙道を確認した。東壁から煙道先端までの長さは約1.5mである。本体は建物内にあり、明黄褐色粘土で構築されている。両側壁の構築土からは土師器甕(第60図-21~23)が逆位で2個体ずつ出土した。これらは焚口に向かって手前側の2個体は直径40cm、深さ10cmの掘方に、奥側の2個体は地山を削り出した床に据えられている。いずれも側壁の構築材として使用されたとみられる。掘方埋土上面および地山上面を燃焼部焼け面としており、強く被熱して赤変・硬化している。燃焼部内の堆積土は4層に分けられた。1~3層は



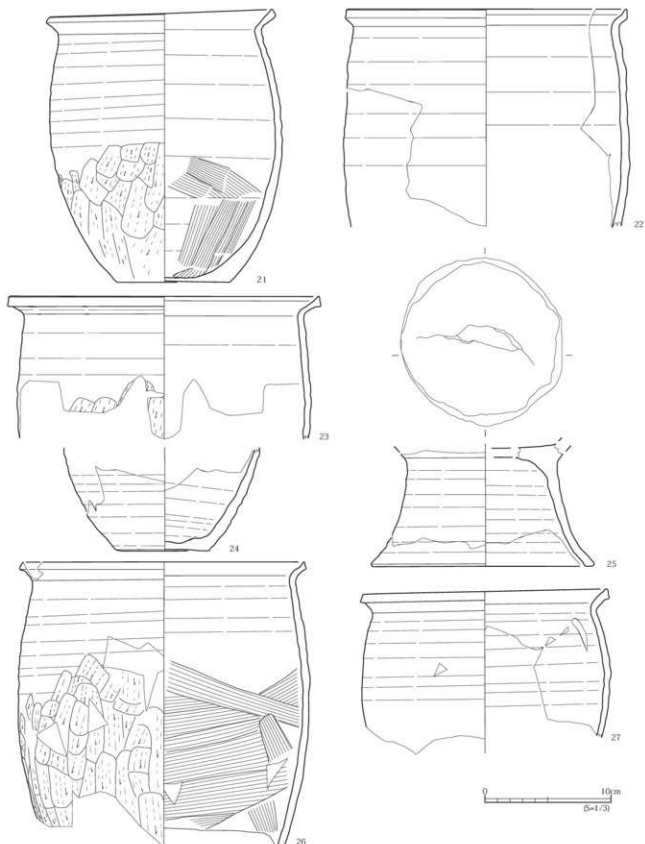
第 58 图 S160 竖穴建物跡 出土遺物 (1)



No.	器種	遺積・期	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写点図版	登録
1	土師器 高台甕	K1	1/2	(13.0)		(7.8)	3.1	外:ロクロナデ 内:黒色処理 高台歪む(高台附の内で計った)		1200
2	土師器 高台甕	K1	ほぼ完形	12.8		6.9	3.8	外:ロクロナデ 内:黒色処理	42-1	1201
3	土師器 高台甕?	?	底部				7.3	内:黒色処理		1169
4	須恵器 坏	床殿方埋土	完形	12.9		5.8	4.4	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右	42-2	1172
5	須恵器 坏	6層北西	1/4	(13.8)		(6.2)	4.2	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り 底切れ		1161
6	須恵器 坏	床殿方埋土	完形	13.8		6.8	4.9	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		1171
7	須恵器 碗	K1	2/3	15.8		6.0	5.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右	42-3	1202
8	須恵器 碗	床殿方埋土	ほぼ完形	14.4		7.4	6.0	外:ロクロナデーケズリ 内:ロクロナデ 底部:糸切り→回転ケズリ→「ト」字のナデ 底切れ	42-4	1170
9	須恵器 高台坏	床殿方埋土	1/2	16.5		10.1	7.8	外内:ロクロナデ	42-5	1175
10	須恵器 鉢	7層北東	1/2	(20.0)		7.5	12.5	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右→手持ケズリ	42-6	1160
11	土師器 鉢	5層北西	部分					外:ケズリ 内:黒色処理		1163
12	土師器 甕	床殿方埋土	2/3	15.1		6.7	10.9	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ 風化著しい 燻水コゴ	43-3	1176
13	土師器 甕	8層南西	1/2	14.6		6.3	11.4	外:ロクロナデ ススコゴ ぶきこぼれ? 著しい2次焼熟 内:ロクロナデ 燻水コゴ		1178
14	土師器 甕	8層南西	1/2	(16.8)			13.8	外内:ロクロナデ 摩滅 風化著しい		1179
15	土師器 手付鍋	増城土	把手			4.2		長さ:(6.8) 孔径:2.1 ケズリ	43-1	1162
16	土師器 土師	土層	破					残高:2.3	43-2	1173
17	土製品 把手	8層南西	把手							1164
18	土製品 ?	土層	破片					孔径:(1.2) 胎土:砂粒多い、直径2mmの石英粒 顕形等不明 風化強く、器面と欠損部との境不明瞭		1174
19	土師器 甕	床	1/2	(16.5)		6.7	19.4	外:ロクロナデーケズリ 内:ロクロナデーナデ 表面風化著しい 下部コゴ		1165
20	土師器 甕	床	1/5			7.6	26.2	外:ロクロナデーケズリ 内:ロクロナデーナデ 表面風化著しい		1177

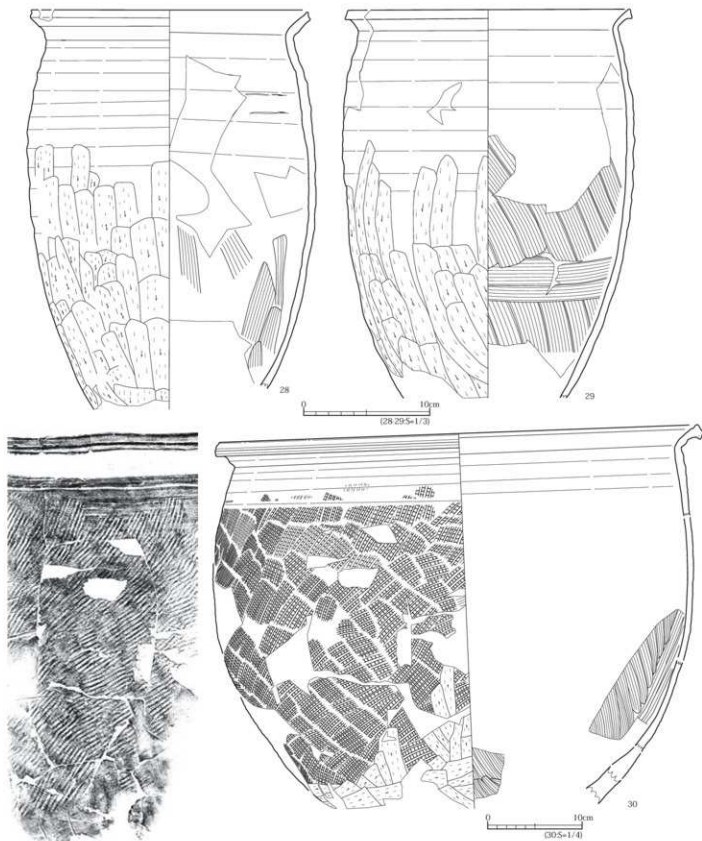
第59図 S160 竪穴建物跡 出土遺物(2)

自然堆積土で、4層は木炭粒・焼土粒を含む機能時の遺積である。焼け面中央からは赤焼土器台付鉢(第60図-25)の台が出土しており、摩滅・風化の様子から支脚として転用されたものとみられる。煙道は長さ1.5m、幅0.4~0.5m、深さ0.2mの掘方から、掘方埋土(13層)の上に底のない土師器甕3個体(第60・61図-26・28・29)が連結された状態で出土した。これらは口縁部を燃焼部側に向けて横位で置かれ、底部を隣り合う甕に5cmほど差し込まれていた。甕同士が接する部分の下部では、土師器甕の破片(第60図-27)が出土しており、高さ調整などに使われたとみられる。煙道の先端には直径36cmほどの煙出しピットが設けられており、内部の自然堆積土(9・10層)から大形の須恵器鉢(第61図-30)が逆位で出土した。出土状況からみて、これらの土師器甕は



編	器種	遺構・層	形状	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	巻数
21	土師器 甕	カマド左輪	ほぼ完形	17.5	18.5	8.9	21.6	外：ロクロナデート部ケズリ 内：ロクロナデート部ナデ 中空やや厚減 風化	43-4	1189
22	土師器 甕	カマド右輪	1/6	(22.1)			17.3	内内：ロクロナデ		1193
23	土師器 甕	カマド右輪	口縁部	(24.5)			11.3	内内：ロクロナデークズリ 内：ロクロナデ		1194
24	土師器 甕	カマド支脚	底部			7.1	8.2	内内：ロクロナデ 底部：回転糸切り有		1188
25	赤城土器 付録	カマド支脚	跡のみ			(11.4)	9.7	内内：ロクロナデ		1187
26	土師器 甕	樽道	3/4	(22.2)	23.2		23.0	外：ロクロナデート部ケズリ 内：ロクロナデート部ナデ 薄いコゲ コゲなし部分みだら	43-5	1182
27	土師器 甕	樽道	口縁部	19.4			13.0	内内：ロクロナデ	43-7	1199

第60図 S160 竪穴建物跡 出土遺物(3)



№	図種	濃縮・層	残存	口径	最大径	底径	胎高	特徴	写真掲載	登録
28	土師器 甕	標道	底部欠損	22.0	22.8		31.7	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ	44.1	1181
29	土師器 甕	標道	3/4	22.0	23.1		30.8	外:ロクロナデ→ト平ケズリ 内:ロクロナデ→ト平ナデ	44.2	1183
30	瓦器器 鉢	標出埋積土	3/4	(50.4)				外:ロクロナデ 縦格子印き→ロクロナデ 下部縦格子印き→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ	44.3	1184

第 61 図 S160 竪穴建物跡 出土遺物 (4)

煙道の構築材として使用されたものとみられる。

〔周溝〕北壁の東側付近に沿って、部分的に長さ 0.9 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 m ほどの底面が凹凸な溝が認められた。自然堆積土で覆われていた。

〔土坑〕床面で 1 基確認した。K1 はカマドのすぐ南側に隣接し、平面形が直径 50cm ほどの円形、断面形は楕円状である。深さは 20cm である。埋土は自然堆積であり、土師器高台皿（第 58 図-1・2）、須恵器環（第 58 図-7）が出土した。

〔出土遺物〕カマドとその周辺の床、土坑、掘方から土師器高台皿、甕、須恵器環、高台環、鉢、赤焼土器台付鉢が出土した。土師器長胴甕など大形の土器はカマドの構築にかかわるもので、供膳具は主に土坑から出土した。

【SI62 竪穴建物跡】（第 62・63 図・図版 16）

〔位置・検出面〕7 区中央の丘陵南緩斜面に位置し、V 層で検出した。壁が確認できなかったが、貼床の残存とみられる粘土の広がり、その下から掘方埋土を確認したほか、床面とした面に焼け面を確認したことから竪穴建物跡として報告する。

〔重複〕SX94 と重複し、これより古い。

〔規模・平面形〕不明。貼床とみられる粘土の残存は、東西 4.9 m、南北 1.7 m ほどの範囲に広がる。

〔方向〕不明。

〔堆積土〕壁と床の一部が壊されたのち、SX94 が堆積する。

〔壁〕確認できなかった。

〔床〕にふい黄褐色粘土質シルト主体の貼床である。貼床の厚さは、建物跡とした範囲の西半では最大 10cm 程度残っていたが、東半では大部分が 1 cm 未満である。掘方埋土はⅢ層と V 層ブロックからなる。

〔柱穴〕支柱穴は確認していない。

〔カマド〕確認できなかった。

〔そのほかの施設〕焼け面を 2 か所確認した。南の焼け面は径 50cm の円形で熱を受けて赤変するとともに一部は硬化していた。東の焼け面は長軸 50cm、短軸 25cm ほどの範囲が熱を受けて赤変していた。

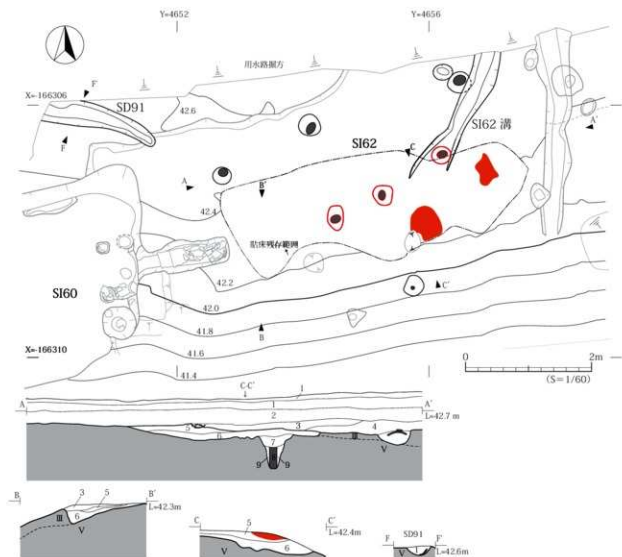
〔出土遺物〕床から土師器甕が出土したほか、堆積土から須恵器環、壺、土師器甕などが出土した。6 は小形の環である。

【SI76 竪穴建物跡】（第 64・65 図・図版 16）

〔位置・検出面〕7 区西の丘陵平坦面に位置し、V 層で検出した。南東隅付近と外延溝とみられる溝を検出したのみで、大部分は調査区外にある。

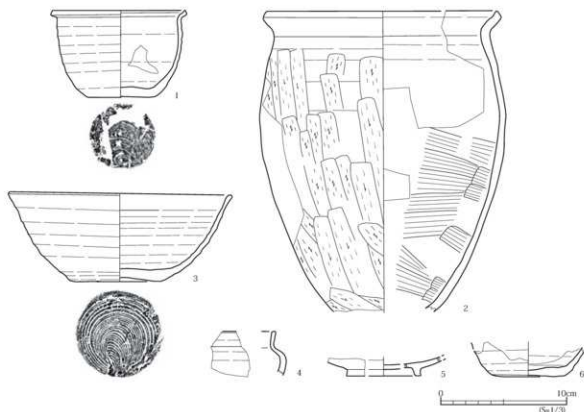
〔重複〕SX53、SD54、SD73 と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕南東隅付近の東西 1.8 m、南北 2.8 m の範囲を確認した。



遺構名	層	土色・土性	特徴	評価
SI62	1	黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト		自然堆積 SX04
	2	黒褐色 (10YR3/2) シルト		自然堆積 SX04
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト		自然堆積 SX04
	4	褐色 (10YR4/4) シルト		自然堆積 SX04
	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト	炭化物粒を少し含む	粘土
	6	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	地山 (V層) からなり、炭化物粒を少し含む	掘方埋土
	7	にぶい黄褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	溝 人為堆積
	8	褐色 (10YR3/3) シルト		P4 柱基礎
	9	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	P4 掘方埋土
P1	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト		柱基礎
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	炭化物粒を微量含む	掘方埋土
	3	にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト		掘方埋土
SI62-P3	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト		柱基礎
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	炭化物粒を微量含む	掘方埋土
SD91	1	にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックからなり、黄褐色ブロック小を少し含む	人為堆積

第 62 図 SI62 竪穴建物跡



№	名称	遺物・層	形状	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図番	登録
1	土師器 甕	床面内	ほぼ完成	10.5	5.1	6.9		外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り・右 スズ付着 内：粟永緑コゲ	49-1	1267
2	土師器 土	4層	1/2	(18.0)			23.8	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		1386
3	須恵器 坏	1層内	4/5	17.5		6.7	7.2	外内：ロクロナデ 底部：回転糸切り右		1385
4	須恵器 甕	4層	破片					外：ロクロナデ 蓋の可能性もある		1409
5	須恵器 甕?	4層	破片		(5.8)	1.5		外内：ロクロナデ		1387
6	須恵器? 坏	2層	底部片			5.7		外内：ロクロナデ 底部：ナデ 色調：にぶい黄褐色		1390

第 63 図 S162 竪穴建物跡 出土遺物

〔方向〕東辺で測ると N-6° -W である。

〔堆積土〕地山ブロック小、炭化物粒を少し含む黄褐色シルトの自然堆積層である。

〔壁〕ほとんど残っていない。高さは最も残りの良い P3 付近で 10cm である。

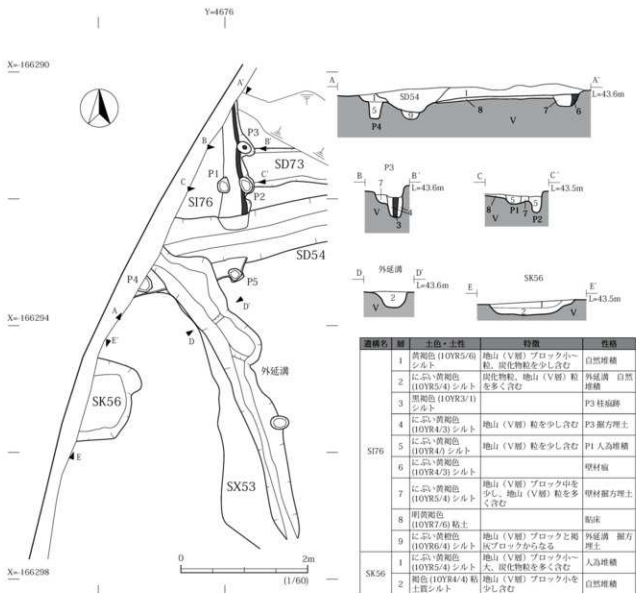
〔床〕IV層ブロックからなる貼床である。地山のわずかな凹凸を整えたとみられる。厚さは 1～2 cm ほどで、壁周溝付近では地山が床面となっている部分もあった。

〔柱穴〕東壁に沿う柱穴 (P3)・ピット (P 2・4・5) を確認した。柱穴・ピットの掘方は径 20cm ほどの楕円形である。P3 の柱痕跡は径 10cm ほどの円形である。掘方埋土は V層を主体とする。ピットも位置からみて柱穴であったとみられるが柱痕跡は確認できなかった。

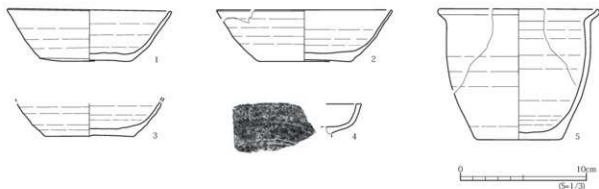
〔カマド〕確認できなかった。

〔周溝〕壁材の掘方である。掘方は幅 30～50cm、深さは 20cm である。

〔外延溝〕建物南東隅から南東方向に向かって延びる。長さは約 4.4 m 分確認した。南端は斜面の傾斜に吸収されて途切れる。幅は 40～80cm で断面形は逆台形である。底面標高は南端で 42.84 m、外延溝北端の周溝底面との比高は 20cm ほどある。建物内で溝の延長を確認しているが、上半は



第64図 S176 竪穴建物跡 SK56 土坑



No.	品類	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
1	陶器器 杯	床	ほぼ完形	12.9	7.2	4.2	4.2	外内: ロクロナデ 底部: 回転糸切り右		49-2 1308
2	陶器器 杯	床	2/3	(13.8)	7.2	4.1	7.2	外内: ロクロナデ 底部: ヘラ切り→ナデ		1311
3	陶器器 杯	床	1/4		7.0	2.6	7.0	外内: ロクロナデ 底部: ヘラ切り→ナデ		1312
4	陶器器 甕? 外延溝	破片						外内: ロクロナデ ヘラ掘		49-6 1313
5	土師器 甕	床	1/3	(12.5)	10.4	10.4	10.4	外内: ロクロナデ 底部: 回転糸切り 摩滅著しい		1309

第65図 S176 竪穴建物跡 出土遺物

SD54によって壊されていた。その下に残っていた部分は建物の掘方埋土(9層)で埋め戻されていた。〔出土遺物〕床から土師器甕、須恵器坏のほか堆積土からも土師器・須恵器片が出土している。1は床とした面から出土しているがSD54やカクランと接する位置から出土しており、紛れ込みの可能性が高い。4の須恵器は器種が判然としない。外面に「Ⅱ」のヘラ描がある。

【SI78 竪穴建物跡】(第66～73図・図版17)

〔位置・検出面〕7区丘陵部分中央の南側、丘陵南緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。発見当初はSX53に覆われていた。床面北半から炭化物、炭化材、焼土塊などがまとまって出土したことから焼失建物とみられる。

〔重複〕直接の重複はないが、SD54がSX53を掘り込むことからSD54より古い。

〔規模・平面形〕東西4.1m、南北3.7mの隅丸方形である。

〔方向〕西辺で測るとN-15°-Wである。

〔堆積土〕6層に分けられた。水がたまりやすい場所だったようで、堆積土下層(4～6層)から床はグライ化していた。1・2層は火災後の自然堆積層で、大量の須恵器が出土している。この層では西辺付近でとくに土器が出土している。火災層の3層は、カマド周辺から建物北東隅付近では炭化材が残る。4、5、6層は火災以前の自然堆積である。とくに5層はカマド周辺のみ堆積しており、煙道から流入した自然堆積とみられる。以上の堆積状況から建物の廃絶から火災まで一定の時間があつたことが分かる。

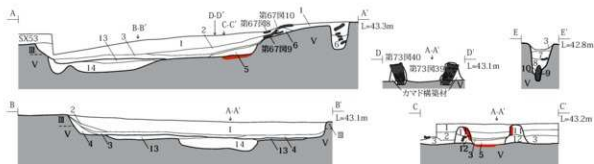
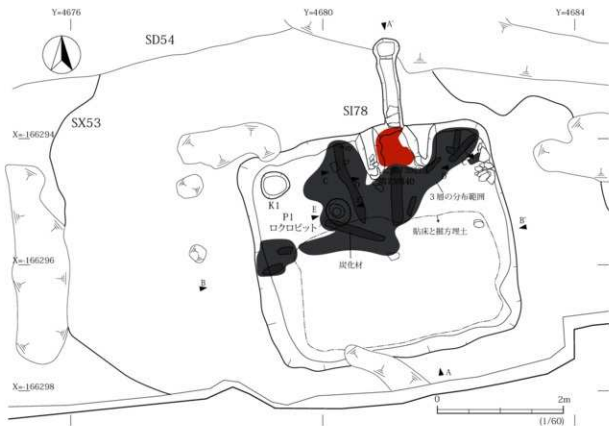
〔壁〕やや外傾して立ち上がる。高さは、最も残りの良い北壁で36cmある。

〔床〕西辺と北辺沿いが地山、それ以外ではV層ブロック主体の掘方埋土、一部では掘方埋土の上に明黄褐色粘土の貼床である。

〔柱穴〕主柱穴は確認していない。

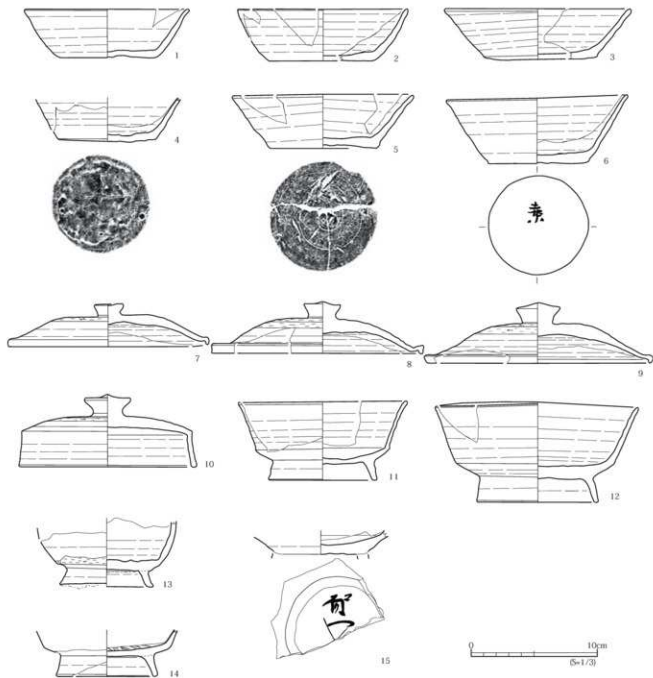
〔カマド〕北壁中央のやや東寄りに付設される。本体部分と煙道部を確認した。本体部分は建物内にあり、左右の側壁は明黄褐色粘土で構築されている。両側壁前端には丸瓦39・40を玉縁部を下にして据えて芯材としている。左側壁では検出面で須恵器壺片が構築粘土から露出していたほか、断ち割り時に断面でも須恵器坏片・壺片が出土した。土器片を補強材として使っていた可能性がある。煙道は長さ1.5mで先端に直径36cmの煙出しピットを設ける。煙出しピットの底面は煙道の底面から40cm深い位置にある。

〔そのほかの施設〕P1がある。建物中央やや北西よりにあり、長軸66cm、短軸45cmの楕円形、断面は漏斗状である。軸径6cm、軸長49cmである。ピットの位置と形態、建物内にほかに組み合うピットがないことからロクロピットと判断した。検出時には円形の窪みに3層(火災層)が堆積しており、これを除去した後も軸木痕跡は確認できなかった。下層で壁寄りにわずかに残っていた軸木痕を確認したが、大部分は軸木が腐食して空洞となっていた。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性状
SI78	1	灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小、炭化物粒を少し、鉄・マンガンを多く含む	自然堆積
	2	暗灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	3	栗褐色 (10YR3/1)	炭層	火災時の残積
	4	暗灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト		自然堆積
	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	地山 (V層) ブロック小〜大を多く、焼土塊を少し含む	自然堆積
	6	にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト	地山 (V層) ブロック大、遺層ブロック小、炭化物粒・焼土粒を多く含む	自然堆積
	7	にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる	P1 入込堆積
	8	暗灰色 (10YR4/1) 粘土	グライ化した地山 (V層) ブロック小を多く含む	P1 入込堆積
	9	灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土		輪木筋跡
	10	暗灰色 (10YR4/1) 粘土		P1 掘方埋土
	11	にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘土質シルト		カマド構築材
	12	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト		カマド構築材
	13	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる	船床
	14	暗褐色 (10YR3/3) 粘土	地山 (V層) ブロックと黒褐色土からなる	掘方埋土

第66図 SI78 竪穴建物跡



No.	名称	遺物・層	形状	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図典	資料
1	須恵器 坏	増穂1	2/3	12.9	7.4	3.8		外内：ロクロナデ 底部：へろ切り→ナデ 火タヌキ十字	45-1	1212
2	須恵器 坏	2層北西	1/2	13.4	8.2	4.1		外内：ロクロナデ 底部：へろ切り→ナデ 赤褐色		1234
3	須恵器 坏	1層	1/3	14.6	8.6	4.0		外内：ロクロナデ 底部：へろ切り→ナデ		1230
4	須恵器 坏	2層	1/4		7.6	3.6		外内：ロクロナデ 底部：内外指面を履「十」へろ掻き		1224
5	須恵器 坏	3層南西	ほぼ定形	14.2	8.4	4.3		外内：ロクロナデ 底部：へろ切り→ナデ	45-2	1236
6	須恵器 坏	2層	2/3	14.2	7.9	5.5		外内：ロクロナデ 底部：墨書「黒」 内面のみ火タヌキ十字	46-5,73-5	1219
7	須恵器 蓋	2層	ほぼ定形	15.7		3.4		ボタン 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ 外面自然釉かかると	45-3	1215
8	須恵器 蓋	2層	2/3	16.6		4.1		靨宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1217
9	須恵器 蓋	2層	3/4	17.6		4.8		靨宝珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ	45-4	1237
10	須恵器 蓋	1層	ほぼ定形	13.8		5.8		靨宝珠 外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ	45-5	1229
11	須恵器 高台坏	1層	1/3	13.3	8.4	6.3		外内：ロクロナデ 底：回転ケズリ→ナデ		1226
12	須恵器 高台坏	増穂土	ほぼ定形	15.9	9.4	7.9		外内：ロクロナデ 赤褐色	45-7	1225
13	須恵器 高台坏	増穂土	底部・体部		7.4			外内：ロクロナデ 外面自然釉かかると		1213
14	土師器 高台坏	1層・2層南西	胴部～底部		7.8	3.7		外：ロクロナデ 内：黒色処理		1233
15	須恵器 高台坏	1層	底部		1.9			墨書「置」へろ掻「十」	46-6,73-2	1228

第 67 図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物 (1)

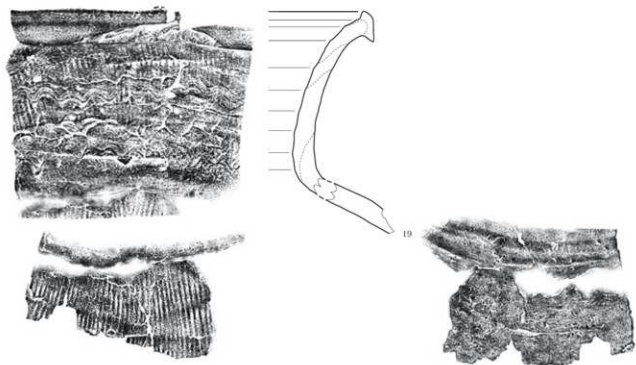
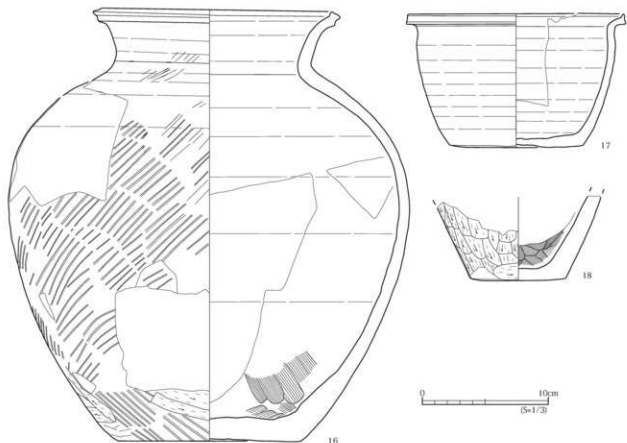


図	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録	
16	須恵器 甕	2層 下	3/4	18.2	31.7	14.3	34.4	外：ロクロナデ→平行印き→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	46-1	1259	
17	須恵器 鉢	横出面	1/5	117.0		10.5	10.6	外内：ロクロナデ		45-8	1210
18	土師器 甕	2層	体部～底部			7.6		外：ケズリ 内：ナデ			1366
19	須恵器 甕	2層	口縁部片	推定 50 ～55			残存高 17.6	外：口縁部～胴部上：平行印き→波状文 胴部平行印き 内：無文当て具層 外内自然釉付着	46-2	1291	

第 68 図 S178 竪穴建物跡 出土遺物 (2)

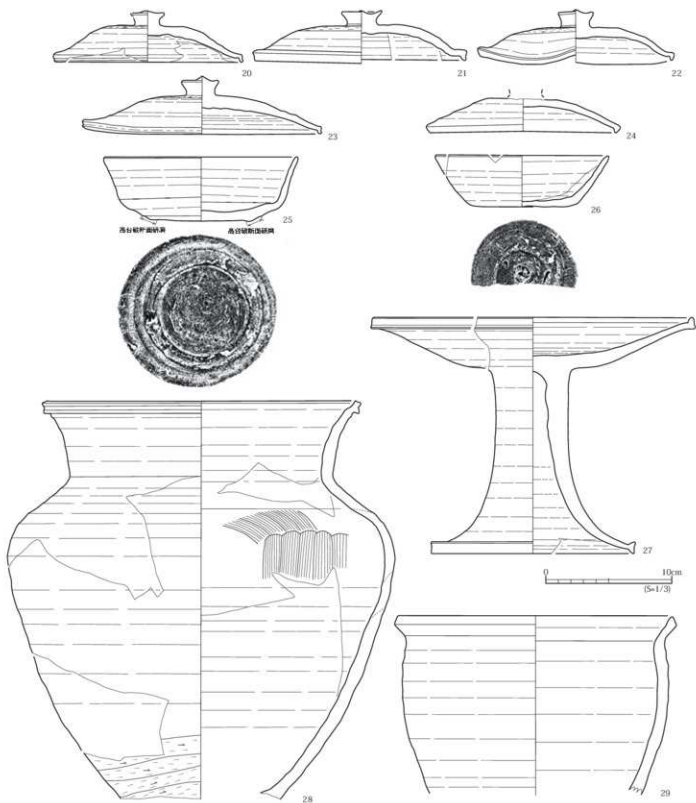
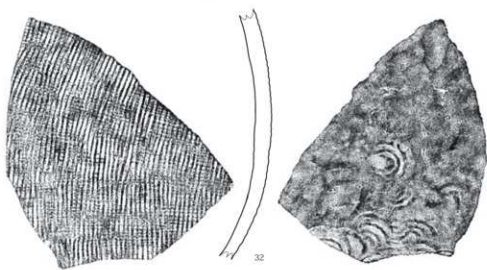
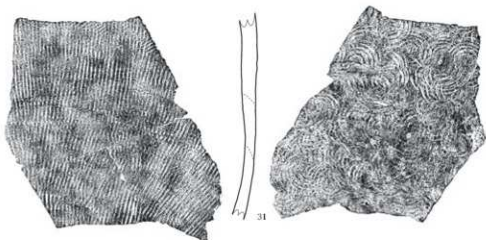
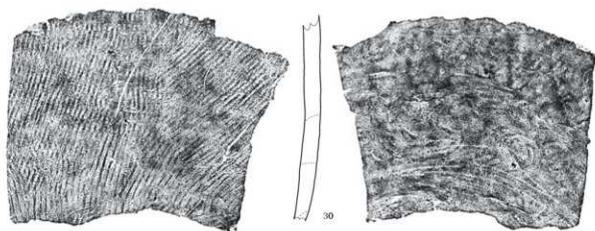


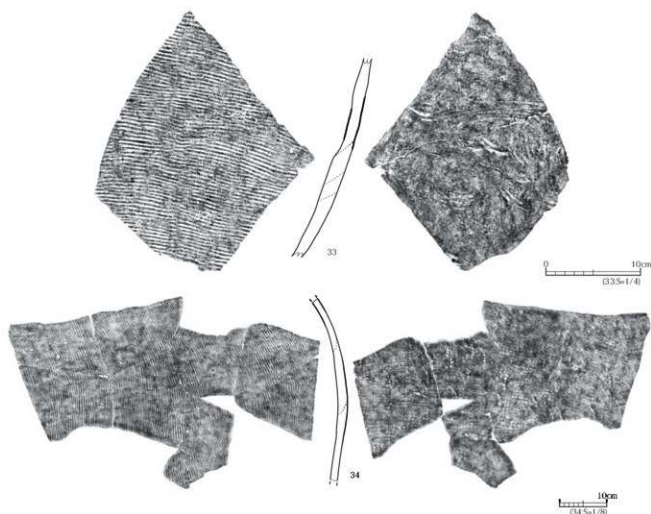
図	名称	遺積・層	形状	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
20	須恵器 蓋	床	ほぼ完形	14.8			4.0	甍定珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ 焼けムラあり		1245
21	須恵器 蓋	床	2/3	16.6			4.2	甍定珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1246
22	須恵器 蓋	7層	完形	15.2			4.3	甍定珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ	45-6	1243
23	須恵器 蓋	床	ほぼ完形	18.7			4.6	甍定珠 外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ		1257
24	須恵器 蓋	床	揃まみ欠	14.6			2.7-	外内：ロクロナデ→天井回転ケズリ 帯ね焼き極明瞭		1258
25	須恵器 高台坪	床	高台欠	15.2			(5.1)	外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ナデ 高台破断面研削	40-3	1250
26	須恵器 坪	床	1/2	(13.6)		8.3	4.1	外内：ロクロナデ 底部：へら切り→ナデ		1248
27	須恵器 高坪	床	3/4	(25.2)		16.0	18.7	外：ロクロナデ 内部と脚部の縁合部分回転ケズリ→ナデ 内：ロクロナデ	46-4	1254
28	須恵器 壺	床	1/3	22.4	28.7		31.5-	外：ロクロナデ 下部ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	47-1	1253
29	土師器 鉢	床	1/5	21.7			14.2-	外内：ロクロナデ		1251

第 69 図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物 (3)



編	遺物	遺物・類	保存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	図録
30	編織器 篋	床	編片					外：縦格子型金 内：同心円文当て具編		1255-1
31	編織器 篋	床	編片					外：縦格子型金 内：同心円文当て具編	48-1	1255-2
32	編織器 篋	床	編片					外：縦格子型金 内：同心円文当て具編 縦断面に軸付筋。焼き台転用か		1255-3

第70図 S178 竪穴建物跡 出土遺物(4)



No.	形状	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
33	須恵器 甕	床	大型破片					外：縦格子甲子 内：同心行文当て貝版	48-2	1249
34	須恵器 甕	床	体部破片 大形					外：縦格子甲子(斜め) 内：格子文当て貝版	47-2	1241

第71図 SI78 竪穴建物跡 出土遺物(5)

【SI90 竪穴建物跡】(第74～76図・図版16)

〔位置・検出面〕7区丘陵平坦面南端に位置し、Ⅲ層で検出した。壁が確認できなかったが、貼床とみられる粘土の広がり、その下から掘方埋土を確認したほか、西側で壁周溝を確認したことから竪穴建物跡として報告する。全体の南側の一部を確認したと考えられる。竪穴建物跡の北側と考えられる部分では、用水路掘方があり、その北側で断面検出を試みたが用水路掘方が調査区外まで続いていたため、確認できなかった。

〔重複〕SX92、SK93、SX94と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形〕東西7.4m、南北1.7m以上である。

〔方向〕壁周溝で測るとN-3°・Eである。

〔堆積土〕SX94が堆積する。このことからSI90とSI62は、10層を掘り込むSX92の構築以前の古代に壁、床の一部まで削平されたことが分かる。

〔壁〕残っていない。

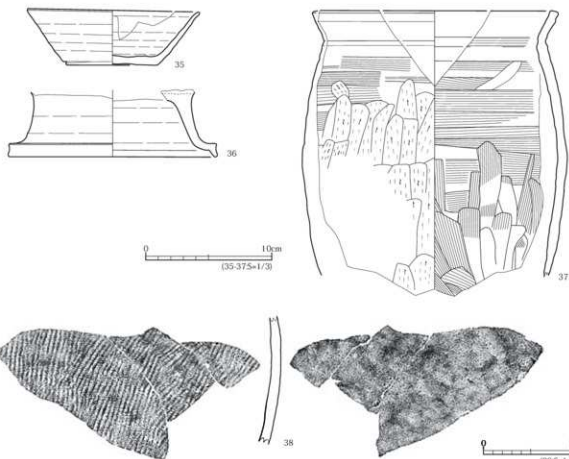


図	名称	遺積・層	形状	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真回数	登録
35	須恵器 環	カマド左側壁内・ロクロナデ1層	ほぼ圆形	13.3		7.1	4.4	内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ十字	47.3	1244
36	土師器 脚付壺	1層	脚部のみ		(16.3)	5.3-		内：ロクロナデ	47.4	1227
37	土師器 甕	6層	1/6	(18.4)		22.6-		外：ナデ（カキ目状）→ケズリ 内：ナデ（カキ目状）→ケズリ外にスス		1242
38	須恵器 甕	1層	破片					外：靱格子叩き 内：無文当て具面		1239

第72図 S178 竪穴建物跡 出土遺物（6）

〔床〕黄褐色粘土からなる貼床である。厚さは1～3cmである。掘方埋土はV層ブロックを主体とする。

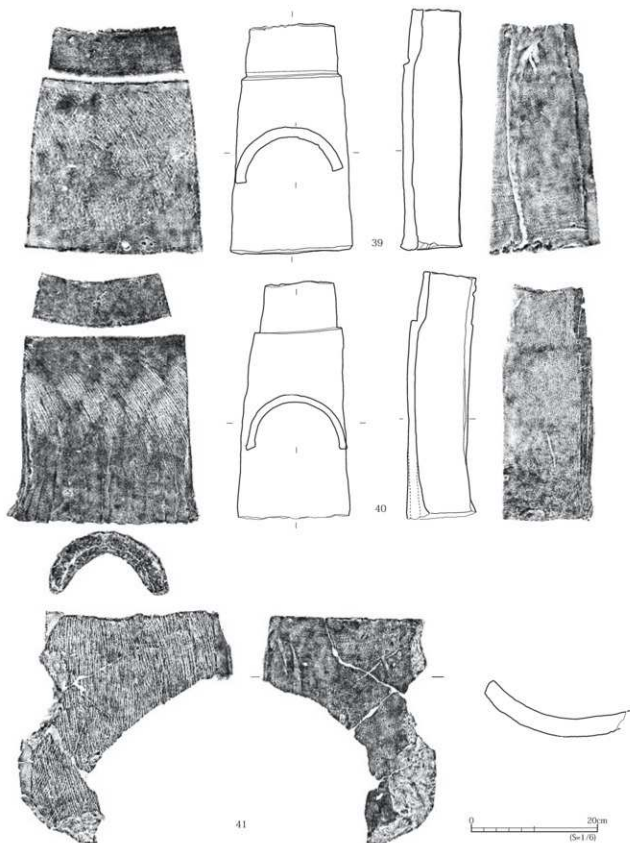
〔柱穴〕主柱穴は確認していない。

〔カマド〕確認していない。

〔周溝〕西辺で検出した排水溝である。後述する瓦の位置の東側の延長上が竪穴建物跡の掘方埋土の南端であることから、瓦周辺が周溝と外延溝の境と判断した。西辺南西隅とみられる位置で南に伸びる外延溝と接続する。外延溝と接続する位置では12の軒平瓦が凸面を上向けて、さらにその上から9の大甍片と平瓦片が出土した。これらの土器、瓦はもとの位置からやや動いたとみられるものの、溝に架けて暗渠蓋にしていたと考えられる。また、瓦の上に貼床が認められた。このほかにも西辺で瓦が出土したほか、東辺を壊すSK93でも平瓦が出土している。堆積土は自然堆積層である。

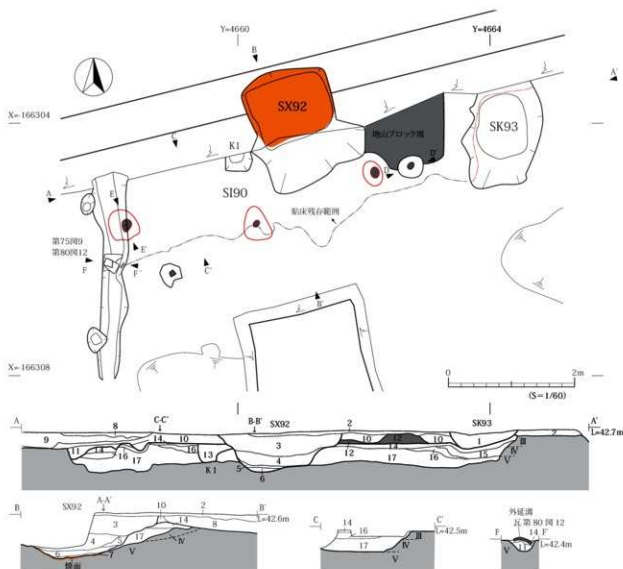
〔外延溝〕貼床残存範囲南西端からの長さ1.8m、幅30～40cmほどである。断面は逆台形である。

〔出土遺物〕堆積土と床から土師器高台皿、甕、須恵器環、蓋、高台環、平底甕、鬼板、周溝から軒平瓦、平瓦、須恵器大甕、土製品が出土した。須恵器環は底部が再調整とヘラ切りのものが出土している。



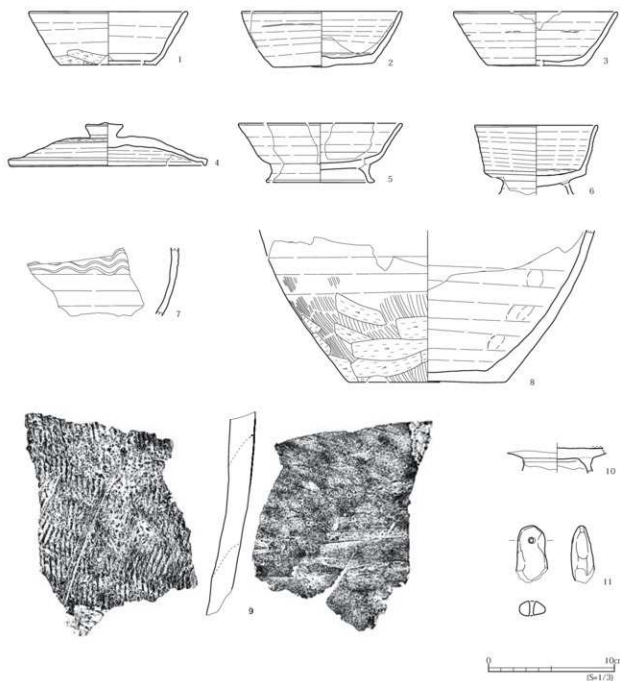
No.	原種	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写尺図版	尺書号
39	丸瓦	I	カマド右袖	完形	全長: 36.2cm 丸瓦部長: 28.0cm 丸瓦部広端幅: 19.0cm 袷端幅: 16.0cm 玉脚部広端幅: 14.7cm 袷端幅: 13.7cm 重量: 2.1kg 凸面: 脚明目→ロクロナ字 凹面: 7.5Y8/1 灰白	48-3	K14	
40	軒丸瓦	III	カマド左袖	4/5 瓦当部欠損	全長 37.0cm 丸瓦部長: 29.7cm 丸瓦部広端幅: 17.3cm cm 13.5cm 玉脚部広端幅: 12.0cm 袷端幅: 10.6cm 重量: 2.3kg 筒縁: ケズリ 【丸瓦】凸面: 脚明目→ロクロナ字 凹面: 布目	7.5Y8/1 灰白	48-4	K15
41	平瓦	I	S178	1/3	長: 36.5cm 重量: 2.3kg 凸面: 脚明目 凹面: 布目 側端・小口: ケズリ	7.5Y8/1 灰白		K16

第73図 S178 竪穴建物跡 出土遺物(7)



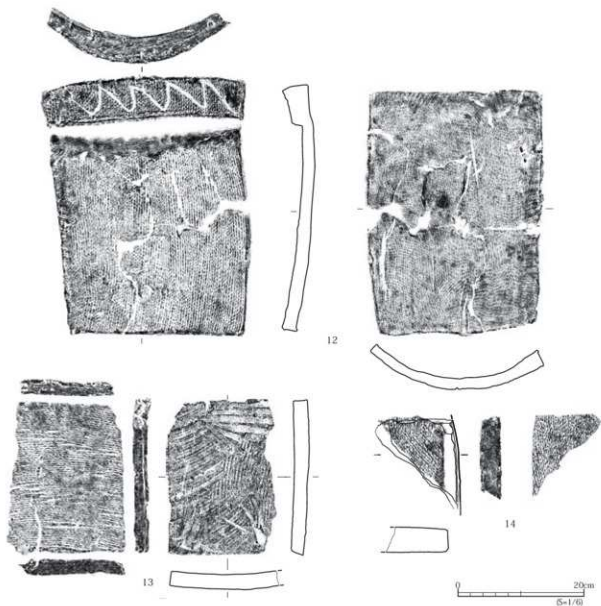
遺構名	層	土色・土性	特徴	青積
SK93	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	砂を多く含む	SK93 埋積土 自然堆積
	2	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物多く含む	SX92 埋積土 人為堆積
	3	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物、地山 (V層) ブロック小を多く含む	SX92 埋積土 人為堆積
	4	褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト	粘土ブロック、地山 (V層) ブロック小を含む	SX92 埋積土 人為堆積
	5	黒色 (10YR2/1) シルト	炭化物を多く含む、土器片を含む	SX92 埋積土 人為堆積
	6	褐色色 (10YR4/1) シルト	炭化物、土器片を少し含む	SX92 埋積土 人為堆積
	7	黒色 (10YR2/1)	炭層	炭層 自然堆積
SI90	8	黒褐色 (10YR3/2) シルト		SD94
	9	黒褐色 (10YR3/2) シルト		SD94
	10	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物少し 土器多く含む	SD94
	11	暗褐色 (10YR5/2) シルト	床由梁のふい、黄褐色 (10YR5/4) 粘土ブロック小を少し含む	埋戻土 自然堆積
	12	黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト	地山 (V層) (上層の粘土とその下層のやや硬い土) かなる	埋戻土
	13	褐色 (10YR4/4) シルト	SI90-4 層より炭化物多く含む 土器少し含む	K1 自然堆積
	14	明黄褐色 (10YR7/6) 粘土		埋戻
	15	暗黄褐色 (10YR3/3) シルト	粘土・炭化物を多く含む	掘方埋土
	16	にじみ黄褐色 (10YR6/4) 粘土	暗褐色 (10YR3/3) シルトを多く含む	掘方埋土
	17	黄褐色 (10YR5/4) 粘土質シルト	地山 (V層) ブロックと黒褐色土からなる	掘方埋土

第 74 図 SI90 竪穴建物跡 SX92 土器焼成遺構 SK93 土坑



No.	名称	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
1	須恵器 坏	床	破片	(12.4)		(7.6)		外：ロクロナデ 下部手持ちケズリ 内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ		1397
2	須恵器 坏	8層	2/3	(12.6)	8.0	4.4	4.4	外内：ロクロナデ 底部：へつ切り→ナデ 火ダスキ十字	40-3	1393
3	須恵器 坏	床	1/2	(12.8)		(7.4)	4.4	外内：ロクロナデ 底部：へつ切り→ナデ		1400
4	須恵器 蓋	床	ほぼ完形	15.2 ~ 15.5 (最大)			3.5	甕宝珠 外内：ロクロナデ→天月回転ケズリ	40-4	1401
5	須恵器 高台坪	4層	破片	(12.8)		(8.4)	4.7	外内：ロクロナデ		1408
6	須恵器 高台坪	床	1/2	9.6				外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ナデ		1398
7	須恵器 壺か瓶	8層	破片					外内：ロクロナデ 縞面波状文（縞面数3）		1395
8	須恵器 甕	床	体部中～底部		12.3			外：平行両立→ロクロナデ 体部下2/3 平行両立→手持ちケズリ 内：当て具輪→ロクロナデ		1399
9	須恵器 甕	増積土						外：平行両立 内：ナデ		1413
10	土師器 高台皿	1層	底部片					外：ケズリ→ナデ 内：黒色地埋		1394
11	土製品 鏝?	埴原溝	破片						40-5	1396

第75図 SI90 竪穴建物跡 出土遺物（1）



No.	図種	分類	素材・材	残存	特徴	色調	写真回数	写真号	
12	軒平瓦	II	埴岡焼	定形	長：38.5cm 広端幅：28.0cm 狭端幅：25.0cm 重量：4.2kg 【瓦当】 瓦当面：ケズリ→無文 頸面：縄目印→縦溝文 段頸【平瓦】凸面：縄 目印 凹面：糸切痕→布目 側端・小口：ケズリ	2.5Y7/1	灰白	49-7	K19
13	葺瓦(礎?)	II	埴岡土	1/3	長：17.0cm 幅：24.5cm 厚さ：2.2cm 凸面：縄目印 凹面：糸切痕→ 布目→平行(凹版状) 圧痕?→指十字	7.5YR6/1	褐色	49-8	K20
14	葺瓦	I	埴岡土	破片	表：縄目印→布目(古すか) 裏：縄目印 側端：ケズリ	7.5YR6/1	褐色	49-9	K22

第76図 SI90 竪穴建物跡 出土遺物(2)

(3) 土坑

土坑は44基検出され、これらには被熱の痕跡が認められるものと、認められないものがある。

前者のうち、SX 3・4・7・8・15・31・33・34・37・38・39・46・82・92の14基は、平面形が長軸1.5m以上の方形・円形を基調とし、斜面上方に位置する壁が比較的急角度で立ち上がる特徴を持つ。これらには、斜面上方側の壁が下方側に比べて長いもの、被熱範囲が底面中央から斜面上方側にかけて認められ、その一部がより強く被熱しているもの、底面直上に炭化物層が薄く堆積するもの、堆積土から土師器小片や焼成粘土塊などが出土するものが認められる。このような構造上の特徴と出土遺物から、これらを土師器焼成遺構とした。なお、被熱痕跡が認められるもののうち土師器焼成遺構以外の10基を焼成土坑、被熱痕跡が認められない22基を土坑とする。

以下では、(i)土坑、(ii)土師器焼成遺構、(iii)焼成土坑の順で報告する。

(i) 土坑

【SK9 土坑】(第77～80図・図版20)

〔位置・検出面〕8区西端付近の緩斜面に位置し、SX8 上面で検出した。

〔重複〕SX8・SK13と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸0.8m、短軸0.6m、確認面からの深さは12cmである。平面形は隅丸方形で、断面形は箱形である。

〔堆積土〕1層のみで、炭化物・焼土・鉄滓を多く含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できたものは第80図-7の土師器甕のみである。周囲の土師器焼成遺構に由来するとみられる。

【SK10 土坑】(第77・78図・図版20)

〔位置・検出面〕8区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕なし

〔規模・平面形・断面形〕長軸0.7m、短軸0.6m、確認面からの深さは15cmである。平面形は隅丸方形で、断面形は箱形である。

〔堆積土〕2層に分けられた。いずれも炭化物を含む人為堆積層である。1層は鉄滓を多く含む。

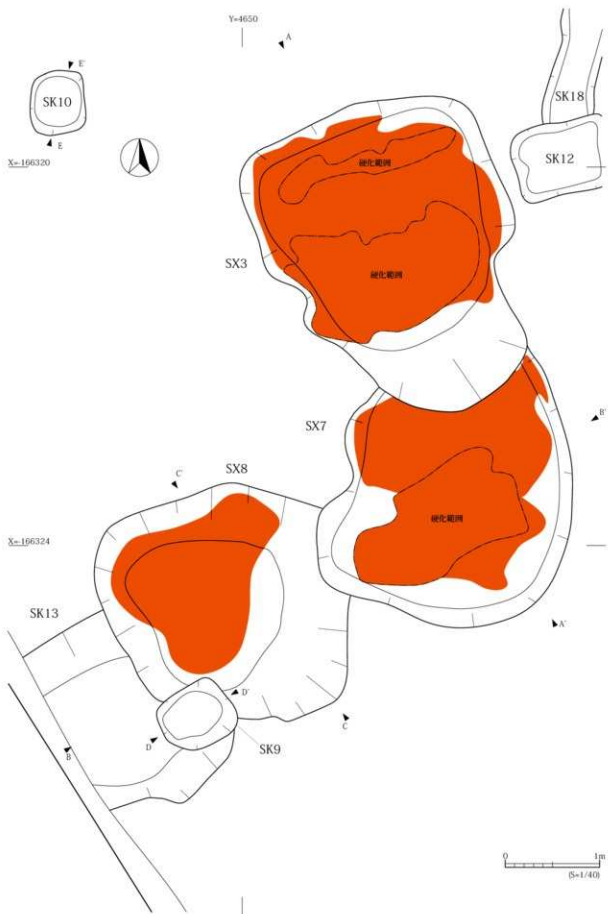
〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できる遺物はなかった。

【SK13 土坑】(第77～80図)

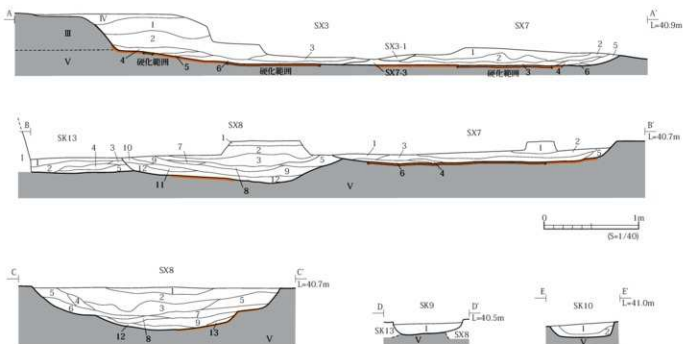
〔位置・検出面〕8区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK9・SX8と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形・断面形〕遺構西側が、調査区外にあるため平面形は調査区壁と切り合いのため分からない。東西1.6m以上、南北1.8m、確認面からの深さは16cmである。壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。



第 77 圖 SK9・10・13 土坑 SX3・7・8 土師器燒成遺構 (1)

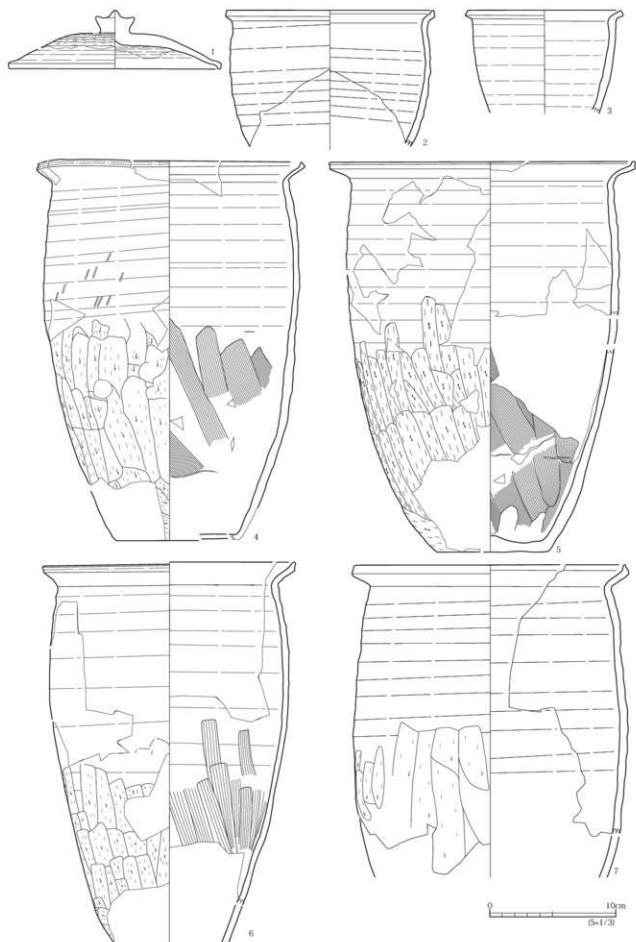


遺構名	層	土色・土性	特徴	首積
SX3	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/2) シルト	地山 (V層) ブロック小～大を大量に含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物ブロック小を大量に含む	自然堆積
	4	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物ブロック小を多く含む	自然堆積
	5	暗灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	灰かなる層	灰層
	6	黒色 (10YR2/1) シルト	炭化物からなる層	炭層
SX7	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物からなる層	自然堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック中を少し含む	人為堆積
	3	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	4	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物、焼土ブロック小を多く含む	自然堆積
	5	にがい黄褐色 (10YR6/3) 粘土	地山 (V層) ブロック小を多く含む	自然堆積
	6	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
SX8	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック大を多く含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック小を多く含む	人為堆積
	4	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック小を少し含む	人為堆積
	5	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	6	黒色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック中、地山 (V層) ブロック小を少し含む	人為堆積
	7	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	8	黒赤褐色 (5YR5/4) シルト	炭化物からなる層	大井の崩落土
	9	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック大を多く含む	自然堆積
	10	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む (5層と同一)	自然堆積
	11	暗赤褐色 (5YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土を多く含む	自然堆積
	12	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	13	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	焼土粒を多く含む	自然堆積
SK13	1	褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	2	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	4	暗褐色 (7.5YR2/3) 粘土質シルト	焼土ブロック大を多く含む	人為堆積
	5	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層
SK9	1	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒、鉄屑を多く含む	人為堆積
	2	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物粒、焼土粒、鉄屑を多く含む	人為堆積
SK10	1	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積
	2	黒褐色 (10YR3/2) シルト	炭化物粒、焼土粒を少し含む	人為堆積

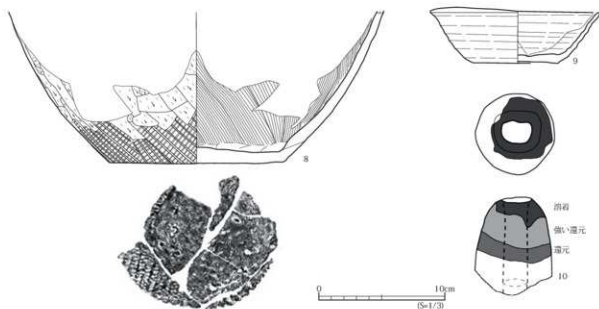
第 78 図 SK9・10・13 土坑 SX3・7・8 土師器焼成遺構 (2)

〔堆積土〕 5層に分けられた。1層は炭化物・焼土を含む人為堆積層である。2層は炭化物が主体となる層である。3～4層は炭化物・焼土を含む人為堆積層である。5層は炭化物が主体となる層である。〔被熱〕 部分的にわずかに赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が多数出土している。堆積土から出土した遺物のうち、特徴的なものを図化した。81-10の羽口はSK13を切るSK9の流れ込みの可能性がある。



第79图 SK9・13土坑 SX3・8土師器焼成遺構 出土遺物(1)



No	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 蓋	SK3 横出面	2/3	17.8			4.9	履宝珠 外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 外内に火ダスキ		787
2	土師器 甕	SK8 堆積土	口縁部～体部	15.8			10.4～	外内：ロクロナデ 明確な使用痕なし		721
3	土師器 甕	SK8 6～13層	口縁部付近	12.1			8.3～	外内：ロクロナデ 明確な使用痕なし		726
4	土師器 甕	SK8 6～13層	3/4	20.8		19.8	30.2～	外：叩き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 未使用品	50-2	722
5	土師器 甕	SK8 6～13層	1/5	24.0		18.8	31.4	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 未使用品	50-3	780
6	土師器 甕	SK8 6～13層	3/4	20.0		18.5	30.1～	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 未使用品	50-4	781
7	土師器 甕	SK9 堆積土	口縁部～胴部	21.4			24.8～	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ	50-5	727
8	須恵器 甕	SK8 6～13層	底付近			(13.7)		外：ナデ 内：履格子叩き→ケズリ 底：履格子叩き		724
9	須恵器 坏	SK13 4・5層	2/3	13.4		6.4	4.4	外内：ロクロナデ 底部：へら切り		729
10	土製品 口吻	SK13 堆積土						残高：7.8 残径：6.5 孔径：2.5	50-7	728

第80図 SK9・13土坑 SK3・8土師器焼成遺構 出土遺物(2)

〔SK14土坑〕(第81・82図・図版20)

〔位置・検出面〕8区西端の丘陵西側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕なし

〔規模・平面形・断面形〕長軸2.0m、短軸0.8m以上、確認面からの深さは86cmである。平面形は楕円形で、断面形は台形を呈する。

〔堆積土〕7層に分けられた。1～2層は炭化物などを少し含む自然堆積層である。3・5・7層は含有物のない自然堆積層であり、4・6層は遺構壁面の崩落土である。

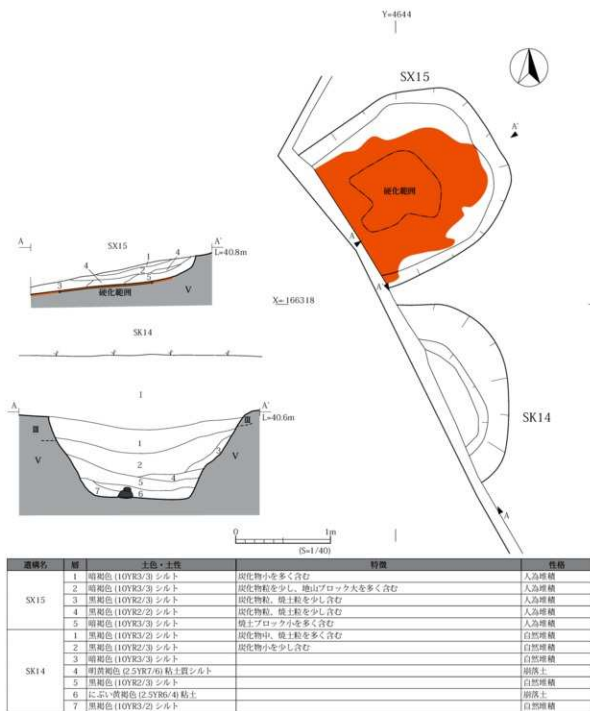
〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土した。108-1は甕の口縁部とみられる破片である。108-3は土坑底部から出土した。

〔SK18土坑〕(第83図)

〔位置・検出面〕8区西側の平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK12と重複し、これより古い。

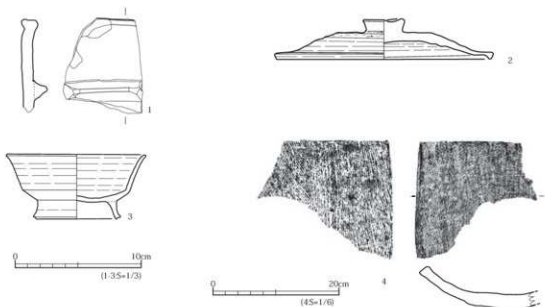
〔規模・平面形・断面形〕長軸1.9m、短軸0.4m、確認面からの深さは20cmである。平面形は長楕円形で、断面形は逆台形を呈する。



第 81 図 SK14 土坑 SX15 土師器焼成遺構

〔堆積土〕 3層に分けられた。いずれも地山 (V層) ブロックなどを含む然堆積層である。

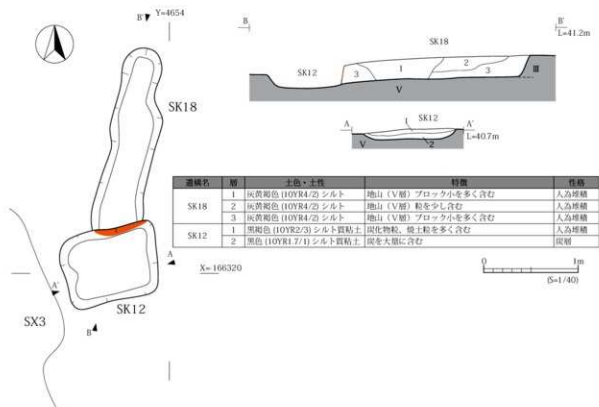
〔出土遺物〕 遺物は出土していない。



No.	図種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甌?	SK14 埴埴土	口縁部				7.7	外内:ロクロナデ		733
2	須恵器 蓋	SK14 埴埴土	1/3	(15.4)			3.9	籠宝珠 外内:ロクロナデ→天井ケズリ 暗赤褐色		732
3	須恵器 高台坪	SK14 底面	ほぼ完形	11.8		7.5	5.5	外内:ロクロナデ 底面:回転ケズリ→ナデ 底凸び割れ		735

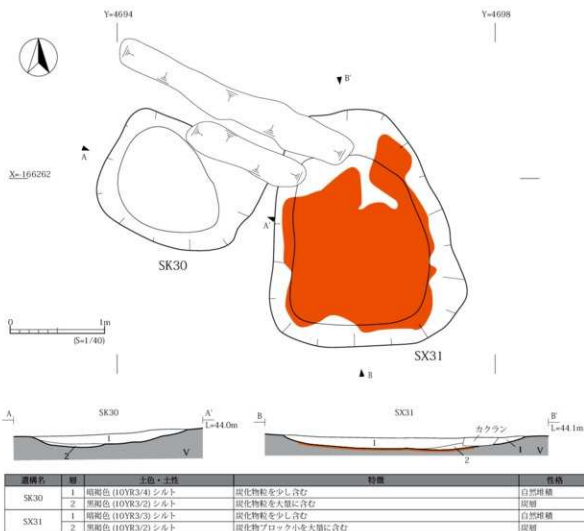
No.	図種	分類	遺構・層	残存	特徴	色画	写真図版	瓦番号
4	平瓦	1	SK14 埴埴土	1/6	凸面:脚切目 凹面:縁付前→脚かへ布目 側端・小口:ケズリ	5Y8/1 灰白		K40

第 82 図 SK14 土坑 出土遺物



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SK18	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	人為堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) 粉を少し含む	人為堆積
	3	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を多く含む	人為堆積
SK12	1	黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土	炭化物粒・硬土粒を多く含む	人為堆積
	2	黒色 (10YR1.7/1) シルト質粘土	炭を大量に含む	炭層

第 83 図 SK18 土坑 SK12 焼成土坑



第 84 図 SK30 土坑 SX31 土師器焼成遺構

【SK30 土坑】(第 84 図・図版 18)

〔位置・検出面〕 6 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 なし

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.6m、短軸 1.3m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿状を呈する。

〔堆積土〕 2 層に分けられた。1 層は自然堆積層で炭化物を少量含む。2 層は炭化物粒を大量に含む層で、底面西側の一部で確認した。

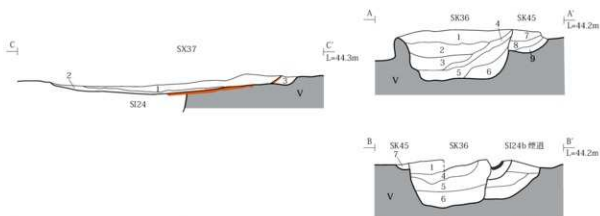
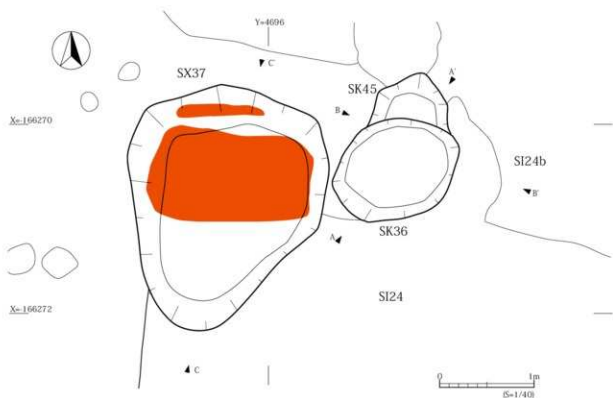
〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK36 土坑】(第 85・86 図・図版 11)

〔位置・検出面〕 6 区中央南側の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SI24b・SK45 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.2m、短軸 1.1m、確認面からの深さは 52cm である。平面形は楕円形で、



遺構名	層	土色・土性	特徴	評価
SX37	1	褐色 (10YR4/4) 粘上質シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	2	黒褐色 (10YR2/2) 粘上質シルト	炭化物ブロック大を多く、焼土粒と灰黄褐色 (10YR4/2) ブロック小を少し含む	炭層
	3	暗褐色 (10YR3/3) シルト		墾跡後堆積
SK36	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	焼土粒を少し含む	自然堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	3	暗褐色 (10YR3/3) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	4	褐色 (7.5YR4/3) 粘上質シルト		自然堆積
	5	褐色 (10YR4/4) 粘上質シルト		自然堆積
SK45	6	黒褐色 (10YR2/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積
	7	暗褐色 (10YR3/3) シルト		自然堆積
	8	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト		自然堆積
	9	褐色 (10YR4/4) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積

第 85 図 SK36・45 土坑 SX37 土師器焼成遺構



No.	遺構	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	深高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器	平底甕	1層			14.4	(7.6)	外:ケズリ 内:ナデ 赤褐色		645

第86図 SK36土坑 出土遺物

断面形は箱形である。

〔堆積土〕6層に分けられた。1～6層は地山粒や焼土粒を少量含む自然堆積層である。4層と6層は、SI24のカマド煙道堆積土(図28-10層)由来とみられる土からなる。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土した。赤変した須恵器甕110-1が出土している。

〔SK45土坑〕(第85図)

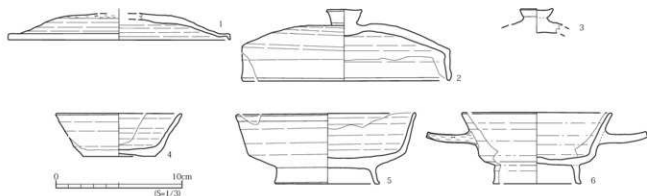
〔位置・検出面〕6区中央南側の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕SK36、SI24と重複し、SK36より古く、SI24より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸0.7cm、短軸0.5m、確認面からの深さは20cmである。平面形は不整形で、断面形は皿状を呈する。

〔堆積土〕3層に分けられた。すべて自然堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。



No.	遺構	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	深高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器	甕	SK47 1層	1/3	17.6		2.1	外:ロクロナデ→大丹ケズリ 内:ロクロナデ		688
2	須恵器	甕	SK47 3層上面	3/4	16.3		5.6	ボタン 内内:ロクロナデ	52-3	694
3	須恵器	甕	SK47 1層	つまみ				ボタン		693
4	須恵器	坪	SK47 1層	1/3	(9.6)	5.7	3.4	外内:ロクロナデ 底部:へら切り 外内:自然軸かかろ		692
5	須恵器	高台坪	SK47 1層	3/4以上	(14.1)	8.3	5.7	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→ナデ 赤褐色	52-4	687
6	須恵器	坪	SK47 1層	1/3	(11.0)	(6.9)	5.6	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ→内面ナデ 瓦目坪	52-5	691

第87図 SK47土坑 出土遺物

【SK47 土坑】(第 13・87 図・図版 22)

〔位置・検出面〕 6 区南西の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SI23、SK28 と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 5.5m、南北 3.5m、確認面からの深さは最も深いところで 16cm である。平面形は不整形で、壁はなだらかに立ち上がり、底面は凹凸がある。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック・地山粒のほか、炭化物粒や白色粒子を含む自然堆積土である。

〔出土遺物〕 須恵器高台環が底面から出土したほか、堆積土中から土師器・須恵器が出土した。

【SK51 土坑】(第 88 図)

〔位置・検出面〕 7 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SX71、SD73 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.4m、短軸 1.0m、確認面からの深さは 36cm である。平面形は隅丸長方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 5 層に分けられた。1 層は、2・3 層は焼土粒・ブロック、炭化物、灰からなる人為堆積層、4 層はⅢ層主体の自然堆積層、5 層は炭化物からなる層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土した。

【SK55 土坑】(第 89 図)

〔位置・検出面〕 7 区東の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SD73 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.5m、短軸 1.4m、確認面からの深さは 17cm である。平面形は不整形で、断面形は壁がゆるやかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK56 土坑】(第 64・90 図・図版 21)

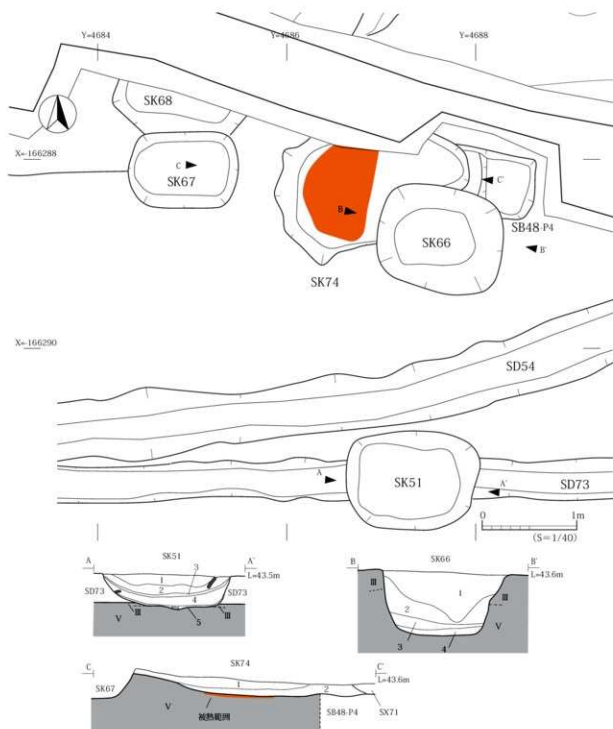
〔位置・検出面〕 7 区西の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 なし。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 0.8cm 以上、南北 1.4m、確認面からの深さは 20cm である。平面形は不整な方形で、断面形は皿形である。

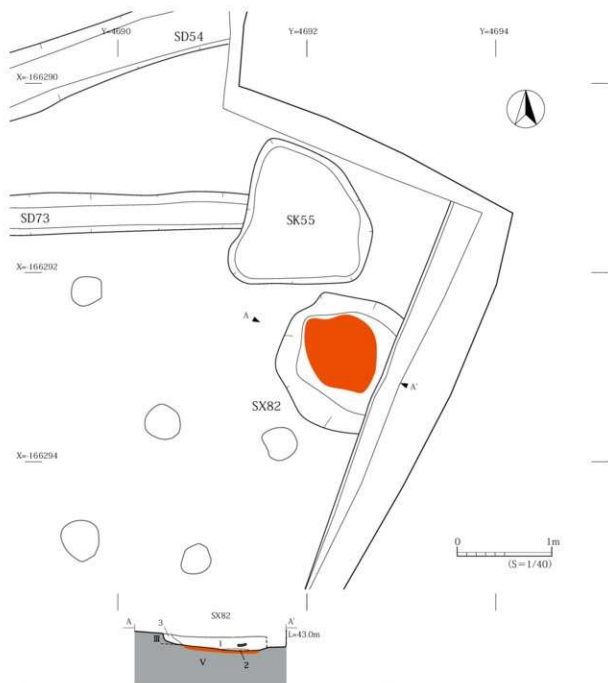
〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小へ中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土した。1 は器形から高台環の環部とみられるが、高台を接着した痕跡が無い。ほかに須恵器の環 2 点を図示した。



遺構名	層	土色・土性	特徴	自然積
SK51	1	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロックを少し含む	自然堆積
	2	褐色 (10YR4/4) シルト	焼土ブロック小、炭化物粒、灰を少し含む	自然堆積
	3	明褐色 (7.5YR5/8) シルト	焼土塊、炭化材・粒、灰からなる層	自然堆積
	4	黒褐色 (10YR3/2) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積
	5	黒褐色 (10YR2/2) シルト	灰層	自然堆積
SK66	1	灰黄褐色 (10YR5/2) シルト	地山 (V層) ブロック大～小を多く、黒色土ブロック小を少し含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	3	黒褐色 (10YR2/2) シルト	地山 (V層) ブロック小を少し含む	自然堆積
	4	暗褐色 (10YR3/4) シルト	地山 (V層) 粒を少量含む	自然堆積
SK74	1	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	明黄褐色粘土ブロック大～中、焼土塊小～粒、炭化物粒を多く含む	人為堆積
	2	暗褐色 (10YR4/1) シルト	焼土粒、炭化物粒を多く含む	自然堆積

第 88 図 SK51・66 土坑 SK74 焼成土坑



遺構名	層	土色・土質	特徴	性格
SX82	1	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒・焼土粒を少し含む	堆積土
	2	黒色 (10YR1/1) シルト	炭層	堆積土
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	遺層とV層からなる	堆積土

第 89 図 SK55 土坑 SX82 土器焼成遺構

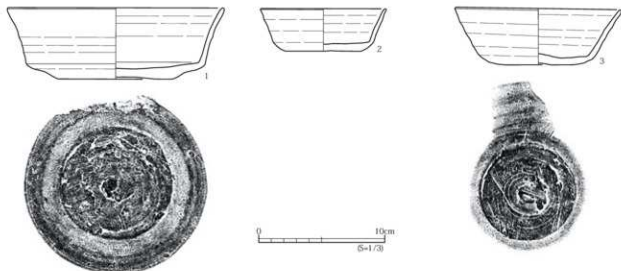
【SK57 土坑】(第 91 図)

〔位置・検出面〕 7 区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SK70 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.4m、短軸 1.1m、確認面からの深さは 25cm である。平面形は不整形で、断面形は壁がゆるやかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	登録
1	須恵器 高台杯	1層	杯部はぼ定形	17.2		9.1	5.7	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 高台杯環部か？		1294
2	須恵器 杯	2層	3/4	10.0		6.0	3.4	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1296
3	須恵器 杯	3層	ほぼ定形	13.2		7.2	4.6	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ ヘラ掻き「十」 底切れ		1295

第90図 SK56土坑 出土遺物

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

〔SK58土坑〕(第91図)

〔位置・検出面〕7区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕SK70と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸1.6m、短軸0.8m、確認面からの深さは15cmである。平面形は楕円形で、断面形は壁がゆるやかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕1層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

〔SK59土坑〕(第91図)

〔位置・検出面〕7区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71とV層で検出した。

〔重複〕SX71、SD54、SD73と重複し、これらより新しい。

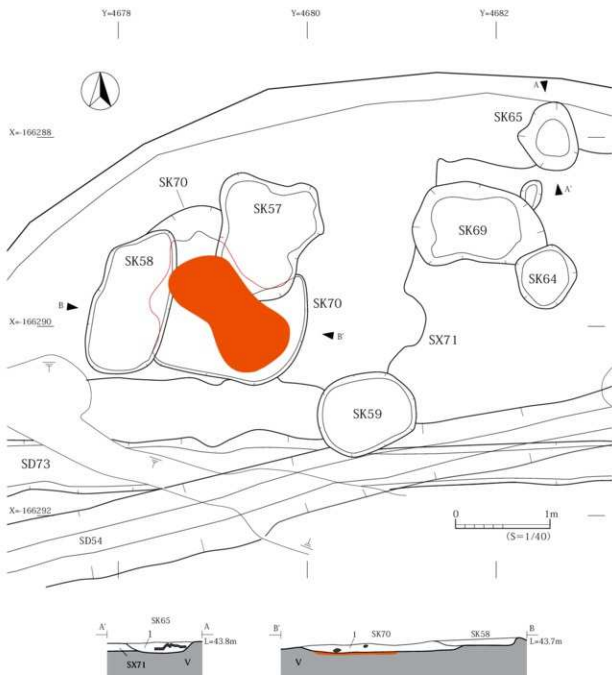
〔規模・平面形・断面形〕長軸1.1m、短軸0.9m、確認面からの深さは14cmである。平面形は楕円形で、断面形は台形である。

〔堆積土〕1層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

〔SK64土坑〕(第98図)

〔位置・検出面〕7区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71で検出した。



遺構名	期	土色・土性	特徴	意味
SK65	I	灰青色 (10YR4/2) シルト	地山 (V層) ブロック小と炭化物粒を少し、埋塞された土層を多量に含む	自然堆積
SK70	I	暗褐色 (10YR3/3) シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) ブロック小を微量含む	埋積土

第 91 図 SK65 土坑 SK70 焼成土坑

〔重複〕 SX71、SK69 と重複し。これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.1m、短軸 0.9m、確認面からの深さは 14cm である。平面形は隅丸方形で、断面形は台形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小へ中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK65 土坑】(第 91 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 と V 層で検出した。

〔重複〕 SX71 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 0.7m、短軸 0.6m、確認面からの深さは 14cm である。平面形は楕円形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～中、炭化物粒を少し含む人為堆積層である。土器片を大量に含む。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK66 土坑】(第 88・92 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北中央の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SB48、SX71、SK74 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.4m、短軸 1.1m、確認面からの深さは 74cm である。平面形は隅丸長方形で、断面形は箱形である。

〔堆積土〕 4 層に分けられた。1 層は地山ブロック小～大を含む人為堆積層、2 層は自然堆積層、3 層は炭層で、4 層は地山ブロックを微量含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片、硯が出土した。111-1 は土師器環、111-2 は風字硯の破片とみられる。

【SK67 土坑】(第 88 図・図版 21)

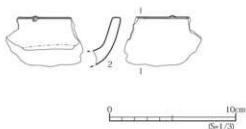
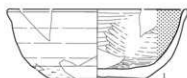
〔位置・検出面〕 7 区北中央の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SX71、SK68 と重複し、これらより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.2m、短軸 0.8m、確認面からの深さは 31cm である。平面形は隅丸長方形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小～大、炭化物粒を多く含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。



No.	遺物	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
1	土師器 環	1層	1/3	(14.0)		7.4	5.5	外：ロウロナデ 体下部回転ケズリ 内：黑色処理 底部：ヘラ切りケ→回転ケズリ		1364
2	陶 硯	1層	破片					口牌・外面ナデ(不明瞭) 内面に自然釉 風字硯か?		529 1363

第 92 図 SK66 土坑 出土遺物

【SK68 土坑】(第 88 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北中央の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SK67、SX71 と重複し、SK67 より古く、SX71 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 1.4m、南北 0.5m 以上、確認面からの深さは 35cm である。平面形は隅丸長方形か隅丸方形とみられ、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小〜大、炭化物粒を多く含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK69 土坑】(第 91 図・図版 21)

〔位置・検出面〕 7 区北西の丘陵頂部平坦面に位置し、SX71 で検出した。

〔重複〕 SK64、SX71 と重複し、SK64 より古く、SX71 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.5m、短軸 0.8m、確認面からの深さは 30cm である。平面形はやや不整な楕円形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、地山ブロック小〜中、炭化物粒を少し含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK93 土坑】(第 74 図)

〔位置・検出面〕 7 区丘陵平坦面南端に位置し、SI90 で検出した。

〔重複〕 SI90 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.6m 以上、短軸 1.3m、確認面からの深さは 20cm である。平面形はやや不整な楕円形で、断面形は皿形である。

〔堆積土〕 1 層のみで、砂を多く含む黒色シルトの自然堆積層である。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片、平瓦が出土したが、図化できるものはなかった。

(ii) 土師器焼成遺構

【SX 3 土師器焼成遺構】(第 77～80 図・図版 18)

〔位置・検出面〕 8 区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

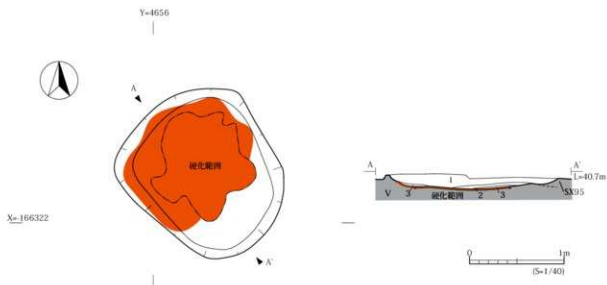
〔重複〕 SX7 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 平面形は、斜面下方の南側からみて逆台形を呈し、長軸 3.4m、短軸 2.6m である。斜面上方に位置し、比較的急角度で立ち上がる北辺を奥壁とする。それ以外の壁はなだらかに立ち上がり、南壁の傾斜が最も緩やかとなる。壁の高さは最大 44cm である。床面はほぼ平坦である。

〔方向〕 西壁で測ると N-35°-W である。

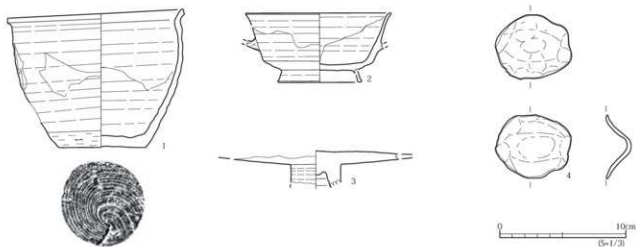
〔被熱〕 床面および奥壁と左右側壁の一部が熱を受けて赤変し、一部が強く被熱し硬化する。

〔堆積土〕 6 層に分けられた。1 層は炭化物を少し含む自然堆積層である。2 層は地山ブロックを大量に含む暗褐色シルトの人為堆積層である。3・4 層は炭化物を多く含む自然堆積層である。5 層は



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SX4 南北	1	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト	炭化物粒、焼土粒を多く含む	人為堆積
	2	暗灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭層 機能時の堆積
	3	黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト	炭化物からなる層	炭化物層 機能時の堆積

第 93 図 SX4 土師器焼成遺構



品	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
1	土師器 甕	SX4 1層	3/4	13.9	7.0	10.9		内内:ロクロナデ 底部:回転糸切り石 未使用	50-1	716
2	須恵器 灰皿	SX4 検出面	3/4	(11.6)	(6.7)	(5.5)		内内:ロクロナデ 耳欠損 菊赤褐色		715
3	須恵器 高杯	SX4 1層	杯部					内内:ロクロナデ 脚一部残存 色調:暗赤褐色		713
4	不明	SX4 2層	完形					長さ:5.8 幅:5.0 厚:0.3 焼成粘土製	51-123	770

第 94 図 SX4 土師器焼成遺構 出土遺物

灰、6層は炭化物がそれぞれ主体となる層で、機能時の堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土しているが、遺構に伴うもので図化できる資料はなかった。

80-1は検出面から出土した須恵器蓋である。

【SX4土師器焼成遺構】(第93・94図・図版18)

〔位置・検出面〕8区中央西寄りの平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SX95と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 1.8m、短軸 1.4m の逆台形で、長辺側に位置し、底面の被熱範囲から北壁が奥壁とみられる。残存する深さは 16cm である。壁はいずれもなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〔被熱〕底面の中央から奥壁側が熱を受けて赤変し、その大半がより強く被熱し、硬化する。

〔方位〕西壁で測ると N-40° -W である。

〔堆積土〕3層に分けられた。1層は炭化物や焼土を多く含む人為堆積層である。2・3層は炭化物層で機能時の堆積層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土しているが、埋め戻し土に含まれるものなど遺構に伴うものではない。77-1の土師器甕はスス・コゲ・赤変など使用痕跡がなく、SX4に限定できないものの、土師器焼成遺構にかかわる可能性がある。77-2と3は埋戻し土に含まれていた須恵器のうち特徴的なものを図化して提示した。4は焼成された粘土円盤である。

〔SX 7 土師器焼成遺構〕(第 77・78 図・図版 18)

〔位置・検出面〕8区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SX3、SX8と重複し、SX3より古く、SX8より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 2.9m、短軸 2.6m、確認面からの深さは 20cm である。平面形は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕6層に分けられた。1層は自然堆積層である。2層は地山ブロックを含む人為堆積層である。3層は炭化物が主体となる層である。4～5層は自然堆積層である。6層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕床のほぼ全体が熱を受けて赤変、中央南寄りが赤変硬化する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土したが、図化できるものはなかった。

〔SX 8 土師器焼成遺構〕(第 77～80 図・図版 18)

〔位置・検出面〕8区西端付近の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SX7、SK9、SK13と重複し、SX7・SK9より古く、SK13より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 2.6m、短軸 2.5m、確認面からの深さは 44cm である。平面形は不整形で、壁は北壁が外に開いて直線的に立ち上がりほかは、なだらかに立ち上がることから、北壁が奥壁とみられる。床はなだらかに窪んでいる。

〔方位〕北壁が奥壁とすると、左側壁(西壁)で N-24° -W である。

〔堆積土〕13層に分けられた。1～6層は炭化物や地山ブロックを含む人為堆積層である。7層は炭化物が主体となる層である。8層は天井の崩落土とみられる。9～11層は炭化物を含む自然堆積層である。12層は炭化物が主体となる層である。13層は焼土を多く含む自然堆積層である。

〔被熱〕奥壁(北西壁)側が熱を受けて赤変している。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土した。80-4～6の土師器甕は器面の状態がよく、ケズリやロクロ目がシャープに残っているほか、スス・コゲがなく明瞭な黒斑が観察できる。いずれも下層から出土している。80-2、3の甕も同様の特徴をもつ。

〔SX15 土師器焼成遺構〕(第81・95～97図・図版18)

〔位置・検出面〕8区西端の丘陵西側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕遺構西側が調査区外に及ぶため全体の平面形や規模は不明であるが、東西1.8m以上、南北1.6mの隅丸長方形を基調とし、北東側は直線状を呈する。斜面上方に位置し、比較的急角度で立ち上がる北東辺が奥壁と考えられる。壁の高さは最大26cmである。

〔方位〕北西壁で測るとN-53°Eである。

〔被熱〕底面のほぼ全体が熱を受けて赤変し、その一部がより強く被熱し硬化する。

〔堆積土〕5層に分けられた。いずれも炭化物や焼土を含む人為堆積層である。

〔出土遺物〕1～3層から遺物が多く出土しており、一括廃棄されたものとみられる。土師器杯、甕、壺、把手、須恵器杯、蓋、高台杯、鉢、甕、長頸瓶、甕、円面硯、土鍾など、いずれも土師器焼成遺構を埋め戻した層から出土した。18～20はロクロ成形の薄手、丸底気味の土器でいずれも赤褐色を呈す。同時期の一般的な土器組成にはみられない器種だが薄手でロクロ目、回転ケズリともにシャープな仕上がりである。84-17は杯部と高台を打ち欠いて円形に整えられた高台杯で底部に「郷賀」の墨書がある。また、すべて埋戻しではあるものの、4・5層から土師器剥離破片が遺物取り上げ策(内寸21×28×5cm)1杯分出土した。

〔SX31 土師器焼成遺構〕(第84図・図版18)

〔位置・検出面〕6区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕長軸2.5m、短軸2.0m、確認面からの深さは12cmである。平面形は逆台形、壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕左側壁(西壁)で測るとN-2°Wである。

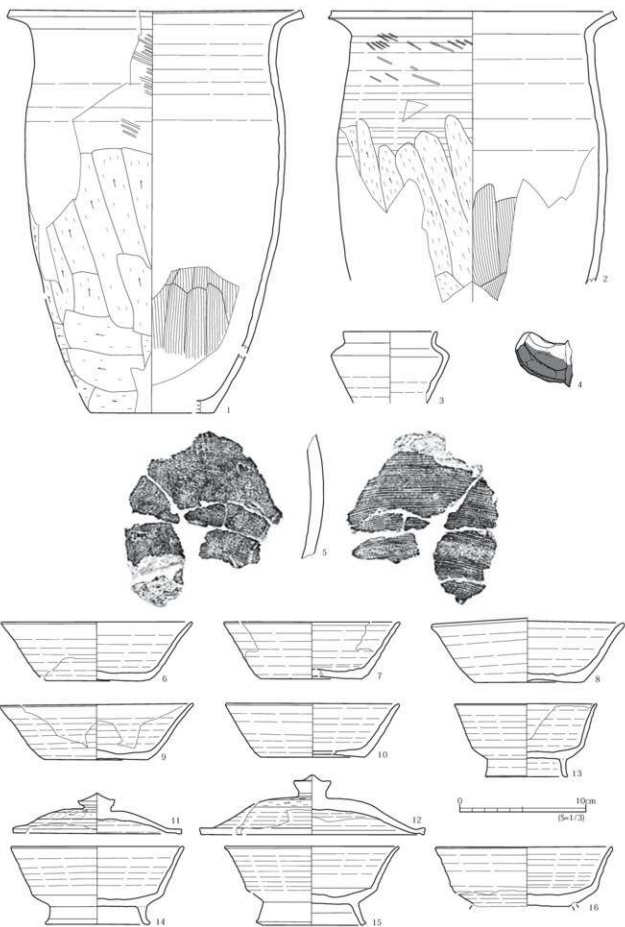
〔堆積土〕2層に分けられた。1層は炭化物を少量含む自然堆積層、2層は炭化物小ブロックが主体となる層である。

〔被熱〕前壁側を除く床全体と、北東壁・西壁の一部が熱を受けて赤変する。

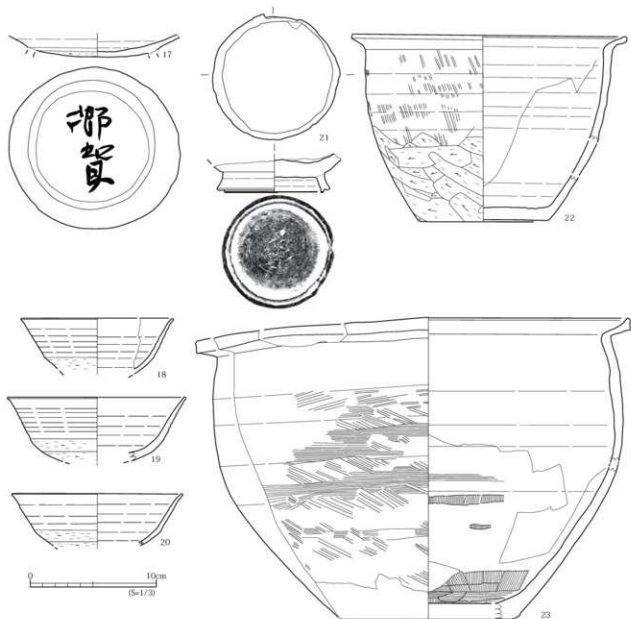
〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

〔SX33 土師器焼成遺構〕(第94図・図版18)

〔位置・検出面〕6区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、Ⅴ層で検出した。中央から左側壁(東壁)がカクランで大きく壊されている。

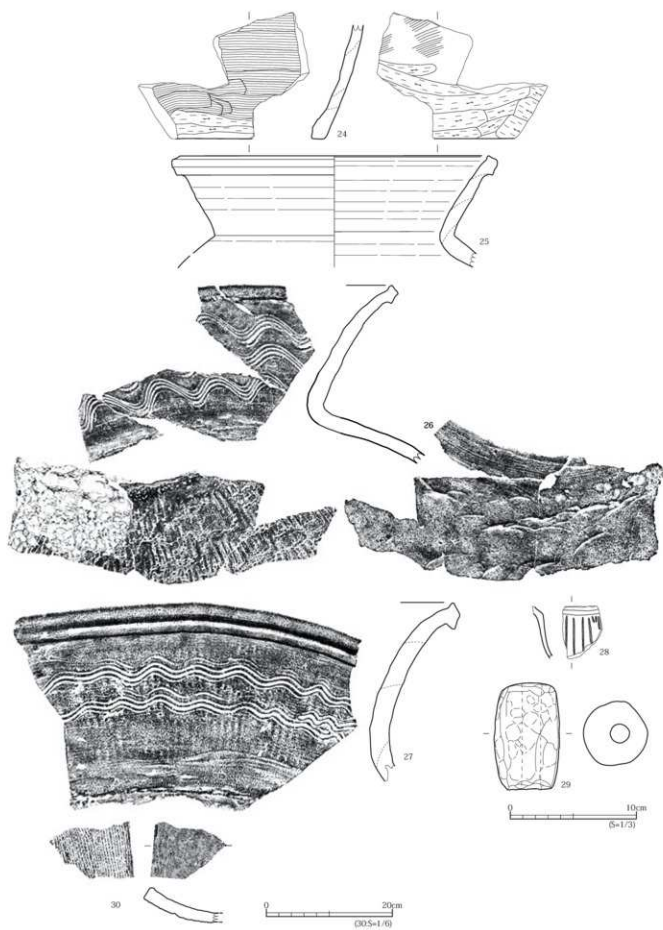


第 95 図 SX15 土師器焼成遺構 出土遺物 (1)



№	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	登録
1	土師器 甕	SX15 1~3層	1/3	(33.0)		(18)	31.9	外：平行四辺→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ 黒灰 スス・コゲなし	51-5	749
2	土師器 甕	SX15 4+5層	1/5	(22.4)			23.0~	外：ロクロナデ→ケズリ (明きが残る?) 内：ロクロナデ→ナデ		748
3	土師器 甕	SX15 1~3層 口縁部付近		7.4			5.7	内内：ロクロナデ		766
4	土師器 甕	SX15 4+5層 把手						長：5.1 厚さ：3.1		737
5	土師器 甕?	SX15 1~3層 底部付近						外：ケズリ 内：ハケ(木口工具痕)		745
6	土師器 杯	SX15 1~3層	1/3	(15.0)		8.3	4.7	内内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 赤褐色		759
7	土師器 杯	SX15 1~3層	1/3	(14.0)		(8.0)	4.5	内内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		763
8	土師器 杯	SX15 1~3層 完形		14.9		8.7	5.1	内内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 底切れ	51-6	764
9	土師器 杯	SX15 1~3層	3/4	(15.5)		8.3	4.5	内内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 赤褐色	51-7	767
10	土師器 杯	SX15 1~3層	1/2	13.6		8.2	4.3	内内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		771
11	土師器 蓋	SX15 1~3層	2/3	13.4			3.2	縦穴 外内：ロクロナデ→大井筒転ケズリ 内：ロクロナデ		743
12	土師器 蓋	SX15 1~3層	1/3	(17.7)			6.4	縦穴 外内：ロクロナデ→大井筒転ケズリ		755
13	土師器 高台杯	SX15 1~3層	3/4	11.1		6.1	5.8	内内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ナデ	51-8	753
14	土師器 高台杯	SX15 1~3層	3/4	13.4		8.3	6.1	内内：ロクロナデ 底部：ナデ 底切れ	51-10	754
15	土師器 高台杯	SX15 1~3層	1/5	(13.8)		7.9	6.2	内内：ロクロナデ		756
16	土師器 高台杯	SX15 1~3層	1/3	(13.9)			14.3	内内：ロクロナデ 底：ヘラ切り		762
17	土師器 高台杯	SX15 1~3層		13.2				底穴スレ 輪かき 湯身 腐食	51-12,73-4	772
18	杯(薄手)	SX15 4+5層	1/3	(12.0)			4.4~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色		752
19	杯(薄手)	SX15 4+5層		14.0			5.1~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色		753
20	杯(薄手)	SX15 4+5層	1/4	(13.6)			4.2~	外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色		738
21	土師器 長頸瓶	SX15 1~3層	底			7.6	3.0~	内内：ロクロナデ		741
22	土師器 鉢	SX15 1~3層	3/4	21.7		10.3	14.8	外：平行四辺→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ	51-9	736
23	土師器 鉢	SX15 1~3層	2/3	(34.1)		(14.0)	24.8	外：平行四辺→ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		747

第96図 SX15土師器焼成遺構 出土遺物(2)



第97図 SX15土師器焼成遺構 出土遺物(3)

№	名称	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	巻数
24	須恵器 甕	SK15 1～3層	底部付近				10.0	外：平行印き→ロクロナデーゼリ 内：ロクロナデーゼリ		739
25	須恵器 甕	SK15 1～3層	口縁部	24.5			(8.8)	外内：ロクロナデ		774
26	須恵器 甕	SK15 1～3層	口縁部～胴					外：口：櫛歯状文(櫛歯数4)3段 ロクロナデ 胴：平行印き 内：口：ロクロナデ 胴：無文当て具組		746
27	須恵器 甕	SK15 1～3層	口縁部					外：口：櫛歯状文(櫛歯数4)2段 平行印き→ロクロナデ 内：口：ロクロナデーゼリ		773
28	須恵器 円面椀	SK15 1～3層	胴						51-4	769
29	土甕	SK15 1～3層	完形					長：8.4 幅：5.1 重さ：245.2g		765

№	名称	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真掲載	尺貫寸
30	平瓦	1	堆積土	1/6	凸面：脚付目 凹面：(椀縁部)→端が凹み付目・小口：ケズリ	2.5YR/2 灰白		K50

〔重複〕SK32と重複し、これより古い。

〔規模・平面形・断面形〕長軸2.2m、短軸1.9m 前後、確認面からの深さは20cmである。平面形は逆台形とみられる。壁は奥壁（南壁）が直に立ち上がるほかは、なだらかに立ち上がり、床は緩やかに窪む。

〔方位〕右側壁（東壁）で測るとN-6°-Wである。

〔堆積土〕3層に分けられた。1～3層は炭化物や焼土などを含む自然堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕床奥壁側と奥壁、左側壁が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SX34 土師器焼成遺構】(第99・100図・図版18)

〔位置・検出面〕6区中央東寄りの丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

〔重複〕なし

〔規模・平面形・断面形〕長軸1.7m、短軸1.6m、確認面からの深さは10cmである。平面形は隅丸方形、壁は奥壁（北壁）がほかと比べて直立気味に立ち上がり、ほかはなだらかに立ち上がる。床はほぼ平坦である。

〔方位〕左側壁（西壁）で測るとN-6°-Eである。

〔堆積土〕2層に分けられた。1・2層は、炭化物と焼土を少量含む自然堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕奥壁側半分が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土した。89-1は風化や摩滅、スス・コゲの無い甕である。

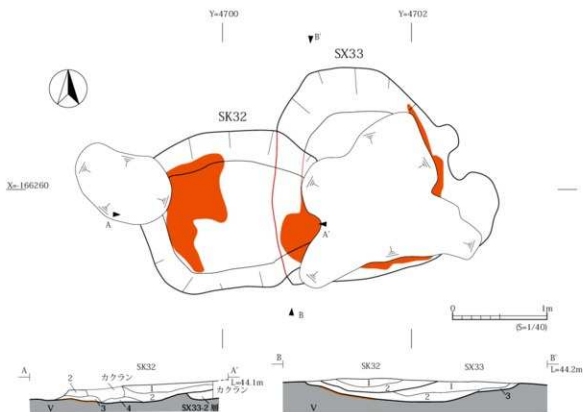
89-2の須恵器杯は2次的な被熱がみられ、床面から逆位で出土した。

【SX37 土師器焼成遺構】(第85図・図版19)

〔位置・検出面〕6区中央南側の丘陵頂部平坦面に位置し、V層で検出した。

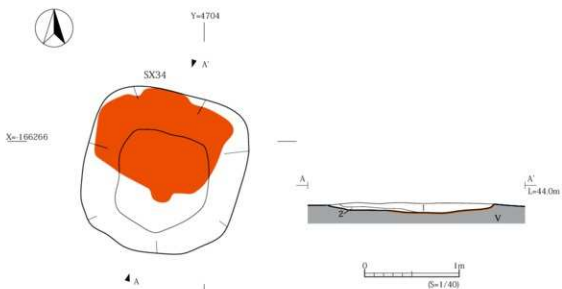
〔重複〕SI24bと重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸2.6m、短軸2.1m、確認面からの深さは12cmである。平面形は二等辺三角形、壁は奥壁（北壁）が外に開いて直線的に立ち上がるほかは、なだらかに立ち上がり、床はほぼ平坦で、南半はSI24 bの堆積土を床面とする。



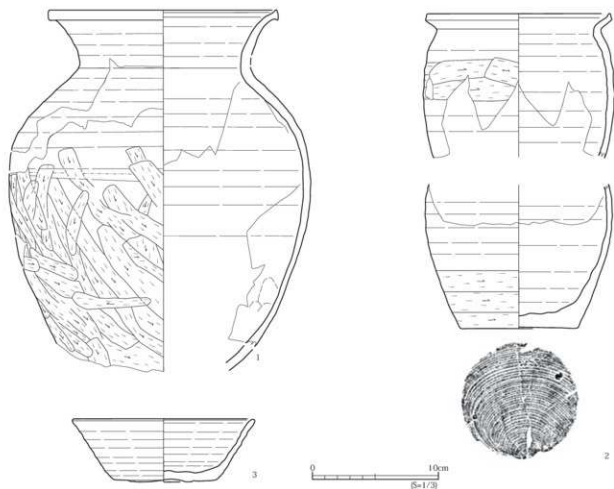
遺構名	層	土色・土質	特徴	性状
SK32	1	にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト	灰白色カクラン (Toa)	自然埋積
	2	黒褐色 (10YR3/1) シルト	焼土粒を豊富、地山灰ブロックを少し含む	自然埋積
	3	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	黒褐色 (10YR4/1) ブロックを少し含む	自然埋積
	4	黄褐色 (10YR5/6) シルト	黒褐色 (10YR3/1) 粒を少し含む	自然埋積
SX33	1	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	炭化物小、焼土粒を豊富含む	自然埋積
	2	褐色 (10YR4/4) シルト	炭化物小を多く含む	自然埋積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト	焼土粒を少し、黒褐色 (10YR3/4) ブロックを豊富含む	自然埋積

第 98 図 SX33 土器焼成遺構 SK32 焼成土坑



層	土色・土質	特徴	性状
1	黒褐色 (10YR3/4) シルト	炭化物粒を少し、地山 (V層) 粒を豊富含む	自然埋積
2	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭化物ブロック小、焼土粒を少し含む	自然埋積

第 99 図 SX34 土器焼成遺構



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	図録
1	須恵器 壺	SK32 2層	3/4	17.9	23.8		28.6	外：ロクロナデーケズリ 内：ロクロナデーナデ	52-1	655
2	土師器 盥	SX34 床	3/4	14.7		9.4		外：ロクロナデー→回転ケズリ 内：ロクロナデー 底部：回転糸切り右		664
3	須恵器 盥	SX34 床	完形	14.1		8.3	5.0	内外：ロクロナデー 底部：ヘラ切り 赤褐色 二次焼熟	51-11	662

第100図 SX34 土師器焼成遺構 SK32 焼成土坑 出土遺物

〔方位〕 南北軸で測ると N-13° E である。

〔堆積土〕 3層に分けられた。1層は炭化物粒などを少量含む自然堆積層、2層は炭化物が主体となる層、3層は自然堆積層である。

〔被熱〕 床の奥壁側 2/3 が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

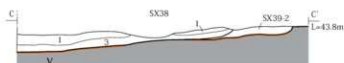
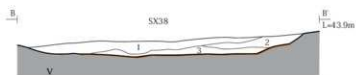
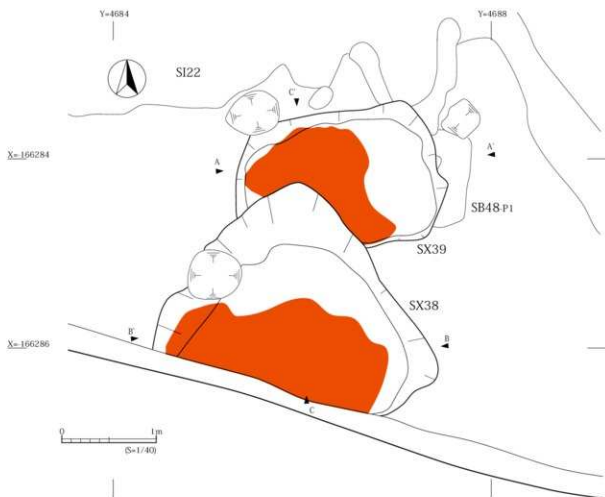
【SX38 土師器焼成遺構】(第101・102図・図版19)

〔位置・検出面〕 6区南端の丘陵南側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SX39と重複し、これより新しい。

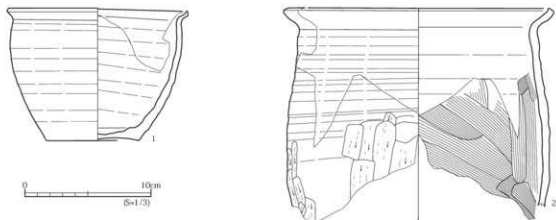
〔規模・平面形・断面形〕 東西2.6m、南北2.0m以上、確認面からの深さは18cmである。平面形は楕円形、壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕 不明。



遺構名	層	土色・土性	特徴	用途
SX38	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物粒を大量に、焼土ブロック中を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山 (V層) 粒を少し含む	人為堆積
	3	黒褐色シルト (10YR2/2) シルト	炭化物を部分的に大量に含む	人為堆積
SX39	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	炭化物粒を大量に、焼土ブロック中を少し含む	人為堆積
	2	にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト	炭化物ブロック中、焼土ブロック中を少し含む	人為堆積

第 101 図 SX38・39 土師器焼成遺構



No	形状	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	図録
1	土師器 甕	SX38 3層	1/3	(14.0)		7.3	10.5	内内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右	52-2	648
2	土師器 甕	SX38 1層	破片	(20.0)			(16.8)	外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ		647

第 102 図 SX38 土師器焼成遺構 出土遺物

〔堆積土〕3層に分けられた。1層と3層は炭化物を多く含む人為堆積層である。2層は地山粒を含み、西壁際で部分的に確認した人為堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕床中央が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土した。遺構に伴う遺物としては、土師器甕がある。

〔SX39 土師器焼成遺構〕(第 101 図・図版 19)

〔位置・検出面〕6区南端の丘陵南側緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SB48、SI22、SX38 と重複し、SX38 より古く、SI22・SB48 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 2.1m、短軸 1.4m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は隅丸長方形で、壁は直に立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕奥壁が判然としないが東西方向である。

〔堆積土〕2層に分けられた。1・2層は炭化物と焼土ブロックを含む人為堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕床西半が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

〔SX46 土師器焼成遺構〕(第 103 図)

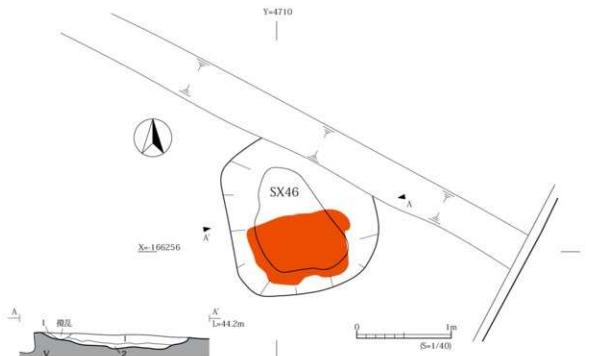
〔位置・検出面〕6区北の北西斜面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 1.7m、短軸 1.6m、確認面からの深さは 14cm である。平面形は隅丸長方形で、南壁が奥壁とみられる。壁は緩やかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕左側壁(西壁)で測ると N-11°-W である。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は焼土ブロックと地山ブロックを少し含む人為堆積層である。2



層	土色・土性	特徴	性格
1	暗褐色 (10YR3/4) シルト	焼土ブロック小、地山 (V層) ブロック小を少し含む	人工堆積
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	炭化物粒、焼土粒、地山 (V層) 粒を少し含む	自然堆積

第 103 図 SX46 土師器焼成遺構

層は炭化物粒や地山粒を少し含む自然堆積層である。

〔被熱〕床の奥壁側半分程度が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SX82 土師器焼成遺構】(第 89 図・図版 19)

〔位置・検出面〕7区北東の丘陵平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕直接重複しないが、SX82 の窪みに由来する黒色土の堆積層を SK55 が掘り込む。

〔規模・平面形・断面形〕東西 1.4m 以上、南北 1.5m、確認面からの深さは 18cm である。平面形は楕円形で、壁は緩やかに立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕左側壁（西壁）で測ると N-11° -W である。

〔堆積土〕3層に分けられた。1層は炭化物と焼土を少し含む自然堆積層である。2層は炭化物が主体となる層である。3層は遺構壁面の崩落土である。

〔被熱〕床の奥壁側半分程度が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SX92 土師器焼成遺構】(第 74・104 図・図版 19)

〔位置・検出面〕7区斜面、SI90、SX94 の検出面で検出した。奥壁側は用水路掘方によって上部が削平されていたが、その下で床から壁にかけて深さ 15cm 程度が残存していた。

〔重複〕 SI90、SX94 より新しい。

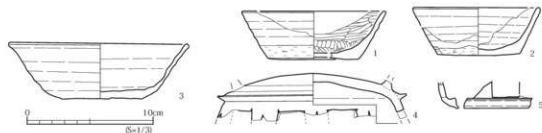
〔規模・平面形・断面形〕東西 2.0m、南北 1.9m、確認面からの深さは 63cm である。平面形は隅丸長方形で、奥壁（北壁）と奥壁側の両側壁は東壁と西壁は直に立ち上がり、前壁側は緩やかに立ち上がる。床は前壁に向かって緩やかに立ち上がる。

〔方位〕左側壁（西壁）で測ると N-20°-W である。

〔堆積土〕6層に分けられた。1～5層は地山ブロック（Ⅲ・Ⅴ層）を含む人為堆積層、6層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕床と奥壁、奥壁側の側面が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が多数出土した。図化した遺物はいずれも堆積土中から出土した。103-1 は土師器環として報告するが、器形が一般的な形ではなく、むしろ須恵器環に近い。内面はミガキ調整だが、内黒ではない。もともと内黒であったか否かを判断できる痕跡は観察できなかった。103-2 は 1 と同形、近似した寸法だが、内面はロクロナデである。103-4 と 5 は円面硯である。5 は 4 の脚とみても違和感ない器形だが、4 と比べると器壁がやや薄く、胎土が精緻で焼成もきわめて良好のため、4 の風化・摩滅の可能性を想定することもできるが、別個体として報告した。



No.	品名	遺構・層	保存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載
1	土師器 環	SX92 3層	1/4 口縁部～底部	(11.0)		(7.2)	3.8	外：ロクロナデークズリ 内：ミガキ（黒色彫理の痕跡見られず） 底部：回転ケズリ	1391
2	土師器 環	SX92 5層面	2/3	(10.0)		6.5	3.8	外：ロクロナデ→手持ちケズリ 内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 内面風化	52-10 1392
3	須恵器 環	SX92 3層	2/3	13.8		6.8	4.5	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 欠ダスキ	52-6 1389
4	須恵器 円形硯	SX92 3層	1/3					縦面径：15.0 内径：10.8 外内：ロクロナデ 透し10 脚部に彫文	52-8 1388
5	須恵器 円形硯	SX92 堆	脚部					4と同一の可能性が高い	52-7 1388-②

第 104 図 SX92 土師器焼成遺構 SK85 焼成土坑 出土遺物

(iii) 焼成土坑

〔SK12 焼成土坑〕(第 83・105 図・図版 20)

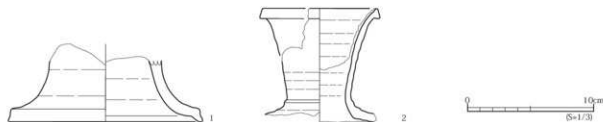
〔位置・検出面〕8区西側の平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK18 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸 1.0m、短軸 0.8m、確認面からの深さは 10cm である。平面形は隅丸長方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は炭化物や焼土を多く含む人為堆積層である。2層は炭化物が主体となる層で、木炭を大量に含む。



No	名称	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 脚付壺	SK12 埋 壁		9.0		15.3	(6.2)	外内：ロケロナデ 赤褐色	52-11	785
2	須恵器 長頸瓶	SK16 1層	口縁部片				9.0	外内：ロケロナデ リング状凸帯	53-6	784

第105図 SK12・16 焼成土坑 出土遺物

〔被熱〕北壁の一部が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕堆積土中から須恵器脚付壺の脚部とみられる破片106-1が出土した。ほかに土師器・須恵器片が出土した。

〔SK16 焼成土坑〕(第105・106図・図版20)

〔位置・検出面〕8区中央の平坦面、SX95、V層で検出した。

〔重複〕SX95と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕長軸0.6m、短軸0.5m、確認面からの深さは18cmである。平面形は隅丸方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は地山(V層)由来のブロックを少量含む人為堆積層、2層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕西壁を除いて壁が部分的に熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕堆積土中からリング状凸帯のある須恵器長頸瓶106-2が出土した。ほかに土師器・須恵器片が出土した。

〔SK17 焼成土坑〕(第106図・図版20)

〔位置・検出面〕8区中央の平坦面、SX95、V層で検出した。

〔重複〕SX95と重複し、これより新しい。

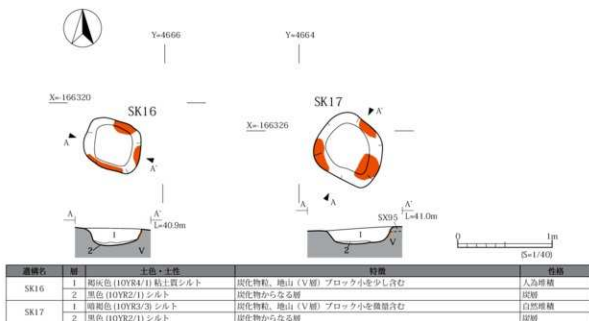
〔規模・平面形・断面形〕長軸0.7m、短軸0.7m、確認面からの深さは16cmである。平面形は隅丸方形で、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は地山(V層)由来のブロックを少量含む人為堆積層、2層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕北西壁を除いて壁が部分的に赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できる遺物は無かった。



第 106 図 SK16・17 焼成土坑

【SK28 焼成土坑】(第 13 図)

〔位置・検出面〕 6 区南の西壁際の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SK47 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 東西 0.5m 以上、南北 2.0m、確認面からの深さは 24cm である。大部分が調査区外にあるため平面形は不明である。壁はなだらかに立ち上がり、床は平坦である。

〔堆積土〕 3 層に分けられた。1～2 層は炭化物粒や焼土粒・地山ブロックを少量含む自然堆積層である。3 層は炭化物粒が主体となる層で、床面全体に薄く堆積していた。

〔方位〕 不明。

〔被熱〕 床の一部が赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK32 焼成土坑】(第 98・100 図・図版 18)

〔位置・検出面〕 6 区中央の丘陵頂部平坦面に位置し、V 層で検出した。

〔重複〕 SX33 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.8m 以上、短軸 1.6m、確認面からの深さは 18cm である。平面形は楕円形で、壁はなだらかに立ち上がり、床はほぼ平坦である。

〔方位〕 奥壁が判然としないが、東西方向である。

〔堆積土〕 4 層に分けられた。1 層は灰白色火山灰 (To-a) の自然堆積層、2～4 層は地山ブロックや焼土粒を少量含む自然堆積層である。炭化物が主体となる層は確認できなかった。

〔被熱〕 床の西寄りが熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が多数出土した。89-1 は須恵器とみられるが、剥離が目立つ。

【SK40 焼成土坑】(第 107・108 図・図版 19)

〔位置・検出面〕 6区南東の緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SI21 と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.7m、短軸 1.4m、確認面からの深さは 12cm である。平面形は不整形、壁は直線的に外に開いて立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕 奥壁が判然としなが、南北方向である。

〔堆積土〕 3層に分けられた。1～2層は炭化物と焼土を少し含む自然堆積層である。3層は炭化物が主体となる層である。

〔被熱〕 床全体が熱を受けて赤変する。南西隅の一部は硬化する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土した。95-1・2は堆積土から出土した土師器甕である。

【SK70 焼成土坑】(第 91 図)

〔位置・検出面〕 7区北西の丘陵平坦面に位置し、Ⅴ層で検出した。

〔重複〕 SK57、SK58 と重複し、これらより古い。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 1.8m、短軸 1.7m、確認面からの深さは 18cm である。重複する土坑に削平されているため、平面形は不整形、ほぼ床面のみ確認のため壁は判然としない。床は平坦である。

〔方位〕 不明。

〔堆積土〕 1層のみで、炭化物と焼土を少し含む自然堆積層である。

〔被熱〕 床の一部が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK74 焼成土坑】(第 88 図・図版 19)

〔位置・検出面〕 7区北の平坦面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕 SB48、SK66、SX71 と重複し、SX71、SK66 より古く、SB48 より新しい。

〔規模・平面形・断面形〕 長軸 2.0m、短軸 1.1m 以上、確認面からの深さは 24cm である。平面形は逆台形で、壁はなだらかに立ち上がる。奥壁は西壁とみられる。

〔方位〕 不明。

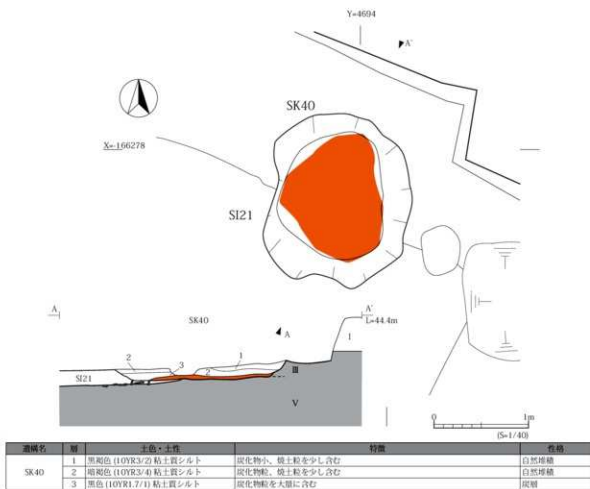
〔堆積土〕 2層に分けられた。1層は地山ブロック中～大、焼土塊を少し含む自然堆積層、2層は炭化物と焼土を多く含む自然堆積層である。

〔被熱〕 床の奥壁側半分程度が熱を受けて赤変する。

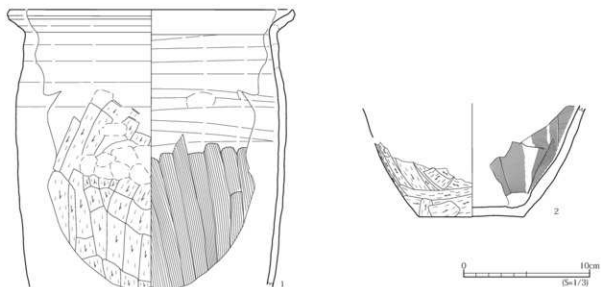
〔出土遺物〕 土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

【SK85 焼成土坑】(第 109・110 図・図版 19)

〔位置・検出面〕 7区斜面に位置し、Ⅳ層で検出した。北側は用水路掘方、南側はカクランによって

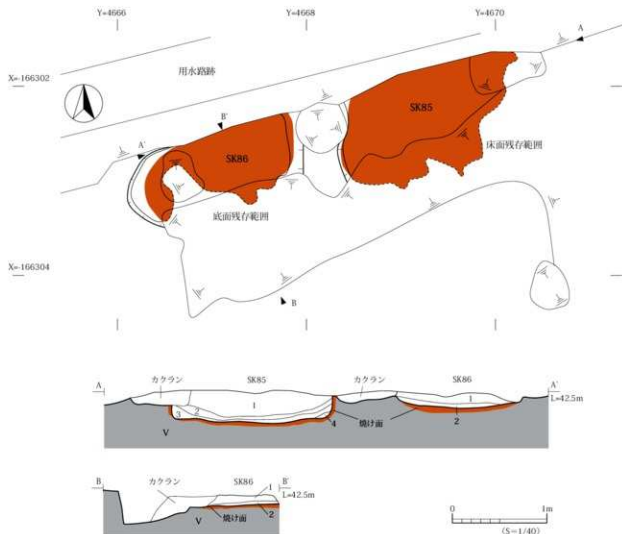


第 107 図 SK40 焼成土坑



編	名称	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図番	登録
1	土師器 甕	SK40 1層	口・胴下部	(22.4)			(22.0)	外：ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ		668
2	土師器 甕	SK40 1層	胴下部～底部		8.4	8.8		外：ケズリ 内：ナデ 黒炭		666

第 108 図 SK40 焼成土坑 出土遺物



遺構名	層	土色・土性	特徴	作層
SK85	1	暗褐色(10YR3/4)粘土質シルト	地山(V層)ブロック小、炭化物粒を少し含む	人為堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト	褐色土ブロック小を少し含む	人為堆積
	3	暗褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト	地山(V層)ブロック小を少し含む	自然堆積
	4	黒褐色(7.5YR3/3)粘土質シルト	地山(V層)ブロック小を少し含む	自然堆積
SK86	1	暗褐色(10YR3/3)粘土質シルト	地山(V層)ブロック小を少し含む	人為堆積
	2	黒褐色(10YR2/2)粘土質シルト	地山(V層)ブロック小を少し含む	自然堆積

第109図 SK85・86 焼成土坑



品	品類	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	鋸歯器	高坪坪部 or 遺 SK85 3層	1/3	(20.0)			1.3	外:ロクロナデーケズリ 内:ロクロナデ 赤褐色		1411

第110図 SK85 焼成土坑 出土遺物

削平されていた。南側ではカクランの下で床面の一部が残存していた。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕東西1.9m以上、南北1.2m以上、確認面からの深さは50cmである。平面形は不明で、東壁と西壁は垂直に立ち上がり、床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕4層に分けられた。1層は地山ブロックを含む人為堆積層、2層は地山に近い黄褐色粘土

質シルトの人為堆積層である。3層および4層は自然堆積層である。

〔被熱〕床が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土した。102-1は須恵器として報告するが、赤褐色を呈す土器で器形・器種も判然としない。皿か高坏坏部とみられる。

【SK86 焼成土坑】(第109図・図版19)

〔位置・検出面〕7区斜面に位置し、IV層で検出した。北側は用水路掘方、南側はカクランによって削平されていた。南側ではカクランの下で床面の一部が残存していた。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕東西1.9m以上、南北0.8m以上、確認面からの深さは24cmである。平面形は不明で、東壁と西壁は緩やかに立ち上がる。床は平坦である。

〔方位〕不明。

〔堆積土〕2層に分けられた。1層は地山ブロックを含む人為堆積層、2層は自然堆積層である。

〔被熱〕検出範囲の床が熱を受けて赤変する。

〔出土遺物〕土師器・須恵器片が出土したが、図化できるものはなかった。

(4) 溝跡

【SD11 溝】(第122・123・111図・図版22)

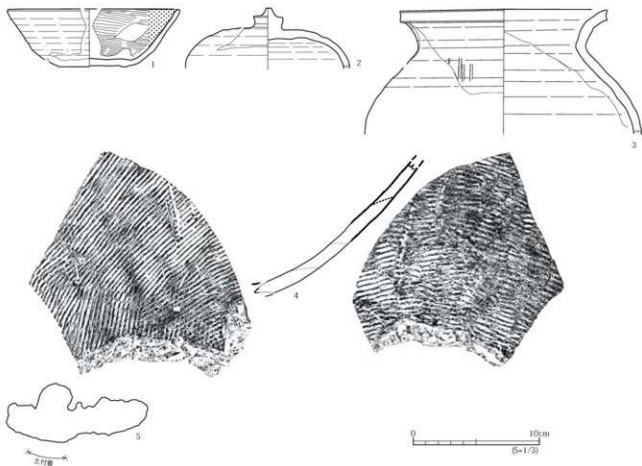
8区南端の丘陵南西側緩斜面に位置し、SX95と重複し、これより新しい。南西-北東方向で検出長は6.2m、規模は上幅1.15m、下幅0.35m、深さ0.3mである。断面形は台形である。堆積土は5層に分けられ、自然堆積層である。3層は灰白色火山灰(To-a)の自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が多く出土した。113-2は須恵器蓋、5は椀形鍛冶滓である。

【SD54 溝】(第64・112・113図・図版22)

7区中央北寄りの丘陵南緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。SI22、SI29、SI76、SK59、SX53、SX71、SD73重複し、SX53、SI76より新しく、SK59、SX71、SD73より古い。SI22、SI29との新旧関係は不明である。南西-北東方向で検出長は16.9m、規模は上幅0.5～0.7m、下幅0.2～0.3m、深さ0.3mである。断面形は台形である。堆積土は2層に分けられ、自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が多量に出土した。それらのうち、特徴的なものを図化して提示した。114-7・8は横瓶側面の閉塞部の破片、114-10は風字硯の破片とみられる。

【SD73 溝】(第88・114図)

7区中央北寄りの丘陵南緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。SK51、SK55、SK59、SX71、SD54と重複し、SD54より新しく、SK51、SK55、SK59、SX71より古い。東西方向で検出長は15.4m、規模は上幅0.3～0.4m、下幅0.2～0.3m、深さは0.2mである。断面形は箱形である。堆積土は、



No.	図種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
1	土師器 環	2層	1/3	(13.5)		5.4	4.6	外：ロクロナデ 内：黒色処理 底部：糸切り		1087
2	須恵器 蓋	2層					4.7～	幅まみ：空床 外内：ロクロナデ		956
3	須恵器 壺	2層	口縁部片	16.4			9.9～	外部：ロクロナデ→叩き 内：ロクロナデ		1086
4	須恵器 壺	1層	胴部片					外：平行叩き 内：平行撥当て具磁	67-1	1085
5	陶器片	埋積土						長さ：11.1 8.2 厚さ：4.6 2.3		952

第 111 図 SD11 溝 出土遺物

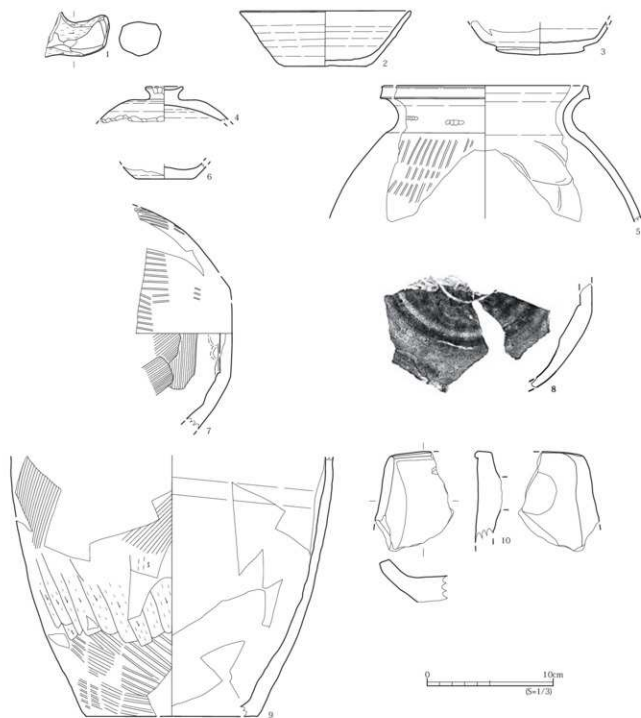
自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器、土製品が出土した。

【SD84 溝】(第 56 図)

7 区南西の丘陵南緩斜面に位置し、V 層で検出した。SI60 と重複し、これより新しい。東西方向で検出長は 2.2 m、規模は上幅 2 m、下幅 1 m、深さ 0.4 ～ 0.8 m である。断面形は台形である。堆積土は 2 層に分けられ、自然堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。

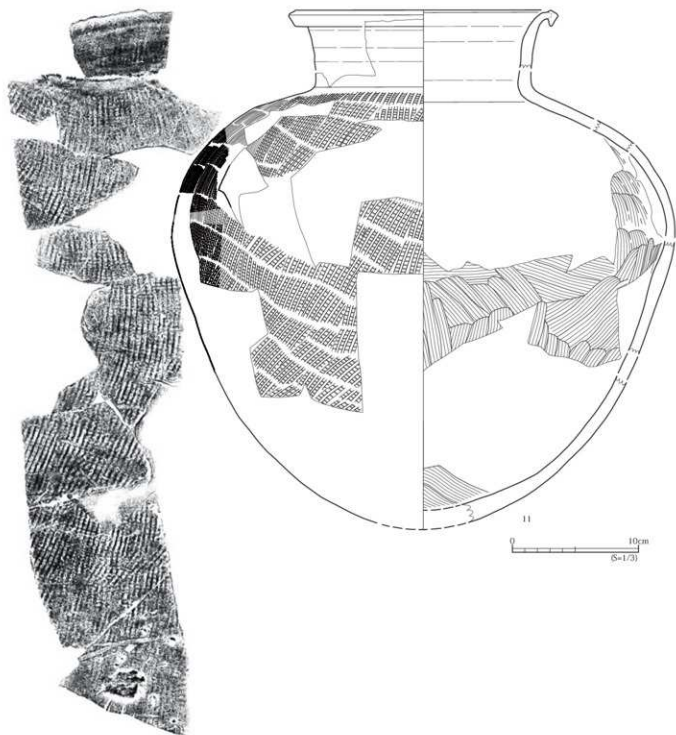
【SD91 溝】(第 62 図)

7 区中央の丘陵南緩斜面に位置し、V 層で検出した。東西方向で検出長は 1.8 m、規模は上幅 0.4 m、下幅 0.2 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m である。断面形は緩やかな U 字形である。堆積土は地山 (V 層) からなる人為堆積層である。堆積土から土師器・須恵器が出土したが、図化できるものはなかった。



№	部材	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図録	登録
1	土師器 甌	2層	把手							1379
2	須恵器 坏	1層	3/4	13.6		6.6	4.4	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1297
3	須恵器 坏	1層	底部片			(7.0)	2.6	外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 厚い 外内に重ね接ぎ痕有り		1298
4	須恵器 蓋	1層	2/3				2.3～	編まみ：ボタン 外内：ロクロナデ 重ね接ぎ痕有り 端部打ち欠き		1301
5	須恵器 甌	1層	口縁部～胴部	16.4			10.8 ～	外：ロクロナデ→平行叩き 内：ロクロナデ→無文当て具 外面底部に横位で4～5個1単位の圧痕有り		1292
6	須恵器 甌?	1層	底部片			4.2	1.2	外内：ロクロナデ 自然軸付着 底部：ヘラ切り		1302
7	須恵器 横瓶	1層	胴部側面					外：平行叩き ナデ 内：ナデ 胎直正 閉塞口腹	67-2	1299
8	須恵器 横瓶	1層	胴部側面					外：ナデ 内：ロクロナデ 閉塞口腹	67-3	1300
9	須恵器 甌	SK51・SX71・SD54・SD73・SD75・7区検出	底部・胴部			(13.6)	20.6 ～	外：叩き→ケズリ 内：ロクロナデ		1305
10	須恵器 甌	1層	破片					甌字根	67-4	1377

第112図 SD54溝 出土遺物(1)



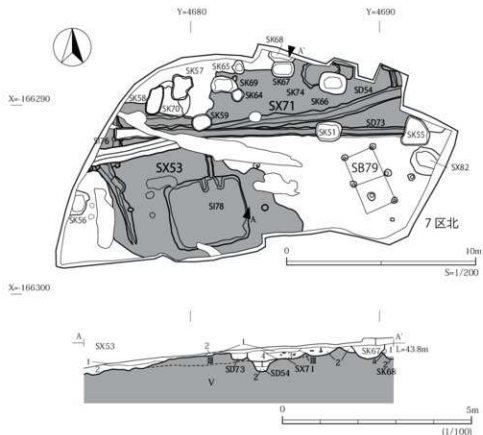
No.	器種	遺構・型	残存	口径	総大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
11	須出器 中腰	1期・SK51・SK71・SD54・SD75・7区横出面		(20.2)				口縁(外内:ロケロナ字) 胴(外:平行線を 内:無文当て具一部ナ字)		1304

第113図 SD54 溝 出土遺物(2)



No.	器種	遺構・期	残存	口径	総大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
1	土師	1期	完形					小形 長さ:6.0 総大径:2.5 重さ:32g		1376

第114図 SD73 溝 出土遺物



第115図 SK67・68土坑 SD54・73溝跡 SX71整地層 SX53堆積層

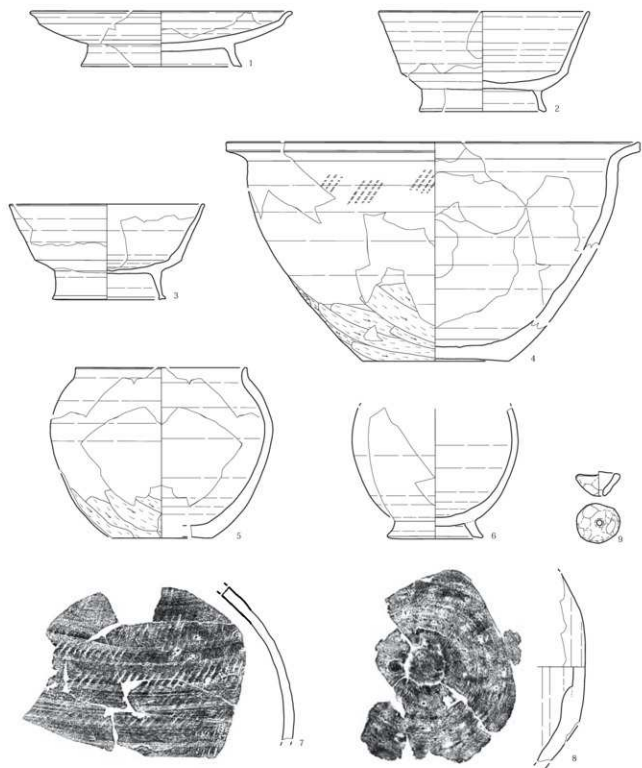
(5) その他の遺構

【SX71整地層】(第115～120図)

7区北半の丘陵頂部平坦面の、Ⅲ・Ⅴ層上で確認した。SB48、SI22、SK51、SK70、SK74、SD54、SD73、SK55、SK59、SK65、SK66、SK67、SK68、SK69と重複し、SB48、SI22、SK70、SK74、SD54、SD73より新しく、SK51、SK55、SK59、SK65、SK66、SK67、SK68、SK69より古い。

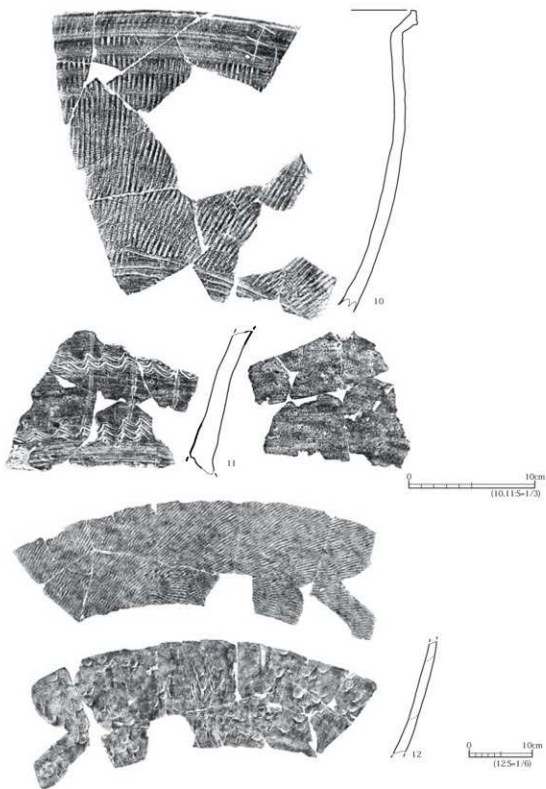
東西15.5m以上、南北4mほどの範囲に広がる。盛土は4層に分かれ、いずれもⅢ層を主体として黒色土やⅤ層ブロックからなり、厚さは最大30cmほど残存する。整地層の底面は、浅く掘り込まれて東西方向の溝状になっている。遺物は、土師器・須恵器が大量に出土した。それらのうち、特徴的なものを図化して提示した。

遺構名	層	土色・土質	特徴	植物
SK67	1	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	Ⅲ・Ⅴ層ブロックからなり、炭化物粒を多く含む	人為堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)シルト	Ⅲ・Ⅴ層ブロックからなり、炭化物粒を多く含む	人為堆積
SK68	1	黒色(10YR2/1)シルト		カクラン
	2	黒色(10YR2/1)シルト		人為堆積
SX71	1	にぶ・黄褐色(10YR4/3)シルト	黒色土ブロック中～小を多く含む	人為堆積
	2	暗褐色(10YR3/3)シルト	黄褐色土ブロック大～小を多く含む	人為堆積
	3	黒褐色(10YR3/2)シルト	黄褐色土ブロック中～小を少し含む	人為堆積
	4	黒色(10YR2/1)シルト	黄褐色土ブロック小、明黄褐色土ブロック小を少し含む	人為堆積
SX53	1	黒褐色シルト(10YR3/1)シルト	褐色土粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む	自然堆積
	2	灰黄褐色(10YR4/2)粘土質シルト	Ⅲ層ブロック中～小、白色粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む	自然堆積
SD73	1	暗褐色(10YR3/1)シルト	黄褐色ブロック小・粒をわずかに含む	自然堆積
	2	黒色(10YR2/1)シルト	黄褐色土・明黄褐色土粒を少し含む	自然堆積
SD54	1	黒色(10YR2/1)シルト	黄褐色土・明黄褐色土粒を少し含む	自然堆積
	2	暗褐色(10YR4/1)粘土質シルト	明黄褐色土ブロック小・粒を多く含む	自然堆積



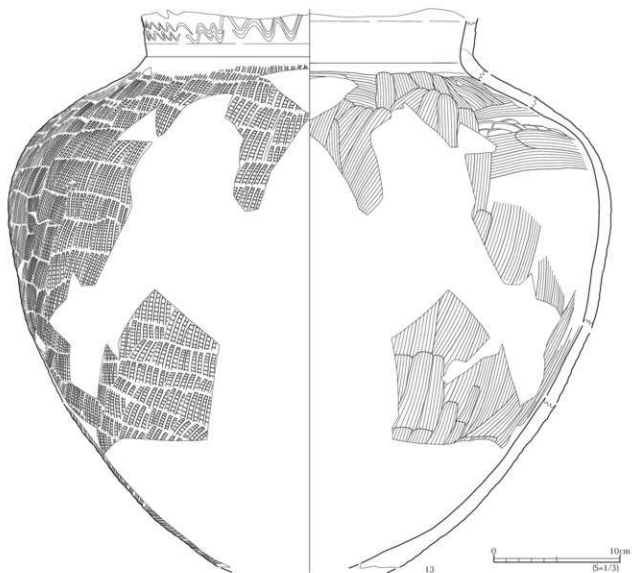
No.	遺種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	図録
1	須恵器 器	1層	2/3	20.8	12.7	4.4		外：白釉部～体部ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ		1332
2	須恵器 高台杯	SX71	1/2	(16.6)	(10.0)	7.9		外：ロクロナデ(底部～体下部)回転ケズリ→ナデ 軸付着 内：ロクロナデ		1371
3	須恵器 高台杯	2層	1/2	15.2	9.0	7.6		外：ロクロナデ 軸付着 内：ロクロナデ 全体に軸付着 底部：回転ケズリ 重ねの最上段と見られる		1373
4	須恵器 鉢	増積土	2/3	32.5	11.6	17.4		外：ロクロナデ→下部ヘラケズリ 内：ロクロナデ		1303
5	須恵器 壺	2層	1/3	(13.7)	(17.7)	8.0	13.5	外：ロクロナデ 胴部ヘラケズリ 内：ロクロナデ 知須産		1316
6	須恵器 瓶	2層	胴部片			7.6	10.4	外内：ロクロナデ 底部：回転系切り 赤釉?		1318
7	須恵器 横瓶?	2層	胴部片					外：叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ		1319
8	須恵器 横瓶	2層	胴部側面					外内：ロクロナデ 円筒閉塞		1321
9	土製品	2層	完形					手づくね底部穿孔		1378

第116図 SX71 整地層 出土遺物(1)



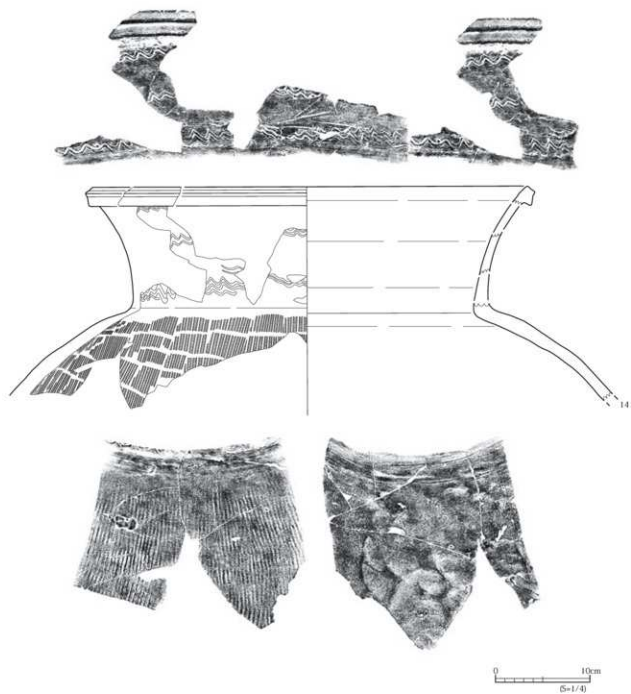
No.	図柄	遺構・層	残存	口状	輪大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
10	須恵器 鉢	3層	1/4					外：口縁部下に「玉」へら指き 上部ロクロナデ 体部編織子叩き 下部へらく式リ 内：ロクロナデ		1326
11	須恵器 甕	1層		口縁部破片				外：ロクロナデ→懸指き流注文→縦線文 内：ロクロナデ		1314
12	須恵器 甕	SD54 1層・SX71 2層・3層・焼出面 7区焼出面	破部片					破片復元径上：69.4 下：57.0 外：平行叩き 内：無文当て具取→へらナデ		1374

第117図 SX71 整地層 出土遺物 (2)

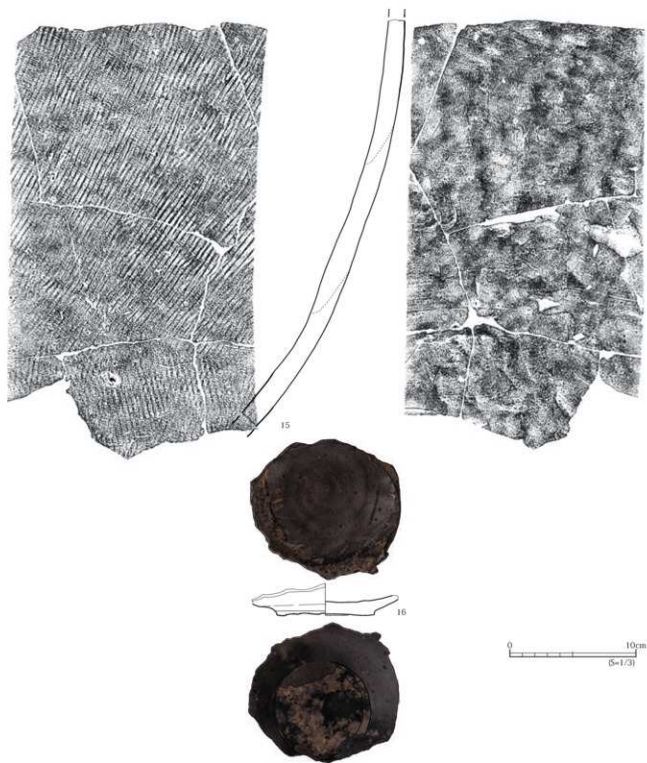


No.	名称	遺物・期	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	頁数
13	須恵器 甕	SX71 + SD54 7区検出面	胴・胴部 1/4		(47.8)		45.0 ～	胴(外:ロクロナデ→華文散2華文散状文 内:ロクロナデ) 胴(外:平行明志 内:無文当て貝刷→ナデ)		1370

第118図 SX71 整地層 出土遺物 (3)

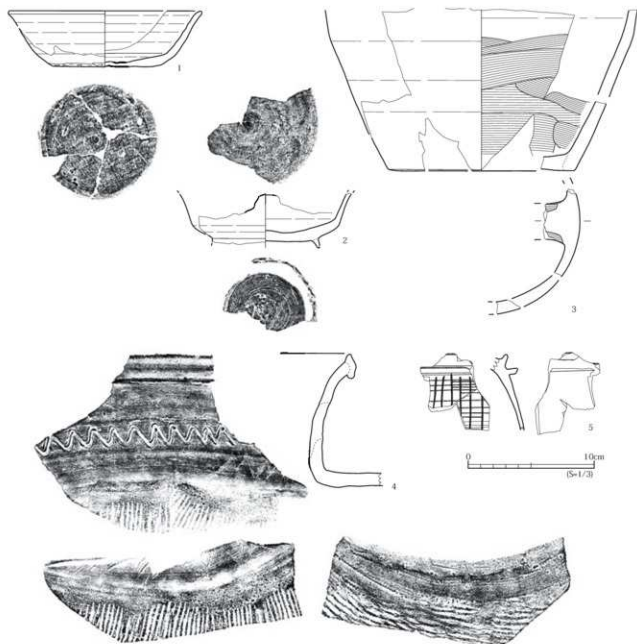


第 119 図 SX71 整地層 出土遺物 (4)



No.	品名	遺物・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
14	須恵器 甕	SK51 2層 SX71 3層・横出面 SD73 SD54 1層 7区横出面	白臍部一体部破片					外：縦歯数3 縞線波状文3段 体部縦格子(細) 内：ロクロナデ 体部無文当て具痕		1375-1
15	須恵器 甕	SK51 2層 SK52 SX71 3層・横出面 SD73 SD54 1層 7区横出面	体部破片					外：縦格子 内：ナデ		1375-2
16	専用焼台	7区 SX71 1層						外内：自然釉	67.5	1482

第 120 図 SX71 整地層 出土遺物 (5)



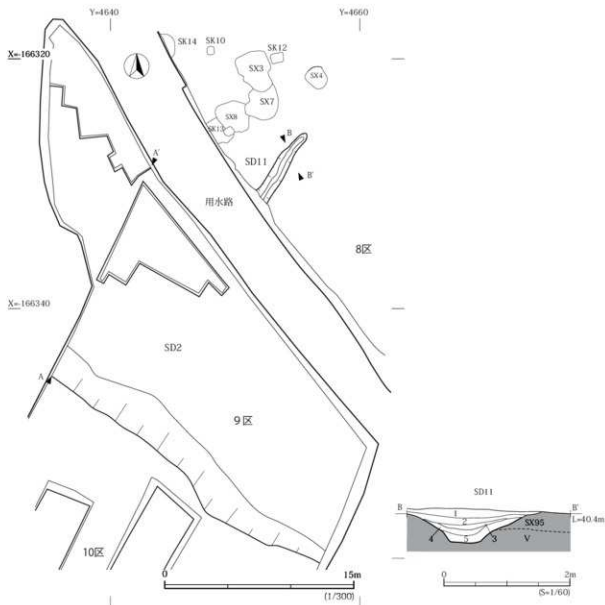
No.	部材	遺物・器	保存	C径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	須恵器	鉢	1層	1/3	(15.1)		8.5 4.4	外内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ		1347
2	須恵器	高台鉢	1層	1/4未満				外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 裏面にへら掘き「×」		1333
3	須恵器	甕	1層	底部分		(14.6)		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ→ナデ 底部：ナデ(ケズリに近い) 大部分摩滅		1334
4	須恵器	甕	1層	口縁部・胴上				樹皮状文(輪画数2) 外：口：ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴：平行線当て具痕		1354
5	須恵器	円面碗	1層						53-7	1450

第121図 SX53 堆積層 出土遺物

【SX53 窪地】(第115・121図)

7区丘陵部分中央の南に位置し、SI78 廃絶後の窪地およびその周辺の地上上に形成される。範囲は、東西15.5m以上、南北4mに広がり、最大0.2mの厚さが残存する。堆積層は2層に分かれ、褐色土粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む黒褐色シルト、Ⅲ層ブロック中～小、白色粒を少し、鉄分・マンガンを多く含む灰黄褐色粘土質シルトからなる。

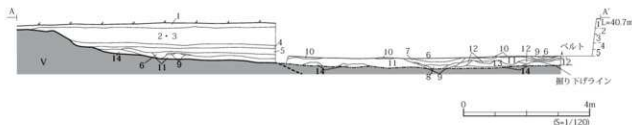
遺物は、土師器・須恵器が出土した。それらのうち、特徴的なものを図化して提示した。



第 122 図 SD11 溝・SD2 河川跡

【SD2 河川跡】(第 112 ~ 141 図・図版 22)

9区で検出した。長さは、北西-南東方向で44.5m検出した。上幅は18.0m以上、下幅は15.6m以上、深さは掘り下げた範囲で1.2m以上ある。東から北西に向かって緩やかに傾斜する。検出面での標高は調査区東壁周辺で39.9m、北西壁で38.7mである。堆積土は、いずれも自然堆積層で11層に分けられた。6層は灰白色火山灰層(To-a)である。遺物は土器と瓦が出土した。土器はまとまりをもって出土しており、堆積状況と合わせて大別4層に整理した。以下、層ごとに上層から順に提示する。



遺構名	層	土色・土性	特徴	性格
SD2	1		表土	基本層1
	2		腐土	基本層1
	3		雨水田土	基本層1
	4	暗褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト		自然堆積
	5	黒褐色 (10YR3/3) 粘土質シルト		自然堆積
	6	黒色 (10YR2/1) 粘土		自然堆積 遺物大別 1A 層
	7	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		自然堆積 遺物大別 1A 層
	8	暗褐色 (10YR3/3) 砂	粘土を含む	自然堆積 遺物大別 1B 層
	9	灰黄褐色 (10YR6/2) シルト	Toa 灰白色火山灰層	一次堆積 遺物大別 2 層
	10	黒褐色 (10YR3/1) 粘土		自然堆積
	11	暗灰色 (10YR4/1) 細砂		自然堆積 遺物大別 3 層
	12	黒褐色 (10YR3/2) 砂		自然堆積 遺物大別 3 層
	13	黄褐色 (2.5YR5/3) 砂	12層より粗い砂	自然堆積 遺物大別 4 層
	14	オリーブ褐色 (2.5YR4/3) 砂礫		自然堆積
SD11	1	暗灰色 (10YR4/1) 粘土質シルト		自然堆積
	2	黒褐色 (10YR3/1) シルト		自然堆積
	3	灰白色 (10YR8/1) シルト	灰白色火山灰 (Toa) ブロックからなる	一次堆積
	4	暗灰色 (10YR4/1) シルト質粘土	鉄分を多く含む	自然堆積
	5	暗灰色 (10YR5/1) シルト質粘土	炭化物小、鉄分、円形夾の砂を含む	自然堆積

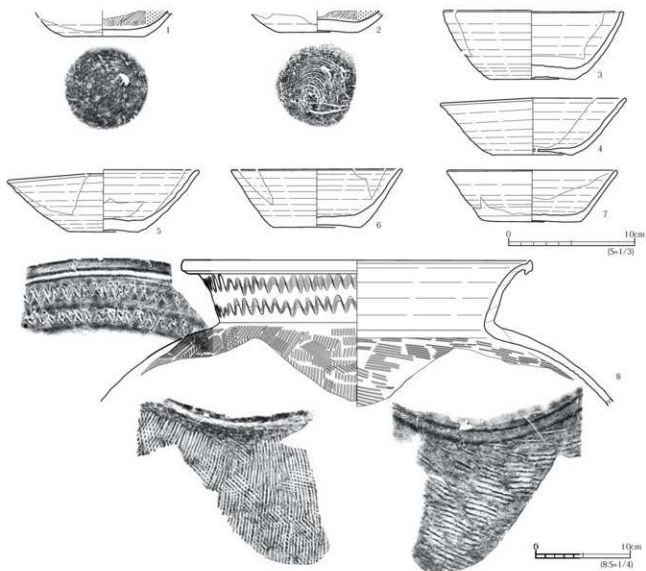
第123図 SD11溝・SD2河川跡 断面図

大別1層（6～8層）からは土師器環、甕、甕、丸底杯、盤、須恵器環、蓋、甕、壺、甕ほか、土鍾、土製の円盤などが出土した。須恵器環は底部糸切り、ヘラ切りが混在して、器形や法量にもまとまりがみられない。

大別2層（9層）は灰白色火山灰（To-a）で基本的に遺物を含まない層である。

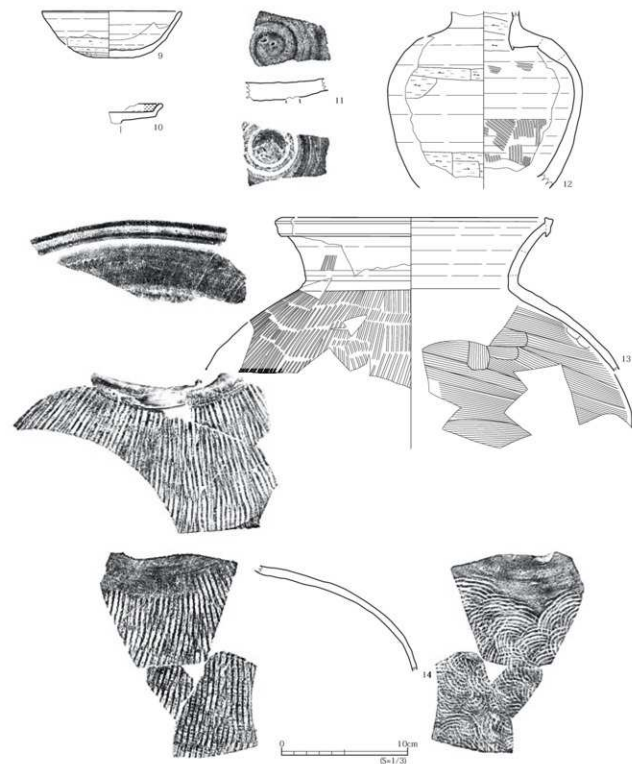
大別3層（11・12層）からは、土師器環、埴、小甕、甕、甕、壺、須恵器環、高台環、蓋、盤、高杯、壺、長頸瓶、甕のほか土製の紡錘車などが出土した。須恵器環の底部は糸切りとヘラ切りの両方のみられ、その割合は3：1である。底部切離し技法の違いごとに器形・法量にまとまりがある。土師器の壺は外面ミガキのち、黒色処理が施されており、金属器を模倣した土器とみられる。

大別4層（13層）からは、土師器環、埴、盤、甕、須恵器環、高台環、蓋、高杯、盤、鉢、甕のほか、土鍾、専用焼台が出土した。須恵器環はごくわずかに底部回転糸切りがみられるものの、原則としてヘラ切りかヘラ切りの後、ナデや手持ちケズリを施すもので占められ、器形・法量が比較的揃っている。



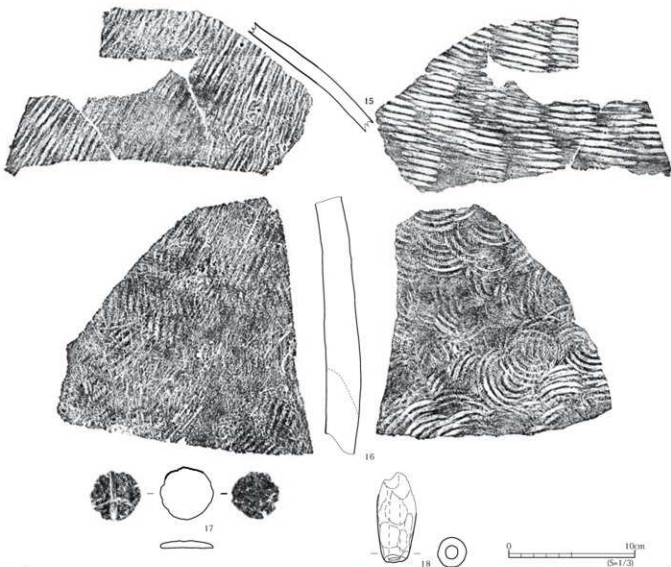
No.	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
1	土師器 坏	大別1層	底部		6.5	2.0~		外：ロクロナデ 内：黒色胎土 底部：糸切り→ナデ		840
2	土師器 坏	大別1層	底部		6.7	1.7~		外：ロクロナデ 内：黒色胎土 底部：糸切り→ナデ		842
3	須恵器 坏	大別1層	2/3	13.9	6.7	5.5		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ	53-1	810
4	須恵器 坏	大別1層	2/3	14.5	6.4	4.5		外内：ロクロナデ 底部：回転系切り右	53-2	826
5	須恵器 坏	大別1層	2/3	(15.0)	5.5	4.9		外内：ロクロナデ 底部：ナデ		812
6	須恵器 坏	大別1層	2/3	(13.4)	6.8	4.6		外内：ロクロナデ 底部：回転系切り右		809
7	須恵器 坏	大別1層	1/3	(13.2)	8.8	4.1		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		836
8	須恵器 甕	大別1層	口縁~胴上	(33.6)			15.4~	外：縞縞状文(縞間数4)2段 胴部平行叩き 内：平行線当て具腐	53-3	837

第124図 SD2河川跡 出土遺物(1)



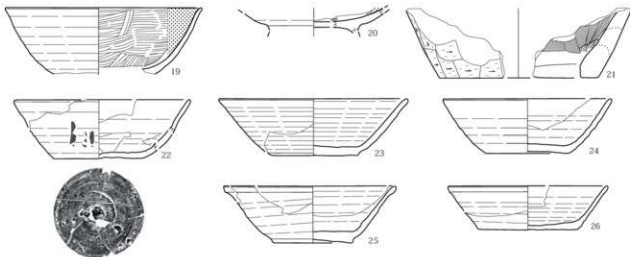
編	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	図録
9	土師器 環(薄子)	大別1層	底面	(10.9)			(4.7)	外内:ロクロナデ 底面:回転ケズリ	53-4	845
10	土師器 壺	大別1層	破片					外:ロクロナデ 内:黒色処理 著しい摩滅・風化		849
11	筑紫器 高环	大別1層	环部即接合							866
12	筑紫器 長頸瓶	大別1層	1/3				14.0	外:胴の上部と下部にケズリ(ナデに近い) 内:口:ロクロナデ一側部下半部 広い黄褐色。壁或は土師器に近い		846
13	筑紫器 甕	大別1層	口縁・胴上	(20.8)			18.2	外:口:ロクロナデ 胴:平行印キ 内:口:ロクロナデ 胴:ナデ		859
14	筑紫器 甕	大別1層	胴部片					外:菱格子印キ 内:同心円文当て具痕		860

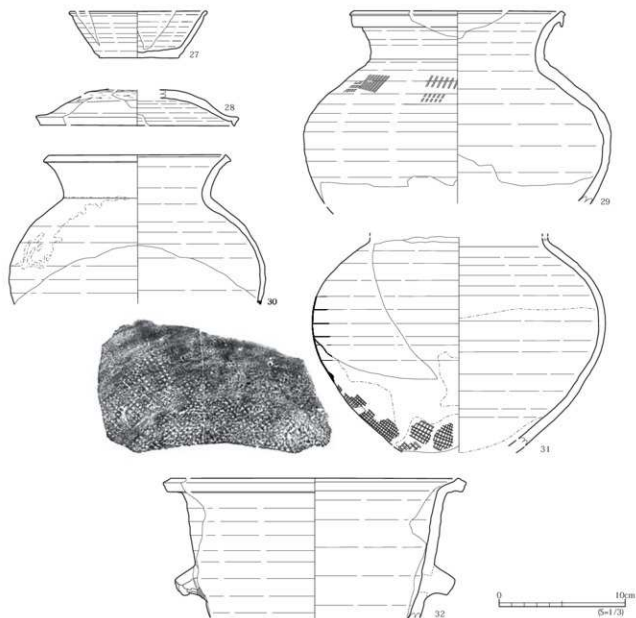
第 125 図 SD2 河川跡 出土遺物 (2)



No.	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	図録
15	須恵器 壺	大別1層	胴部片					外内：平行印き	54-1	861
16	須恵器 壺	大別1層	胴部片					外：輻辳子母き 内：同心円文当て具履（木目平行している）	54-2	865
17	土製品 円盤	大別1層	完形					寸分の縮跡	54-3	908
18	土器	大別1層	3/4					径：0.7 最大幅：2.9 乳径：0.8 胎面に痕		867

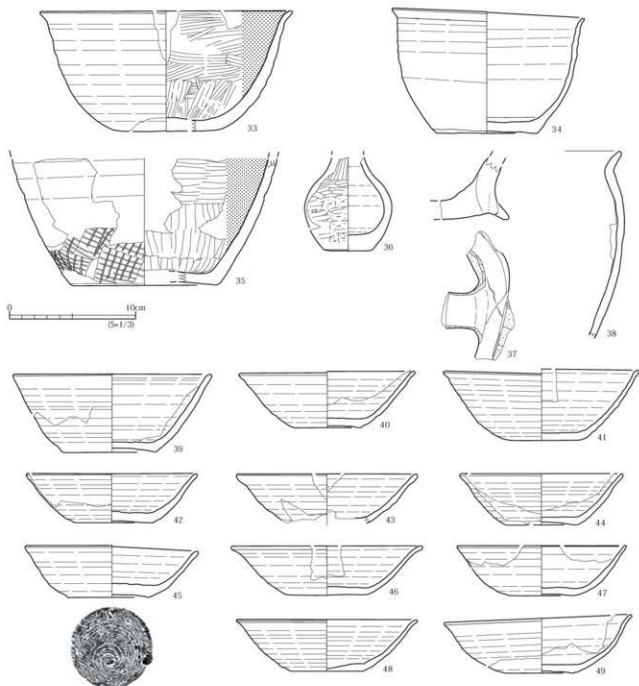
第126図 SD2河川跡 出土遺物(3)





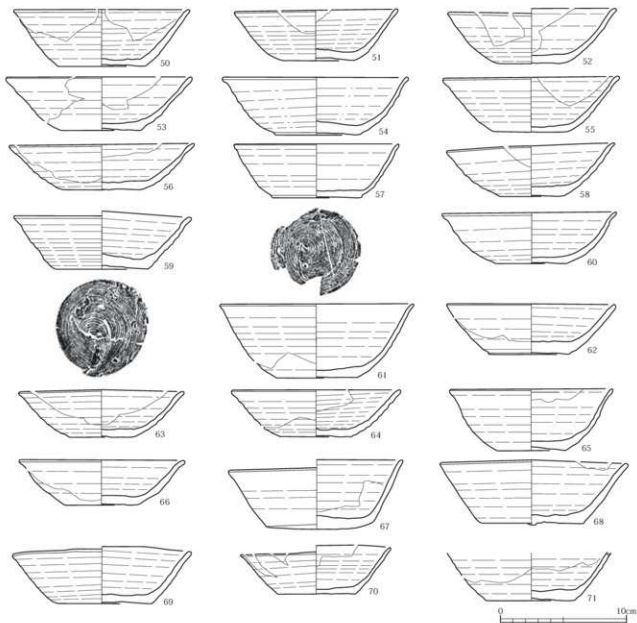
番	名称	遺構・層	残存	口径	最大径	高さ	器高	特徴	写真No.	巻数
19	土師器 坏	大割1層	1/5	(15.4)			5.3	外:ロクロナデ 内:黒色処理		900
20	土師器 高台坏	大割1層	底部		(7.0)			外:ロクロナデ 内:黒色処理		902
21	土師器 甕	大割1層	底部					外:ケズリ 内:ナデ		903
22	須恵器 坏	大割1層	1/3	(13.8)	7.1	4.7		外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り 外面(体部)に黒書「三」		874
23	須恵器 坏	大割1層	2/3	(14.8)	7.0	4.5		外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ		875
24	須恵器 坏	大割1層	2/3	13.2	6.6	4.3		外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		876
25	須恵器 坏	大割1層	2/3	(13.4)	6.2	4.5		外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右		886
26	須恵器 坏	大割1層	1/2	(12.5)	7.8	3.5		内外:ロクロナデ 底部:ヘラ切り		887
27	須恵器 坏	大割1層	3/4	10.7	6.3	3.8		外内:ロクロナデ→大目回転ケズリ	53-5	894
28	須恵器 甕	大割1層	3/4 (輪まみ欠)	(15.4)		2.9~		外内:ロクロナデ 底部:大目回転ケズリ		895
29	須恵器 甕	大割1層	口縁部~胴部中	(16.4)		15.3~		外:ロクロナデ 胴部平行形き→ロクロナデ 内:ロクロナデ	53-8	884
30	須恵器 甕	大割1層	口縁~胴上	14.0		12.8~		外内:ロクロナデ 自然輪 胎土精良	53-9	885
31	須恵器 甕	大割1層	胴部破片		24.0			外:ロクロナデ・下部履帯子明き残る 内:ロクロナデ 自然輪		870
32	須恵器 甕	大割1層	口縁部~把手	(23.0)		11.2~		外内:ロクロナデ 明成不致		802

第127図 SD2 河川跡 出土遺物(4)



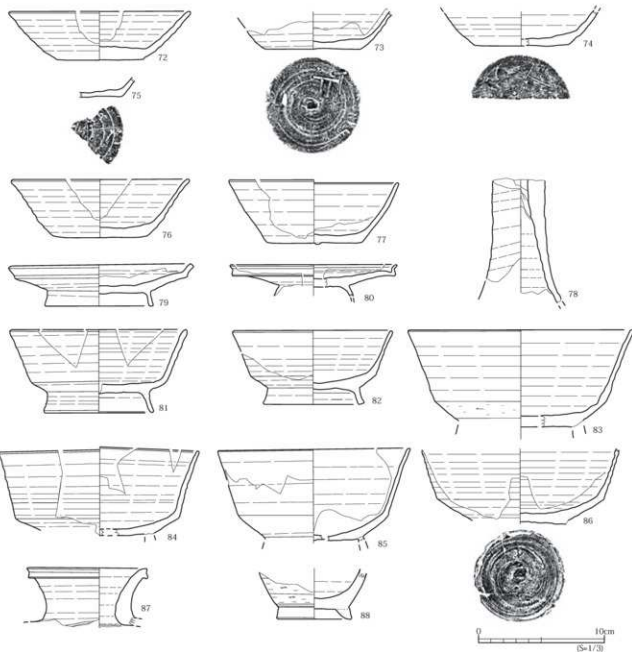
№	部材	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	登録
33	土師器 鉢	大別3層	1/2	(10.0)	8.0	9.5	9.5	外：ロクロナデ 内：黒色処理		1432
34	土師器 鉢	大別3層	2/3	15.0		8.2	9.9	外：上平ロクロナデ (摩滅のため不明瞭) 内：ロクロナデ 全体の摩滅・風化 ふきこぼれ痕	55-1	1431
35	土師器 鉢?	大別3層	1/4			(11.6)	10.0	外：ロクロナデ一体下部縦格子印 内：黒色処理 底面：ケズリ? 扇輪のみわずかに縦格子印が残る		1437
36	土師器 壺	大別3層	3/4		6.9	3.9	7.4~	外：黒色処理 内：ロクロナデ 底面：回転糸切り 厚紙により体面調整不明瞭 No.1139と接合	55-2	998
37	土師器 壺	大別3層	破片					外：ケズリ ナデ 内：ナデ トケズリ	55-3,4	1428
38	土師器 壺	大別3層	破片					内面に漆付痕		1007
39	須恵器 坏	大別3層	1/2	(15.6)		7.4	6.2	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右 黄褐色		957
40	須恵器 坏	大別3層	2/3	13.8		5.3	5.5	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右	55-5	958
41	須恵器 坏	大別3層	3/4	15.3		6.4	5.7	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右	55-6	959
42	須恵器 坏	大別3層	1/2	13.4		6.2	4.0	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右		960
43	須恵器 坏	大別3層	1/3	(14.1)		6.4	3.9~	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右		962
44	須恵器 坏	大別3層	1/3	(13.2)		5.9	4.2	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右		964
45	須恵器 坏	大別3層	3/4	13.5		6.4	4.2	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右 割離	55-7	965
46	須恵器 坏	大別3層	2/3	(14.9)		6.6	3.9	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右		966
47	須恵器 坏	大別3層	2/3	(13.2)		5.5	4.0	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右 底切れ		967
48	須恵器 坏	大別3層	1/2	14.4		5.8	4.1	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右		968
49	須恵器 坏	大別3層	1/2	(14.4)		5.6	4.6	外内：ロクロナデ 底面：回転糸切り右		969

第128図 SD2 河川跡 出土遺物(5)



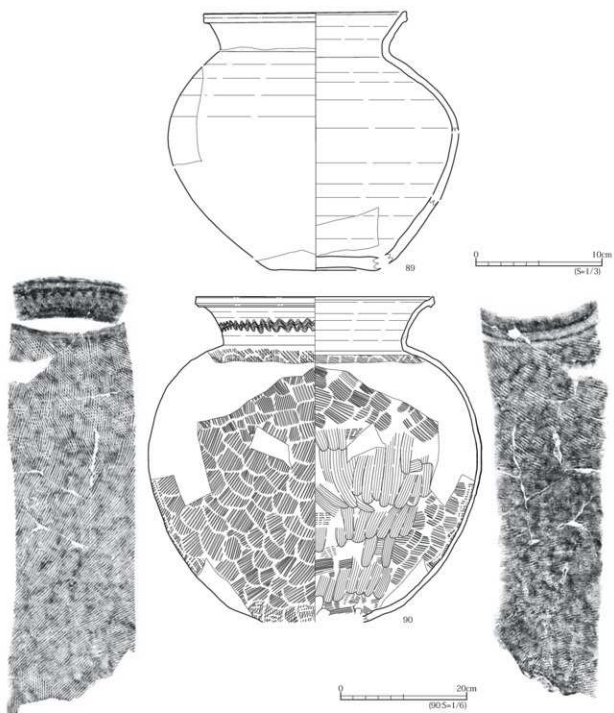
番号	部種	遺構・層	西/东	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
50	須恵器 坏	大男3層	1/2	(13.6)	7.0	4.5	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			970
51	須恵器 坏	大男3層	3/4	12.9	5.6	4.1	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ			971
52	須恵器 坏	大男3層	3/4	13.0	5.6	4.4	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			972
53	須恵器 坏	大男3層	2/3	(14.5)	6.3	4.2	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			973
54	須恵器 坏	大男3層	2/3	14.6	6.7	4.6	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ	55-8		974
55	須恵器 坏	大男3層	2/3	13.9	6.0	4.4	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			975
56	須恵器 坏	大男3層	1/3	(14.7)	6.3	3.7	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			976
57	須恵器 坏	大男3層	1/2	13.0	7.0	4.3	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右「一」のへら記号			977
58	須恵器 坏	大男3層	ほぼ完形	13.2	5.2	4.3	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			978
59	須恵器 坏	大男3層	完形	14.0	7.4	4.6	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ	56-1		979
60	須恵器 坏	大男3層	3/4	13.8	5.6	4.1	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			980
61	須恵器 坏	大男3層	1/3	(15.3)	6.4	5.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			981
62	須恵器 坏	大男3層	2/3	(13.2)	6.4	4.0	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			982
63	須恵器 坏	大男3層	1/2	(12.9)	5.4	3.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ			983
64	須恵器 坏	大男3層	1/3	(13.2)	5.6	3.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			987
65	須恵器 坏	大男3層	2/3	(12.8)	5.6	4.9	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右 底切れ			988
66	須恵器 坏	大男3層	1/2	(13.1)	5.8	3.8	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			990
67	須恵器 坏	大男3層	3/4	13.6	8.5	5.5	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ (部分的にケズリに見える)			992
68	須恵器 坏	大男3層	ほぼ完形	14.6	8.2	5.2	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ	56-2		993
69	須恵器 坏	大男3層	完形	14.0	7.4	4.5	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ 底切れ	56-3		994
70	須恵器 坏	大男3層	3/4	(12.0)	6.2	3.7	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ 底切れ			996
71	須恵器 坏	大男3層	2/3		7.0	3.8	外内:ロクロナデ 底部:へら切り→ナデ 底切れ			1000

第129図 SD2河川跡 出土遺物(6)



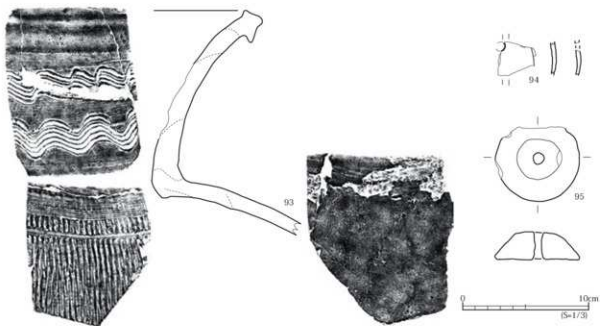
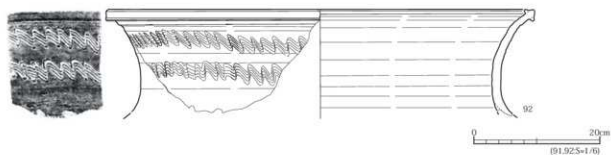
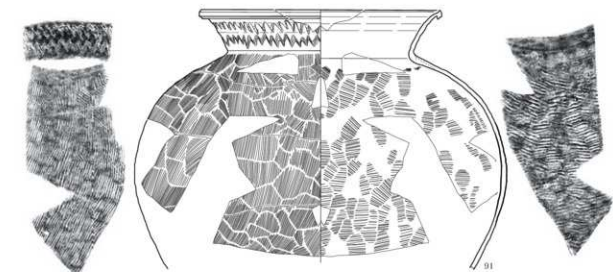
№	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
72	須恵器 坏	大別3層	1/2	(14.2)	7.0	3.9		外内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り→ナデ		1001
73	須恵器 坏	大別3層	底部		7.5			内内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り ヘタ記号「午」？ 赤褐色		1003
74	須恵器 坏	大別3層	底部		7.5			外内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り ヘタ記号「午」		1004
75	須恵器 坏	大別3層	底部 1/2					外内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り ヘタ記号あり		1005
76	須恵器 坏	大別3層	1/2	(13.8)	7.0	4.6		外内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り→ナデ		1006
77	須恵器 坏	大別3層	1/2	(13.2)	7.6	5.1		外内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り→ナデ		1009
78	須恵器 高坏	腰のみ						外内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り→ナデ 火ダヌキ 赤褐色		1022
79	須恵器 甕	大別3層	2/3	(14.2)	8.6	3.3		外内：ロクロナデ 底：ヘタ切り→ナデ	56-4	1021
80	須恵器 甕	大別3層	1/2	(13.2)				2.6～ 外内：ロクロナデ		1017
81	須恵器 高坏	大別3層	1/2	(13.8)	8.0	6.6		外内：ロクロナデ		1011
82	須恵器 高坏	大別3層	1/2	(12.4)				7.0～ 外内：ロクロナデ 底切れ	56-5	1010
83	須恵器 高坏	大別3層	1/3	(17.7)				外：ロクロナデ→回転ケズリ 内：ロクロナデ 黄褐色		1015
84	須恵器 高坏	大別3層	1/2	(15.5)				7.0～ 外内：ロクロナデ		1012
85	須恵器 高坏	大別3層	1/3	(15.1)				外内：ロクロナデ		1014
86	須恵器 高坏	大別3層	1/2		6.0～			外内：ロクロナデ 底部：ヘタ切り ナデ		1013
87	須恵器 横瓶？	大別3層	口縁部	9.5			4.7～	外：ロクロナデ 体部平行突き 内：ロクロナデ→体部横方向のナデ 口縁口縁部を収り付けている	56-6	1439
88	須恵器 甕	大別3層	底部破片		6.0	4.0～		外：ロクロナデ→体下部回転ケズリ 内：ロクロナデ→回転 自然黒 底部：糸切り 回転回転ケズリ	56-7	1440

第130図 SD2 河川跡 出土遺物(7)



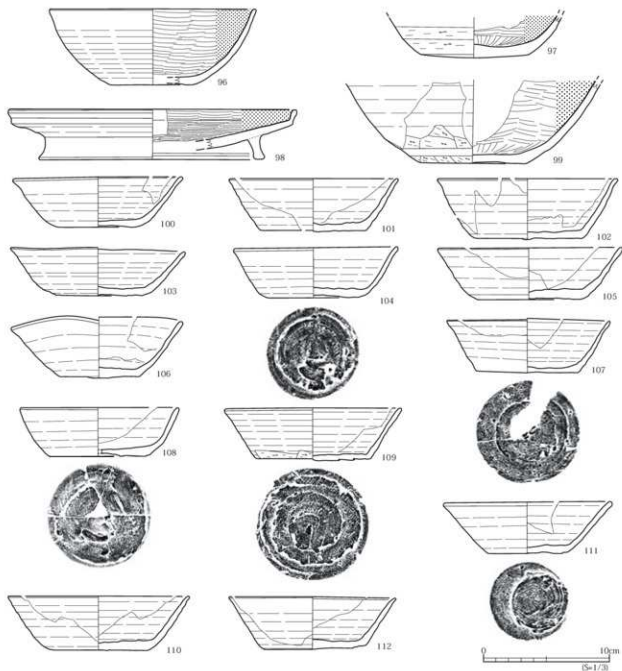
No	器種	遺跡・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	図録
89	須恵器 壺	大別3層		15.8	23.0	8.7	20.5	外内：ロクロナデ 胎かから	56-9	1424
90	須恵器 甕	大別3層	1/3	40.0	(56.5)		55.2	縞縞或状文（縞間数4） 外：口：ロクロナデ 胴：平行帯 内：口：ロクロナデ 胴：平行帯当て具底→ナデ	57-1	1441

第131図 SD2河川跡 出土遺物(8)



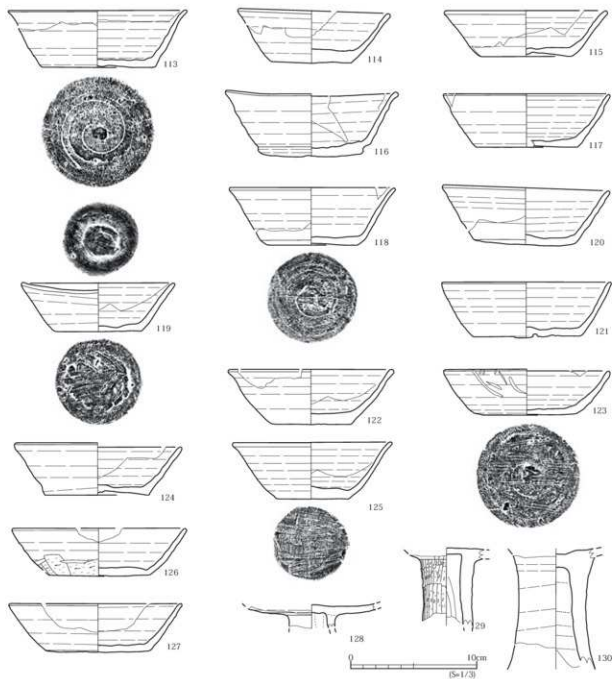
品	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	巻録
91	須恵器 甕	大別3層	1/2	(38.0)	(59.0)		41.0~	御南流状文(御南敷4)2段 外:口;ロクロナ字 刷:平行叩き 内:口;ロクロナ字 刷:平行線当て具痕	57-2	1430
92	須恵器 甕	大別3層	1/4口縁部片	(68.0)			16.6~	御南流状文(御南敷4)2段 内内:ロクロナ字		1421
93	須恵器 甕	大別3層						御南流状文(御南敷4)2段 外:口;ロクロナ字 刷:縦格子叩き 内:ロクロナ字 刷:無文当て具痕	56-10	1425
94	須恵器 甕?	大別3層	細片							1020
95	土製品 紡錘車	大別3層	3/4		6.6	2.2	83g以上		56-8	1016

第132図 SD2 河川跡 出土遺物(9)



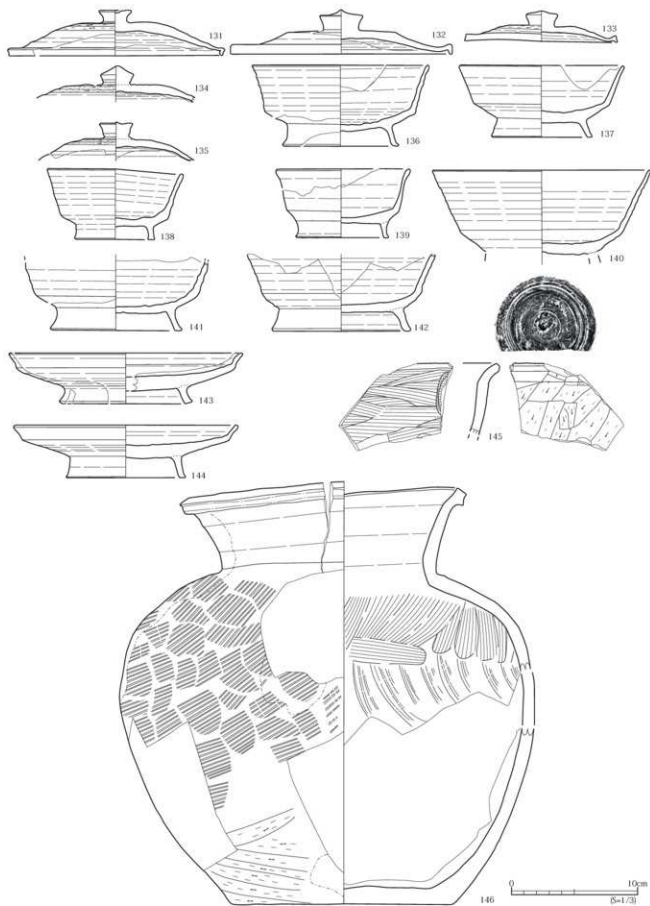
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	胎高	特徴	写真図版	登録
96	土師器 坏	大別4層	1/4	16.5	6.9	6.0	外:ロクロナデ 内:黒色処理 底部:回転糸切り→縦縞のみ手持ちケズリ		1434	1434
97	土師器 坏?	大別4層	1/3		8.8	3.6	外:回転ケズリ 内:黒色処理		58-1	1435
98	土師器 甕	大別4層	1/4	22.8	17.6	4.0	外:ロクロナデ 内:黒色処理		58-2	1433
99	土師器 甕?	大別4層	1/3		9.0	6.0	外:ロクロナデ→ト端手持ちケズリ 内:黒色処理			1436
100	流土器 坏	大別4層	3/4	13.1	6.2	4.0	外内:ロクロナデ 底部:回転糸切り右			1023
101	流土器 坏	大別4層	1/3 (13.2)		8.4	4.3	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ 火ダスキ			1026
102	流土器 坏	大別4層	3/4 (13.9)		8.4	4.9	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り			1027
103	流土器 坏	大別4層	ほぼ完形	13.6	6.5	3.9	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ 底切れ		58-3	1028
104	流土器 坏	大別4層	ほぼ完形	12.8	7.3	4.0	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り		58-4	1029
105	流土器 甕	大別4層	1/2 (14.6)		8.3	4.1	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り			1030
106	流土器 坏	大別4層	3/4	13.4	6.3	4.9	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ 縁がみ			1031
107	流土器 坏	大別4層	2/3 (12.9)		(8.2)	4.3	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り			1032
108	流土器 坏	大別4層	3/4	12.5	8.2	3.8	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り			1033
109	流土器 坏	大別4層	2/3 (13.8)		9.1	4.2	外:ロクロナデ 下端に手持ちケズリ 内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ			1034
110	流土器 坏	大別4層	1/3 (14.2)		7.8	4.4	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ 黄褐色			1035
111	流土器 坏	大別4層	ほぼ完形	13.2	6.2	4.1	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→手持ちケズリ		58-5	1036
112	流土器 坏	大別4層	2/3	13.2	8.2	4.3	外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り			1038

第133図 SD2河川跡 出土遺物(10)

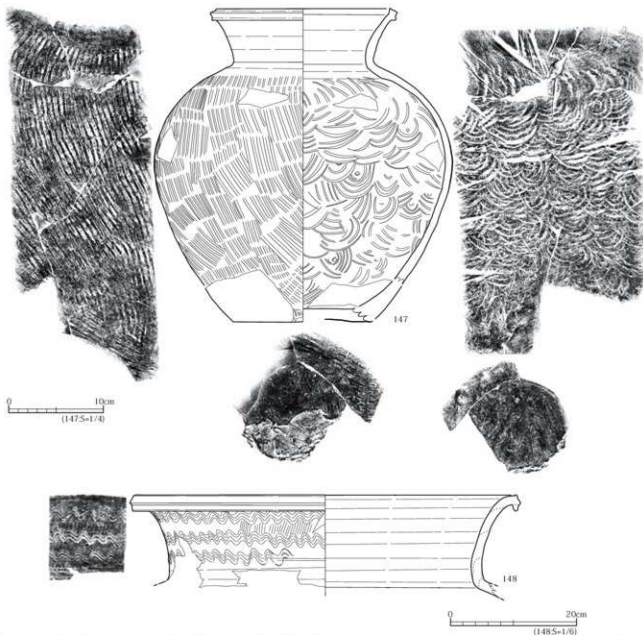


品	名称	遺体・層	形状	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	資料
113	碗形器	環	大別 4層	2/3	(14.2)	8.8	4.5	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 火ダスキ十字		1037
114	碗形器	環	大別 4層	2/3	(12.0)	6.3	4.0	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ 内面に輪 ヲラ煎	58.6	1039
115	碗形器	環	大別 4層	2/3	(12.7)	7.20	4.6	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 火ダスキ 内面に輪		1040
116	碗形器	環	大別 4層	3/4	(13.6)	8.0	5.2	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちケズリ→ナデ 外：火ダスキ十字		1041
117	碗形器	環	大別 4層	1/2	(13.0)	8.0	4.7	内外：ロクロナデ ヘラ切り→ナデ		1042
118	碗形器	環	大別 4層	2/3	(13.1)	7.2	4.3	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ ヘラ掻き「一」 底切れ		1043
119	碗形器	環	大別 4層	2/3	(12.0)	7.0	3.9	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 底割れ	58.7	1044
120	碗形器	環	大別 4層	2/3	(13.3)	8.1	4.4	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1045
121	碗形器	環	大別 4層	ほぼ完形	13.1	8.7	4.9	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ 底切れ	58.8	1046
122	碗形器	環	大別 4層	3/4	12.7	6.3	4.4	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1047
123	碗形器	環	大別 4層	完形	13.0	8.1	3.6	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちケズリ 底切れ	58.9	1048
124	碗形器	環	大別 4層	3/4	13.0	8.3	4.1	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1049
125	碗形器	環	大別 4層	3/4	12.6	5.8	4.5	内外：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ	58.10	1050
126	碗形器	環	大別 4層	2/3	(13.6)	8.0	3.7	内外：ロクロナデ 下部ケズリ 内：ロクロナデ 底部：手持ちケズリ		1051
127	碗形器	環	大別 4層	2/3	(13.6)	8.2	3.8	内外：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 黄褐色 見た目は土器		1438
128	碗形器	高环	大別 4層	坏部片		1.9~		内外：ロクロナデ		1062
129	碗形器	高环	大別 4層	脚				外：土器中に近いケズリ 内：ロクロナデ		1063
130	碗形器	高环	大別 4層	脚				内外：ロクロナデ 黄褐色		1064

第 134 図 SD2 河川跡 出土遺物 (11)

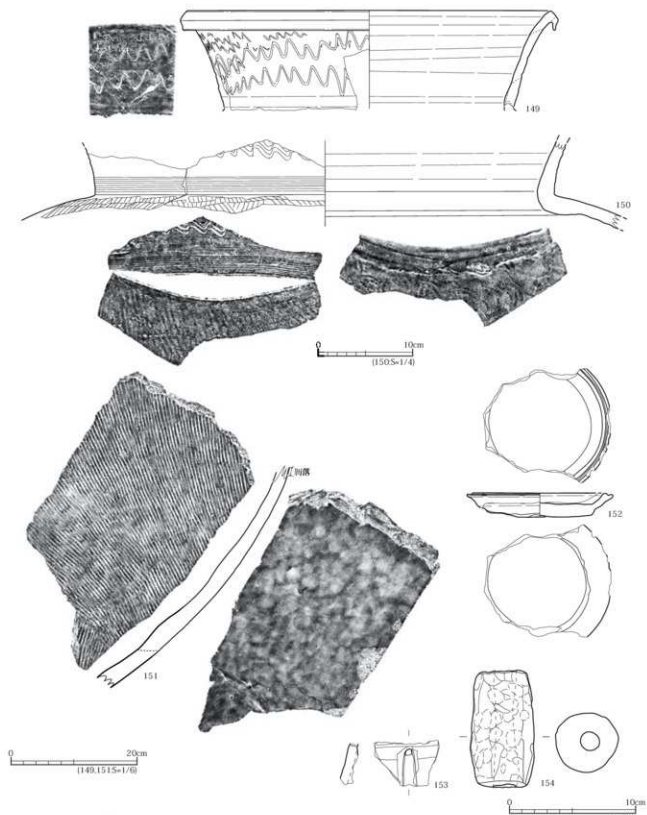


第135圖 SD2河川跡 出土遺物(12)



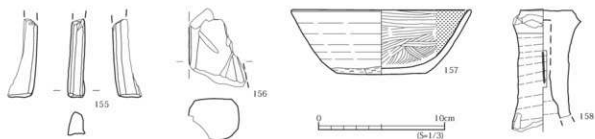
№	名称	遺物・層	形状	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
131	須石原 蓋	大別 4 層	3/4				3.8	編みみ：ボタン 外内：ロクロナデ→大井回転ケズリ		1070
132	須石原 蓋	大別 4 層	1/3	(17.5)			3.5	編みみ：脚室珠 外内：ロクロナデ		1072
133	須石原 蓋	大別 4 層	2/3	(12.1)			2.5	編みみ：脚室珠 外内：ロクロナデ→大井回転ケズリ	59-1	1073
134	須石原 蓋	大別 4 層	1/3				2.9～	編みみ：脚室珠 外内：ロクロナデ→大井回転ケズリ		1071
135	須石原 蓋	大別 4 層	2/3				3.1～	編みみ：ボタン 外内：ロクロナデ→大井回転ケズリ		1074
136	須石原 高台坪	大別 4 層	2/3	13.8	9.0	6.4		外内：ロクロナデ 黄褐色		1055
137	須石原 高台坪	大別 4 層	3/4	12.9	8.0	5.7		外内：ロクロナデ	59-3	1052
138	須石原 高台坪	大別 4 層	完形	10.6	6.2	5.6		外内：ロクロナデ	59-4	1054
139	須石原 高台坪	大別 4 層	2/3	(10.4)	7.4	5.4		外内：ロクロナデ		1056
140	須石原 高台坪	大別 4 層	2/3	(17.4)				外内：ロクロナデ		1058
141	須石原 高台坪	大別 4 層	2/3			10.4		外内：ロクロナデ		1057
142	須石原 大別 4 層	1/3			10.8	6.1～		外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ→ロクロナデ		1059
143	須石原 壺	大別 4 層	1/3	(18.4)	(10.4)	4.0		外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ		1060
144	須石原 壺	大別 4 層	1/2	(17.4)		9.5	4.2	外：ロクロナデ 底部：回転ケズリ	59-2	1061
145	須石原 鉢	大別 4 層	口縁部付否					外：ケズリ 内：ナデ		1067
146	須石原 甕	大別 4 層	2/3	21.3	32.8	33.5		外：口：ロクロナデ 胴：平行叩き 下部ケズリ 内：口：ロクロナデ 胴：無文当て具組→ナデ		1422
147	須石原 甕	大別 4 層	1/2	(18.5)	(31.5)	(15.0)	33.1	外：口：ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴：同心円文当て具組		1423
148	須石原 甕	大別 4 層	1/3 口縁部付	(62.0)			16.6	縞帯状文(縞間数 3) 3段 外：胴部平行叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ		1427

第 136 図 SD2 河川跡 出土遺物 (13)



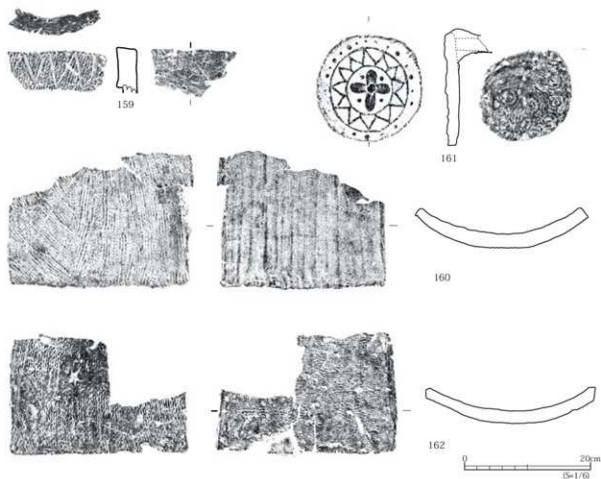
品	原種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
149	瓦片器	費	大別 4層	1/4 口縁部片	80.0		15.2	不規則な1本線波状文3~4段 外内:ロケロナデ		1426
150	瓦片器	費	大別 4層	1/5 頸部片			9.2	外:柳葉波状文(柳葉数3) 内:同心文当て具面		1429
151	瓦片器	費	大別 4層	体部~底部付近破片				外:平行叩き 内:無文当て具面		1420
152	瓦片器 (專用機台)	大別 4層	3/4	10.5	8.4	1.9	外内:ロケロナデ 内:輪 底部:へら切り 最大径:13.6		59-5	1075
153	瓦片器	大別 4層					把手の剝離した破片			1065
154	陶罐	大別 4層					長:9.2 幅:5.0 重さ:244.1g		59-6	1069

第137図 SD2河川跡 出土遺物(14)



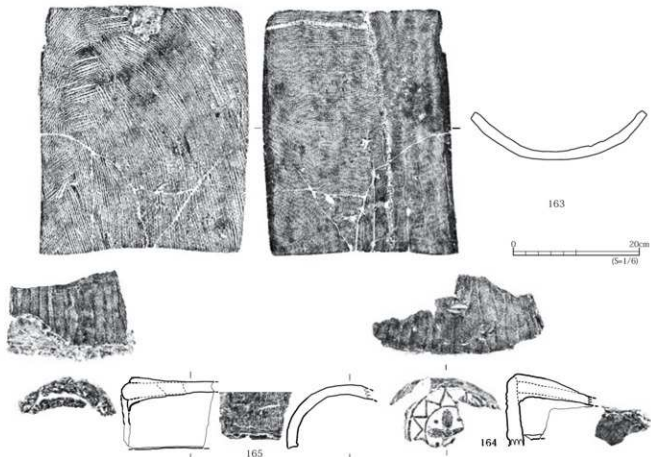
品	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	高さ	器高	特徴	写真図版	登録
155	土製品	4層						高さ：6.1 最大径：1.8 長方形の破片 面はナデで整えられている		1066
156	土製品	跡	跡部？破片					長：(6.2) 最大径：(4.0) 面取り後ナデ？ 整脚の破片？		778
157	土師器	環	輪出面	14.0	7.1	5.1		外：ロクロナデ→下磁子持ちケズリ 内：黒色処理		59-7 777
158	土師器	高坪	輪出面					ロクロナデ へらによる線文1条		776

第138図 SD2 河川跡 出土遺物 (15)



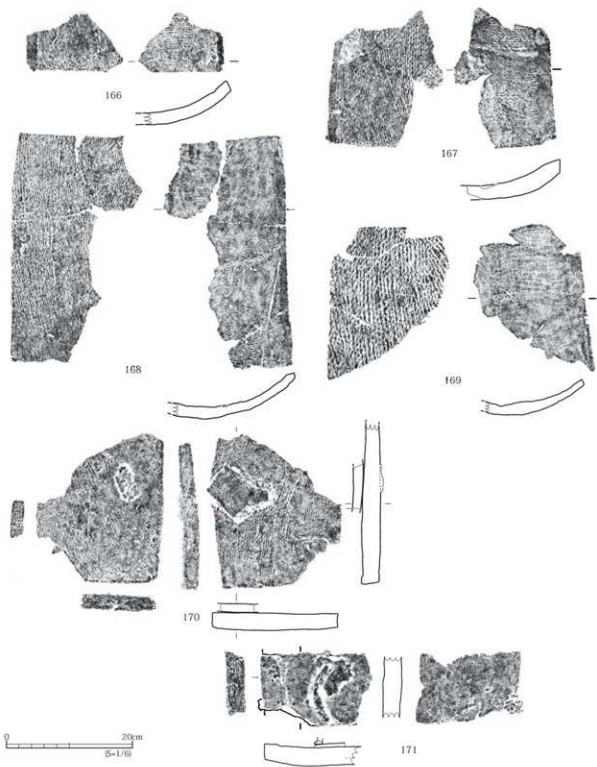
品	品名	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	登録
159	軒平瓦	II	輪出面	破片 平瓦 部欠面	【表当】表当面：ケズリ→無文 側面：焼印目→龍南文 段頭 長：(22.0) cm 広端幅：26.0cm 重量：2.0kg 凸面：焼印目 凹面：摺付面→布目 側端・小口：ケズリ	5Y6/1 灰		K45
160	平瓦	I	輪出面	1/2 広端 側のみ半分	周縁：ケズリ 表当裏：同心円文当て具面 表当接合のためのナデ 【裏瓦】凸面：ナデ 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y8/1 灰白	59-8	K29
161	軒丸瓦	I	大別1層	瓦当	広端部：26.5cm 凸面：焼印目→龍南文 凹面：龍南文 凹面：摺付面→布目→焼印目 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白	65-3	K30
162	平瓦	II	大別3層	1/3		5Y6/1 灰		K39

第139図 SD2 河川跡 出土遺物 (16)



品	部種	分類	遺積・層	残存	特徴	色調	写真図版	番号
163	平瓦	I	大別 4 層	完形	長：38.0cm 広端幅 27.5cm 狭端幅 25.5cm 重量：3.36g 凸面：繩印目 凹面：布目 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白	59-9	K31
164	軒丸瓦	II	大別 4 層	瓦当破片	貫縁：ケズリ 外区珠文が明り取られてる 瓦当裏：ナデ 丸瓦接合のための横ナデ 【丸瓦】凸面：縦方向ナデ 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y8/1 灰白	65-1	K32
165	軒丸瓦	III	大別 4 層	破片 瓦当面欠損	【丸瓦】凸面：繩印目→粘土付加→縦方向ナデ 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y8/1 灰白		K33

第 140 図 SD2 河川跡 出土遺物 (17)



No.	形状	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真図版	頁番号
166	平瓦	Ⅲ	大別4層	1/4	凸面：縄目白→潰れ・凹型台端部破 凹面：布目→縄目白 側端・小口：ケズリ	2.5Y6/1 黄灰		K35
167	平瓦	Ⅲ	大別4層	1/4	凸面：縄目白→潰れ 凹面：布目→縄目白 側端・小口：ケズリ	5Y6/1 灰		K36
168	平瓦	Ⅲ	大別4層	1/2	長：36.5cm 重量：1.5kg 凸面：縄目白→潰れ 凹面：布目→縄目白 側端・小口：ケズリ	2.5Y6/1 黄灰		K37
169	平瓦	I	大別1層・大別4層	1/4	長：24.0cm 凸面：縄目白(彫い縄目) 凹面：横線彫→布目 側端・小口：ケズリ	2.5Y8/1 灰白		K38
170	透孔瓦(礎?)	Ⅲ	大別4層	4/5	長：24.0cm 幅：20.0cm 厚さ：2.5cm 凸面：縄目白 突脚状破片付着 凹面：糸切端→溝(甲殻状)圧痕 須恵器残体破片継着(閉れ口は裏入れ前の縦断面) 両側面：縄目白 焼き台として転用したものか? 継着した須恵器残体破片も焼き台かもしれない	5Y8/1 陶灰	65-4	K34
171	甍板	Ⅲ	大別4層	破片	表：須恵器高台环高台部と遺体部破片継着(高台环が製品で遺体部破片は高さ調整の 接台) 裏：ナデ 焼台として転用 一側面と高台环破断面を深くほび全面に自然輪	5Y8/1 陶灰	65-2	K52

第141図 SD2河川跡 出土遺物(18)

【SX94 堆積層】(第 62・74 図)

7 区南西の丘陵南緩斜面に位置し、IV 層上面で検出した自然堆積した層である。SI62、SI90、SX92、SK93 と重複し、SI62、SI90 より新しく、SX92、SK93 より古い。

正確な分布範囲は不明だが、SK93 付近から SI60 煙道東側までの範囲で確認した。厚さは最大 0.4 m 残存する。堆積層は 4 層に分けられ、1 層は黒褐色砂質シルト、2・3 層は黒褐色シルト、4 層は炭化物粒を少し含む褐色シルトからなる。

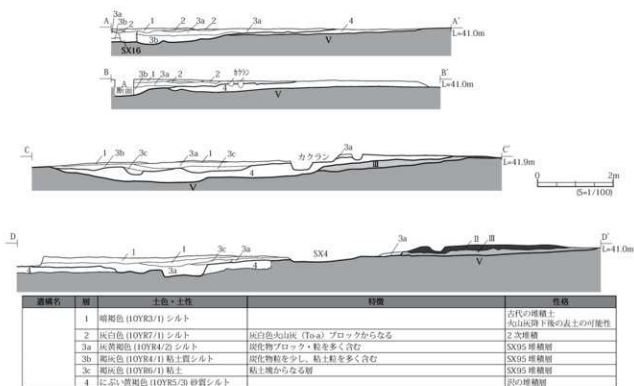
出土遺物は、須恵器・土師器が出土した。

【SX95 堆積層】(第 11・142・143～153 図・図版 22)

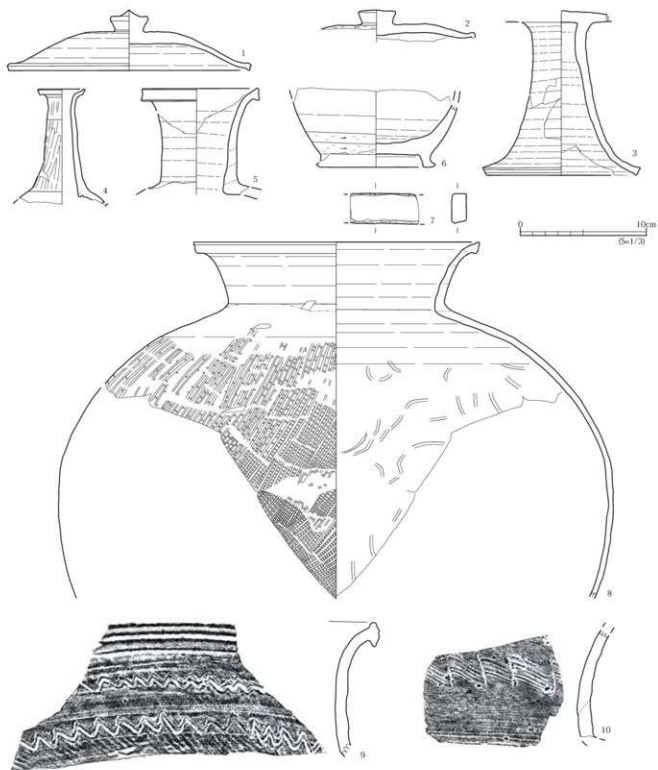
8 区中央に位置し、南西-北東方向の沢を埋めるように形成された遺物を含まない自然堆積層(第 142 図-4 層)上に自然堆積した層である。北東付近は灰白色火山灰(To-a)で覆われる。SX4、SK16、SK17、SD11 と重複しこれより古い。

範囲は、東西 10m、南北 27m に広がり、最大 0.4 m の厚さが残存する。堆積層は 3 層に分かれ、3a 炭化物ブロック・粒を多く含む灰黄褐色シルト、3b 炭化物粒を少し、粘土粒を多く含む褐色粘土質シルト、3c 粘土塊層の褐色灰色粘土からなる。

出土遺物には、土師器環、甕、甕、壺、須恵器環、蓋、高台杯、高坏、盤、鉢、長頸瓶、瓶、壺、甕、円面硯、赤焼土器、台付鉢、器台、獸脚や鈴などの土製品、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、鬼板などの道具瓦、埴がある。

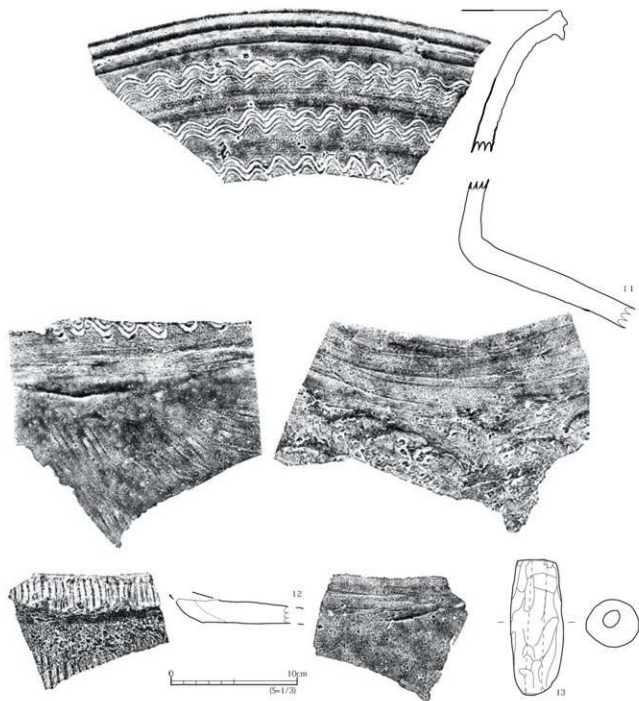


第 142 図 SX95 堆積層断面図



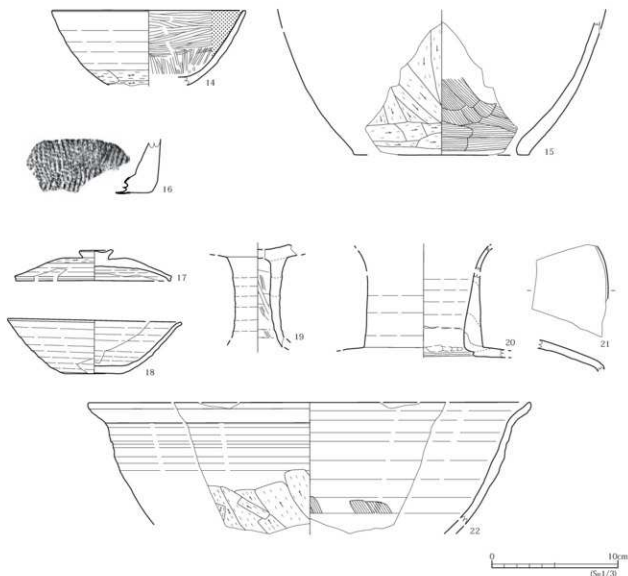
No	名称	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
1	深鉢器 蓋	1層	1/3	19.4			4.8	外内：ロクロナデ 火ダヌキ		934
2	深鉢器 蓋	1層	2/3				2.6	外内：ロクロナデ→天付回転ケズリ (焼き台転用か?)		1080
3	深鉢器 高环	1層	跡のみ					外内：ロクロナデ	60-1	938
4	深鉢器 水皿	1層	口縁部	3.7			9.0	外：ロクロナデ→ミガキ	60-2	953
5	深鉢器 長頸瓶	1層	口縁部	19.0			18.4	外内：ロクロナデ		935
6	深鉢器 長頸瓶	1層	底部-下部			19.4		外内：ロクロナデ 底部：回転ケズリ 外面に自然釉		933
7	深鉢器 瓶	1層	底部					ケズリ		1084
8	深鉢器 甕	1層	胴上下	22.2				外：口：ロクロナデ 胴：縦格子叩き 内：ロクロナデ 胴：無文当て具皿→ロクロナデ	60-3	930
9	深鉢器 甕	1層	口縁部					縞縞状文(縞回数2)2段 外：叩き→ロクロナデ 内：ロクロナデ		944
10	深鉢器 甕	1層	口縁部片					縞縞状文(縞回数6) 外内：ロクロナデ		1076

第143図 SX95堆積層 出土物(1)



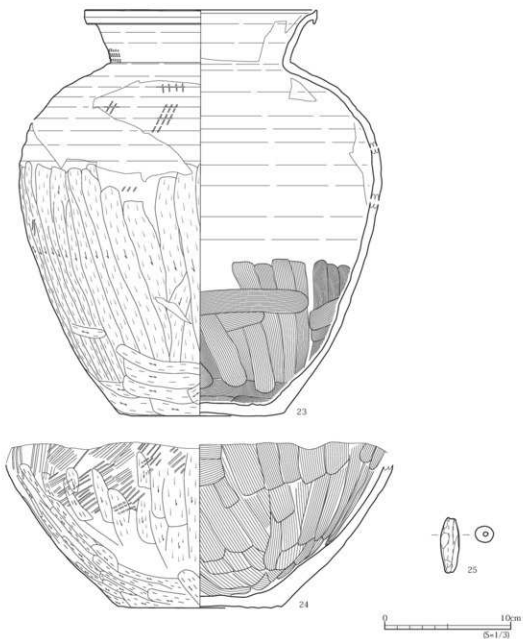
No	図柄	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
11	須恵期 大塊	1層	口縁部～胴部	68.2			残存高：12.2	帯指波状文（帯曲数4）3段 外：ロケロナデ 胴部平行凹き 内：口：ロケロナデ→ナデツケ 胴：同心円文当て具輪？		1079
12	須恵期 大塊	1層	胴部部片					外：平行凹き 口縁縁部部剥離している 内：ナデ		1081
13	土師	1層	器底完形					長：10.7 幅：4.2 重さ：163.4g		936

第144図 SX95堆積層 出土遺物（2）



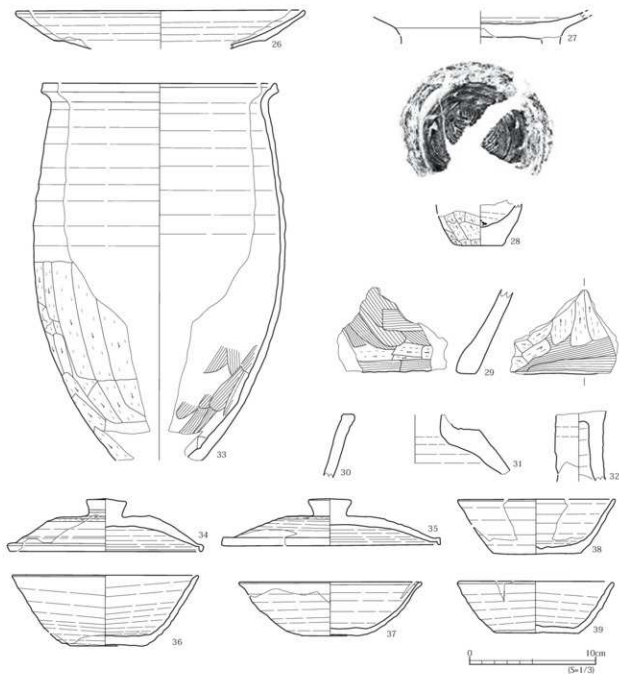
編	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図物	登録
14	土師器 片	1層	1/4	(15.2)			5.9~	外:ロクロナデーケズリ 内:黒色処理	61-1	1130
15	土師器 瓢	1層	底部					外:ケズリ 内:ナデ		1127
16	土師器 蓋	1層	底部付蓋					外:明金 内:ナデ		1126
17	須恵器 蓋	1層	3/4	12.0			2.5	赤タン 外内:ロクロナデー天井回転ケズリ	61-2	1102
18	須恵器 杯	1層	1/2	13.7	4.7	4.4		外内:ロクロナデ 底部:回転系切り石 外:赤ダズキ		1101
19	須恵器 高杯	1層	脚					外:ロクロナデ 内:ロクロナデ しぼり		937
20	須恵器 長頸瓶	1層	頸-肩					外内:ロクロナデ 接合3段明瞭		1103
21	須恵器 瓶	1層	肩-頸出函					外内:ロクロナデ 多口瓶の可能性		1147
22	土師器 鉢	1層	口縁部付蓋	(35.2)			10.4~	外:ロクロナデーケズリ 内:ロクロナデ		1129

第145図 SX95 堆積層 出土遺物(3)



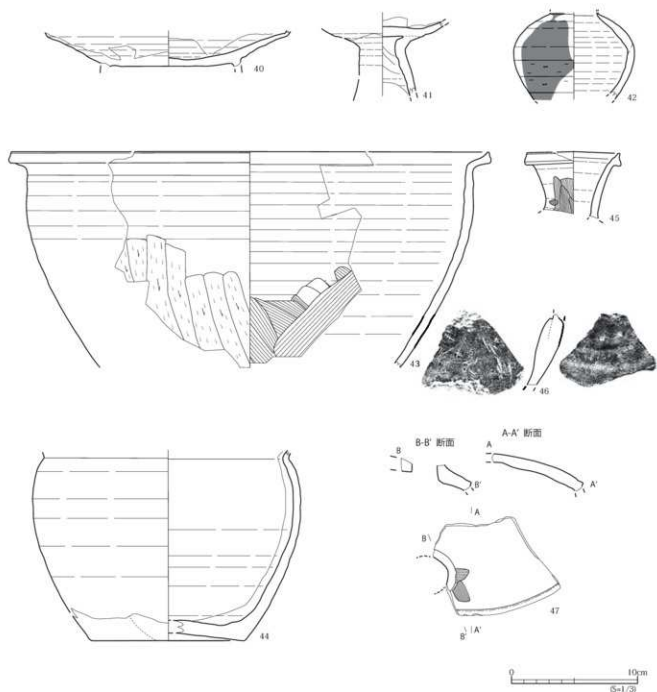
No.	図種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	胴高	特徴	写真図版	登録
23	須恵陶 甕	1層	3/4	18.3	13.1	32.2		外：甲斐→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	61-3	1151
24	須恵陶 甕	1層	底部-下部		12.8	13.1		外：平形甲斐→ケズリ 内：ナデ		947
25	土鏝	1層						長：4.4 幅：1.5 重さ：9.7g	61-4	955

第 146 図 SX95 堆積層 出土遺物 (4)



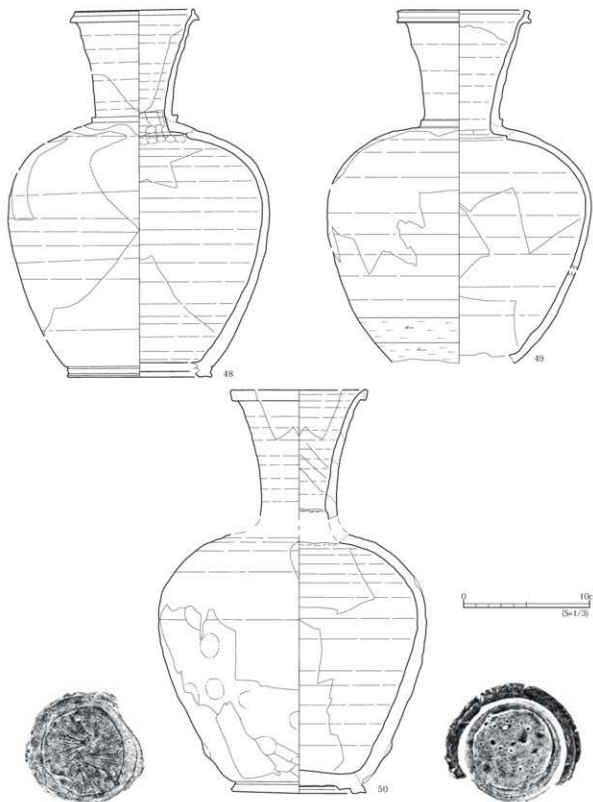
№	名称	遺体・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	巻録
26	赤焼土器 皿?	3層	口縁部片	(23.0)			3.0~	外内: ;ロクロナデ 31の器内の皿部分か?		1137
27	赤焼土器付鉢	3層	底部					高台割離痕明確		1133
28	土師器 壺	3層	底部		3.9	3.3~		外:ケズリ 内:ナデ 付着物	61-56	1138
29	土師器 壺	3層	底部					外内:ナデ ケズリ		1140
30	土師器 壺?	3層	口縁					外内:ロクロナデ 赤彩?		1136
31	赤焼土器 器台	3層	脚~台部							1141
32	土師器 高杯?	3層	脚					外:ロクロナデ 内:ナデ		1144
33	土師器 壺	3層	1/4	(18.4)	(6.8)	(29.9)		外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ		1142
34	須恵器 蓋	3層	3/4	15.2			4.1	平 外内:ロクロナデ→天井ケズリ 外:ロクロナデ→天井ケズリ 内:ロクロナデ		1115
35	須恵器 蓋	3層	2/3	17.2			3.7	平 外内:ロクロナデ→ケズリ 外:ロクロナデ→天井ケズリ 内:ロクロナデ		1116
36	須恵器 杯	3層	2/3	14.6	5.8	5.6		外内:ロクロナデ 底部:割離痕切り右		1112
37	須恵器 杯	3層	3/4	(14.4)	4.6	4.2		外内:ロクロナデ 底部:割離痕切り右		1117
38	須恵器 杯	3層	1/3	(12.2)	7.0	4.4		外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ		1123
39	須恵器 杯	3層	完形	12.4	6.6	4.1		外内:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	61-7	1124

第147図 SX95 堆積層 出土遺物(5)



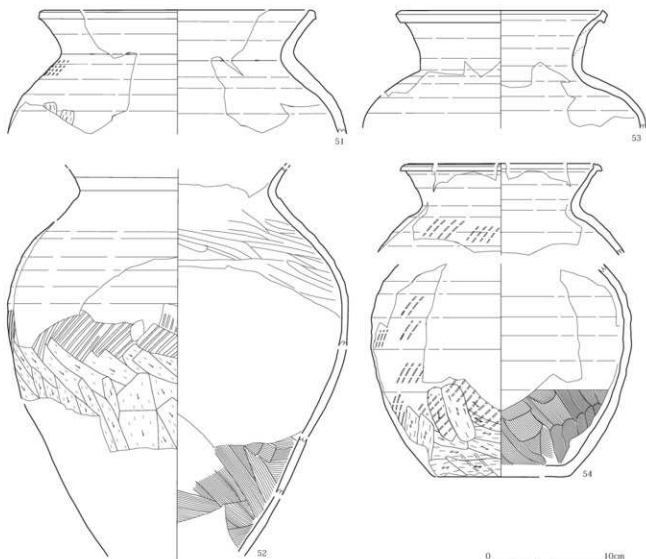
No	図例	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
40	須恵器 鬚	3層	2/3				2.8~	外内:ロクロナデ 底部:回転ケズリ		1108
41	須恵器 高坏	3層	脚上・坏下部		(9.6)			外内:ロクロナデ 脚:しぼり		1113
42	須恵器 壺	3層	胴 1/2				17.2~	外:ロクロナデ→回転ケズリ 内:ロクロナデ	61-8	1104
43	須恵器 鉢	3層	1/4	(37.8)				外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ→ナデ		1111
44	須恵器 鉢	3層	1/4		12.0	15.1~		外:ロクロナデ 下部は回転ケズリと見られるが軸付蓋のため不明瞭 内:ロクロナデ 全体に自然釉付着		1382
45	須恵器 瓶	3層	口縁部完形	7.4				外:ロクロナデ→一部ナデ 内:ロクロナデ 体部との接合面が斜め	61-9	1109
46	須恵器 破片	3層	胴部破片					外内:ロクロナデ 凹痕内側	62-1	1380
47	須恵器 瓶	3層	体部破片					外:ロクロナデ 穿孔部近くに一部ナデ 内:ロクロナデ 多口瓶の胴部破片か?	62-2	954

第148図 SX95堆積層 出土遺物(6)



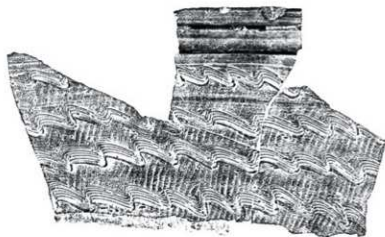
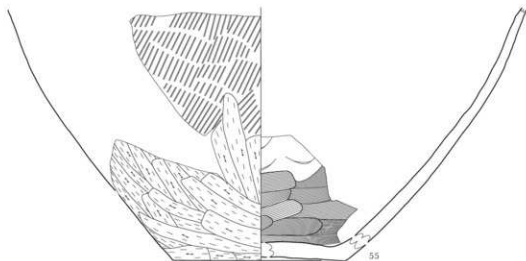
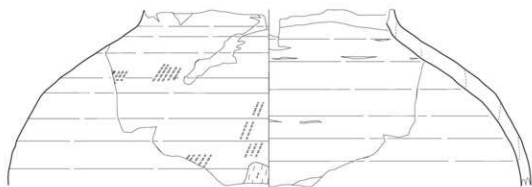
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図面	図録
48	須恵器 長頸瓶	3層	1/3	(9.2)	(11.4)	29.2	280	外内：ロクロナデ リング状突起 接合3段	62.5	1105
49	須恵器 長頸瓶	3層	2/3	9.9		280	外：ロクロナデ→回転ケズリ リング状突起 接合3段 内：ロクロナデ	62.6	1106	
50	須恵器 長頸瓶	3層	2/3	(10.8)	(21.2)	(10.7)	(32.0)	外：ロクロナデ 胴部発食 内：強ロクロナデ→しぼり 指ナデ	62.7	1121

第149図 SX95 堆積層 出土遺物 (7)



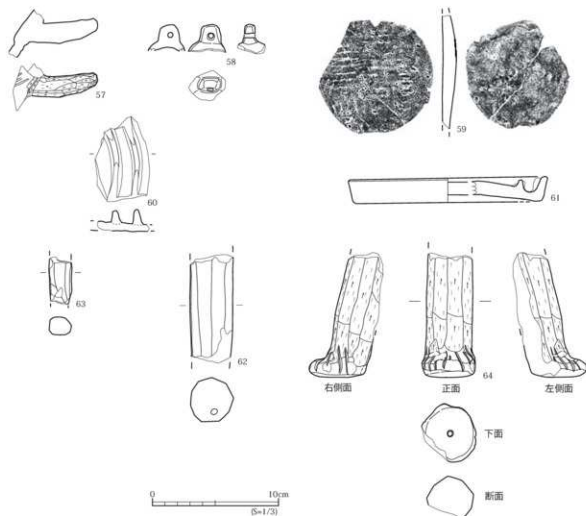
No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真図版	登録
51	須恵陶 甕	3層	口縁部	(21.2)			9.8～	外：平行細き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ 赤褐色	62-3	1131
52	須恵陶 甕	3層	1/3					外：平行細き→ロクロナデ→ケズリ 内：ナデ→ナデ	63-6	1107
53	須恵陶 甕	3層	4/5 口縁部	16.1			9.3～	内外：ロクロナデ		1119
54	須恵陶 甕	3層	1/3 口縁部 胴部～底部	(14.7)	(10.0)		7.3～ 16.9～	外：平行細き→ロクロナデ→ケズリ 内：ロクロナデ→ナデ	62-4	1122

第150図 SX95堆積層 出土遺物(8)



品	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	巻数
55	織造器 袋	3層	1/3				上 14.1 下 20.1	胴部往(推定) 20.9 外: 上: 平行印子→ロクロナデ 下: 平行印子→ケズリ 内: 上: ロクロナデ 下: 無文当て具袋→ロクロナデ 赤褐色 縞織成状文(縞回数6) 外: 平行印子→ロクロナデ 内: ロクロナデ		1118
56	織造器 袋	3層	口縁部						63-5	1100

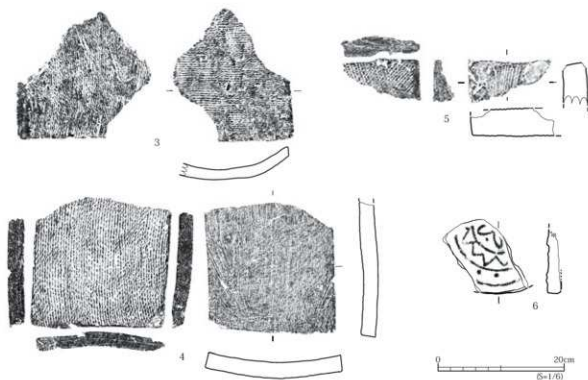
第151図 SX95堆積層 出土遺物(9)



0 10cm
 (5=1/3)

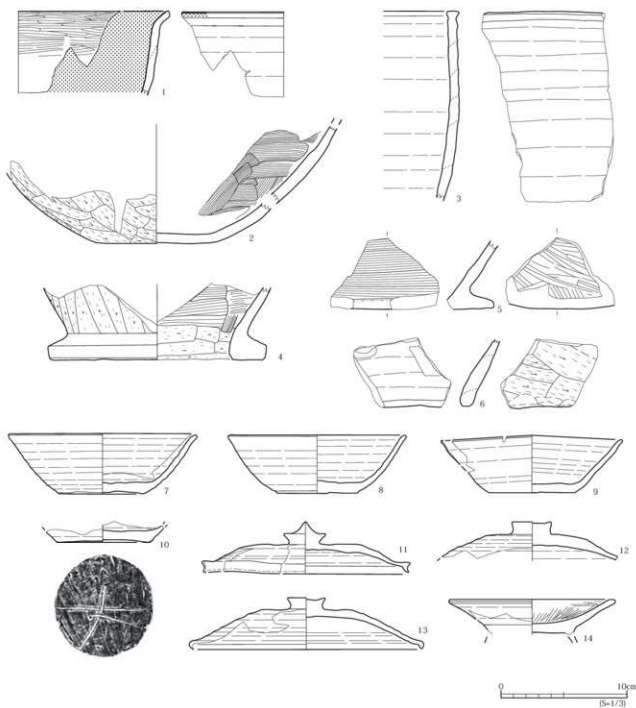
No	品名	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
57	須古周 轆?	3層	把手					把手:ケズリ 体部:叩き→口クロナデ		940
58	土製品 土踏	3層	紐					残高:2.1	63-1	1114
59	須古周	3層	体部破片					外:叩き 内:十字 筋面正裏 裏面筋面? 筋面? 筋面?		1381
60	須古周 円面破	3層	破片					溝2条 色調:明黄褐~赤褐色	63-2	1120
61	須古周 円面破	3層	1/6	115.08					63-3	950
62	土製品	3層						棒状品		1135
63	土製品 腰脚	3層	腰脚?破片					長さ:0.60 最大径:3.4 面取り残ナデ		1110
64	土製品 腰脚	3層	腰脚破片					長さ:0.80 最大径:4.3 ケズリ→一部ナデ→沈線(足指部) 下面(足裏) 中央に径5mmの穴有り	63-4	951

第152図 SX95堆積層 出土遺物(10)



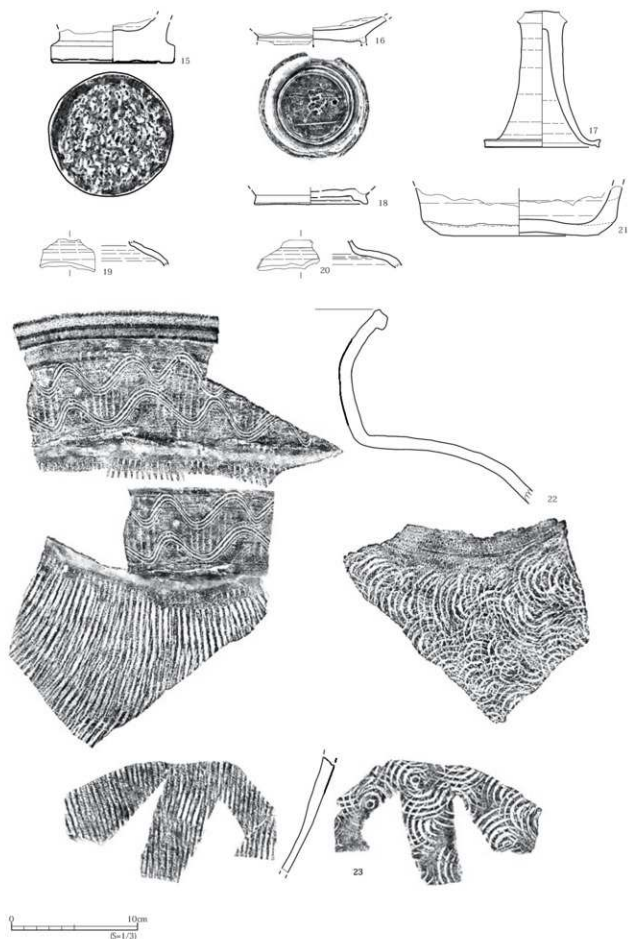
No.	品名	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	厚真四角	瓦番号
1	平瓦	Ⅱ	1層	1/3	凸面：縄目→浪れ・凹型台端部破 凹面：投付痕→布目→叩目 側端・小口：ケズリ	5Y6/1 灰		K46
2	道具瓦 (野斗瓦?)	Ⅰ	1層	1/2	長：(21.0)cm 幅：21.0cm 厚さ：2.5cm 凸面：縄目 凹面：糸切 痕→布目 側端・小口：ケズリ	5YR8/2 灰白		K27
3	道具瓦(碑?)	Ⅱ	3層	破片	厚さ：3.2cm 凸面：縄目 凹面：糸切痕→布目	7.5YR6/1 灰		K28
4	軒丸瓦	Ⅲ	3層	瓦当破片	周縁：ケズリ 瓦当裏割落	7.5YR7/6 碧		K41

第153図 SX95堆積層 出土遺物(11)

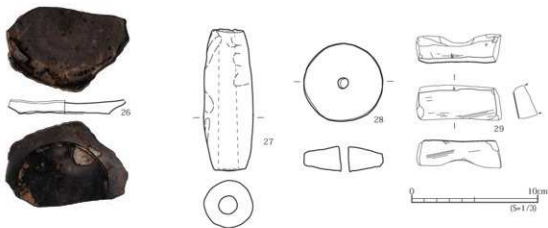
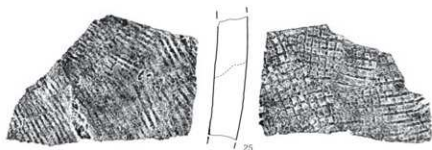
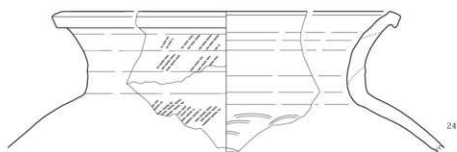


品	品名	遺構・期	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真掲載	登録
1	土師器 鉢	7区焼出面	口縁部破片					外：ロクロナデ 内：黒色処理 残存高7.3		1272
2	土師器 鉢?	7区焼出面	底部片		9.6			*外：体上部ナデ 体下部ケズリ 内：ナデ 底部：ナデ→ミガキ 体部は大きく外傾する*		1274
3	土師器 甌	7区焼出面	口縁部破片					外内：ロクロナデ		1273
4	土師器 甌	6区南棟出面			(17.0)	6.0-		*胎土：密 焼成：良好 外：ケズリ→ナデ 内：ヘラナデ (ハケヌ) →ケズリ*		705
5	土師器 甌	6区焼出面						胎土：密 焼成：良好 外：ナデ 内：ミガキ		706
6	土師器 甌	7区焼出面	底部破片					外：ヘラケズリ 内：ロクロナデ		1270
7	須恵器 杯	7区焼出面	1/2	14.7	6.8	4.8		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り一筋のナデ		1361
8	須恵器 杯	7区焼出面	1/2	(14.2)	6.4	4.6		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り無調整 内面に垂ね焼き痕		1281
9	須恵器 杯	7区焼出面	1/3	(14.4)	6.8	4.6		外内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ		1288
10	須恵器 杯	7区焼出面	底部		7.3			外内：ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ「上」?ヘラ掻き		1343
11	須恵器 蓋	7区焼出面	3/4	16.3	4.1			横まみ：宝成とんがり 外内：ロクロナデ→天付返回転ケズリ		1284
12	須恵器 蓋	7区土器集中	2/3	(14.2)	3.1-			横まみ：平 外内：ロクロナデ 内面に垂ね焼き痕		1290
13	須恵器 蓋	7区焼出面	3/4	(18.2)	4.2			横まみ：ボタン 外内：ロクロナデ 内面に垂ね焼き痕		1283
14	須恵器 高台箱	7区焼出面	1/3	(13.0)	2.8-			外：ロクロナデ 内：黒色処理 摩滅著しい		1271

第154図 遺構検出面 出土遺物(1)

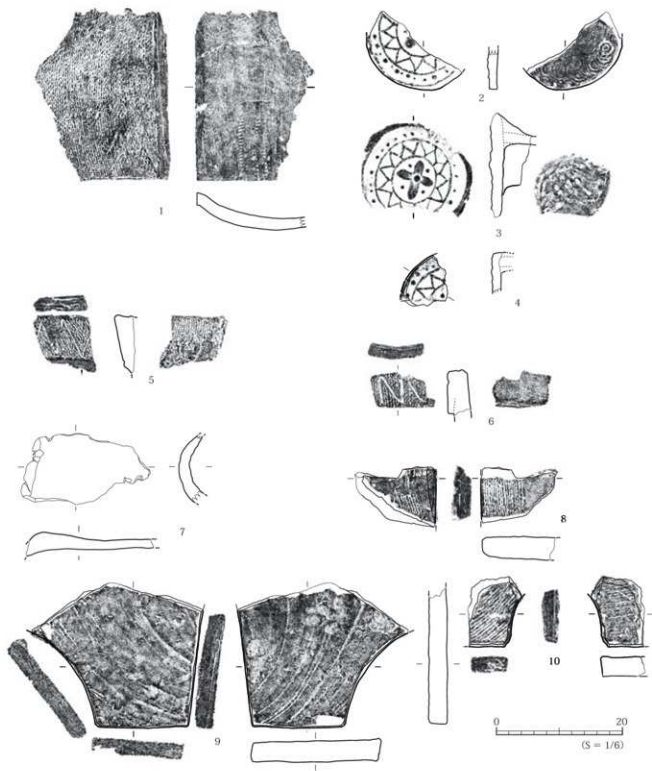


第 155 図 遺構検出面 出土遺物 (2)



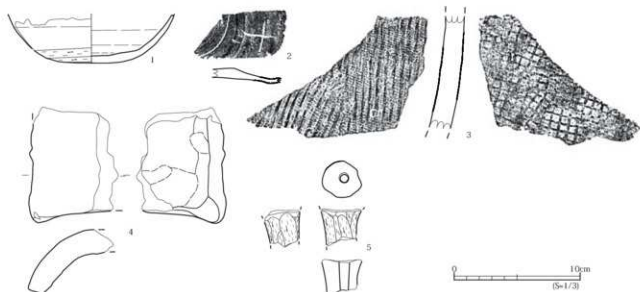
No.	部種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	登録
15	須恵器 钵鉢	7区検出面	胴部下～底部			9.4		外内：ロクロナデ 底部：外縁部ナデ→外縁部を削し縁区工具で刺突を密に施す ハチの渠 内：ロクロナデ 底部：同心ヘラケズリ→高台張り付け →ロクロナデ「二」ウヘラ掻き	66-2	1340
16	須恵器 高台坪	7区検出面	胴部下～底部							1341
17	須恵器 高坪	7区検出面	胴部			9.1	10.8	外内：ロクロナデ 底部欠損		1282
18	須恵器 長頸瓶	6区中央検出面	底部			(8.8)		大口とみられる		704
19	須恵器 壺	7区検出面	胴部片					外内：ロクロナデ		1275
20	須恵器 壺	7区検出面	胴部片					外内：ロクロナデ		1276
21	土師器 甕	7区検出面	底部			(12.7)		外内：ロクロナデ 底部：外内：ナデ		1344
22	須恵器 甕	8区東側検出面	口縁部～胴上部					断面状況文(歯状敷3)2段 外：口：叩き→ロクロナデ 胴：平行叩き 内：口：ロクロナデ 胴部無文当て具面 No.945と接合		942
23	須恵器 甕	7区検出面	胴部片					外：菱格子叩き 内：同心円文当て具面	66-1	1365
24	須恵器 甕	9区I～Ⅲ層		(26.0)		11.1		外：平行叩き→口縁部ロクロナデ 内：ロクロナデ 胴部無文当て具面→ナデ		1088
25	須恵器 甕	9区I～Ⅲ層						外：平行叩き 内：格子当て具面		1083
26	専用焼付	7区検出面						外内：断面面蝕	66-3	1483
27	土師	7区検出面						長さ：11.3 最大幅：3.9 孔径：最大1.6 最小0.75 重さ：162g 胴部ナデ(不浮腫) 両端面ヘラケ文		1358
28	土製品 紡錘車	8区検出面						長：6.2 幅：6.3 厚さ：2.0 重さ：76.4g		940
29	石製品 砥石	8区検出面						凝灰岩	70-1	1091

第 156 図 その他 出土遺物



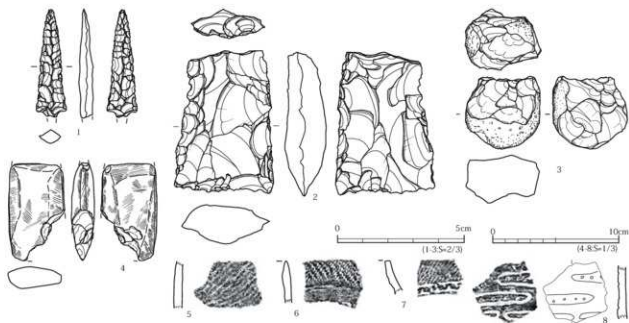
No.	品名	分類	遺構・層	残存	特徴	色調	写真掲載	凡番付
1	平瓦	Ⅱ	1層	1/4	凸面：縄印キ→浪石・凹型台座部痕 凹面：縄目痕→布目→縄目 側端・小口：ケズリ	7.5Y8/1 灰白		K21
2	軒丸瓦	I	歯縁出面	瓦当破片 下平のみ	歯縁：ケズリ 瓦当裏：同心円文当具面	7.5Y8/1 灰白	64-1	K12
3	軒丸瓦	Ⅱ	1層	3/4 瓦当	瓦当裏：縦方向のナデ 【丸瓦】凸面：ナデ (割落) 凹面：布目→接合ナデ	7.5Y6/1 灰	64-2	K42
4	軒丸瓦	Ⅱ	1層	1/4 瓦当破片左上	歯縁：ケズリ 瓦当裏：ナデ 丸瓦接合面	7.5Y8/1 灰白		K40
5	軒平瓦	I	1層	破片 平瓦部分欠損	【瓦当】瓦当面：ケズリ→無文 側面：縄目→縦面文 段帯	5Y6/1 灰		K43
6	軒平瓦	Ⅱ	1層	破片	【瓦当】瓦当面：ケズリ→無文 側面：縄目→縦面文 段帯	5Y6/1 灰		K44
7	軒丸瓦字	Ⅲ	1層	1/3	全面摩滅により調整不明 瓦当部割落か?	10YR5/2 灰黄相	64-3	K23
8	瓦板	Ⅲ	1層	破片	表：縄目→ナデ 裏：布目→縄目	5Y6/1 灰		K26
9	瓦板	I	1層	1/4	表：糸切痕 裏：糸切痕 側端：ケズリ	2.5Y8/2 灰白	64-4	K24
10	瓦板	Ⅱ	1層	破片	表：縄目 裏：糸切痕→布目 側端：ケズリ	2.5Y6/1 黄灰		K25

第157図 SX95堆積層 その他出土瓦



No.	品種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図録	登録
1	陶器器環(丸底)	7区表採	1/3					内外:ロクロナデ 底部:ヘラ切り?一回転ケズリ 丸底ケズリの跡 底成は土師質、製作技法は須恵器 色調:橙		1407
2	陶土器 蓋	6区カクラン						「上」ヘラ面き		710
3	陶土器 甕	8区表採	銅部片					外:縦格子印き 内:格子当て具痕		1090
4	土製品	8区カクラン	破部破片					長さ:10.1 幅:(7.1) 厚さ:2.0 変形?		1089
5	土製品?	7区カクラン溝	破片					残存長:2.9 残存幅:3.2 孔幅:上0.8 下0.65 面取り状にケズリ 但し砂粒の動きは目視で確認できない 中空 磨面か?		1339

第158図 表採・カクラン 出土遺物



No.	品種	遺構・層	残存	長mm	幅mm	底径	重量	特徴	写真図録	登録
1	石鏃	SD2 3層		42	12		1.9	玉鏃	69-5	51
2	石鏃	SX95 3層		56	39		36.1	柱貫石製 両面加工、素材断面が一部残存	69-6	55
3	石鏃	SX95 3層		29	29		19.3	黒曜石 石核 打面が一面、割縁は両面一方、打面から遠い割縁は古く円縁深縁時にはすでに割れていたと考えられる	69-7	54
4	磨製石斧	SX8 増積土		77	43		87.5	緑色凝灰岩 対部・基部欠損、側面面取り。研磨は丁部で単位が縦方向上体	69-8	53
1	縄文土器	S62 2層							69-1	1443
5	縄文土器	SI22 3層						縄文RL	69-2	387
7	縄文土器	7区 横出面						縄文LR	69-3	1444
8	縄文土器	7区 斜面横出面						沈殿、割突	69-4	1445

第159図 石器・縄文土器

3. 彦右工門橋窯跡小括

1. 遺物

(1) 出土土器の器種

土師器/ 坏、埴、鉢、甕、甗、須恵器/ 坏、高台坏、盤、高坏、蓋、長頸瓶、横瓶、鉢、壺、甕、碗、赤焼き土器/ 台付鉢などの器種がある。それらのうち、全容の判明するものを取り上げて分類する。

【土師器】

1 [坏]

坏状の器形である。いずれもロクロ調整で、内面黒色処理である。底部切離し・調整は、回転ケズリと回転糸切りがある。口径 10～16cm、器高 3～6cm、底径 5～8cm 前後である。

2 [高台皿]

皿状で高台が付く。内面は黒色処理される。口径 13cm、器高 3～4cm、底径 7～8cm 前後である。

3 [甕]

器形から A 長胴形、B 鉢形に分けられる。長胴形の甕 A の調整は、外面が胴上部がロクロナデ、胴中～下部がケズリで、内面が上部がロクロナデ、中部～下部がナデである。同形のは口径 20～22cm、器高 32～37cm、底径 6～8cm 前後の大形品を基本とする(10)が、口径 15～16cm、器高 16～19cm、底径 6cm 前後の中形品(11)、口径 13cm、器高 15cm、底径 7cm の小形品(12)がある。鉢形の甕 B は口径 14～15cm、器高 11～13cm、底径 6～8cm 前後のものが多いが、口径 9～10cm、器高 6～7cm、底径 4～6cm の小形品がある。調整は内外面ロクロナデで、外面下端付近ケズリを基本とするが、ケズリのない資料もある。

4 [その他]

埴、鉢、甗のほか、須恵器蓋 A と同形の土師器蓋、須恵器高台坏と同形の土師器高台坏、須恵器盤と同形の土師器盤がある。須恵器と同形のは、いずれも内面黒色処理である。

【須恵器】

5 [坏]

坏状の器形である。底部切離し技法は、ヘラ切り、底部回転糸切りがある。再調整は手持ちケズリ、ナデがみられる。ヘラ切り後のナデは明瞭なもの、不明瞭なものがある。回転糸切りは、確認できたものは全て右回転である。まれに糸切り後にナデを施されたものがある。ほかに把手が付く双耳坏(25)、通常のものより小形のものがある。口径 11～16cm、器高 3～6cm、底径 5～9cm 前後である。

6 [高台坏]

高台の付いた坏である。口径 10～18cm、器高 5～9cm、底径 6～10cm 前後である。

7 [盤]

浅い皿状の坏部に高台がつく。体部に稜線をもち、口縁端部に折り返しをもつ。口径 14～17cm、

器高3～4cm、底径8～10cm前後である。

8 [高坏]

裾の開く脚に皿状の坏部をもつ。口径25cm、器高19cm、脚端部径16cmのものがある。

9 [蓋]

A：天井部から体部が外傾して口縁端部に折り返しをもつもの、B：天井部と体部がほぼ直角に屈曲するものがある。蓋Aの摘みは、擬宝珠、扁平な擬宝珠、扁平、ボタン状がある。口径12～23cm、器高3～6cm前後である。蓋Bの摘みには擬宝珠と擬宝珠が重なった相輪状の形態がある。口径13～18cm、器高5～7cmである。

10 [長頸瓶]

長い頸部をもつ瓶である。口径は大小に区分できる。口径の大きなものは頸部にリング状凸帯をもつものがある。口径の小さいものはいわゆる水瓶である。ほかに多口瓶がある。

11 [その他] 横瓶、鉢、甗、搦鉢、壺、甕、碗（円面碗と風字碗）、托などがある。

(2) 土器の年代

土器の年代を検討する。竪穴建物跡の床面から出土した土器と土師器焼成遺構の埋戻し土から出土した土器を1.遺構に伴う一括性の高い遺物として取り上げる。ほかに2.自然堆積土などからまどまって出土した遺物として、竪穴建物跡の堆積土や河川跡から出土した土器も検討する。対象とした遺構から比較的多く出土している土師器坏、須恵器坏、高台坏を、主な検討対象として用いる（第161図）。

1. 遺構に伴う一括性の高い遺物

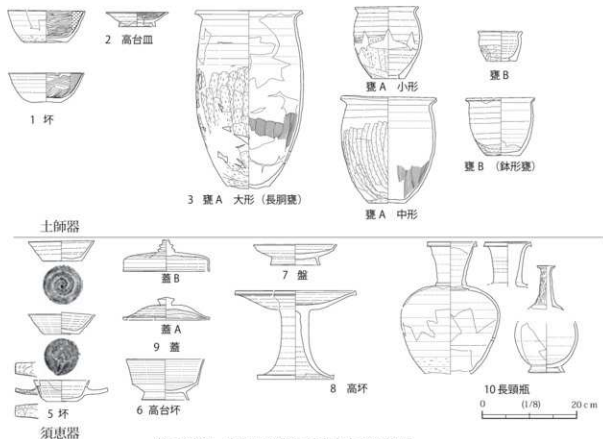
【SI22 竪穴建物跡床面出土土器】須恵器坏1点、高台坏1点が出土した。須恵器坏の器形は逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施す。高台坏は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひらく。

上記のような特徴をもつ須恵器坏・高台坏は、彦右工門橋窯跡SK1土坑（宮城県教育委員会1996）、名生館官衙遺跡SK1166（古川市教育委員会1990）などから出土している。彦右工門橋窯跡SK1土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡SK1166が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI22 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI23 竪穴建物跡床面出土土器】土師器甕が2点、須恵器坏3点出土した。須恵器坏の器形は、逆台形である。底部の切離し・調整は、回転系切り後にナデを施すもの1点、回転系切無調整が1点、ヘラ切り無調整が1点ある。

上記のような特徴をもつ須恵器坏は、加美町壇の越遺跡SI2224住居跡、SI2289住居跡、SI2477住居跡（加美町教育委員会2005）などから出土している。年代については9世紀中葉～後葉と考えられている。したがって、SI23 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI24 b 竪穴建物跡床面出土土器】土師器坏1点、土師器甕片1点、須恵器坏4点、須恵器蓋1点が出土した。土師器坏の器形は逆台形で、内面黒色処理である。底部の切離し・調整は回転ケズリで、



第 160 図 彦右工門橋窯跡出土土器分類図

体下部までみられる。須恵器環の器形は逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施すものが2点、ヘラ切り無調整が2点ある。蓋は天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器環、蓋は、彦右工門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、土師器環、須恵器環、蓋は名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右工門橋窯跡 SK 1 土坑が 8 世紀後半～9 世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が 8 世紀末頃と考えられている。したがって、SI24 b 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI25 竪穴建物跡床面出土土器】土師器環 3 点、土師器甕 2 点が出土した。土師器環の器形は逆台形で、内面黒色処理である。底部の切離し・調整は回転ケズリ 2 点、回転糸切り 1 点である。前者は、回転ケズリが体下部までみられる。

上記のような特徴をもつ土師器環は、西手取遺跡第 4 号住居跡（宮城県教育委員会 1980）、佐内屋敷遺跡第 28 号住居跡（宮城県教育委員会 1983）などから出土している。佐内屋敷遺跡第 28 号住居跡の環は、糸切りと手持ちケズリであり、第 II 群土器と整理され、9 世紀中葉以降の年代が与えられている。回転ケズリの SI25 は、これらと比べるとやや後出の特徴をもつ。後述するように SI25 竪穴建物跡より新しい SI26 竪穴建物跡床面から出土した土器が 9 世紀中葉～後葉の年代が考えられることから、SI25 竪穴建物跡床面出土土器はそれよりも新しい 9 世紀後葉以降と考えられる。

【SI26 竪穴建物跡床面出土土器】須恵器環 5 点が出土した。須恵器環の器形は、逆台形（第 40 図 3・5・6）、口径に対して底径が小さいもの（第 40 図 1・2）がある。底部の切離し・調整は、回転糸切

りが3点、ヘラ切り無調整が1点、ヘラ切り後にナデを施すものが1点ある。

上記のような特徴をもつ須恵器環は、加美町壇の越遺跡 SI2224 住居跡、SI2289 住居跡、SI2477 住居跡（加美町教育委員会 2005）などから出土している。年代については9世紀中葉～後葉と考えられている。したがって、SI26 竪穴建物跡床面出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI78 竪穴建物跡床面出土土器】土師器鉢1点、須恵器環1点、高台環1点、高環1点、蓋4点、壺1点、甕片が出土した。

須恵器環の器形は、逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施す。蓋はつまみが握宝珠形で、天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器環、蓋は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI78 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SX15 1～3層出土土器】

土師器焼成遺構を埋め戻した人為堆積層から一括して、土師器甕2点、須恵器環5点、高台環5点、蓋2点、鉢2点などが出土した。須恵器環の器形は逆台形で、切離し技法はヘラ切り後にナデを施すものが主体である。高台環は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひろく。蓋はつまみが握宝珠形で、天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器環、高台環、蓋は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI78 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

2. 自然堆積土等からまとまって出土した遺物

【SI29 竪穴建物跡堆積土出土土器】床面から土師器甕が2点出土したが、ほかに検討に耐えうる土器が出土していないため、堆積土1～7層から出土した土器も検討する。土師器環2点、高台環1点、蓋1点、鉢2点、須恵器環22点、高台環14点、盤2点、高環1点、蓋11点を図化した。土師器環はロクロ成形で内面黒色処理である。器形が分かるものは出土していない。須恵器環の器形は逆台形で、切離し技法・調整はヘラ切り後にナデを施すものを主体として、再調整（手持ちケズリ）、ヘラ切り無調整がある。底部糸切りのものは22点中、2点ある。また、1点は双耳環である。高台環、盤は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひろく。蓋は天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器環、高台環、蓋は、彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右エ門橋窯跡 SK 1 土坑が8世紀後半～9世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166が8世紀末頃と考えられている。したがって、SI24 b 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SI60 竪穴建物跡 K 1 土坑出土土器】K 1 土坑の自然堆積土から土師器高台皿 2 点、床から土師器甕 2 点、須恵器環 1 点が出土した。須恵器環の器形は口径に対して底径が小さく、器高が高いもので、底部の切離し・調整は回転系切りである。

上記のような特徴をもつ須恵器環は、壇の越遺跡 SI2227 住居跡など、高台皿は、壇の越遺跡 SI2222B 住居跡（加美町教育委員会 2005）などから出土している。年代については、壇の越遺跡 SI2227 住居跡が 9 世紀後葉、壇の越遺跡 SI2222B 住居跡が 10 世紀前葉と考えられている。したがって、SI60 竪穴建物跡出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SD2-3 層出土土器】

河川の自然堆積層から土師器碗、鉢、甕、須恵器環、高台環、盤、高環、瓶類、壺、甕が出土した。須恵器環は器形が逆台形と口径に対して底径が小さいものがある。底部の切離し・調整は、前者がヘラ切り後にナデを施すものと回転系切り、後者が回転系切りである。高台環、盤は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひろく。

上記のような特徴をもつ須恵器環、高台環は、壇の越 SI2224・2289・2477 出土土器（加美町教育委員会 2005）がある。年代的には 9 世紀中葉～後葉に位置付けられている。したがって、SD2-3 層出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SD2-4 層出土土器】

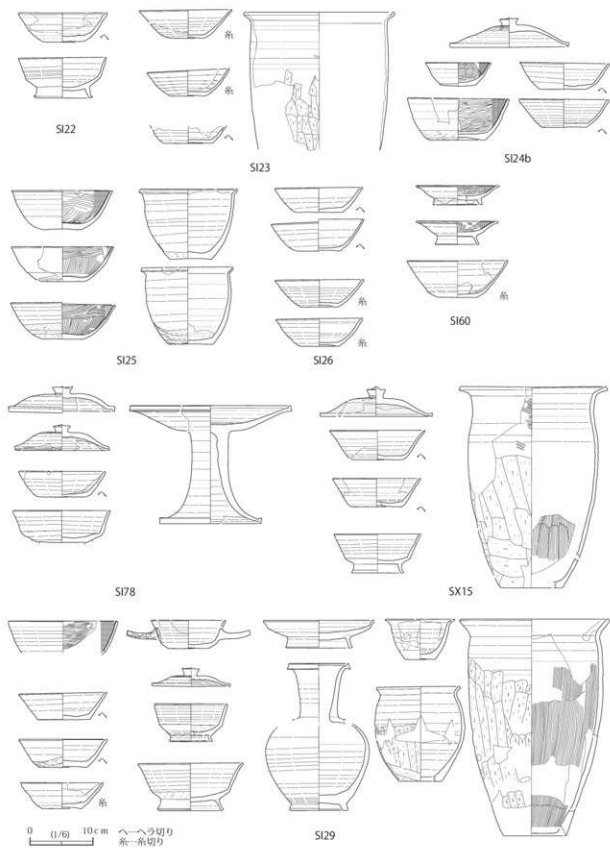
河川の自然堆積層から土師器碗、碗、盤、須恵器環、高台環、盤、高環、蓋、甕が出土した。須恵器環は器形が逆台形で、切離し技法はヘラ切りを主体として、ヘラ切り後にナデや手持ちケズリを施す。高台環、盤は体部に稜をもち、高台は「ハ」字状にひろく。蓋は口径から高台環や盤とセットになる。蓋はつまみが擬宝珠形で、天井部から丸みをもって口縁部にいたり、端部は下に折れ曲がる。

上記のような特徴をもつ須恵器環、高台環、蓋は、彦右工門橋窯跡 SK 1 土坑（宮城県教育委員会 1996）、名生館官衙遺跡 SK1166（古川市教育委員会 1990）などから出土している。彦右工門橋窯跡 SK 1 土坑が 8 世紀後半～9 世紀初頭頃、名生館官衙遺跡 SK1166 が 8 世紀末頃と考えられている。したがって、SD2-4 層出土土器の年代もその頃に位置付けられる。

【SX95 堆積層出土土器】

沢の自然堆積層 4 層から土師器甕、甕、須恵器環、盤、高環、蓋、鉢、長頸瓶、壺、甕、赤焼き土器台付鉢、器台などが出土した。須恵器環の器形は、逆台形、口径に対して底径が小さいものがある。底部の切離し・調整は、前者がヘラ切り後にナデ、後者が回転系切りである。赤焼き土器は大形の器種が複数出土している。

上記のような特徴をもつ須恵器環は、これまで検討してきた環のうち、新旧どちらの特徴も認められる。赤焼き土器は壇の越遺跡 SI2222B 住居跡など 10 世紀前葉と考えられる遺構で出土しているほか、多賀城では第 61 次調査鴻の池第 10 層（多賀城跡調査研究所 1992）から須恵系土器の大形の器種が出土しており、10 層が灰白色火山灰の下層であることと、土器の特徴の検討とを合わせて 9 世紀後半代と考えられている。



第 161 図 年代の検討資料

(3) 瓦埴類についての総括

今回、彦右エ門橋竈跡の調査で出土した瓦埴類は、竈跡に伴う製品ではなく、竈穴建物跡のカマド補強材や周溝蓋として転用されたもの、もしくは溝・土坑埋め土から出土したもので、いずれも二次的な使用・出土状況からなる資料である。したがって以下では、出土状況と瓦埴の種類について整理し、軒瓦類について若干の検討を加えることでまとめたい。

【出土状況】

転用された瓦：SI24・78 竈穴建物跡では、カマド袖の補強材として丸瓦・軒丸瓦が転用されていた。SI24 では玉縁を欠く丸瓦 2 点 (K17・18)、SI78 では丸瓦 (K14) と軒丸瓦の瓦当面を欠いた丸瓦部 (K15) が各 1 点使用されていた。いずれもカマド袖の前端を抑えるように、丸瓦の凸面を外側に向け玉縁部を上にした状態で設置されていた。SI29 竈穴建物跡では周溝の蓋として丸瓦 10 点、平瓦 1 点が転用されていた。

その他の瓦：SI22・90 竈穴建物跡、SK14・15・93 土坑、SD2 溝跡、等の遺構埋土や基本層（北区 I～VII 層）等から瓦埴類が出土しているが出土状況にまともりはみられない。

これらの瓦埴類について、種別や残存状態を指標として抽出し、丸瓦 13 点、平瓦 13 点、軒丸瓦 10 点、軒平瓦 4 点、鬼板 5 点、不明道具瓦 5 点、計 50 点を図示した。出土状況は表 3 のとおりである。

表 3 図示した瓦埴類の出土状況

遺構	時期	丸瓦		平瓦		軒丸瓦			軒平瓦		鬼板			不明道具瓦		合計	
		I	II	I	II	I	II	III	I	II	I	II	III	I	II		
SI22	II						1									1	
SI24	I～II	2														2	
SI29	II	4	6		1											11	
SI78	I	1		1				1								3	
SI90	I～II								1	1					1	3	
SK14				1												1	
SX15				1												1	
SK93															1	1	
SD2				3	4	1	1	1		1			1		1	13	
SX95 1・3 層					1			1							1	1	4
検出面					1	1	3		1	1	1	1	1			10	
合計		7	6	6	7	2	5	3	1	3	2	1	2	1	4	50	

【瓦の種類】

丸瓦：図示資料は 13 点で、いずれも玉縁付きである。焼成・技法から 2 種類が識別される

I：灰白色で軟質のもの：7 点 (K8・9・10・11・14・17・18)

II：灰色で硬質のもの：6 点 (K1・2・4・5・6・7)

平瓦：図示資料は 13 点で、焼成・整形調整技法から 2 種類が識別される

I：灰白色で軟質 凹面に竹を編み込んだ摸骨状の圧痕がみられるものがある

：6 点 (K16・29・31・38・49・50)

Ⅱ：灰色で硬質 凹面が縄目による仕上げのもの

：7点 (K3・21・35・36・37・39・46)

軒丸瓦：図示資料は10点で、このうち瓦当面の残るものが7点ある。

瓦当文様はすべて同範の一種類のみであるが、瓦当背面の調整に以下の2種類がある。

Ⅰ：同心円アテ具痕跡があるもの：2点 (K12・30)

Ⅱ：ナデ仕上げによるもの：4点 (K13・32・40・42)

Ⅲ：瓦当背面の調整が不明のもの：4点 (K15・23・33・41)

軒平瓦：図示資料は4点で、瓦当文様はいずれも無文。

顎面は鋸歯文の1種類のみ。段顎部の幅に違いがあり2種類に分かれる。

Ⅰ：顎の幅が広い(8cm)もの：1点 (K43)

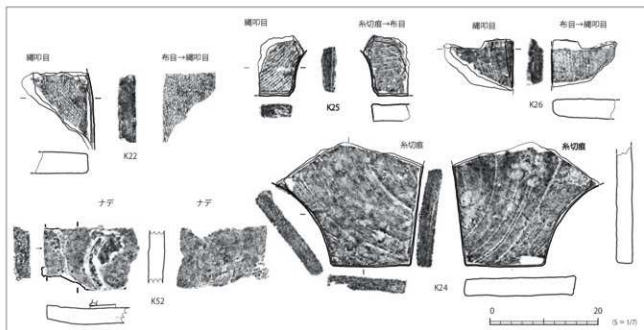
Ⅱ：顎の幅が狭い(6cm)もの：3点 (K19・44・45)

鬼板：図示資料は5(第162図)点で、いずれも破片資料である。扁平で脚部や側面に丸みのあるものを鬼板として抽出した。文様のあるものはないが表裏の調整痕跡に以下の3種がみられる。

Ⅰ：縄目・布目→縄目：2点 (K22・26)

Ⅱ：縄目・糸切痕→布目：1点 (K25)

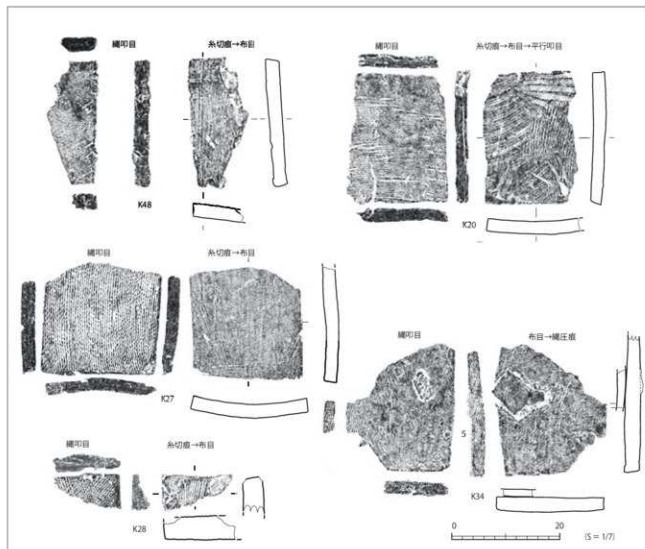
Ⅲ：表裏とも糸切痕→ナデ：2点 (K24・52)



第162図 鬼板集成

用途不明道具瓦：図示したものは5点(第163図)。扁平でごくわずかな反りがある破片を道具瓦として一括した。いずれも破片資料で、須恵器の焼台に転用され、二次的被熱により焼け歪んだものが多い。法量にばらつきがあり、大きさの異なる熨斗瓦の可能性が高いが判然としない。凸面側はいずれも縄目目で、凹面は糸切痕→布目を基本とし、その上に縄(K34)もしくは平行の叩板状の圧痕(K20)が加わるものがある。焼成から2種類が識別される。

- I：灰白色で軟質　　：1点 (K27)
 II：灰色で硬質　　：4点 (K20・28・34・48)



第 163 図 道具瓦集成

【平瓦の製作技法について】

平瓦については、周辺の古代瓦窯で一般的な多賀城系の平瓦にはみられない2つの特徴が確認できる。一つは(I)の凹面にみられる竹を編み込んだ摸骨状の圧痕、もう一つは(II)の凹面の縄目目である。(I)の摸骨状圧痕は、桶巻き作りの痕跡である可能性も残るが、凸面側縁に凹型台末端的の痕跡がみられることから一枚作りの可能性が高い。凹面の摸骨状の圧痕は竹を編み込んだ素材からなる凸型台で成型された際の痕跡とみられる。(II)の凹面の縄目目の痕跡は、ランダムに叩いたというよりは規則的に押し付けたような圧痕である。用途不明道具瓦にも同様の痕跡の見られるもの(K34)がある。

【軒丸瓦について】

図示したのは10点で、うち7点は瓦当文様を確認できる。確認された瓦当文様はすべて同範の一

種のみである。

〈瓦当文様〉

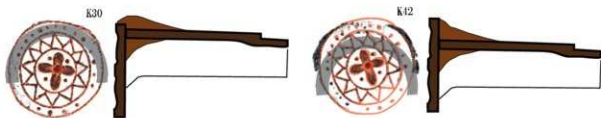
内区中央に四弁の花文を置き、圏線で区画された中区には12の山形の突起をもつ鋸歯状の隆線文が巡り、さらにその外側に25の珠文からなる外区が配されている（第165回 左上）。中央の四葉の花文は、ボタン状に盛り上がった中房から紡錘形の四葉が十字に配され、葉間には粒上の珠文が配されている。この文様については「珠文鋸歯文縁素弁蓮華文」との呼称があった（古川市1990）が、本報告では「珠文縁素弁四葉蓮花文」と記載する。

模様の特徴として、四葉の長さが微妙に異なり、1か所だけわずかに長い。周囲の鋸歯状の隆線文の山形部分は割り付けが均等でないため中心の四葉との位置関係が合わず、対称性が崩れている。外区の珠文は径6mmのものが基本的に2cm間隔で配されているが、一部ではその間に径3mmの小粒の珠文を入れ込んで、大小の珠文が交互に並ぶ部位もみられ、統一性が図られていない。

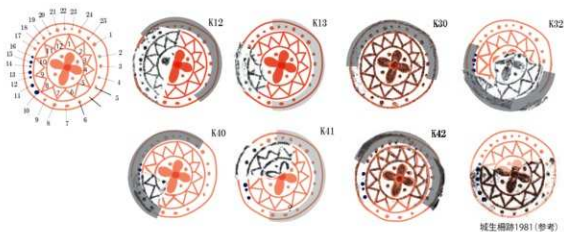
〈製作方法〉

文様を彫り込んだ径16.5cmの円盤状の范に粘土塊を押し付けて屢ぼし、范からはみ出した周縁部を削り取って厚さ1.5～2.0cmの円盤状の瓦当を作成する。范に粘土塊を押し付ける際に、須恵器甕などの内面整形に使用された同心円文様のあるアテ具を用いているものがある。次に円盤状の瓦当裏面の任意の位置に丸瓦を接合する。接合部の丸瓦の内外面に粘土を付加し、指で撫でつけて接合するが、丸瓦の外側に付加した粘土がみ出した部分は削り取らずに処理している。このため、丸瓦を瓦当外側寄りに接合したもの（K30）は瓦当面径が上方に広がり、丸瓦を瓦当内側寄りに接合したものの（K42）は瓦当面径が横方向に広がっている（第164図）。とくに（K42）は丸瓦凸面と瓦当上端の接合位置がずれているためあたかも鳥衾のような角度になる一方、瓦当面の両側に周縁帯が形成されるなど、個体によって瓦当面の仕上がりにばらつきがみられる。また、丸瓦と瓦当の接合位置が任意であるため、内区の四葉の葉の向きも、上下左右がまちまちである（第165図）。さらに周縁の珠文については粘土の押し付けがあまく、完全に描出できていない珠文もみられる。

以上のように全体的に、製作工程の自由度の高さをうかがうことができる。



第164図 軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合位置のバラエティー



第 165 図 瓦当と丸瓦の接合位置の比較

〈類例〉

同種の軒丸瓦は、加美町菜切谷廃寺跡・同城生柵跡と色麻町一ノ関遺跡、大崎市伏見廃寺跡、同名生館官衙遺跡出土資料に類例がある。瓦当文様細部を比較検討した結果、これらはいずれも同范であることが判明した（第 165 図 右下）。これら 5 遺跡は窠跡である当遺跡から北北西の旧加美郡・玉造郡内に所在し、一ノ関遺跡が 5km、城生柵跡・菜切谷廃寺跡が 10km、伏見廃寺跡・名生館官衙遺跡が 15km に位置する。

◆一ノ関遺跡 宮城縣史編纂委員會 1981 『宮城縣史 34 史料集 V』

◆城生遺跡 中新田町教育委員會 1981 『城生柵跡』中新田町文化財調査報告書第 5 集 p12

◆名生館官衙遺跡 古川市教育委員會 1990 『名生館官衙遺跡 X』古川市文化財調査報告書第 9 集 p37

古川市教育委員會 1994 『名生館官衙遺跡 XIV』古川市文化財調査報告書第 13 集 p28

◆伏見廃寺跡 未公表資料

◆菜切谷廃寺跡 未公表資料

〈特徴〉

周辺地域において、この種の瓦当文様の明確な系譜はたどれないが、鋸歯文+四葉蓮花文という組み合わせは福島県いわき市梅ヶ作瓦窠跡出土の素文鋸歯文複弁四葉蓮華文にみられる。鋸歯文と珠文の配置については平城宮系とされる多賀城軒丸瓦 230 の意匠との類似性がみられる。瓦の形態上の特徴としては、瓦当面周縁帯がなく、薄い円盤状を呈することが大きな特徴といえる。

【軒平瓦について】

図示したのは 4 点で、いずれも段額である。顎の幅に違いはみられるが、いずれも瓦当文様はすべて無（素）文で、顎面には縄叩き後、手描きの鋸歯文が描かれている。

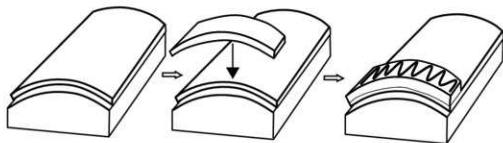
〈瓦当文様〉

いずれも瓦当面を削って平滑にした無（素）文の軒平瓦である。

〈製作技法〉

平瓦狭端凸面側に帯状の粘土を付加する。顎部と平瓦部の接合面に刻みなどの加工が加えられたものはない。接合した後、縄叩きにより再度顎上面を叩き締め、瓦当面を平滑に削り無文の瓦当面を作出する。最後に棒状工具により手描きで鋸歯文を施文する（第166図）。

なお、軒瓦については、軒丸・軒平とも単一の瓦当文様のみが確認されていることから、これら瓦当文様として組む可能性もあるが、出土状況にまとまりがなく断定はできない。



第166図 軒平瓦製作技法模式図

〈類例〉

同種の無文軒平瓦は、多賀城市多賀城跡・仙台市蟹沢中窯跡出土資料に類例がある。ただし、多賀城市・仙台市の類例は顎面に鋸歯文が無い点で彦右工門橋窯跡資料とは異なる。

◆多賀城跡（軒平瓦 641）

宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』p210 図版330

◆蟹沢中窯跡

古窯跡研究会 1972 『仙台市原町小田原蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書』 研究報告第1冊

【鬼板・道具瓦について】 鬼板を含む道具瓦についてはいずれも破片資料であるため詳しい比較検討ができない。文様を施さず縄叩目・布目や糸切痕跡を残す鬼板や熨斗瓦もしくは埴についてはこれまで周辺地域に類例が少なく、今後資料の増加を待って評価再検討する必要がある。

【まとめ】

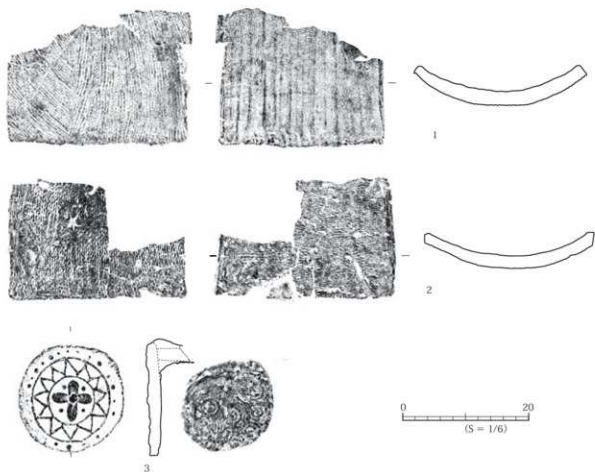
今回の調査における瓦に関する最大の成果は「珠文縁素弁四葉蓮花文」の生産地が大衡窯跡群内の彦右工門橋窯跡周辺にあることが確定となったことである。また、当該瓦の製作年代についても8世紀末～9世紀初頭の土器群が使用されたSI29・78 竪穴建物に限り、まとまりをもって転用されているという状況から、これらの出土土器とほぼ同じ時期の生産年代を想定することができたことも重要である。この制作年代想定は同種の瓦が出土した名生館官衙遺跡第10次調査SK1166の調査成果（古川市教委1990 p37）とも整合する。

平瓦では、凹面に竹を編み込んだ摸骨状の圧痕（第167図-1）や、凹面の縄叩目（第167図-2）など、他に例のない製作技法上の顕著な特徴を見出せる。軒丸瓦でも瓦当背面に須恵器の成型に使われたのと同じ同心円アテ具痕跡がみられるもの（第167図-3）があり、やはり他に例のない製作技法がみられる。これらの特徴は彦右工門橋窯跡での瓦作りの重要な工程に、瓦を作りなれない須恵

器工人を含む工人が関与していた可能性を示唆している。さらに、軒丸瓦については、文様周囲に突出した縁帯が無いという、軒丸瓦本来の構成を逸脱した要素がみられ、彦右工門橋窯跡の瓦の製作現場に軒丸瓦の型＝范制作に習熟した技術者がいなかった可能性も示している。文様全体から受ける稚拙な印象も、そうした状況に符合する。以上のように、「彦右工門橋窯跡ならでは」ともいえる製作技法や軒丸瓦当文様の在り方は、瓦専門工人の不足・欠落を補うため、須恵器工人を含む応急的な工人集団が互作りに携わったことで生み出された結果と考えられる。そこに彦右工門橋窯の臨時的な瓦生産の実情が垣間見える。

遺跡の外に目を転ずると、軒丸瓦については、同じ范で作られた瓦が、色麻町一の関遺跡・加美町菜切谷廃寺跡・大崎市伏見廃寺跡から出土している。これら3遺跡はそれぞれ色麻・加美・玉造といった古代の宮城県北西部に置かれた郡の役所＝郡衙の付属寺院跡と考えられている。一方、同時代の国レベルの施設である、陸奥国府多賀城跡や多賀城廃寺跡、陸奥国分寺・国分尼寺跡では、彦右工門橋窯跡の製品は確認されていない。これらのことから、彦右工門橋窯跡の瓦生産は、主に色麻・賀美・玉造郡など宮城県北西部の郡衙付属寺院の屋根の補修など、限定的な需要に対応するために臨時的な生産体制が組まれた可能性が高いと考えられる。

最後に瓦の製作年代については、これらの瓦群を再利用した竪穴建物（SI24・78）がいずれも第1期段階のものであることから、第1期段階もしくはそれ以前に作成された瓦群と考えられる。同范



第167図 特徴的な製作技法

の軒丸瓦が出土した名生館官衙遺跡 SK1166 でも、共伴した土器群から 8 世紀末の年代が想定されており、本遺跡の在り方と矛盾しない。

時代背景としては、対蝦夷政策の強化、38 年戦争の遂行の最中であり、宮城県北部の城柵郡衙と付属寺院の修造・維持にも律令国家の威信をかけた心配りが行き届いた時代であった。彦右工門橋窯の瓦の供給体制を見ると、国府多賀城（政庁第Ⅲ期）と付属寺院、陸奥国分寺・国分尼寺の瓦は利府の春日大沢窯跡群や仙台市台原窯跡群で生産し、県北部の郡衙寺院跡の補修瓦は大衡窯跡群で生産する、という分業体制が成立していたと考えられる。

2. 遺構

彦右工門橋窯跡で発見した遺構は、掘立柱建物跡 3 棟、竪穴建物跡 14 棟、土坑 22 基、土師器焼成遺構 14 基、焼成土坑 10 基、溝 5 条、整地層 1 か所である。ほかに窪地、河川、堆積層も発見した。大部分の遺構は、出土遺物の年代から 8 世紀後半～10 世紀前葉のものと考えられる。以下では、各遺構の所属時期・年代を整理して、それぞれの概要や問題点について見ておきたい。

(1) 遺構の時期

前項で示した検討対象遺物「1. 遺構に伴う一括性の高い遺物」「2. 自然堆積土等からまとも出土した遺物」の年代は 8 世紀後半～9 世紀初頭、9 世紀中葉～9 世紀後葉、9 世紀後葉～10 世紀前葉に分けられた。これらと遺構の新旧関係および灰白色火山灰層との前後関係を整理すると、I 期：8 世紀後半～9 世紀初頭、II 期：9 世紀中葉～9 世紀後葉、III 期：9 世紀後葉～10 世紀前葉となる。年代と重複関係を整理すると以下ようになる（第 168 図）。

I 期：≪8 世紀後半～9 世紀初頭≫

- ・遺構に伴う遺物の検討から、SI22、SI78、SI24b がこの時期に該当する。
- ・堆積土出土遺物の検討から、SI29、SD 2-4 層もこの時期と想定される。
- ・SX15 は I 期以前と想定される。
- ・遺構との重複関係から、SB24a、SB48 は I 期以前である。

II 期：≪9 世紀中葉～9 世紀後葉≫

- ・遺構に伴う遺物の検討から、SI23、SI26 がこの時期に該当する。
- ・堆積土出土遺物の検討から、SD 2-3 層もこの時期から III 期と想定される。
- ・遺構との重複関係から、SK36、SK45 は II 期以降である。

III 期：≪9 世紀後葉～10 世紀前葉≫

- ・遺構に伴う遺物の検討から、SI25、SI60 がこの時期に該当する。
- ・上記遺構の下限は灰白色火山灰降下以前の 10 世紀前葉である。
- ・堆積土出土遺物の検討から、SX95 もこの時期と想定される。

・遺構との重複関係から、SX4、SX16、SX17、SD11はⅢ期以降である。

また、遺構、灰白色火山灰との重複関係からSD84、SD2-2層はⅢ期より新しい。

なお、いずれの検討もできなかった遺構が複数含まれるが、各遺構の堆積土から出土した遺物は検討対象とした土器群の年代幅の中におさまることから、いずれもⅠ～Ⅲ期の遺構である可能性がある。

(2) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は14棟発見した。SI22、SI24a、SI24 b、SI29、SI78がⅠ期、SI23、SI26がⅡ期、SI25、SI60がⅢ期に属する。

Ⅰ期の竪穴建物跡のうち、SI22、SI24 b、SI78でロクロ回転台の下部構造とみられるピット（ロクロピット）を発見した。SI29のP3も同様のピットの可能性がある。また、SI24 bからは粘土塊・粘土の広がりが発見されている。彦右工門橋窯跡の北西約1.7kmに所在する日の出山窯跡群C地点では、2・4a・4b・7・8号住居で同様のピットが、2・7・9号住居の床面で粘土が確認されている。日の出山窯跡群C地点では、両者の存在から、住居（竪穴建物跡）が土器・瓦の製作・成形に関係した工房としての性格が想定されている。彦右工門橋窯跡でも同様の状況を確認していることから、竪穴建物跡は土器、瓦製作にかかわった工人の住居、もしくは作業場・工房と想定できる。

Ⅱ期のSI23、SI26では、ロクロ回転台の下部構造とみられるピット（ロクロピット）は見つかっていないが、粘土塊・粘土の広がりが発見されている。

Ⅲ期のSI25、SI60では、Ⅱ期までみられていた粘土、Ⅰ期で確認できたロクロピットなどの、土器・瓦製作にかかわる痕跡はみられなくなる。

(3) その他の遺構

【土師器焼成遺構】

土師器焼成遺構は14基発見した。竪穴建物跡と重複するものは、いずれも建物跡より新しい。年代はSX15がⅠ期以前、SX4がⅢ期以降である。

平面形は、隅丸長方形、長楕円形、逆台形、二等辺三角形がある。長楕円形を除いて、いずれも各辺は直線的である。いずれの平面形も側壁にあたる辺が長く、奥壁・前壁にあたる辺が短くなる。奥壁はほかの壁と比べて直線的に立ち上がり、長さは、前壁の辺よりやや長くなる。対して前壁は、奥壁、さらには側壁と比べても壁が緩やかに立ち上がる。被熱範囲の分布は、おおむね奥壁側に偏る。原則、斜面上方に奥壁、斜面下方に前壁がつくられる。天井の有無やその構造は不明瞭である。SX8で焼成にかかわる層の上に天井に由来するとみられる土（SX8-14層）が部分的に堆積した状態が確認できた程度である。遺構周囲に天井高架をうかがわせるような小ピットなども確認されていない。また、焼成土坑として報告したSK28、SK32、SK40、SK70、SK74、SK85、SK86の7基は、奥壁の認定ができなかったため、土師器焼成遺構と報告しなかったが、遺構の検出状況から想定される規模や焼け面があることなどから、土師器焼成遺構であった可能性がある。

これらの遺構に伴う土師器片はほとんどが甕片である。出土した破片をみると、黒斑があるものは少なく、赤褐色であることから、酸化焙焼成で比較的高温で焼成されたと考えられる。

【土坑】

SK9、SK10は、鉄滓が廃棄された小規模な土坑である。SK9はSK8、SX13より新しい。SK10は時期を限定できない。重複関係のあるSX13堆積土から輪羽口、隣接するSD11堆積土から椀形鍛冶滓が出土している。上記の土坑を含め、8区西隅周辺に鍛冶関連の遺構・遺物がまとまっているため、周辺で小鍛冶が行われていたとみられる。

【焼成土坑】

SX12、SX16、SX17は下層に炭化物層がみられ、底面や側面に熱を受けた痕跡があった土坑である。平面形は、SX12が隅丸長方形、SX16、SX17が楕円形で、前壁と奥壁の区別がみられない。土坑は、底面上に炭化物層が比較的厚く堆積していたが、何を焼成していたかは不明である。

3. 遺跡の性格と変遷

I期を遡る遺物は縄文土器や石器以外出土していない。遺構の重複からは、I期以前の可能性が残るものがあるものの、出土遺物の状況から、I期を大きく遡らないとみられる。

【I期：SB48、SI22、SI24a、SI24 b、SI29、SI78、SX15、SD 2-4層】

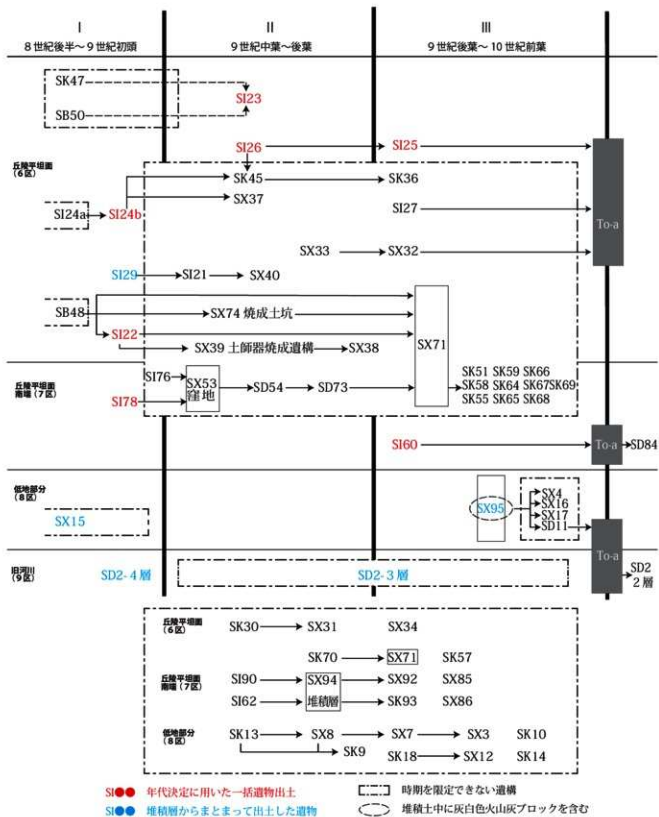
竪穴建物跡は須恵器を主とした土器・瓦製作にかかわった人々の住居、あるいは作業場・工房とみられる。土師器焼成遺構は、SX15で8世紀後半～9世紀初頭と考えられる土器がまとまって出土したことから、この時期以前に土師器の焼成が行われていたと考えられる。河川跡SD 2-4層では竪穴建物跡から出土した須恵器と同じ特徴をもつものが大量に出土した。遺物は主に土師器、須恵器、瓦である。とくにI期は須恵器が多く、瓦も出土していることが特徴として挙げられる。須恵器は坏のみでなく、高台環や盤などの高台の付く器種や硯がある。須恵器には、底部のひび割れや高台の剥がれ、焼け歪みなどが多くみられる。これらの遺構の特徴、遺物の出土状況から、付近に須恵器を焼成した窯跡が存在したと推定できる。

I期は、丘陵上(6・7区)が、土器・瓦製作の作業場・工房にかかわる場、低地(8区)が土師器焼成の場として利用されている。なお、調査地点の北東400mほどには、8世紀後半とされる彦右エ門橋窯跡SR 1(宮城県教育委員会1997)が位置する。

【II期：SI23、SI26 III期：SI25、SI60、SX95】

II期の竪穴建物跡では、粘土の広がり・粘土塊を発見したが、I期とは異なり、ロクロピットは見つかっていない。

III期の竪穴建物跡では、土器製作の痕跡がみられなくなる。低地(8区)では、沢部分にSX95堆積層が形成される。河川跡ではSD 2-3層から大量の須恵器が出土している。III期は、丘陵上(6・7区)は竪穴建物跡がつかれる。低地部分では沢に堆積層が形成されるとともに、土師器の焼成の場としての利用が確認できる。河川出土の須恵器坏は底部がひび割れているものが多いため、不良品



第 168 図 遺構の年代・新旧関係

が廃棄されたものであろう。

4. まとめ

- (1) 彦右工門橋窯跡の遺跡範囲西側を南北に縦断して調査した。その結果、遺構はⅠ期：8世紀後半～9世紀初頭、Ⅱ期：9世紀中葉～後葉、Ⅲ：9世紀後葉～10世紀前葉のものがあり、過去の調査と合わせると、奈良・平安時代の土師器・須恵器生産にかかわる遺跡であることが判明した。
- (2) 遺跡はⅠ期が土器・瓦製作、土師器焼成の場、Ⅱ・Ⅲ期は竪穴建物跡がある。
- (3) Ⅰ期の遺構や河川からは、高台坏・蓋、双耳坏、盤、硯（円面硯・風字硯）などを含む多様な器種からなる大量の須恵器が出土した。その一方で焼け歪みや底切れ、高台のひびなどが多いといった特徴がある。それらは窯跡の製品であると考えられる。
- (4) 珠文鋸歯文緑素弁四葉蓮華文軒丸瓦をはじめ、彦右工門橋窯跡出土の瓦は共伴関係が明らかなのはⅠ期の遺構に限られることから、須恵器生産を主とする傍ら限定的な需要に応えるかたで、瓦を生産していたと考えられる。

参考文献

- 大衛村教育委員会 1995 『亀岡遺跡』大衛村文化財調査報告書第1集
- 加美町教育委員会 2005 『壇の越遺跡』Ⅶ加美町文化財調査報告書第5集
- 古窯跡研究会 1972 『仙台市原町小田原蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書』研究報告第1冊
- 東北学院大学考古学研究所 1979 『温故』昭和53年度 第12号
- 中新田町教育委員会 1981 『城生柵跡』中新田町文化財調査報告書 第5集 p12
- 古川市教育委員会 1990 『名生館官衙遺跡』Ⅹ 古川市文化財調査報告書第9集
- 古川市教育委員会 1994 『名生館官衙遺跡ⅩⅣ』古川市文化財調査報告書 第13集
- 宮城県教育委員会 1980 『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅱ宮城県文化財調査報告書第63集
- 宮城県教育委員会 1981 『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集
- 宮城県教育委員会 1983 『東北自動車道遺跡調査報告書』8 宮城県文化財調査報告書第93集
- 宮城県史編纂委員会 1981 『宮城県史 34 史料集Ⅴ』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 『多賀城跡 政庁跡 本文編』

写 真 图 版



1. 彦右工門橋梁跡、吹付梁跡、吹付C梁跡 全景 (南から)



2. 彦右工門橋梁跡 全景 (北から)

図版 1 遺跡全景



1. 6区 全景（南東から）

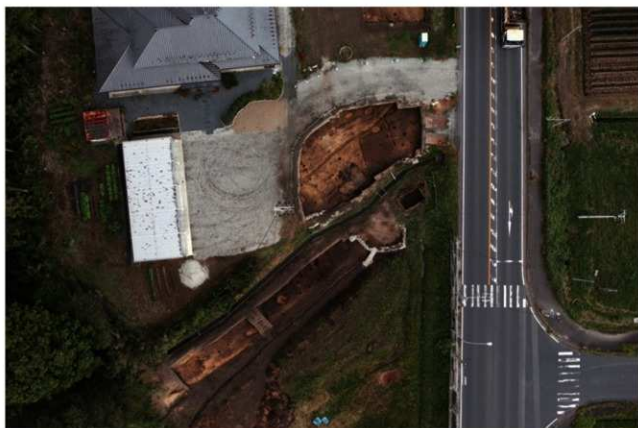


2. 6区 調査区全景（西から）

図版 2 6区 全景



1. 7区 全景（南東から）



2. 7区 調査区全景（南から）

図版3 7区 全景



1. 8・9区 全景 (南から)



2. 8・9区 全景 (西から)

図版4 8・9区 全景



1. SB48 掘立柱建物跡 検出（南から）



2. SB48 掘立柱建物跡 P2 断面（西から）



3. SB48 掘立柱建物跡 P1 断面（西から）



4. SB48 掘立柱建物跡 P4 断面（南から）



5. SB50 掘立柱建物跡 P1 (P14) 断面（東から）



6. SB79 掘立柱建物跡 検出（南から）



7. SB79 掘立柱建物跡 P1 断面（南から）



8. SB79 掘立柱建物跡 P3 断面（南から）

図版 5 SB48・50・79 掘立柱建物跡



1. SI21 竪穴建物跡 完掘（南から）



2. SI21 竪穴建物跡 検出（南から）



3. SI21 竪穴建物跡 カマド残存状況（南から）



4. SI21 竪穴建物跡 K1土層出土状況（南から）



5. SI21 竪穴建物跡 K1土坑断面（西から）

図版 6 SI21 竪穴建物跡



1. SI22 竪穴建物跡 完掘（南東から）



2. SI22 竪穴建物跡 検出（南西から）



3. SI22 竪穴建物跡 断面（南西から）



4. SI22 竪穴建物跡 カマド1完掘（南から）



5. SI22 竪穴建物跡 カマド2完掘（南から）

図版 7 SI22 竪穴建物跡



1. SI22 竪穴建物跡 完掘（北から）



2. SI22 竪穴建物跡 カマド3断面（西から）



3. SI22 竪穴建物跡 ロクロビット1断面（南から）



4. SI22 竪穴建物跡 ロクロビット2・K9断面（北から）



5. SI22 竪穴建物跡 K8断面（西から）

図版 8 SI22 竪穴建物跡



1. SI23 竪穴建物跡 完掘（西から）



2. SI23 竪穴建物跡 カマド完掘（西から）



3. SI23 竪穴建物跡 床粘土（北から）



4. SI23 竪穴建物跡 掘方礎痕（南から）



5. SI23 SB50 SA49 SK47（南から）

図版 9 SI23 竪穴建物跡



1. SI24b 竪穴建物跡 完掘（南から）



2. SI24b・SK36・SX37・SK45 検出（南から）



3. SI24b 竪穴建物跡 P6 ロクロピット断面（東から）



4. SI24b 断面



5. SI24b 竪穴建物跡 カマド下暗渠須恵器糞出土状況（南東から）

図版 10 SI24b 竪穴建物跡



1. SI24a 竪穴建物跡 全景（南から）



2. SI24a 竪穴建物跡断面（西から）



3. SI24a 竪穴建物跡 カマド完掘（西から）



4. SI24b 竪穴建物跡 南半検出（南から）



5. SI24b 竪穴建物跡 カマド（南から）



6. SI24b 竪穴建物跡 煙道入口土師器壺出土状況（東から）



7. SI4b 煙道掘方（西から）



8. SK36・SK45・SI24b 煙道・堀方断面（南から）

図版 11 SI24a・b 竪穴建物跡・SK36・45



1. SI25 竪穴建物跡 完掘（南から）



2. SI25 竪穴建物跡 検出（南から）



3. SI25 竪穴建物跡 断面（南東から）



4. SI25 竪穴建物跡 カマド完掘（南から）



5. SI25 竪穴建物跡 カマド掘方（南東から）

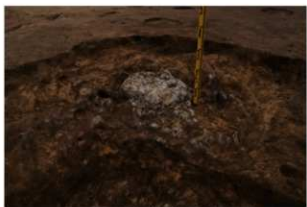
図版 12 SI25 竪穴建物跡



1. SI26 竪穴建物跡 完掘（北から）



2. SI26 竪穴建物跡 カマド完掘（北東から）



3. SI26 竪穴建物跡 粘土塊（北東から）



4. SI27 竪穴建物跡 完掘（西から）



5. SI29 竪穴建物跡 遺物出土状況（東から）

図版 13 SI26・27・29 竪穴建物跡



1. SI29 竪穴建築跡 検出（南から）



2. SI29 竪穴建物跡 断面（南東から）



3. SI29 竪穴建物跡 カマド



4. SI29 竪穴建物跡 カマド下部陶製瓦（北から）



5. SI29 竪穴建物跡 壁周溝瓦（西から）



6. SI29 竪穴建物跡 P3断面（西から）



7. SI29 竪穴建物跡焼け面（南から）



8. SI29 竪穴建物跡 K6断面（西から）

図版 14 SI29 竪穴建物跡



1. S160 竪穴建物跡 完掘（南から）



2. S160 竪穴建物跡 断面（南から）



3. S160 竪穴建物跡 カマド完掘（南西から）



4. S160 竪穴建物跡 煙道検出（南から）



5. S160 竪穴建物跡 煙道完掘（北から）

図版 15 S160 竪穴建物跡



1. SI60 竪穴建物跡 カマド (南から)



2. SI62 竪穴建物跡 検出 (南から)



3. SI62 竪穴建物跡 焼け面断面 (西から)



4. SI76 竪穴建物跡 完掘 (南から)



5. SI76 竪穴建物跡 P2・P4断面 (南から)



6. SI90 竪穴建物跡 完掘 (南から)



7. SI90 竪穴建物跡 断面と瓦 (南から)



8. SI90 竪穴建物跡 軒平瓦検出 (南から)

図版 16 SI60・62・76・90 竪穴建物跡



1. SI78 竪穴建物跡 完掘（南東から）



2. SI78 竪穴建物跡 検出（南から）



3. SI78 竪穴建物跡 煙道断面（東から）



4. SI78 竪穴建物跡 カマド完掘（南から）



5. SI78 竪穴建物跡 P1 ロックビット断面（南から）

図版 17 SI78 竪穴建物跡



1. SX3・SX7 土師器焼成遺構 断面 (南西から)



2. SX4 土師器焼成遺構 断面 (西から)



3. SX8 土師器焼成遺構 断面 (南から)



4. SX15 土師器焼成遺構 完掘 (東から)



5. SK30 土坑・SX31 土師器焼成遺構 完掘 (東から)



6. SX34 土師器焼成遺構 完掘 (南から)



7. SK32 焼成土坑、SX33 土師器焼成遺構 検出 (東から)



8. SK32 焼成土坑、SX33 土師器焼成遺構 断面 (東から)

図版 18 土師器焼成遺構



1. SX37 土師器焼成遺構 炭層検出 (南から)



2. SX38・SX39 土師器焼成遺構 完掘 (南から)



3. SK40 焼成土坑 断面 (東から)



4. SK74 焼成土坑 完掘 (南から)



5. SX82 土師器焼成遺構 完掘 (南から)



6. SK85・SK86 焼成土坑 検出 (北から)



7. SX92 土師器焼成遺構 断面 (西から)



8. SX92 土師器焼成遺構 完掘 (南から)

図版 19 土師器焼成遺構・焼成土坑



1. SK12 焼成土坑 断面(南から)



2. SK16 焼成土坑 完掘(南から)



3. SK17 焼成土坑 断面(東から)



4. SK9 土坑 完掘(西から)



5. SK10 土坑 断面(東から)



6. SK14 土坑 完掘(東から)



7. SK14 土坑 須恵器高台坏出土(北東から)

図版 20 土師器焼成遺構・焼成土坑・土坑



1. SX71 (東から)



2. SX71 断面 (北東から)



3. SK56 土坑 土器出土状況 (東から)



4. SK65 土坑 断面 (東から)



5. SK66 土坑 断面 (南から)



6. SK67 土坑 断面 (東から)



7. SK68 土坑 断面 (西から)



8. SK69 土坑 検出 (南から)

図版 21 整地層・土坑



1. SX95 検出 (東から)



2. SX95 D-D 断面 (北東から)



3. SD54 遺物出土状況 (西から)



4. SD11 溝 断面 (南から)



5. SK47 土坑 検出 (南から)



6. SK47 土坑 断面 (西から)



7. SD2 河川跡 断面 (南から)



8. SD2 河川跡 3層灰白下出土状況 (南から)

図版 22 土坑・溝・河川



1. T3 沢完掘後全景 (北から)



2. T3 沢完掘後東壁 (西から)



3. T15 調査区北壁 (南から)



4. 1区調査前風景



5. 3区調査前全景 (南から)



6. T1 (北から)



7. T5・T9 SD1 完掘 (北西から)



8. T9 SD1 調査区東壁 (北西から)

図版 23 彦右工門橋築跡1区・3区



1. 4区調査前風景（南から）



2. T1～T4ブロック（北から）



3. T1 調査区東壁（西から）



4. T5 沢検出状況（南から）



5. T5 沢完掘（南から）



6. T5 調査区西壁（東から）



7. 5区全景（南から）



8. 5区調査区東壁（西から）

図版 24 彦右工門橋窯跡4区・5区



1. 10区調査区全景（北から）



2. T1（南から）



3. 11区調査区全景（南から）



4. T1 沢付近（北東から）



5. T2（北から）



6. T2 西壁南端（東から）



7. T3（北から）



8. T4 西壁北端（東から）

図版 25 彦右工門橋竃跡 10区・11区



SI22 集合写真



図版 26 SI21・22 出土遺物



1 : S=1/4

図版 27 S122 出土遺物 (1)



図版 28 S122 出土遺物 (2)



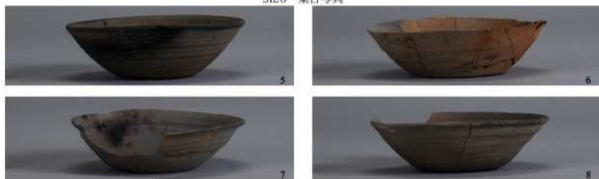
图版 29 S122 出土遺物 (3)



SI23 集合写真



SI26 集合写真



図版 30 SI23・26 出土遺物



SI24 集合写真



1



3



2



5



4



7



6

図版 31 SI24b 出土遺物 (1)



图版 32 SI24b 出土遺物 (2)



1 : S=1/4, 2 : S=1/6, 3・4 : S=1/3

図版 33 S124b 出土遺物 (3)



SI25 集合写真



図版 34 SI25 出土遺物 (1)



1・3・4 : S=1/4, 2 : S=1/3

図版 35 S125 出土遺物 (2)



SI29 集合写真



図版 36 SI29 出土遺物 (1)



图版 37 S129 出土遺物 (2)



図版 38 SI29 出土遺物 (3)



2・3：S-1/4

図版 39 S129 出土遺物 (4)



图版 40 S129 出土遗物 (5)



图版 41 S129 出土遺物 (6)



S160 集合写真



図版 42 S160 出土遺物 (1)



図版 43 SI60 出土遺物 (2)



1-3 : S-1/4

図版 44 S160 出土遺物 (3)



SI78 集合写真



図版 45 SI78 出土遺物 (1)



1・2・4 : S=1/4

図版 46 S178 出土遺物 (2)



1・2：S=1/4

図版 47 S178 出土遺物 (3)



1·2 : S=1/4, 3·4 : S=1/6

图版 48 S178 出土遺物 (4)



7-9 : S=1/6

図版 49 SI62・76・90 竪穴建物跡 出土遺物



2.5 : S=1/4

図版 50 SX4・8・SK9・13 出土遺物



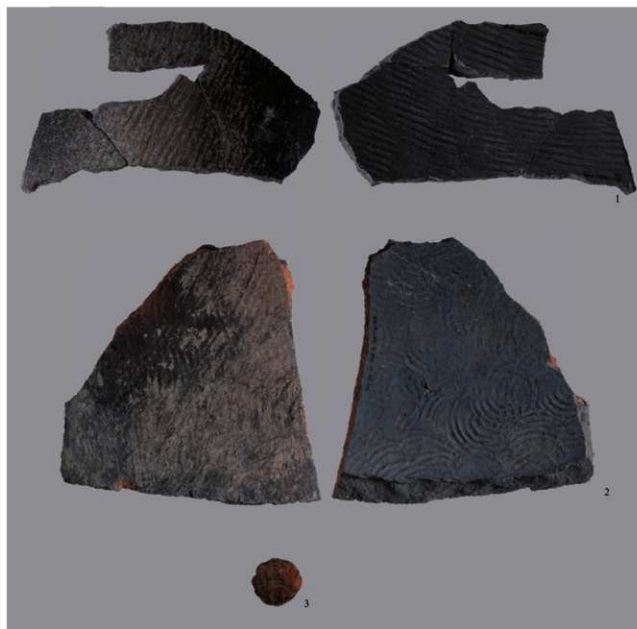
図版 51 SX4・15・34 出土遺物



図版 52 SK12・32・47・66・SX38・92 出土遺物



図版 53 SX16・SX53・SD2 大別 1層 出土遺物 (1)



図版 54 SD2 大別 1層 出土遺物 (2)



SD2 大別3層 集合写真



図版 55 SD2 大別3層 出土遺物(1)



図版 56 SD2 大別 3層 出土遺物 (2)



図版 57 SD2 大別 3層 出土遺物 (3)

1・2 : S=1/6



SD2 大別4層 集合写真



図版 58 SD2 大別4層 出土遺物 (1)



図版 59 SD2 大別 4層 出土遺物 (2)

8・9：S=1/6



SX95 集合写真



図版 60 SX95 出土遺物 (1)



図版 61 SX95 出土遺物 (2)



图版 62 SX95 出土遗物 (3)



図版 63 SX95 出土遺物 (4)



瓦 集合写真



图版 64 基本層 瓦 1

1-4 : S=1/6



图版 65 SD2 出土遺物



图版 66 遺構検出面 遺物



図版 67

SD11・54・75 出土遺物



1-4: SX15 堆, 5・6: SD2・4 層, 7: SD2-1A 層, 8: SR2-検出面

図版 68 焼台 集合写真



1-4・8 : S=1/3, 5-7・9 : S=2/3

図版 69 縄文土器と石器



1:No.1091, 2:No.627, 3:No.587, 4:No.343 : S=1/3 5:SI22 P9, 7:SI25 床 : S=1/4

図版 70 石製品 集合写真



1:SI90-7層, 2:SI29下層, 3: SX8下層, 4: SX76・2, 5: SX76-1層, 6: I22 カマド 3, 7: SI22 ※建物北半の層, 8: SX15 堆, 9: SI29 上層

図版 71 粘土 集合写真



1: SK10 上層, 2: SD11 堆, 3: SD11 堆 No.952, 4: SX9 堆

図版 72 鉄滓 集合写真



1:No.502, 2:No.1228, 3:No.632, 4:No.772, 5:No.1219, 6:No.586 S=任意

图版 73 墨書拡大写真

ふ つけ かま あと 吹 付 窯 跡

調 査 要 項

遺 跡 名：吹付窯跡（宮城県遺跡地名表記載番号：26011）

所 在 地：宮城県黒川郡大衡村駒場字欠下

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

佐藤渉、伊東博昭、風間啓太、手代勝巳、村上景亮、佐久間光平

調査期間：令和元年 12 月 3 日～ 12 月 19 日 佐藤渉 村田晃一

令和 2 年 8 月 3 日～ 8 月 27 日 佐藤渉 伊東博昭 風間啓太 古田和誠

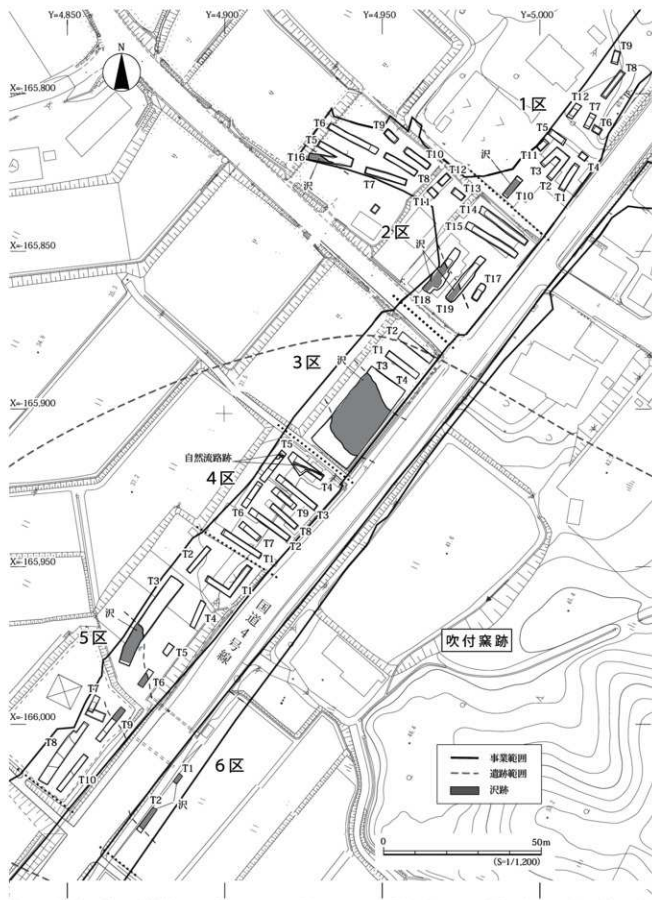
令和 3 年 12 月 7 日～ 12 月 20 日 佐藤渉 風間啓太 古川一明

令和 4 年 5 月 9 日～ 5 月 20 日 佐藤渉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

令和 4 年 10 月 18・19 日 佐藤渉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

調査対象面積：約 7098㎡

調査面積：約 1806㎡



第 169 図 吹付窯跡調査区配置図

第IV章 吹付窯跡

1. 調査の経過と概要

調査対象地は遺跡範囲の西端付近にあたる（第147図）。本線部分のほかに取り付き道路や、国道と県道との合流部分を含む。調査は、事業地内における遺跡内および隣接地を対象として、幅2mの調査区において遺構・遺物の有無を確認しながら進め、遺構・遺物を発見した場合には調査区を拡張した。各調査区は、現道の東西に並行する拡張部にあたり、便宜的に北から南に向かって現道西側を1～5区、東側を6区に分けた。

2. 各区の調査（第147図）

【1区】

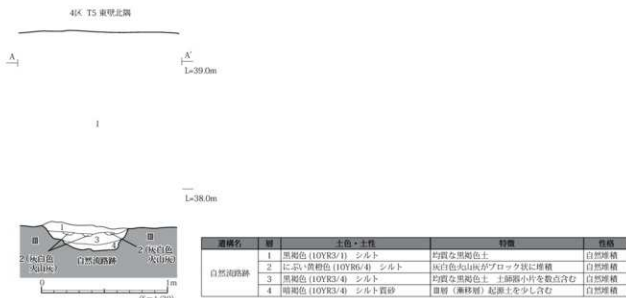
令和元年12月3日～12月19日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端の隣接地にあたり、丘陵尾根平坦面から南緩斜面に位置する。調査前の現況は宅地である。

遺跡北東側の隣接地に12本の調査トレンチ（T1～T12）を設定した。調査深度は20～160cmである。T1、T8ではI層直下でV層（岩盤）を確認した。一方、T9、T10ではI層（盛土など）が50cm以上堆積しており、層の厚さは北側や東側より南側、西側のほうが厚くなっている。調査区では、宅地造成にさいして元の地形を切土・盛土して平坦に造成していたことが分かった。

遺構・遺物は発見されなかった。

【2区】

令和2年8月3日～8月27日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端の隣接地にあたり、丘



第170図 4区自然流路断面図

陵南緩斜面と西から入る沢部に位置する。調査区は大きく2段に造成されており、調査前の現況は東側にある上段が宅地、西側にある下段が畑地であった。

15本の調査トレンチ（T5～T19）を設定した。調査深度は40cm～290cmである。調査区北東側のT14・15ではⅡ層や沢の堆積層を確認したが、それ以外のトレンチでは原則、地山直上に1層（耕作土や盛土）がなされていた。調査区の大部分は一度地山まで削平されたのち、耕作土や盛土によって造成されていたことが分かった。

遺構・遺物は発見されなかった。

【3区】

令和2年8月3日～8月27日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端にあたり、丘陵尾根北西緩斜面に位置する。調査前の現況は水田である。

4本のトレンチによる調査（T1～T4）をしていたところ、T3・T4において灰白色火山灰の広がりを確認したため両トレンチを拡張し、面的な調査を行った。調査深度は20cm～95cmである。その結果、調査区中央付近には、南東から北西方向に向かって沢が横断することがわかった。この沢中央部の堆積土には10～20cmほどの厚さの灰白色火山灰が堆積していた。また、調査区の南北では表土直下でV層（岩盤）を確認した。

遺物は、調査区南側の表土・攪乱等から須恵器甕の破片が少量出土した。

【4区】

令和4年5月9日～5月20日に調査を実施した。調査区は、遺跡北西端にあたり、丘陵尾根西緩斜面に位置する。調査前の現況は宅地である。

9本の調査トレンチ（T1～T9）を設定した。調査深度は90～160cmほどである。調査区の全体に削平・盛土が及んでおり、盛土は地形的に低い西側ほど厚く、1.5mほどあった。宅地造成に際して、旧地形を切土・盛土により平坦に造成したものとみられる。旧表土とみられるⅡ層（黒褐色土）が残っていたのは北側のT4、T5付近に限られる。

遺構は検出されなかったが、北側のT4・T5では東西方向の自然流路跡1条（幅60～70cm、深さ10～20cm）を確認した。堆積土には灰白色火山灰ブロックが堆積していた。

遺物はこの自然流路跡の堆積土などから、土師器細片が数点出土した。

【5区】

令和3年12月7日～12月20日に調査を実施した。調査区は、遺跡南西端にあたり、丘陵尾根西緩斜面に位置する。調査前の現況は宅地や畑地等である。

10本の調査トレンチ（T1～T10）を設定した。調査深度は30cm～170cmほどである。調査区の中央やや南よりのT3・T6付近では、東から西方向に向かって沢が走っていた。この沢の北側（T1・T2）と南側（T8・T10）は地形的にやや高かったため削平が及んでおり、地表から30cmほどで

IV層を確認した。沢付近には1mを超える盛土がなされている。

遺構・遺物は発見されなかった。

【6区】

令和4年10月18・19日に調査を実施した。遺跡南西部に当たり、丘陵西緩斜面に位置する。調査前の現況は旧水田地である。

2本の調査トレンチ（T1・T2）を設定した。調査深度は140～170cmほどである。いずれも厚さ1mほどの盛土下に沢の堆積土（厚さ：40～50cm、黒褐色～褐灰色のシルト～粘土層）が確認された。地形的により低い西側の5区の沢（T3・T6・T9）へと繋がるものとみられる。

遺構・遺物は発見されなかった。

3. まとめ

今回の調査地点は、遺跡の西に位置し、地形的には遺跡が広がる丘陵が西側へ標高を下げる尾根の西端部付近にあたる。調査の結果、全体的に標高が高い地点は削平が及び、より低い地点には厚く盛土がなされるなど後世の地形改変が進んでいるが、もともとは標高の高い東側の丘陵部からより低地の西側へ向かっていくつかの沢が樹枝状に延びる地形であったことが分かった。

この地点では遺構が検出できなかった。遺物は土師器や須恵器の破片が少量出土したが、やや摩耗しているものも含まれており、近辺から流入したものとみられる。したがって、窯跡などの遺構がこの付近に分布することは考えにくく、遺跡の中心はより標高が高い東方の丘陵上にあるものと推定できる。

写 真 图 版



1. 1区 T1～T5 トレンチ (北西から)



2. 1区 T8 トレンチ (南から)



3. 1区 T10 トレンチ (北東から)



4. 2区 T5～T13 トレンチ (東から)



5. 2区 T6 トレンチ (西から)



6. T7 トレンチ (南から)



7. 2区 T14・T15 トレンチ (西から)



8. 2区 T14 トレンチ北壁 (南から)

図版 74 吹付窯跡 1・2区



1. 2区T18トレンチ (南から)



2. 3区T3・T4トレンチ拡張部 (北西から)



3. 4区T3・T4トレンチ拡張部 (東から)



4. 3区T3・T4トレンチ拡張部 (北西から)



5. 3区T3・T4トレンチ拡張部西壁 (北東から)



6. 4区T1トレンチ (東から)



7. 4区T4トレンチ (西から)



8. 2区T14トレンチ北壁 (南から)

図版 75 吹付窯跡 2～4区



1. 5区T1トレンチ（南東から）



2. 5区T3トレンチ（南西から）



3. 5区T3トレンチ沢断面（西から）



4. 5区T9トレンチ（南から）



5. 5区T8・T10トレンチ（南から）



6. 6区（北から）



7. 6区T1トレンチ（西から）



8. 6区T2トレンチ（北西から）

図版 76 吹付窯跡 5・6区

ふ つけ かま あと 吹 付 C 窯 跡

調 査 要 項

遺 跡 名：吹付窯跡（宮城県遺跡地名表記番号：26092）

所 在 地：宮城県黒川郡大衡村駒場字蔵崎、上横前

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財課

佐藤涉、黒田智章、風間啓太、手代勝巳、村上景亮、佐久間光平、古川一明

調査期間：令和4年3月7日～3月30日 佐藤涉 風間啓太 佐久間光平

令和4年9月8日～9月15日 佐藤涉 手代勝巳 佐久間光平

令和4年10月25日～11月1日 佐藤涉 手代勝巳 村上景亮 佐久間光平

令和5年7月3日～7月4日 黒田智章 手代勝巳 村上景亮 古川一明

調査対象面積：約 1773㎡

調査面積：約 120㎡

第IV章 吹付C窯跡

1. 調査の経過と概要

吹付C窯跡は、国道4号拡幅工事関連遺跡調査のなかで新たに発見し、新規登録した遺跡で、発見の経緯は工事中の不時発見である。

本遺跡に隣接する吹付窯跡1区・2区は、遺跡北西端とその隣接地にあたるが、それぞれ平成31年度・令和2年度の調査で遺構・遺物が発見されなかった。この調査結果と、周知の遺跡が当該箇所になかったため、吹付窯跡1区の北側は調査対象から除外していた。

ところが、令和3年12月17日に仮設道路工事の切土によって造成された法面に、U字形の赤変範囲が発見されたため、当課職員が現地確認を行ったところ、南北方向に延びる仮設道路の西側法面に、窯の横断面とみられるU字形の赤変範囲が2箇所確認され、仮設道路東側では須恵器片を多く含む灰原とみられる黒色土層の広がりを確認した。

同年12月22日、宮城県教育委員会と国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所は現地協議を行った。窯跡部分・灰原部分とも工事予定範囲内にあり、計画変更等が難しいことから、記録保存のための発掘調査を実施する事となった。この協議および窯跡部分の調査成果を受けて、令和4年4月7日に周辺の分布調査を行い、当該遺跡を「吹付C窯跡」として新規登録した。

窯跡部分は、令和4年3月7日～3月30日に調査した。遺跡のほぼ中央、北東緩斜面に立地する。調査前は仮設道路法面、山林である。

現道の西側を1区とし、法面で確認していた窯の周囲に調査区T1を設定した。調査深度は20～30cmである。遺構はⅢ層で検出した。

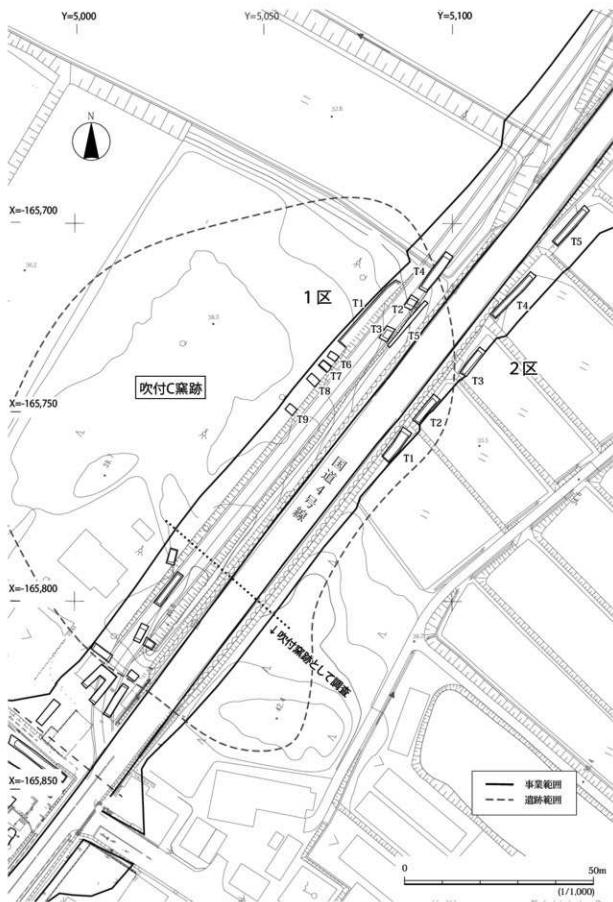
遺構は、窯跡2基、土坑2基を検出した。遺物は主に須恵器環で、整理用コンテナ13箱分が出土した。

このほか、遺跡の広がりを確認するため窯跡の南側に調査区T6～T9を設定したが、遺構・遺物は発見されなかった。

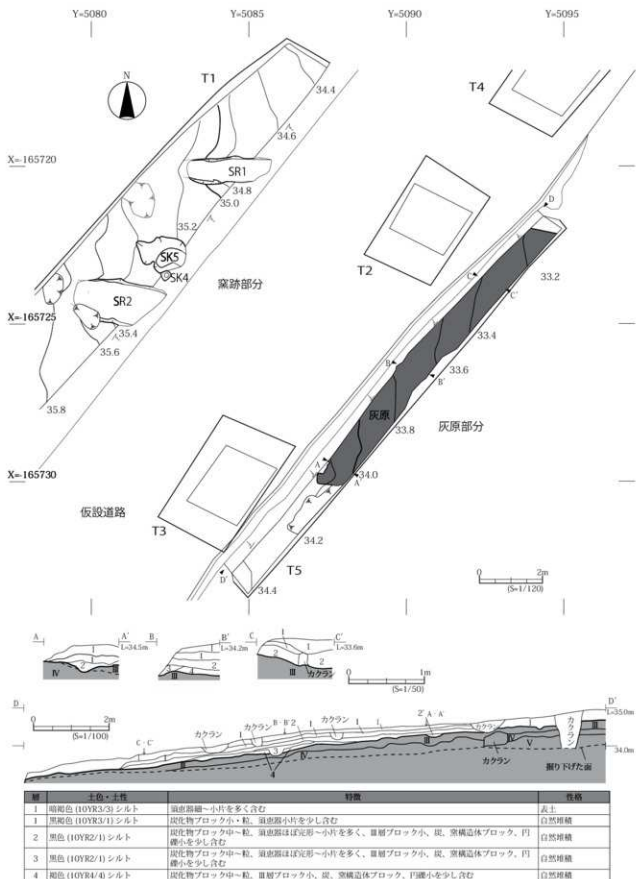
灰原部分は、令和4年9月8日～9月15日に調査した。調査したのは仮設道路をはさんで窯跡部分の東側である。灰原の調査に先立って、仮設道路下の遺構の有無を確認するため調査区T2～4を設定したが、掘削深度80cm前後でⅢ・V層を確認した。当該部分は仮設道路建設によって幅7mほどにわたって大きく削平されていることが分かった。

灰原部分は断面に見えていた灰原の堆積範囲より広い調査区を設定して、他の遺構の有無を確認したが、発見できなかった。遺物は、ほとんどが須恵器で整理用コンテナ10箱分が出土した。なお、この調査の結果、灰原が現道擁壁裏まで残っていることが明らかになった。この部分はT5として、工事スケジュールに合わせて10月25日と11月1日に工事立合いで調査し完掘した。

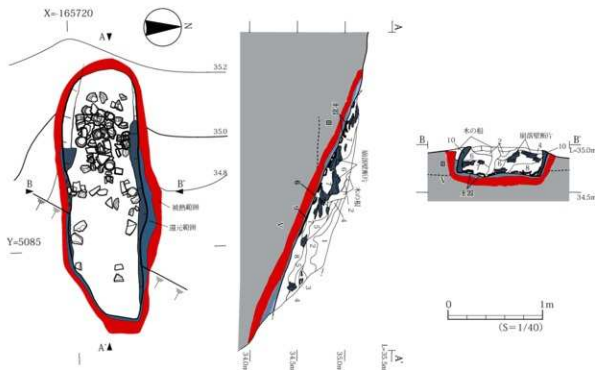
令和5年7月3日～4日には、現道の向かい側を2区として調査した。T1～T5の調査区を設定して調査した。遺構・遺物は発見されなかった。調査深度はいずれも150～200cmで検出面はⅢ層である。近現代のゴミを含む厚いI層（盛土）下でV層（地山）を確認したことから、近現代以降に旧地形が大きく改変されたことが明らかとなった。



第 171 図 吹付 C 竈跡調査区



第 172 図 吹付 C 窯跡遺構配置図



層	土色・土性	特徴	特徴
1	黒褐色 (7.5YR2/2) シルト	焼土粒を不均質に少し含む	天井・壁崩壊地の自然成壤土
2	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	焼土粒を多く、炭化物粒を少し、窯壁の青灰色ブロック小を多く含む	天井・壁崩壊地の自然成壤土
3	暗褐色 (7.5YR3/3) シルト	窯壁の青灰色ブロック小を多く、炭化物粒を少し含む	天井・壁崩壊土
4	暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質シルト	赤化した硬質の赤褐色ブロック小を多く含む	天井・壁崩壊土
5	暗褐色 (7.5YR3/4) シルト	窯壁の青灰色ブロック小を少し、炭化物粒、焼土粒を多く含む	天井・壁崩壊土
6	にぶい赤褐色 (5YR4/4) シルト	赤化した硬質の明褐色～赤褐色ブロック中～大を不均質に多く、焼土粒を少し含む	天井・壁崩壊土
7	褐色 (7.5YR4/4)・灰色 (10Y5/1) シルト・ブロック	還元作用を受けた青灰色の窯壁（硬質）からなる	天井・壁崩壊土
8	暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質シルト	窯壁の青灰色ブロック小、赤褐色ブロック小、炭化物粒・焼土粒を多く含む	天井・壁崩壊地の埋積土
9	黒色 (7.5YR2/1) (炭化物)	床面直上の炭化物層。部分的に薄く残存（厚さ1～2cmほど）	床面の埋積
10	灰黄褐色 (10Y6/2) 粘土	スズ入り粘土	窯脚跡

第173図 SR1 窯跡

2. 発見した遺構と遺物

窯跡2基、灰原1か所、土坑2基を検出した。2基の窯跡は、共に残存していた焼成部を確認した。いずれも窯全体に削平が及んでおり、構造や構築方法の詳細は不明瞭である。

【SR1 窯跡】（第164図・図版77）

〔位置・検出面〕調査範囲北西の北東緩斜面、標高34.7～35.2mほどにある。Ⅲ層で検出した。SR2からは北へ4.6mほど離れている。

〔形状と規模〕残存する焼成部は、床面でみると、残存長2.8m、幅0.9mである。平面形はやや丸みを帯びた長方形である。断面形は両壁がやや内湾する箱形で、高さは最も残りの良いB-B'ベルト北壁付近で約40cmである。方向は長軸を主軸方位とするとW-2°-Nを示す。周辺遺跡やほか地点でも古代の検出面になっているⅢ層が比較的厚く残っていたにもかかわらず、奥端側では壁が5cmほどしかないことから、半地下式構造であった可能性がある。

〔床・壁〕床面は1枚で、地山を床面としている。床面は、斜面上方の西側に向かって高くなっており、凹凸が若干認められる。その傾斜は22°ほどで奥壁に向かってやや急になる。床面では厚さ5～

10cmが還元作用で青灰色に変化し、その外側は厚さ5～15cmが赤変していた。変色範囲は奥壁側が薄く、燃焼部が厚くなっており、燃焼部側では青灰色と赤変の間に明黄褐色の部分があった。いずれも強く硬化している。床には、焼台に転用されたとみられる須恵器が密に並べられていた。それらのうち環には、完形もしくはほぼ完形のもの、半分割されたものがあり、環の内部は還元したシルトで満たされていた。また、大部分で床面との間に還元したシルトが厚さ1cm前後認められた。半分割された環は、上に向けた底面が水平になるように口縁部を傾斜下方の燃焼部側に向けて置かれており、完形もしくはほぼ完形の環も同様に上に向けた底面が水平になるように環の歪みや床との間の土で調整されて置かれていた。

側壁はスサ入り粘土を貼り付けて構築しており、高さは床面から25～30cmほど残存する。厚さ5～10cmが還元作用で青灰色に変化し、その外側は厚さ5～10cmが赤変していた。いずれもかなり硬化している。壁際では焼台に転用された須恵器環の一部をスサ入り粘土が覆っていた。

〔堆積土〕9層に分けられた。1～2層は窯体の天井が崩落した後に形成された窪みに堆積した黒褐色～暗褐色シルトの自然堆積層である。3～8層は天井や側壁の崩落を主体とする堆積層で、7層には壁材の青灰色ブロックを多く含み、8層は焼土粒や炭化物粒などを多く含む。9層は床面直上の薄い炭層である。

〔出土遺物〕遺物は床面から須恵器が多数、崩落土や崩落後の堆積層からも須恵器片が若干出土した。

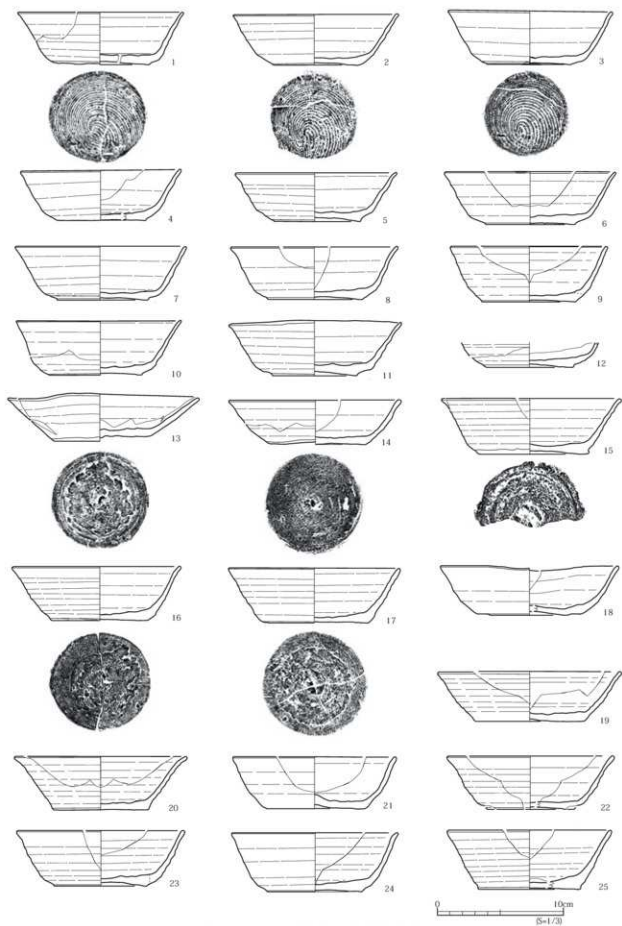
床面からは焼台に転用された須恵器環が多数出土した（第152～154図）。それらの多くは、底面を上に向けた状態で出土している。完形の環も比較的多く出土しているが、いずれも底部が裂ける、あるいはひびがある。ほぼ半分に分けられた環は、整理作業で接合して完形になったものが一定数あるものの、隙間なく接合したものはなく、完形の環同様、底部が裂けていたものを半分に分けて利用したと考えられる。床から出土した盤や鉢、甕は破断面に軸が付着するものが大半であり、焼台に転用されたか、窯内に残された失敗品の破片とみられる。

〔SR2 窯跡〕（第155図・図版78）

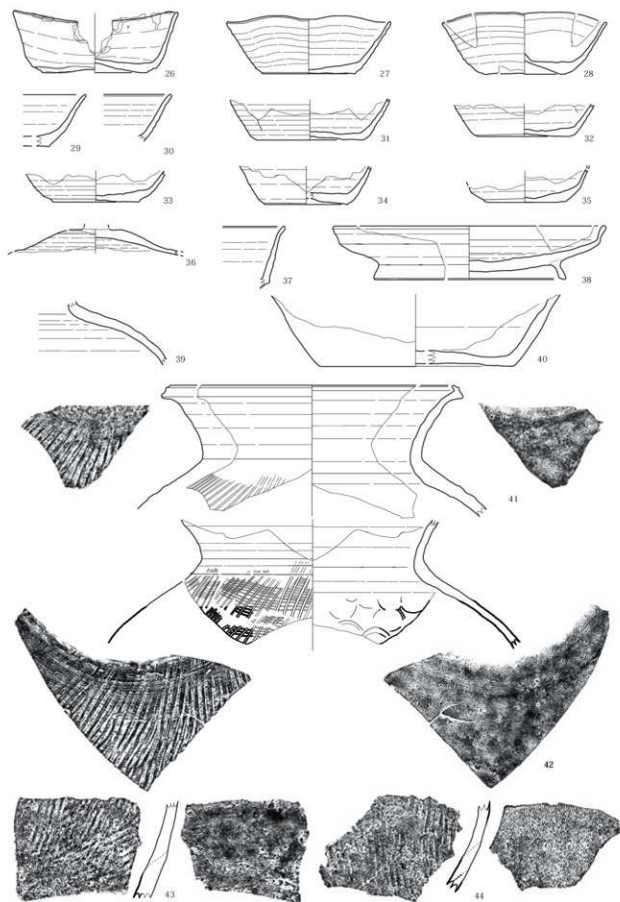
〔位置・検出面〕調査範囲北西の北東緩斜面、標高36.8～35.6mにある。Ⅲ層で検出した。SR1からは南へ4.6mほど離れている。

〔形状と規模〕残存する焼成部は、床面でみると、長さ2.3m、幅1.1mである。平面形はやや扇の張る長方形である。断面形は両壁がやや外傾する逆台形状で、高さは最も残りの良い北壁東側で30cmある。方向は長軸を主軸方位とするとW-13°-Nを示す。周辺遺跡やほか地点でも古代の検出面になっているⅢ層が比較的厚く残っていたにもかかわらず、奥端側では壁がほとんどないことから、半地下式構造であった可能性がある。

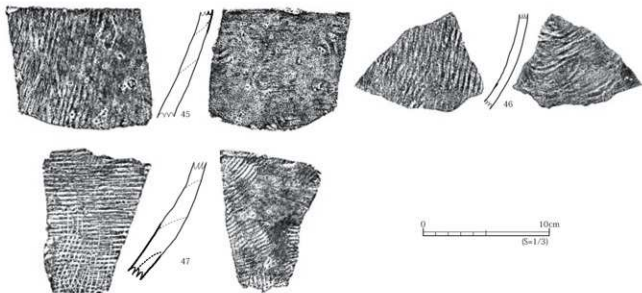
〔床・壁〕床面は1枚で、地山を床面としている。床面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦で、斜面上方の西側に向かって高くなっており、凹凸が若干認められる。その傾斜は23°ほどで、奥壁に向かってややゆるやかになる。床面は赤変して非常に強く硬化している。還元部分は認められない。その外側は、厚さ5～15cmほどが赤変していた。赤変範囲は奥壁側が薄く、燃焼部側が厚くなっている。



第 174 図 SR1 窯跡 出土遺物 (1)



第 175 図 SR1 窯跡 出土遺物 (2)



№	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	高さ	特徴	写真図版	登録
1	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)	7.4	4.1	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り右 底切れ			61
2	須恵器 坏	床	ほぼ完形	12.9	6.7	4.1	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り右			64
3	須恵器 坏	床	完形	12.8	6.8	4.3	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り右 ヒビ		81-1	70
4	須恵器 坏	床	3/4	12.6	7.0	4.1	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り右 火ダスキ			119
5	須恵器 坏	床	ほぼ完形	12.6	6.8	3.8	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り右 二次焼熱 底切れ		81-2	73
6	須恵器 坏	床	1/4	(13.4)	(7.1)	4.2	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り 火ダスキ 重ね焼き痕			90
7	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.4	7.2	4.3	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り右 ヒビ			74
8	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)	7.3	4.2	外内: ロクロナデ 底: 離し回転糸切り右→外側ナデ 外面に糸を引いた痕			111
9	須恵器 坏	床	1/4	(12.3)	(7.4)	4.4	外内: ロクロナデ 底: 離し回転糸切り 火ダスキ 外面に糸を引いた痕			94
10	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)	7.4	4.3	外内: ロクロナデ 底: 離し回転糸切り右 重ね焼き痕 外面に糸を引いた痕			82
11	須恵器 坏	床	完形	13.4	6.6	4.4	外内: ロクロナデ 底: 回転糸切り右		81-3	85
12	須恵器 坏	床	破	(15.0)	7.6	3.8	外内: ロクロナデ 底: 離し回転糸切り右 外面に火ダスキ			114
13	須恵器 坏	床	1/2	(15.0)	7.6	3.8	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り 芯みヒビ		81-6	62
14	須恵器 坏	床	1/2	(13.5)	7.6	3.5	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			59
15	須恵器 坏	床	1/2	(14.0)	8.7	4.4	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			65
16	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.3	7.7	4.3	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ		81-5	57
17	須恵器 坏	床	ほぼ完形	13.4	8.2	4.4	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り		81-4	58
18	須恵器 坏	床	1/2	(14.0)	(6.2)	3.9	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り 体部歪み			117
19	須恵器 坏	床	1/3	(14.4)	(8.6)	3.9	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ 破断面に輪付首			121
20	須恵器 坏	床	1/3	(13.5)	(7.6)	4.3	外: ロクロナデ→ケズリ 内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ 重ね焼き痕			81
21	須恵器 坏	床	1/3	(12.8)	(7.6)	4.1	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ ヒビ 破断面に輪付首			120
22	須恵器 坏	床	1/5	(13.0)	(6.8)	4.3	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			107
23	須恵器 坏	床	1/2	(13.1)	7.3	4.4	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り			102
24	須恵器 坏	床	1/2	(13.0)	(7.4)	4.7	外内: ロクロナデ 底: 離し回転糸切り右 火ダスキ 重ね焼き痕 外面に糸を引いた痕			91
25	須恵器 坏	床	1/3	(12.8)	(7.8)	4.8	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			115
26	須恵器 坏	床	1/2	(12.8)	(8.0)	4.8	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ 二次焼熱 液体滑着			72
27	須恵器 坏	床	1/2	(12.8)	7.4	4.6	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			83
28	須恵器 坏	床	1/2	(12.9)	(6.3)	4.9	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			38
29	須恵器 坏	床	破			4.1	外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			104
30	須恵器 坏	床	口縁部付近				外内: ロクロナデ 重ね焼き痕			105
31	須恵器 坏	床	1/5		(8.4)		外内: ロクロナデ 底: 回転ケズリ→外側のみナデ 外内面・破断面に輪付首, ヒビ			78
32	須恵器 坏	床	破		(7.3)		外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			84
33	須恵器 坏	床	破		6.8		外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り			103
34	須恵器 坏	床	1/4	(6.6)			外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ 芯み大破断面に輪付首			100
35	須恵器 坏	床	破		(6.5)		外内: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切り→ナデ			101
36	須恵器 蓋	床	1/3				外: ロクロナデ→ケズリ→ナデ 内: ロクロナデ 外内面に輪付首			88
37	須恵器 高台坏	床	体部片				外内: ロクロナデ			98
38	須恵器 甕	床	1/2	(21.4)	(15.1)	4.2	外内: ロクロナデ 底: ケズリ 破断面に輪付首		81-7	75
39	須恵器 甕	床	口縁部片				外内: ロクロナデ 外面に輪付首		81-9	87
40	須恵器 甕	床	破		(15.2)		外: ケズリ 内: ロクロナデ 破断面取付のためのナデ 破断面に輪付首			93
41	須恵器 甕	床	口縁部→甕	(22.4)			外: 平行タタキ→ロクロナデ 内: 無文当て具→ロクロナデ		81-8	106
42	須恵器 甕	床	口縁部片				外: タタキ→ロクロナデ 内: ロクロナデ 無文当て具			39
43	須恵器 甕	床	製部片				外: 平行タタキ内: 同心円当て具 外内面・破断面に輪付首 輪付首?			80
44	須恵器 甕	床	製部片				外: 平行タタキ内: 無文当て具→ヘラナデ 破断面に輪付首 輪付首転用			97
45	須恵器 甕	床	製部片				外: 平行タタキ内: 無文当て具 外内面・破断面に輪付首 輪付首転用			92
46	須恵器 甕	床	製部片				外: 平行タタキ内: 同心円当て具			116
47	須恵器 甕	床	製部片				外: 疑碇子タタキ内: 無文当て具→ナデ			99

第176図 SR1 窯跡 出土遺物(3)

側壁は地山を直接壁としており、高さは床面から5～30cmほど残存するが10cm以下の部分が多い。壁の外側は厚さ5～10cmほどが赤変して硬化していた。

〔堆積土〕6層に分けられた。1～4層は窯体の天井が崩落した後に形成された窪みに堆積した黒褐色～暗褐色シルトの自然堆積層である。5層は床上に堆積する層で地山ブロック（V層）からなる。6層は焼土粒と地山（V層）からなる層である。

〔出土遺物〕遺物は堆積層から須恵器片が若干出土している。床からは157-7の須恵器甕片1点が出土した。

【灰原】（第172図・図版79）

〔位置・検出面〕調査地中央東側位置し、丘陵北東緩斜面Ⅲ層で検出した。

〔重複〕なし。

〔規模・平面形・断面形〕南北11m、東西1.6mの範囲を確認した。深さは最大で40cm、大部分は20cm前後である。

〔堆積土〕4層に分けられた。1層は黒褐色シルト層、2層は黒色シルト層で灰原全体に分布する。3・4層はSR2の主軸線上の対応する位置にのみ堆積する層で2層と比べて焼土塊や炭化物粒が大きく量も多い。

〔出土遺物〕各層から須恵器杯、双耳環、蓋、高台杯、壺、短頸壺、長頸瓶、甕が出土した。2層とⅢ層の層理面で比較的大きな破片の須恵器がまとめて出土している。

土坑

【SK4土坑】（第177図・図版78）

〔位置・検出面〕調査地中央付近のSR1とSR2の間の丘陵北東緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK5と重複し、これより新しい。

〔規模・平面形・断面形〕直径35cm前後、確認面からの深さは86cmである。平面形は不整な円形で、断面形はU字形である。

〔堆積土〕暗褐色シルトの自然堆積層である。

〔出土遺物〕堆積土中から須恵器片が少量出土した。

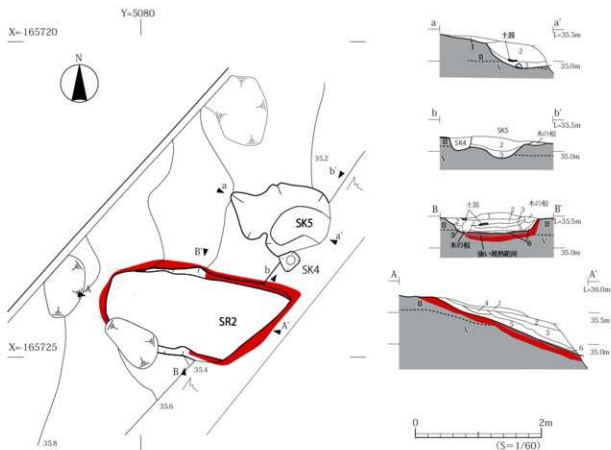
【SK5土坑】（第177図・図版78）

〔位置・検出面〕調査地中央付近のSR1とSR2の間の丘陵北東緩斜面に位置し、Ⅲ層で検出した。

〔重複〕SK5と重複し、これより古い。

〔規模・平面形・断面形〕残存する規模は、東西106cm、南北100cm以上、確認面からの深さは38cmである。平面形は楕円形とみられ、断面形は壁が緩やかに立ち上がる台形である。

〔堆積土〕3層に分けられた。1層は褐色シルトの自然堆積層である。2層は焼土塊、窯体ブロックからなり、炭化物粒を少し含む人為堆積層である。3層は焼土塊小ブロック・粒、窯体小ブロック、

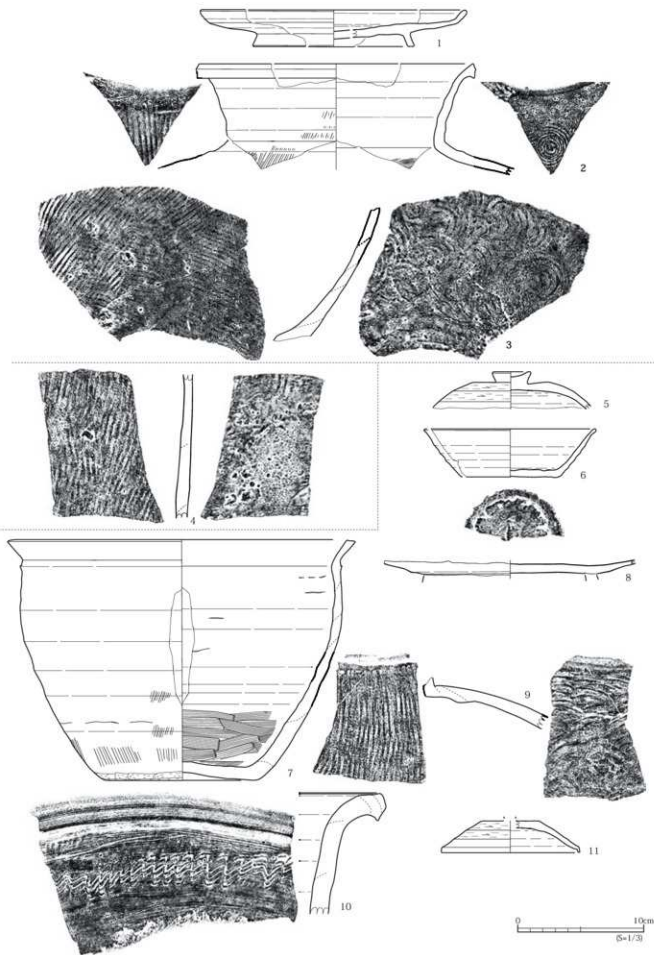


遺構名	層	土色・土性	特徴	堆積
SR2	1	黒褐色 (10YR3/1) シルト	焼土粒、地山粒を少し含む	自然堆積
	2	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	焼土ブロック中、焼土粒、地山粒を少し含む	自然堆積
	3	黒色 (10YR3/2) シルト	焼土ブロック中を少し、焼土粒、地山粒を多く含む	自然堆積
	4	灰褐色 (10YR4/1) シルト	焼土粒、地山粒を多く含む	自然堆積
	5	褐色 (10YR8/6) 粘土	地山 (V層) ブロックからなる貯置な層	壁・天井由来か? 自然堆積
	6	褐色 (7.5YR4/3) 粘土質シルト	焼土粒、地山粒からなる層	自然堆積
SK4	1	暗褐色 (10YR3/4) シルト	焼土粒多く含み、炭化物粒をわずかに含む	自然堆積
	2	褐色 (10YR4/4) シルト	焼土小ブロックを若干含む。	自然堆積
SK5	2	暗赤褐色 (5YR3/4) シルト	焼土小〜大ブロック、壘体ブロック (還元含む) からなる層で、炭化物粒を若干含む	人為堆積
	3	黒褐色 (10YR3/2) シルト	焼土小ブロック、壘体小ブロック、炭化物粒を多く含む	自然堆積

第177図 SR2 窯跡 SK4・5 土坑

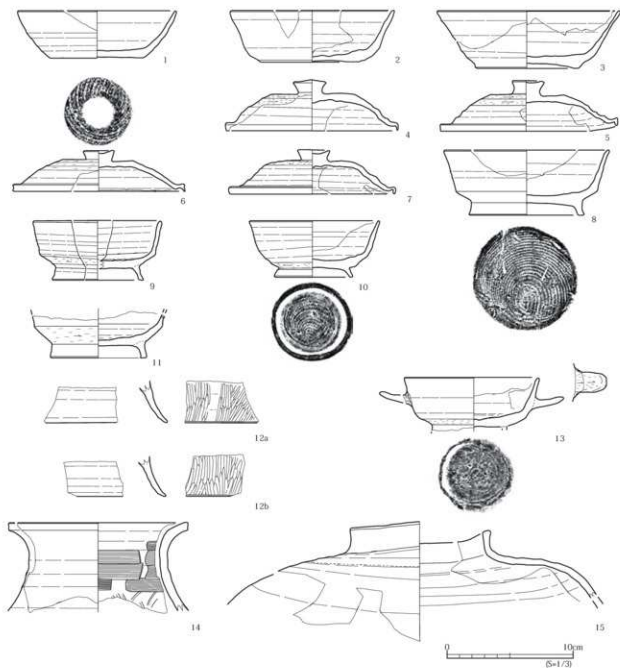
炭化物粒を多く含む自然堆積層である。

〔出土遺物〕 堆積土中から 157-2 の蓋をはじめ須恵器片が多数、土師器片が少量出土した。



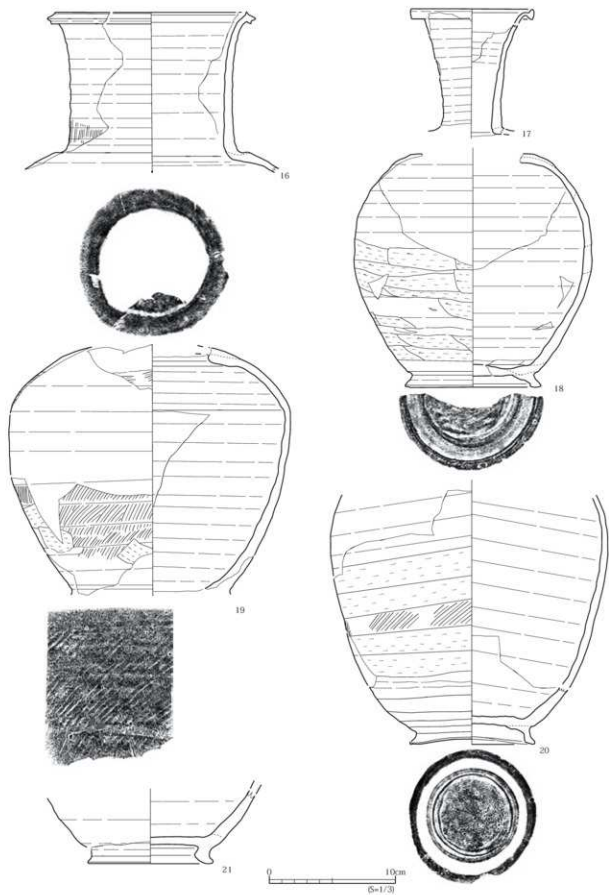
第 178 図 SR1 SR2 その他出土遺物

No	部種	濃縮・材	残存	口径	最大径	奥行	部高	特徴	写真四版	枚数
1	顕微鏡 型	SR1 3～8 期	1/8	(20.9)		(12.6)	2.9	内内：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り→高台彫付け	84.6	41
2	顕微鏡 鏡	SR1 3～8 期	口縁部～前	(21.8)				外：縦格子タタキ→ロクロナデ 内：同心円当て具→ロクロナデ	84.8	40
3	顕微鏡 鏡	SR1 3～8 期	底部付造片					外：平行タタキ 内：同心円当て具		42
4	顕微鏡 鏡	SR2 床	側面片					外：平行タタキ 内：無文当て具 外内面・縦断面に軸付着 鏡台転用		51
5	顕微鏡 蓋	SK5 3 層	頂部～体部					外：回転ケズリ 内：ロクロナデ 頂部：糸切り	84.4	54
6	顕微鏡 杯	側木彫	1/3	(13.5)		(7.5)	3.8	内内：ロクロナデ 底部：ヘラ切り 「一」ヘラ置き 鏡成時のヒビ	84.2	53
7	顕微鏡 鏡	側木彫	1/4	(26.2)		(11.9)	19.0	外：ケズリ→平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ 底部彫付け	84.7	37
8	顕微鏡 型	鏡出面	底部付造片					内内：ロクロナデ 底部：ケズリ→高台彫付け	84.3	47
9	顕微鏡 鏡	鏡出面	側付造片					外：平行タタキ 内：無文当て具		45
10	顕微鏡 鏡	鏡出面	口縁部					外：磨面鏡状文 磨面 4 1段 内：ロクロナデ	85.1	46
11	顕微鏡 蓋	表採	破片	(11.0)			2.5	外：回転ケズリ 内：ロクロナデ 頂部：糸切り	84.5	55



No.	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真/図版	登録
1	須恵器 坏	1層	1/2	(12.5)	7.3	3.8		外内:ロクロナデ 底:回転糸切り右	82-1	5
2	須恵器 坏	底面		(13.8)		(8.4)	4.4	外内:ロクロナデ 底:回転ヘラ切り	82-2	26
3	須恵器 坏	2層	底部付近	(14.4)		8.1	4.6	外内:ロクロナデ 底:回転糸切り右	82-3	9
4	須恵器 蓋	2層	1/2	13.6			4.1	外内:ロクロナデ 大月:回転ケズリ	82-4	10
5	須恵器 蓋	2層	1/2	14.0			4.0	外:ロクロナデ ケズリ	82-5	11
6	須恵器 蓋	4層	3/4		13.0	3.5		外:回転糸切り→ロクロナデ→回転ケズリ 内:ロクロナデ 握み:窪み		34
7	須恵器 蓋	下部	ほぼ完形	13.5			3.5	外内:ロクロナデ 大月:回転ケズリ→ナデ 握み:彫付	82-6	17
8	須恵器 高台坏	1層	1/2	5.2	13.0	9.0		外内:ロクロナデ 底:回転糸切り右→高台彫付	82-7	6
9	須恵器 高台坏	4層	1/2	10.0		4.7	7.1	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→回転ケズリ	82-8	20
10	須恵器 高台坏	1層	2/3	10.1	6.0	4.5		外:ロクロナデ→ケズリ 内:ロクロナデ 底:回転糸切り	82-9	3
11	須恵器 高台坏	1層	高台			7.4		外:ロクロナデ→ケズリ→ナデ 内:ロクロナデ 底:回転糸切り	82-10	4
12a	須恵器 高台	4層	高台					外:ロクロナデ→ミガキ 内:ロクロナデ→カキメ		18
12b	須恵器 高台	4層	高台					外:ロクロナデ→ミガキ 内:ロクロナデ→カキメ		18
13	須恵器 双耳坏	4層	ほぼ完形	(10.6)				外:ロクロナデ ケズリ 内:ロクロナデ ナデ	82-11	19
14	須恵器 壺	1層	口縁部→肩	(14.1)				外:ロクロナデ 内:ロクロナデ→ヘラナデ 下部に当て具	82-12	2
15	須恵器 短頸壺	底面	口縁部付近	(11.0)				外内:ロクロナデ 口縁部に蓋を嵌めついた短頸	82-13	24

第 179 図 灰原 出土遺物 (1)



第 180 圖 灰原 出土遺物 (2)

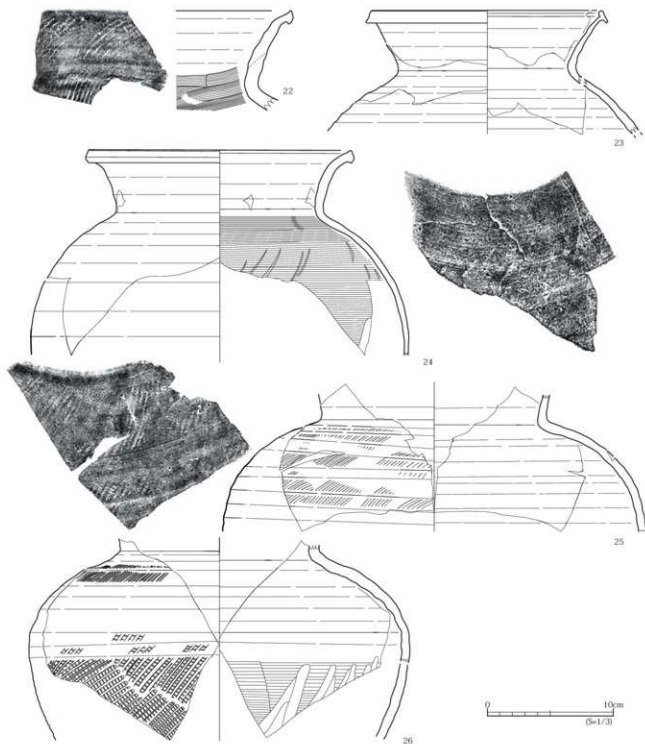


図	器種	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	器高	特徴	写真掲載	図録
16	須恵器 長頸瓶	卜棚	胴~口	(15.2)				外：平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ		83-3 32
17	須恵器 長頸瓶	3層	胴					外：ロクロナデ 内：ロクロナデ		83-4 12
18	須恵器 長頸瓶	3層上面	底~胴		10.8			外：ロクロナデ 欠ズリ 内：ロクロナデ 底：ヘラキリ?		83-2 14
19	須恵器 長頸瓶	4層	胴部1/2					外：平行タタキ→ロクロナデ 内：ロクロナデ		83-1 8
20	須恵器 長頸瓶	底面	底部~胴		9.8			外：タタキ→ロクロナデ 一部欠ズリ 内：ロクロナデ		83-5 22
21	須恵器 長頸瓶	底面	底部		9.7			外内：ロクロナデ		83-6 23
22	須恵器 甕	検出面	口縁部					外：筒橋子タタキ→ロクロナデ 内：当て具→ナデ→ロクロナデ		83-7 44
23	須恵器 甕	1層	口縁部~胴	(18.2)				外内：ロクロナデ		83-8 7
24	須恵器 甕	3層上面	口縁部~胴	(20.8)				外：ロクロナデ 内：当て具→カキメ→ナデ		84-1 16
25	須恵器 甕	3層上面	口縁部~胴					外：平行タタキ→ロクロナデ		84-1 13
26	須恵器 甕	埋積土	胴部					外：平行タタキ 内：ロクロナデ→カキメ→ナデ		29

第181図 灰原 出土遺物(3)

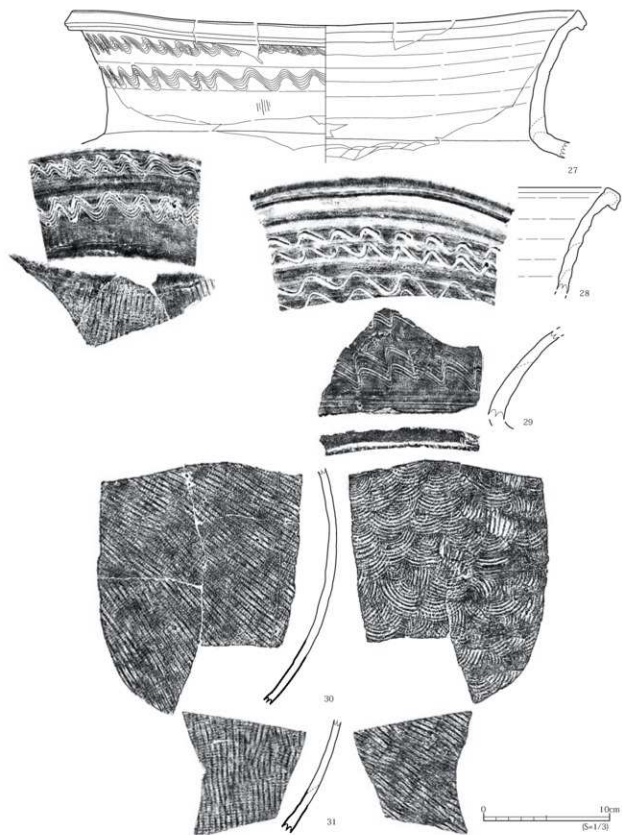


図	図解	遺構・層	残存	口径	最大径	底径	胎高	特徴	写真図版	巻数
27	須恵器 甕	底面	口縁部	40.0				外：櫛歯波状文 櫛歯5 2段 平行タタキ 内：無文当て瓦	83-9	25
28	須恵器 甕	表土	口縁部					外：波状文 2条1単位 2段～	85-2	1
29	須恵器 甕	3層上面	口縁部					外：櫛歯波状文 櫛歯7 2段～ 2次焼熱脱胎転用	85-3	15
30	須恵器 甕	4層	胴部片					外：櫛歯タタキ 内：同心円文当て瓦	85-4	21
31	須恵器 甕	焼出面	胴部片					外：櫛歯タタキ 内：平行文当て瓦	85-5	43

第 182 図 灰原 出土遺物 (4)

3. 吹付C窯跡小括

1. 遺物 (第183図)

SR1では坏、盤、蓋、鉢、壺、甕、SR2では堆積土中から少量の坏、鉢、甕の小破片、灰原では坏、高台坏、盤、蓋、鉢、長頸瓶、壺、甕が出土した。また、灰原や遺構検出面から土師器甕が少量出土した。

【SR1】

須恵器坏の器形は逆台形である(1・2)。口径12.5～13.5cm、器高4.0～4.5cm、底径6.8～8.0cmほどに収まるものが多い。一部、口径が14cmを超える資料は、焼成時の歪みなどに起因するものとみられる。

底部切り離し技法はヘラ切りと糸切りがある。ヘラ切りは底部外周付近や一部を簡素に撫でるものが多い。糸切りは原則、再調整が認められない。ヘラ切りと糸切りの比は、底部1/2以上残存でカウントすると4:3、1/4以上残存でカウントすると2:1となる。どちらもヘラ切りが多くなるが、1/2未満の資料を含まない場合、糸切りがやや多く見える結果になっている。ほかにSR1では、盤、蓋、鉢、壺、甕、SR2では坏、鉢、甕が出土しているが、破片資料が多いため、特徴は灰原の項目で記述する。

【灰原】

1 [坏] …SR1と同様の特徴がみられる(7・8)。灰原でのヘラ切りと糸切りの比は、5:2～3:1でSR1同様、ヘラ切りの方が多い。1点出土した双耳坏は(9)、坏部は高台がほとんど欠損するが、高台坏であり、把手は長さ・幅ともに小さく、小形である。

2 [高台坏] …口径は大きいもので13cm、大部分は10cm、器高は7cmほどである(10・11)。ミガキのある高台破片がある(12)。

3 [盤] …口径20cm、器高4cmほどである。

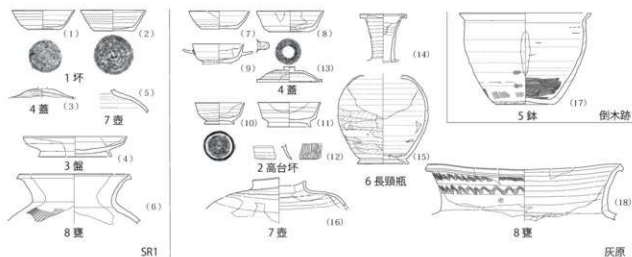
4 [蓋] …口径13～14cm程度のものが多い。セットになるはずの高台坏より大きく、数値上は坏と一致してくる。現状では、出土した高台坏の資料数が少ないため、セットになるものが少なかったと考えておきたい。つまみは擬宝珠である。天井の回転ケズリが不十分で、回転糸切りの痕跡がみられるものがある。

5 [鉢] …全形の判明する資料は倒木痕から出土したものに限られる。口径26cm、器高19cmほどである。SR1、灰原から破片が多数出土している。

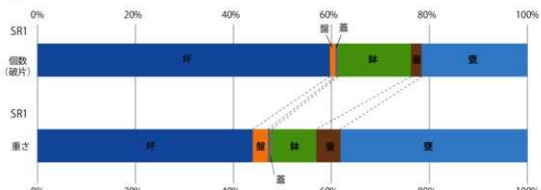
6 [長頸瓶] …口頸部はリング状突起をもつものはない。胴部上端の頸部との境目は擬口縁が残る。頸部と胴部の接合は3段である。2段のものは確認できなかった。

7 [壺] 口径20cm前後である。ロクロやナデが見られるものを壺とした。叩きや当て具痕の残るものは甕とした。(17)は短頸壺である。自然軸がかかるが、同心円状に口縁部外周～頸部にかけて軸がかからないことからセットになる蓋を被せて窯詰めされていたとみられる。

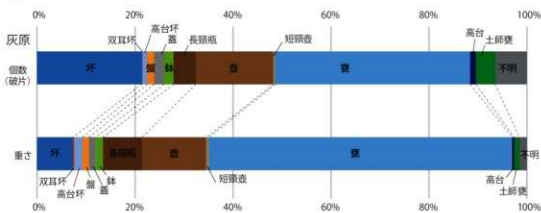
8 [甕] …口径20～40cmほどのものがみられる。(18)は口頸部に櫛描波状文とヘラ描波状文がみられる。甕胴部は外面が擬格子叩き、内面が無文、同心円文、平行線文の当て具痕がある。出土資料



器種	環	双耳環	高台環	盤	蓋	鉢	長頸瓶	壺	短頸壺	甕	高台	土師甕	不明	合計
個数(個)	108	0	0	2	1	27	0	4	0	39	0	0	0	181
重さ(g)	3973	0	0	282	65	825	0	450	0	3448	0	0	0	9043



器種	環	双耳環	高台環	盤	蓋	鉢	長頸瓶	壺	短頸壺	甕	高台	土師甕	不明	合計
個数(個)	544	1	26	34	53	48	116	399	11	1009	28	102	1630	2354
重さ(g)	5767	148	1332	1019	1080	1147	6285	10141	477	48237	296	858	0	77975



(新数) 破片	へ夕切り	糸切り	灰原 (1/2)	へ夕切り	糸切り
SR1 (1/2)	(16)	(11)	灰原 (1/2)	(47)	(18)
SR1 (1/4)	(24)	(13)	灰原 (1/4)	(106)	(39)

第 183 図 吹付 C 窯跡出土土器・個数と重量の比

中では、無文当て具痕が少ない。平行線の当て具痕は今後、類例に注意を払う必要がある。

2. 器種構成とその構成比

灰原とSR1から出土した須恵器の構成比を第183図下半に示した。それぞれ総点数(破片数)・重量・抽出数で提示している。壺の項目は、短頸壺、鉢、長頸瓶、小甕、平底甕に細分できなかった破片をカウントした。甕類は、器形、器壁の厚さ、口縁部の長さや厚さから細分できた破片を大甕や平底甕などとしてカウントした。細分できなかった破片は、項目「甕」でカウントしている。以下では、大甕や平底甕など細分できたものと、できなかった「甕」をまとめて示すさいは甕類とする。なお、灰原では土師器甕が少量出土しており、表にも提示している。本節の目的である須恵器生産の構成比検討では、厳密には除外すべきであるが、少量で影響がないため、灰原出土土器として提示した。

灰原では環、双耳環、高台環、蓋、盤、壺、鉢、長頸瓶、大甕、中甕、小甕、平底甕、土師器甕が出土した。このうち、土師器甕を除く須恵器が窯跡の生産器種である。SR1では焼台転用の環が多く、SR2ではほとんど須恵器が出土していないため、灰原出土須恵器が吹付C窯跡の生産器種とその比率を最も反映する資料である。

器種構成比を点数でみると、甕類が40%、ついで環が22%、壺が16%となっている。重量では、甕類が62%、ついで壺が13%、環が7%となっている。窯の廃棄品といった性格からみた比率のため、各製品の失敗率の違いや焼台への転用を目的とした選抜などによる偏りがあり、正確な生産比を示していないことに注意が必要であるが、個数、重量ともに類似した傾向がみられるため、一定程度の生産比を示すと考えたい。

甕類は重量比にすると割合が高くなるが、個数でも高い割合である。ついで個数では環が高い割合であるが、重量では壺になる。壺は環と比べると、甕類ほどではないものの、割合が高くなる傾向がある。また、壺項目には、鉢や長頸瓶、小甕などの破片を少なくない数含んでカウントしていることを踏まえると、本来は環の方が多く可能性がある。壺は短頸壺、鉢、長頸瓶、小甕、小形の平底甕に細分できなかった破片の個数・重量で、全体で2か3番目に高い割合を示す。

そのほかの器種の比率は点数・重量のどちらでも低く、限定的な生産であったことが分かる。とくに供膳具では、無高台の環がほとんどで、高台環、盤、高環、蓋はかなり限定的である。また、碗や水瓶の出土はない。

吹付C窯跡は、甕類と無高台の環といった貯蔵具と日用雑器の生産が主で、官衛的器種を含むそのほかの器種は限定的な生産である。

3. 須恵器の時期

SR1出土須恵器環は、個々の環が焼台に転用されるまでの時間幅が問題にはなるものの、転用されて廃棄された時点では一括性があり、窯跡内での失敗品の転用であることを踏まえると、極端な時間差はないと考えられる。

須恵器環の器形は逆台形で、ヘラ切りと糸切りが混在し、ヘラ切りが多いものの、一定数の糸切り

が存在する。同様の特徴をもつ土器は周辺では、上新田遺跡第1号住居跡で確認できる。器形は逆台形で底径は比較的大きく、口径に対する底径の割合が小さくなっている資料は認められない。底部切離しをみると、ヘラ切りと糸切りの割合は、床面出土資料では2：1、床面のほかに堆積土やピットも含めると4：5である。上新田遺跡第1号住居では糸切りの割合が高くなっている。

SR1出土須恵器環は、さきに検討した彦右工門橋窯の須恵器環と比較すると、彦右工門橋窯跡I期～II期の特徴をもつ。I期の床面出土須恵器環はヘラ切りのみで糸切りはみられなかった。II期の床面出土須恵器環は、ヘラ切りと糸切りの割合が3：1～2：1程度ある。SR1出土須恵器環は、器形が逆台形に限られることから、器形をみるとI期寄りといえるが、底部切離しをみるとヘラ切りと糸切りが混在するII期寄りである。したがって、SR1出土須恵器環は、9世紀前葉～9世紀中葉のなかでも前葉寄りとみられることから、おおむね9世紀前半と考えられる。

写 真 图 版



1. SR1 完掘（東から）



2. SR1 転用焼台出土状況（南から）



3. SR1 転用焼台出土状況（東から）



4. SR1 堆積状況断面（南から）



5. SR1 検出状況（東から）



6. SR1 被熱確認（東から）



7. SR1 壁断面（東から）

図版 77 吹付C窯跡 SR1



1. SR1、SR2 完掘 (東から)



2. SR2 堆積状況断面 (南から)



3. SR2 堆積状況断面 (南から)



4. SR2 被熱状況 (東から)



5. SR4、SK5 断面 (東から)

図版 78 吹付 C 窯跡 SR2



1. 灰原土器出土状況（西から）



2. 灰原全景（北西から）



3. 灰原中央（北西から）



4. 灰原 B-B' ベルト（南西から）



5. 灰原調査（南から）

図版 79 吹付 C 窯跡 灰原



1. 調査区全景（北東から）



2. 窠2前確認トレンチ（南から）



3. 仮設道路確認トレンチ（南西から）



4. 調査前（東から）



5. 表土掘削（南から）

図版 80 吹付 C 窠跡 全景 トレンチ



SR1 集合写真



図版 81 SR1 出土遺物



灰原 集合写真



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13

図版 82 灰原 出土遺物 (1)



9
1・2 : S=1/4

図版 83 灰原 出土遺物 (2)



図版 84 灰原・SR2 出土遺物 (1)



图版 85 灰原・SR2 出土遗物 (2)

第Ⅵ章 彦右工門橋窯・吹付窯跡・吹付C窯跡まとめ

総括

彦右工門橋窯跡、吹付窯跡、吹付C窯跡周辺ではこれまでに、同時期、あるいは前後する時期の窯跡や窯業にかかわる遺跡が調査されている。以下、その中における彦右工門橋窯跡、吹付C窯跡の位置を整理しておきたい。

年代的な位置

8世紀前半 日の出山C地点

8世紀中葉 萱刈場A地点SR2窯跡、SR3窯跡

8世紀後半～9世紀初頭 彦右工門橋窯跡Ⅰ期、彦右工門橋窯跡SR1、SK1、亀岡遺跡

9世紀前葉～中葉 吹付CⅠ号窯跡・灰原

9世紀中葉～9世紀後葉 彦右工門橋窯跡Ⅱ期

9世紀後葉～10世紀初頭 彦右工門橋窯跡Ⅲ期

調査のまとめ

彦右工門橋窯跡、吹付窯跡、吹付C窯跡を縦断するかたちで約800mにわたって調査区、トレンチを設定して調査した。その結果、遺構・遺物の分布が明らかとなった。

(1) 彦右工門橋窯跡

彦右工門橋窯跡では遺跡範囲西端付近の丘陵突端、沢、低地にあたる部分を調査した。遺構・遺物を発見した範囲は、丘陵が西に張出す位置にあっており、周辺の中では標高の高い場所を中心として、8世紀後半～10世紀初頭にかけて土器・瓦造りと関連の深い竪穴建物跡や土師器焼成遺構が分布する。南側はSD2河川跡を境としてそれ以南の10区では遺構・遺物が見つかっていない。北側では6区SI25竪穴建物跡のある標高44.0m付近を境にして、それ以南では密な遺構分布を示すが、北側では北西側に緩やかに傾斜する斜面が続いていく(第9図)。

I期には恵器とともに瓦も生産されていたと考えられる。瓦の中には、珠文鋸歯文縁素弁四葉蓮華文軒丸瓦があり、これまで一関遺跡、名生館官衙遺跡、伏見庵寺、城遺跡などで出土していたが、生産地は不明であった。今回の調査では、彦右工門橋窯跡が須恵器生産に最も関わっていたとみられる時期の遺構からも出土しており、彦右工門橋窯跡がその軒丸瓦の生産遺跡である可能性が高まった。

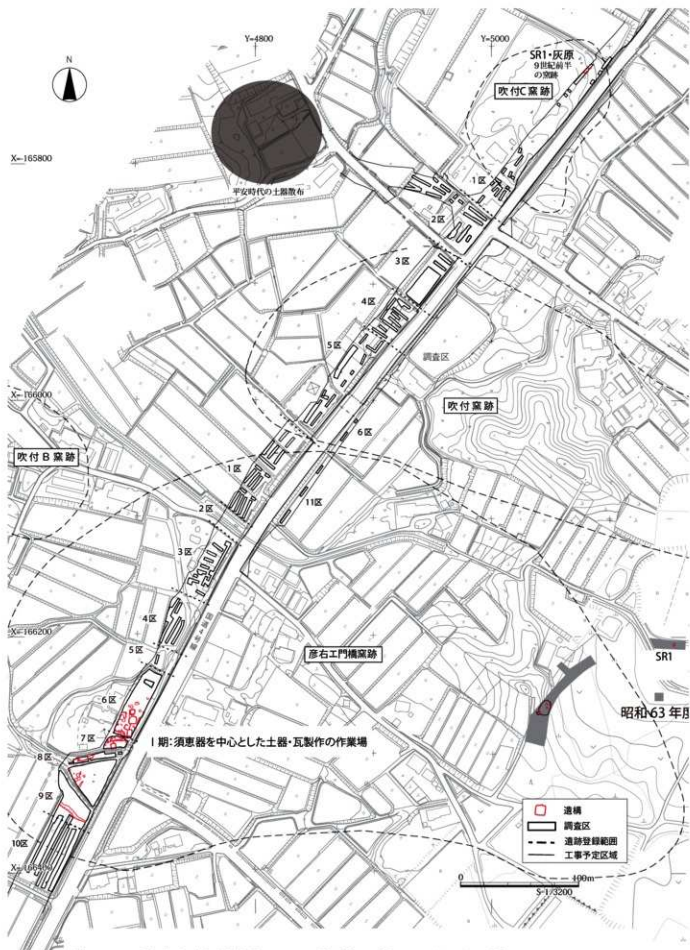
9世紀中葉以降は、竪穴建物跡と土師器焼成遺構が営まれる状況を確認した。また、河川跡から9世紀後半の須恵器環がまとめて出土した。灰白色火山灰降下前の9世紀末～10世紀前葉までの遺構・遺物は確認できるが、火山灰降下以降といえる遺物はみられなかった。

(2) 吹付窯跡

吹付窯跡では、遺跡範囲西端付近の丘陵突端、谷、沢にあたる部分を調査した。土師器・須恵器片が少量出土したものの、遺構は発見されなかった。調査範囲より西側では、沢、谷、低地が広がるため遺構が分布する可能性が低いと考えられる。一方、調査範囲の東側では、過去に須恵器が採集されているほか、地形的にもより標高が高く、丘陵北西～西斜面にあたるため、遺構・遺物が分布する可能性が高い。

(3) 吹付C窯跡

吹付C窯跡は今回の調査時に発見した遺跡であり、発見・調査した窯跡と灰原の位置と周囲の地形から遺跡範囲を設定した。なお、遺跡範囲内とその周辺を踏査したが、顕在遺構や遺物は発見していない。北西に傾斜する斜面に9世紀前葉の窯跡が分布する。



第184図 彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡遺構分布図

報告書抄録

ふりがな	ひこうえもんばしかまあと・ふつけかまあと・ふつけしーかまあと							
書名	彦右工門橋窯跡・吹付窯跡・吹付C窯跡							
副書名	国道4号大衛道路拡幅工事関連遺跡発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第258集							
編者名	佐藤沙、廣谷和也、黒田智章、熊谷亮介、古川一明、佐久間光平							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3丁目8-1 Tel. 022-211-3684							
発行年月日	西暦2024年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひこうえもんばしかまあと 彦右工門橋窯跡	黒川郡大衡村 駒場字彦右工 門橋大衛字吹 付		26010	38度30分 7秒	140度53 分13秒	2019.0803～ 2022.10.13	4937㎡	国道4号大衛道路拡幅 工事
ふつけかまあと 吹付窯跡	黒川郡大衡村 駒場字駒場字 矢下		26011	38度30分 19秒	140度53 分22秒	2019.12.03 ～2022.10.19	1806㎡	
ふつけしーかまあと 吹付C窯跡	黒川郡大衡村 駒場字磯崎、 上横前		26092	38度30分 26秒	140度53 分30秒	2022.03.07 ～2023.07.04	120㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
ひこうえもんばしかまあと 彦右工門橋窯跡	窯跡	古代		掘立柱建物3、竪穴 建物跡14、土師器焼 成遺構14、焼成上坑 10、上坑22、溝5ほ か		土師器、須恵器、瓦、土製品、 石製品、石器、縄文土器		8世紀後半～9世紀初 頭の須恵器生産にかか わる窯場を確認した。
ふつけかまあと 吹付窯跡	窯跡	古代		なし		土師器、須恵器		遺跡範囲の西側を調査 した結果、遺構は確認 できなかった。
ふつけしーかまあと 吹付C窯跡	窯跡	平安		窯跡2、灰原1ほか		土師器、須恵器		9世紀前半の窯跡と灰 原を調査した。窯跡の 製品である須恵器が出 上した。
要約	国道4号大衛道路拡幅工事に先立ち、令和元年～令和5年に実施した彦右工門橋窯跡、吹付窯跡、吹付C窯跡の発掘調査報告書である。彦右工門橋窯跡では8世紀後半～9世紀初頭の須恵器生産にかかわる窯場を発見した。また、これまでの関連遺跡や名生館宮衛遺跡で出土していた珠文瀬南緑赤丹四葉蓮華文軒丸瓦の生産遺跡道路であることが判明した。吹付C窯跡では9世紀前半の窯跡2基と灰原1箇所を発見した。							

宮城県文化財調査報告書第 258 集

彦右工門橋竈跡・吹付竈跡・吹付 C 竈跡

— 国道 4 号大衡道路拡幅工事関連道跡発掘調査報告書 1 —

令和 6 年 3 月 12 日印刷

令和 6 年 3 月 18 日発行

発行 宮城県教育委員会

〒 980-8423

宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8 番 1 号

印刷 株式会社 東北プリント

〒 980-0822

宮城県仙台市青葉区立町 24-24

☎ 022-263-1166
